

**Netfinity マネージャー**

SC88-6555-00

**ユーザーズ・ガイド**

**Vrsion 5.2**



IBM

**Netfinity マネージャー**

SC88-6555-00

**ユーザーズ・ガイド**

**Vrsion 5.2**

お願い

本書の情報とそれによってサポートされている製品をご使用の際は、最初に627ページの付録、『特記事項』に記載されている一般情報をお読みください。

## 第 1 版 (1998 年 8 月)

原 典	10L9271 Netfinity manager User's Guide
発 行	日本アイ・ピー・エム株式会社
担 当	ナショナル・ランゲージ・サポート

図	xix
本書について	xxv
本書の対象読者	xxv
<b>第1章 Netfinity の始動</b>	<b>1</b>
Netfinity サービス・マネージャー	2
Netfinity サービス・プログラムの説明	3
アラート・マネージャー	4
キャパシティー管理	4
クラスター・マネージャー	4
クリティカル・ファイル・モニター	5
DMI ブラウザー	5
ECC メモリー・セットアップ	5
イベント・スケジューラー	5
ファイル転送	6
電源オン・エラー検出	6
事前障害分析	6
プロセス・マネージャー	6
RAID マネージャー	6
リモート・セッション	7
リモート・システム・マネージャー	7
リモート・ワークステーション制御	7
スクリーン・ビュー	7
安全保護マネージャー	8
シリアル接続制御	8
サービス構成マネージャー	8
システム管理	8
ソフトウェア・インベントリー	9
システム診断マネージャー	9
システム情報ツール	9
システム・モニター	9
システム区画アクセス	10
システム・プロファイル	10

Web マネージャー構成 .....	10
OS/2 システムでの Netfinity 始動の遅延 .....	11
<b>第2章 アラート・マネージャー .....</b>	<b>13</b>
アラート・ログ .....	17
アラート・テキスト .....	17
アラートのタイプ .....	18
重大度 .....	18
アプリケーション ID .....	19
アプリケーション・アラート・タイプ .....	19
送信元 .....	19
システム名 .....	19
アラートの時刻 .....	19
アラートの日付 .....	19
システム固有の ID .....	19
アラート・ログの表示 .....	20
アラート・マネージャーの機能 .....	23
削除 .....	23
印刷 .....	23
ファイルに印刷 (保管) .....	23
プロファイル .....	24
最新表示 .....	24
アクション .....	24
ヘルプ .....	24
終了 .....	24
Netfinity アラート・アクション .....	25
アラート・プロファイル .....	38
アラート・プロファイルの新規作成 .....	40
アラート・プロファイルの編集 .....	44
アラート・プロファイルの削除 .....	44
定義済みアラート・プロファイル .....	45
アクションへのプロファイルの割り当て .....	48
個々のアラートへのアクションの割り当て .....	51
下位レベル Netfinity システムのリモート管理 .....	55
基本障害サポート・テクノロジー (FFST) からのアラートの受信 .....	55
<b>第3章 Alert on LAN 構成 .....</b>	<b>57</b>

第4章 キャパシティー管理	61
レポートの生成	62
レポートのスケジュール	67
レポートの表示	67
第5章 クラスタ・マネージャー	69
クラスタ・システム・マネージャー・インターフェース	71
ブルダウン・メニュー	74
ボタン・バー	76
クラスタ管理	77
グループの移動	78
リソースの移動	78
クラスタ要素プロパティの変更	79
ノード管理	83
グループの作成、削除、および管理	84
リソースの作成、削除、および管理	87
クラスタ・ネットワークとネットワーク・リソースの管理	90
クラスタのディスクパラー	91
スケジューラー	93
クラスタ・タスクのスケジュール	94
スケジュールされたクラスタ・タスクの削除	94
アラート・サービス	95
クラスタ・アラートの定義	98
クラスタ・アラートの削除	101
使用可能なクラスタ・イベント	102
使用可能なクラスタ・アラート・アクション	104
クラスタ・エキスパート・ウィザード	107
ファイル共有リソース・グループの作成または変更	108
インターネット情報サーバー・リソース・グループの作成	110
印刷スプーラー・リソース・グループの作成または変更	111
第6章 クリティカル・ファイル・モニター	113
システム・ファイルの監視	114
OS/2 のシステム・ファイル	114
Windows 3.1、および Windows 95 のシステム・ファイル	114
Windows NT のシステム・ファイル	115
NetWare のシステム・ファイル	115
別のファイルの監視	116

ファイル作成の監視	117
<b>第7章 DMI ブラウザー</b>	<b>119</b>
DMI について	120
DMI の動作	120
DMI 構成要素	121
Netfinity DMI 構成要素インストールメンテーション	123
DMI サービス・レイヤー	124
管理アプリケーション	125
DMI ブラウザーの使用	125
DMI 構成要素情報の表示	127
グループ情報の表示	127
属性情報の表示	127
属性情報の変更	128
問題またはエラーの通知の受信	128
<b>第8章 ECC メモリー・セットアップ</b>	<b>129</b>
<b>第9章 イベント・スケジューラー</b>	<b>131</b>
新規イベントのスケジュール	134
「ファイル転送」タスク固有ウィンドウ	140
「リモート・セッション」タスク固有ウィンドウ	142
「システム情報ツール」タスク固有ウィンドウ	143
「システム区画アクセス」タスク固有ウィンドウ	149
「ソフトウェア・インベントリ」タスク固有ウィンドウ	155
「モニター・データベースへのモニターのエクスポート」タスク固有ウィンドウ	161
「システムの始動 / 遮断」タスク固有ウィンドウ	163
「サービス構成」タスク固有ウィンドウ	164
「コマンドライン・インターフェース」タスク固有ウィンドウ	165
「キャパシティー管理」タスク固有ウィンドウ	166
「スケジュールされたイベント」の削除	168
「スケジュールされたイベント」の表示	169
「スケジュールされたイベント」の編集	170
「スケジュールされたイベント」リストの最新表示	172
スケジューラー・ログの表示	172
<b>第10章 ファイル転送</b>	<b>173</b>



ドライブ、ディレクトリー、およびファイルの選択	175
ドライブまたはボリュームの選択	176
ディレクトリーの選択	176
ファイルの選択	176
リモート・システムからのディレクトリーまたはファイルの受信	177
リモート・システムへのディレクトリーまたはファイルの送信	178
ローカルのディレクトリーまたはファイルの削除	179
リモートのディレクトリーまたはファイルの削除	179
ローカル・ディレクトリーとリモート・ディレクトリーの同期	180
クリーンアップ援助	183
クリーンアップ援助プロファイル	184
クリーンアップ援助プロファイルのテンプレート	186
データ圧縮を使用不可にする	187
<b>第11章 電源オン・エラー検出</b>	189
「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウ	190
「ファイル」プルダウン・メニューの選択項目	192
「オプション」プルダウン・メニューの選択項目	193
「フィルター」プルダウン・メニューの選択項目	194
「ソート」プルダウン・メニューの選択項目	195
「電源オン・エラー検出項目の内容」ウィンドウ	196
<b>第12章 事前障害分析</b>	199
「PFA サービス」ウィンドウ	200
「ドライブの PFA オプション」ウィンドウ	203
詳細なディスク・ドライブ情報	204
事前障害分析オプション	205
<b>第13章 プロセス・マネージャー</b>	207
プロセス情報の収集	208
コマンドの実行	210
プロセスの停止	211
プロセス・アラート	212
プロセス・アラートの追加	213
プロセス・アラートの編集	215
プロセス・アラートの削除	215
<b>第14章 RAID マネージャー</b>	217

「Netfinity RAID サービス」ウィンドウのオプション	219
表示スケールの変更	219
仮想ドライブ表示の変更	219
筐体構成の変更	220
RAID 情報の最新表示	224
RAID 情報の表示	224
筐体情報の表示	224
物理装置情報の表示	225
一般アダプター情報の表示	225
アダプター固有情報の表示	226
仮想ドライブ情報の表示	227
RAID 装置の管理	227
RAID アダプター構成のバックアップ	228
RAID 仮想ドライブの管理	228
仮想ドライブの同期	228
第15章 リモート・セッション	229
OS/2 システムおよび Windows システムでのリモート・セッション	230
NetWare システムでのリモート・セッション	231
第16章 リモート・システム・マネージャー	233
システム、ラック、およびクラスター・グループ	235
システム・グループの作成	237
ラック・グループの作成	239
クラスター・グループの作成	242
システム・グループまたはラック・グループへの個々のシステムの追加	243
検索処理による複数システムの追加	244
リモート TCP/IP サブネットでの検索システム	245
SNA を使用しての他のシステムの検索	245
動的アドレス・オプション	246
グループ検索フィルターの使用	248
自動的に定義されるキーワード	250
グループの表示設定	253
リモート・システムへのアクセス	257
追加機能	258
検索処理の使用	266
インストール時のキーワードの割り当て	267
システム検索条件	268

第17章 リモート・ワークステーション制御	275
リモート・ワークステーション制御のセッション	277
リモート・ワークステーション制御のキーストローク	278
第18章 スクリーン・ビュー	279
第19章 安全保護マネージャー	281
着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定	283
着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの削除	286
発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定	286
発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの編集	289
発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの削除	289
安全保護アクセス・アラート	290
アクセス付与アラート	291
パブリック・アクセス付与アラート	292
システム・アクセス拒否アラート	293
システム再始動アラート	294
システム再始動開始アラート	294
システム再始動要求リジェクト・アラート	295
第20章 シリアル接続制御	297
モデムの構成	298
リモート・アクセスの使用可能化	301
シリアル接続制御項目の作成	303
リモート・システムへのアクセス	305
初期設定ストリングのガイドライン	306
第21章 サービス構成マネージャー	309
サービス構成ファイルの作成	311
サービス構成ファイルの編集	313
サービス構成ファイルの削除	314
第22章 システム管理	315
リモート・システム管理サブシステムを管理するためのシリアル接続の使用	318
構成情報	319
構成の設定	320
「システム識別」グループ	321
「ダイヤルイン設定」グループ	322

「システム管理プロセッサ・クロック」グループ	324
POST タイムアウト	325
ローダー・タイムアウト	326
O/S タイムアウト	327
電源オフ遅延	328
その他の構成設定機能	328
モデム設定	329
「ポート構成」グループ	330
「ダイヤル設定」グループ	332
初期化文字列に関する指針	333
ダイヤルアウト項目の設定の変更	333
リモート・アラート設定	334
「リモート・アラート項目情報」グループ	335
「アラートを使用可能にする」グループ	337
イベント・ログ	342
稼働パラメーター	344
システム電源制御	346
リモート POST コンソール	348
システム管理サブシステムのマイクロコードの更新	350
サポートされるサーバー	351
サポートされる拡張機能	351
POST タイムアウト	351
ローダー・タイムアウト	352
電源障害時自動ダイヤルアウト設定	352
冷却ファン障害時自動ダイヤルアウト設定	352
ハード・ディスク障害時自動ダイヤルアウト設定	352
非クリティカル温度自動ダイヤルアウト設定	352
リモート POST コンソール、再生、およびリモート診断	353
追加温度モニター	353
Netfinity マネージャーがない状態でのシステム管理サブシステムへのアクセス	354
「システム電源」メニューの選択項目	357
「ブート」メニューの選択項目	359
POST の管理とアクセスのためのリモート・ビデオ・モニターの使用	361
<b>第23章 ソフトウェア・インベントリー</b>	<b>365</b>
ソフトウェア・インベントリーの辞書ファイル	367
辞書ファイルのロード	367

新規の辞書ファイルの作成	368
辞書ファイルの編集	369
製品定義の追加	371
製品定義の編集	381
検索の実行	381
全辞書の検索	382
ドライブによる検索	382
選択された製品の検索	383
製品タイプによる検索	384
報告書の生成とデータのエクスポート	385
ファイルに印刷	385
プリンターに印刷	385
データベースにエクスポート	386
NetView 配布管理機能インベントリーの更新	387
ソフトウェア辞書のインポート	388
アプリケーション・キーワードの使用	390
<b>第24章 システム診断マネージャー</b>	<b>393</b>
サポートされるシステム	395
システム診断マネージャーの使用	395
診断の実行	396
表示データの最新表示	397
以前収集された結果の表示	398
<b>第25章 システム情報ツール</b>	<b>399</b>
システム情報ツールの機能	399
システム情報ツールの使用	401
データベース機能	402
機密システム・データの保護	406
<b>第26章 システム・モニター</b>	<b>407</b>
「システム・モニター・サービス」ウィンドウ	409
モニター・ポップアップ・メニュー	413
「システム・モニター」ノートブック	416
しきい値の設定	417
モニターの設定	421
属性モニター	425
属性モニターのしきい値	425

属性モニターの設定	427
IBM PC Server 720 のモニター	428
<b>第27章 システム区画アクセス</b>	429
区画からコピー	431
区画へコピー	432
ディレクトリーの削除	433
ディレクトリー名の変更	433
ファイルの削除	434
ファイル名の変更	434
区画の削除	435
区画のバックアップ	435
区画の復元	436
ディレクトリーの作成	436
終了	436
<b>第28章 システム・プロファイル</b>	437
<b>第29章 Update Connector マネージャー</b>	441
ハードウェアおよびソフトウェアの要件	442
Update Connector マネージャー・インターフェース	443
Update Connector マネージャー・クライアント表示	446
Update Connector マネージャー更新表示	448
「Update Connector マネージャー状況表示」	450
Update Connector マネージャーのグループ機能	453
グループの作成	454
グループの編集	456
グループの除去	458
Update Connector マネージャーのシステム機能	460
システムの追加	461
システムの除去	463
Update Connector マネージャーの更新機能	465
更新の検索	466
更新の適用	467
更新の除去	469
更新プールの作成	471
更新プールの編集	473
更新プールの除去	475

スケジュール・タスクの作成	477
サーバー管理	481
Update Connector マネージャー付きのリモート・システム・マネージャー の使用	483
<b>第30章 Web マネージャーの構成</b>	485
Netfinity マネージャー (Web 用) の使用可能と使用不可	486
TCP/IP ソケット (ポート) 番号の指定	486
URL ログの使用可能	486
Netfinity マネージャー (Web 用) へのアクセスの制限	487
<b>第31章 Netfinity マネージャー (Web 用)</b>	491
システム要件	492
World Wide Web を介した Netfinity へのアクセス	492
Netfinity サービスの Web インターフェース	496
アラート・マネージャー	497
クリティカル・ファイル・モニター	499
ECC メモリー・セットアップ	500
イベント・スケジューラー	500
ファイル転送	501
電源オン・エラー検出	502
事前障害分析	503
プロセス・マネージャー	503
RAID マネージャー	504
リモート・セッション	504
リモート・システム・マネージャー	505
スクリーン・ビュー	506
安全保護マネージャー	506
シリアル接続制御	507
ソフトウェア・インベントリー	508
システム情報ツール	509
システム・モニター	510
システム・プロファイル	511
<b>付録A. 下位レベル Netfinity システムのアラート・マネージャー</b>	513
<b>付録B. プラットフォーム間統合</b>	517
Microsoft SMS との統合	517

システム要件	518
Netfinity MIF ジェネレーター	519
Netfinity アラート・アクション	520
SMS QUERY の作成	522
Netfinity マネージャー のランチ・サポート	522
Intel LANDesk サーバー・マネージャーまたはクライアント・マネージャーとの統合	523
システム要件	524
構成のセットアップ	524
付録C. 電源オン・エラー検出を使用可能にする方法	529
システム要件	529
電源オン・エラー検出ドライバーのインストール	530
電源オン・エラー検出ドライバーのアンインストール	531
サポートされるネットワーク・アダプター	532
電源オン・エラー検出のインストール・ディスクットの作成	533
付録D. サポートされる PFA ハード・ディスク	535
付録E. サポートされる RAID アダプター	537
付録F. RAID アラート	539
RAID 物理ディスク・ドライブ状況がオンラインです	540
RAID 物理ディスク・ドライブ状況がスタンバイです	540
RAID 物理ディスク・ドライブ状況が無効です	541
RAID システム・ディスク・ドライブ状況がオンラインです	541
RAID システム・ディスク・ドライブ状況がクリティカルです	541
RAID システム・ディスク・ドライブ状況がオフラインです	542
付録G. Netfinity のコマンドライン操作	543
アラート・マネージャーのコマンドライン操作	543
NMVT.INIファイルへの GENALERT のアラートの記述の追加	545
システム情報ツールのコマンドライン操作	546
ECC メモリー・セットアップのコマンドライン操作	547
サービス基本プログラムをリモートから開始および停止させる方法	548
リモートからのサービス基本プログラムの開始	549
リモートからのサービス基本プログラムの停止	550
サービスの結合名	551



付録H. インストール・オプション	553
自動インストール	553
カスタマイズしたインストール	555
付録I. <b>Netfinity</b> リレーショナル・データベース・テーブル	559
Netfinity システム情報テーブル	559
BASE テーブル	559
DISKETTE テーブル	560
DISPLAY テーブル	561
EXPANSION_SLOT テーブル	561
FIXED_DISK テーブル	562
LOGICAL_DRIVE テーブル	563
KEYBOARD テーブル	564
MODEL テーブル	565
MOUSE テーブル	565
PRINTER テーブル	566
PROCESSOR テーブル	566
SYSLEVEL テーブル	567
MEMORY テーブル	567
DASD_ADAPTER テーブル	568
DASD_DEVICE テーブル	569
Netfinityシステム・プロファイル・テーブル	570
SYSTEM_PROFILE テーブル	570
SYSTEM_USER テーブル	571
SYSTEM_LOCATION テーブル	572
SYSTEM_CONTACTS テーブル	573
SYSTEM_MISC テーブル	574
Netfinityシステム・モニター・テーブル	575
MONITOR_STATE テーブル	575
MONITOR_VALUE テーブル	575
Netfinityソフトウェア・インベントリー・テーブル	576
SOFTWARE_INVENTORY テーブル	576
Netfinity アラート・テーブル	577
ALERT_LOG テーブル	577
DB2 データベースにおける行の削除	577
一般的なデータベース照会情報および例	578
付録J. <b>Netfinity</b> アラート	587

電源オン・エラー検出アラート	587
事前障害分析 (PFA) アラート	588
クリティカル・ファイル・モニター	589
ファイル変更アラート	589
ファイル削除アラート	590
ファイル作成アラート	591
プロセス・マネージャー	592
プロセス終了アラート	592
プロセス開始アラート	593
プロセス開始の失敗アラート	594
リモート・システム・マネージャー	595
システム・オンライン・アラート	595
システム・オフライン・アラート	596
安全保護マネージャー	597
アクセス付与アラート	597
パブリック・アクセス付与アラート	598
システム・アクセス拒否アラート	599
システム再始動開始アラート	600
システム再始動要求リジェクト・アラート	601
Netfinity サービス・マネージャー	602
サービス開始要求アラート	602
サービス開始リジェクト・アラート	603
システム・モニター	604
しきい値上限エラー・アラート	604
しきい値上限警告アラート	605
しきい値下限警告アラート	606
しきい値下限エラー・アラート	607
しきい値の標準への復帰アラート	608
物理 RAID ドライブ・オンライン・アラート	609
物理 RAID ドライブ・スタンバイ・アラート	610
物理 RAID ドライブ不良アラート	611
論理 RAID デバイス・オンライン・アラート	612
論理 RAID デバイス・クリティカル・アラート	613
論理 RAID デバイス・オフライン・アラート	614
<b>付録K. Wake-On-LAN システムのトラブルシューティング</b>	<b>615</b>
MAP 0100: システム・ハードウェアのチェック	615
MAP 0110: ハードウェア構成のチェック	616

MAP 0120: システム・ソフトウェアのチェック	617
MAP 0130: ネットワーク・セットアップのチェック	622
MAP 0140: その他の可能性のある理由	623
その他の起こりうる問題	624
付録L. 特記事項	627
商標	628
付録M. 索引	631





1. 「Netfinity フォルダー」	1
2. 「Netfinity サービス・マネージャー」	2
3. アラート・マネージャー・サービス	14
4. 「アラート・ログの表示」ウィンドウ	21
5. 「アラート・プロファイル」ウィンドウ	39
6. 「プロファイル・エディター」ウィンドウ	40
7. 「アラート・アクション」ウィンドウ	48
8. 「アクション・エディター」ウィンドウ	49
9. 「Alert on LAN の構成」サービス	57
10. 「キャパシティー管理」ウィンドウ	61
11. 「レポートの生成」ノートブック - 「レポートの定義」のページ	62
12. 「レポートの定義」ウィンドウ	63
13. 「レポートの生成」ノートブック - 「システム」のページ	64
14. 「レポートの生成」ノートブック - 「生成」のページ	65
15. 「レポート・ビューアー」ウィンドウ	66
16. クラスタ・マネージャー	69
17. 「新規グループ」ウィンドウ	84
18. 「優先所有者」ウィンドウ	85
19. 「新規リソース」ウィンドウ	87
20. 「リソース プロパティ」ウィンドウ	88
21. 「依存関係」ウィンドウ	89
22. 「クラスタの発見」ウィンドウ	91
23. 「Discovered Clusters Process」ウィンドウ	92
24. クラスタ・マネージャーの「スケジューラー」ウィンドウ	93
25. 「Alert Service」ウィンドウ	96
26. 「アラートの構成」ウィンドウ	98
27. 「アラート管理」ビュー	101
28. 「ファイル共有リソース」ウィンドウ	108
29. 「IIS リソース・グループ」ウィンドウ	110
30. 「印刷スプーラ リソース グループ」ウィンドウ	111
31. クリティカル・ファイル・モニター	113
32. クリティカル・ファイル・モニター - 「モニター」ウィンドウ	116
33. 「DMI ブラウザー」ウィンドウ	126
34. ECC メモリー・セットアップ	129

35.	「スケジューラー・サービス」ウィンドウ	132
36.	「新しいイベントのスケジュール」ウィンドウ	134
37.	「グループまたはシステムのスケジュール」ウィンドウ	136
38.	「時刻および日付のスケジュール」ウィンドウ	138
39.	「ファイル転送」タスク固有ウィンドウ	140
40.	「リモート・セッション」タスク固有ウィンドウ	142
41.	「システム情報ツール」タスク固有ウィンドウ	143
42.	「データベースの選択」ウィンドウ	146
43.	「ファイルにエクスポート」ウィンドウ	147
44.	「サーバー選択」ウィンドウ	148
45.	「システム区画アクセス」タスク固有ウィンドウ	149
46.	「ソフトウェア・インベントリー」タスク固有ウィンドウ	155
47.	「レポートの定義」ウィンドウ	167
48.	「レポートの生成」ノートブック - 「システム」のページ	168
49.	「スケジュールされたイベントの表示」ウィンドウ	169
50.	「スケジュールされたイベントの編集」ウィンドウ	170
51.	「スケジューラー・ログ」ウィンドウ	172
52.	「ファイル転送」ウィンドウ	175
53.	「ディレクトリーの同期化」ウィンドウ	181
54.	「クリーンアップ援助」ウィンドウ	183
55.	「クリーンアップ援助プロファイル」ウィンドウ	185
56.	「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウ	190
57.	「電源オン・エラー検出エントリーの内容」ウィンドウ	196
58.	「電源オン・エラー検出の詳細」ウィンドウ	197
59.	「PFA サービス」	200
60.	「ドライブの PFA オプション」ウィンドウ	203
61.	「プロセス・マネージャー」ウィンドウ	207
62.	プロセス・マネージャー - 「プロセス・アラートの追加」ウィンドウ	213
63.	RAID マネージャー・サービス	218
64.	「筐体の構成」ウィンドウ	220
65.	「筐体の選択」ウィンドウ	221
66.	「装置番号の構成」ウィンドウ	223
67.	リモート・セッション	229
68.	リモート・システム・マネージャー - 「システム・グループ管理」ウィンドウ	236
69.	リモート・システム・マネージャー - 「システム・グループの追加」ウィンドウ	237

70.	リモート・システム・マネージャー - 「グループ検索フィルター」ウィンドウ	248
71.	リモート・システム・マネージャー - 「グループ」ウィンドウ、アイコン表示	254
72.	リモート・システム・マネージャー - 「グループ」ウィンドウ、アイコン表示	256
73.	リモート・システム・マネージャー「システム通知の設定」ウィンドウ	261
74.	システム検索条件 1: 例 1	269
75.	システム検索条件 1: 例 2	270
76.	システム検索条件 2	271
77.	システム検索条件 3	273
78.	リモート・ワークステーション制御	276
79.	「スクリーン・ビュー・サービス」	279
80.	着信ユーザー ID とパスワードの構成	284
81.	「発信パスワード」ウィンドウ	287
82.	「発信パスワードの編集」ウィンドウ	287
83.	シリアル接続制御サービス	298
84.	シリアル接続制御 - 「Netfinity モデム設定」ウィンドウ	299
85.	「サービス構成マネージャー」ウィンドウ	310
86.	「サービス構成ファイル生成プログラム」ウィンドウ	311
87.	「サービス構成ファイル・エディター」ウィンドウ	313
88.	システム管理のサービス	316
89.	「構成情報」ウィンドウ	319
90.	「構成の設定」ウィンドウ	321
91.	「モデム設定」ウィンドウ	329
92.	「リモート・アラート設定」ウィンドウ	334
93.	「システム管理サブシステム・ログ」ウィンドウ	342
94.	「システム操作パラメーター」ウィンドウ	345
95.	「システム電源制御」ウィンドウ	346
96.	「リモート POST コンソール」ウィンドウ	348
97.	ソフトウェア・インベントリー・サービス	366
98.	「辞書の編集」ウィンドウ	369
99.	「新規製品定義タイプ」ウィンドウ	371
100.	「ファイル・リスト製品定義の追加」ウィンドウ	372
101.	「突合せファイルの編集」ウィンドウ	376
102.	「SYSLEVEL 製品定義の追加」ウィンドウ	377
103.	「選択インベントリー」ウィンドウ	383
104.	「製品タイプによる検索」ウィンドウ	384

105.	「システム診断マネージャー」ウィンドウ	394
106.	「診断の実行」ウィンドウ	396
107.	「セッションの選択」ウィンドウ	398
108.	システム情報ツール	400
109.	「データベースの選択」ウィンドウ	402
110.	「ファイルにエクスポート」ウィンドウ	404
111.	「サーバー選択」ウィンドウ	405
112.	システム・モニター・サービス	408
113.	「システム・モニター・サービス」ウィンドウ	409
114.	「表示モニターの選択」ウィンドウ	410
115.	「システム・モニター」ノートブックの「しきい値」ページ	417
116.	「システム・モニター」ノートブック「設定」ページ	421
117.	システム区画アクセス・サービス	430
118.	「システム・プロファイル・サービス」のウィンドウ	437
119.	「Update Connector マネージャー」ウィンドウ	441
120.	「Update Connector マネージャー更新表示」	448
121.	「Update Connector マネージャー状況表示」	450
122.	「グループの作成」ウィンドウ	454
123.	「グループの編集」ウィンドウ	456
124.	「グループの除去」ウィンドウ	458
125.	「システムの追加」ウィンドウ	461
126.	「システムの除去」ウィンドウ	463
127.	更新可能リスト	467
128.	以前に適用されていた更新のリスト	469
129.	「プールの作成」ウィンドウ	471
130.	「プールの編集」ウィンドウ	473
131.	「プールの除去」ウィンドウ	475
132.	スケジュールされたタスクのリスト	478
133.	「スケジューラー」ウィンドウ	479
134.	「サーバー管理」ウィンドウ	481
135.	「Web マネージャーの構成」サービス・ウィンドウ	485
136.	「許可ホストの追加」ウィンドウ	488
137.	Web ブラウザーを使用した「Netfinity サービス・マネージャー」への アクセス	494
138.	Web ブラウザーを使用した「アラート・マネージャー」へのアクセス	497
139.	Web ブラウザーを使用した「クリティカル・ファイル・モニター」へ のアクセス	499



140. Web ブラウザーを使用した「イベント・スケジューラー」へのアクセス	500
141. Web ブラウザーを使用した「ファイル転送」へのアクセス	501
142. Web ブラウザーを使用した「電源オン・エラー検出」へのアクセス	502
143. Web ブラウザーを使用した「プロセス・マネージャー」へのアクセス	503
144. Web ブラウザーを使用した「リモート・システム・マネージャー」へのアクセス	505
145. Web ブラウザーを使用した「安全保護マネージャー」へのアクセス	506
146. Web ブラウザーを使用した「シリアル接続制御」へのアクセス	507
147. Web ブラウザーを使用した「ソフトウェア・インベントリ」へのアクセス	508
148. Web ブラウザーを使用した「システム情報ツール」へのアクセス	509
149. Web ブラウザーを使用した「システム・モニター」へのアクセス	510
150. Web ブラウザーを使用した「システム・プロファイル」へのアクセス	511
151. アラート・マネージャー - 「アクション・エディター」ウィンドウ	514



本書は、Netfinity マネージャーに含まれる各サービスの使用方法について詳細に説明しています。Netfinity マネージャーのインストールおよび構成の方法についての説明は、*Netfinity マネージャー クイックガイド* を参照してください。Netfinity マネージャーのコマンド・ライン・インターフェースについての説明は、*Netfinity マネージャー コマンドライン・インターフェース リファレンス* を参照してください。

## 本書の対象読者

本書は、ローカルおよびリモートのハードウェア・システム管理のために Netfinity マネージャーおよび Netfinity サービスを使用するすべての方を対象としています。また、個々のサービス・プログラムをご使用になる方々にも、クイック・リファレンスとして使用していただけます。また、すべての Netfinity サービス・プログラムには、詳細オンライン・ヘルプも用意されています。

本書を利用するためには、お使いになるオペレーティング・システム、ネットワークの操作、およびデータベースの機能に関する一般的な知識が必要になります。



## 第1章 Netfinity の始動

Netfinity を始動するには、次のようにします。

1. Netfinity のフォルダーまたはプログラム・グループをオープンします。

Netfinity マネージャーのインストール中に、Netfinity フォルダー (OS/2、Windows 95、または Windows NT 4.0 の場合のみ) または Netfinity プログラム・グループ (Windows NT 3.51 の場合のみ) が、デスクトップに追加されました。Netfinity フォルダーまたは Netfinity プログラム・グループには、「Netfinity サービス・マネージャー」オブジェクトが含まれています。



図 1. 「Netfinity フォルダー」

注:

- a. Netfinity フォルダーまたはプログラム・グループには、「はじめに」というオブジェクトが入っています。この文書には、お手持ちの資料には記載されていない Netfinity に関する情報が含まれています。
- b. Netfinity フォルダーには、ネットワーク・プロトコルとシステム・キーワードの再構成に使用できる「ネットワーク・ドライバー構成」オブジェクトと、Netfinity データベース内のすべてのデータ・テーブルをオンラインで簡単に参照するための「Netfinity データベース・テーブル」オブジェクトを含んでいます。Netfinity のデータベース・サポートの詳細については、559ページの付録I、『Netfinityリレーショナル・データベース・テーブル』およびNetfinity マネージャー クイックガイドの“Netfinity データベース・サポート”を参照してください。

- c. Netfinity フォルダーには、「Netfinity データベース管理」オブジェクトがあり、この「Netfinity データベース管理」を使用すると、Netfinity データベース・サポートを構成することができます。データベース管理についての詳細は、*Netfinity マネージャー クイックガイド* 中の「Netfinity データベース・サポート」を参照してください。

## 2. Netfinity サービス・マネージャーを始動します。

Netfinity サービス・マネージャー を始動するには、「Netfinity サービス・マネージャー」オブジェクトをマウス・ボタン 1 でダブルクリックします。

# Netfinity サービス・マネージャー

システムでサポートされるすべての Netfinity サービス・プログラムは、「Netfinity サービス・マネージャー」ウィンドウから始動できます。使用可能なサービスは、インストール時に選択したインストール構成によって異なります。



図 2. 「Netfinity サービス・マネージャー」

「Netfinity サービス・マネージャー」ウィンドウ内のいずれかの Netfinity サービス・プログラムを始動するには、そのプログラムのアイコンをダブルクリックします。リモート・システムの Netfinity サービスを開始するには、リモート・システ

ム・マネージャー・サービスを使用する必要があります。リモート・システム・マネージャーの詳細については、233ページの第16章、『リモート・システム・マネージャー』を参照してください。

## Netfinity サービス・プログラムの説明

各 Netfinity サービス・プログラムは、基本プログラムとグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) で構成されます。サービス基本プログラムによって、リモートの Netfinity マネージャーから個々のサービス・プログラムにアクセスすることができますが、サービス基本プログラムへのローカル・アクセスはできません。サービス GUI をそれぞれ対応する基本プログラムとともに使用すると、ユーザーはサービスにアクセスすることができます。

一部のサービスは、特別のシステム構成を備えたシステムでだけ利用することができます。このようなサービスには次のものがあります。

- DMI ブラウザー (DMI サービス・レイヤーが必要)
- ECC メモリー・セットアップ (ECC メモリーが必要)
- 事前障害分析 (PFA 利用可能ハード・ディスクが必要)
- RAID マネージャー (RAID ハード・ディスク・サブシステムが必要)
- システム区画アクセス (組み込み型のシステム区画が必要)
- キャパシティー管理 (Windows NT 4.0 以降の稼動するシステムでのみ使用可能)
- クラスターマネージャー (Windows NT 4.0 以降の稼動するシステムでのみ使用可能)
- Update Connector マネージャー (Windows NT 4.0 以降の稼動するシステムでのみ使用可能)

次に、各 Netfinity サービスの概略を説明します。それぞれの詳細な使用方法については、本書の各 Netfinity サービス・プログラムの章を参照してください。

## アラート・マネージャー

アラート・マネージャーは、アプリケーションが生成したアラートを受信し、処理することのできる拡張可能な機能です。アラートに対応して、さまざまなアクションを取ることができます。アクションの例としては、アラートの記録、ユーザーへの通知、別のシステムへのアラートの転送、プログラムの実行、WAV ファイルの再生 (マルチメディア・システムだけで使用可能)、SNMP アラート・メッセージの生成、デジタル・ページャー・サービスへのメッセージ転送 (モデム付きのシステムだけで使用可能)、アプリケーション定義のアクションの実行などが挙げられます。ユーザーは、高度な柔軟性をもつアクション管理インターフェースを使って、アクションを定義することができます。

さらに、アラート・マネージャーで受信したすべてのアラートは、広範囲にわたる詳細なログとして保管されます。ログから入手可能な情報には、アラートを受信した日付と時刻、タイプと重大度、アラートを生成したアプリケーションの ID、アラート・マネージャーが生成したテキストやアラート・マネージャーが取ったアクションなどが含まれます。アラートは、個々に、または複数個同時にログから選択して、将来の参照用に印刷したり、問題の解決後にログから削除したりできます。このサービス・プログラムは、スタンドアロンおよびネットワークのどちらでも使用することができます。

## キャパシティー管理

キャパシティー管理は、ネットワーク管理者用の使用しやすいリソース管理・計画ツールで、これを使用すると、ネットワーク上のすべてのサーバーについて、リモートでパフォーマンスの監視を行うことができます。

## クラスター・マネージャー

クラスター・マネージャーは、Microsoft Cluster Server (MSCS) 管理コンソールのクラスター管理機能 (Microsoft Windows NT バージョン 4.0 Enterprise Edition に組み込まれている) を拡張する目的で設計された、強力なアプリケーションです。クラスター・マネージャーは、強力な MSCS を土台にして、ネットワーク上でクラスター化されているシステムを迅速、かつ、容易に監視および管理することができるようにする統合グラフィカル・インターフェースを提供します。このサービスが使用できるのは、Windows NT Workstation 4.0 が稼動しているシステムの場合だけです。



## クリティカル・ファイル・モニター

クリティカル・ファイル・モニターを使用すると、システム上の重要なシステム・ファイルが削除されたり変更されたとき、警告を受けることができます。クリティカル・ファイル・モニターを使用すると、重要なシステム・ファイル (たとえば、CONFIG.SYS ファイルなど) の日付、時刻、サイズが変更された場合や、ファイルが削除または作成された場合に、Netfinity アラートの生成が簡単になります。また、クリティカル・ファイル・モニターを使用すると、Netfinity システムに存在しているすべてのファイルを監視することができます。

## DMI ブラウザー

DMI ( デスクトップ・マネージメント・インターフェース ) ブラウザーを使用すると、システムにインストールまたは接続されている、DMI 準拠のハードウェア製品とソフトウェア製品についての情報を調べることができます。

## ECC メモリー・セットアップ

ECC メモリー・セットアップを使用すると、ECC メモリーのシングル・ビット・エラーを監視し、エラーが検出されると ECCメモリーを自動的に“修正”します。また、シングル・ビット・エラーの回数をカウントし、ECC シングル・ビット・エラーのしきい値を超えた場合に、マスク不能割り込み (NMI) を行わせるためのシングル・ビット・エラーしきい値を設定することもできます。このサービス・プログラムは、ECC メモリー搭載のシステムであれば、スタンドアロンでも、ネットワークでも使用することができます。

## イベント・スケジューラー

イベント・スケジューラーを使用すると、多くの Netfinity サービスを自動化することができます。イベント・スケジューラーによって、ネットワーク上のすべての Netfinity システムで、システム情報ツール、システム・プロファイル、およびソフトウェア・インベントリーのデータの自動収集とエクスポート、ファイルの配布または削除、システムの再始動、コマンドの実行、およびシステム区画へのアクセスと管理を行うことができます。スケジュールされたイベントは、1 回のみ実行するか、あるいはユーザーが定義したスケジュールに従って実行することができます。

## ファイル転送

ファイル転送サービスを使用すると、ネットワーク上のリモート Netfinity システムとの間でファイルまたはディレクトリー全体を送受信したり削除したりすることができます。

## 電源オン・エラー検出

電源オン・エラー検出サービスは、リモート Netfinity システムの起動時に問題が発生すると、ただちに警告を発し、ユーザーが問題に迅速に対応してシステムダウンの時間を最小限に抑えることを可能にします。

## 事前障害分析

事前障害分析 (PFA) サービスを使用すると、PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブを継続して監視および管理することができます。PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブは、ドライブの問題や損傷を、それらが発生する前に検出したり予測したりできるようにハードウェアが設計されているので、データ損失やシステム・ダウンを防ぐために役立てることができます。

## プロセス・マネージャー

プロセス・マネージャーを使用すると、システム上で現在アクティブなすべてのプロセスに関する詳しい情報を表示することができます。また、プロセスを始動および停止したり、プロセスが開始または停止した場合、また、システムの始動後、指定された時間内にプロセスを開始できなかった場合に、Netfinity アラートを生成することもできます。

## RAID マネージャー

RAID マネージャー・サービスを使用すると、保守のために RAID システムをオフラインにすることなく、RAID (Redundant Array of Independent Disks) アダプターおよび RAID アレイを監視、管理、構成することができます。RAID マネージャーは、システムの RAID アレイと RAID アダプターに関するデータの収集、障害のあるドライブの再構成、論理ドライブの追加または削除、データの保全性のテストの実行およびその他のさまざまな RAID システムのタスクなどに使用します。このサービス・プログラムは、RAID アダプターがサポートされているシステムであれば、スタンドアロンおよびネットワークでも使用することができます。

## リモート・セッション

リモート・セッションを使用すると、リモート Netfinity システムとの間で完全にアクティブなコマンド・セッションを確立することができます。

## リモート・システム・マネージャー

リモート・システム・マネージャーを使用すると、ネットワーク内の Netfinity システムにインストールされている任意の Netfinity サービスにアクセスし、管理することができます。ネットワーク上の Netfinity システムは、自動検索機能を使用して自動的に更新でき、簡単に管理できる論理グループに編成することができます。

## リモート・ワークステーション制御

リモート・ワークステーション制御を使用すると、リモートの Netfinity システムのスクリーン表示を監視および制御することができます。一度、別の Netfinity システムとのリモート・ワークステーション制御セッションを開始すると、そのリモート・システムのディスプレイ上に現れるイベントの受動的な監視、またはそのリモート・システムのデスクトップの能動的な制御を行うことができます。リモート・ワークステーション制御セッションを開始すると、すべてのマウスのクリックおよびキー入力のリモート・システムに自動的に渡されます。リモート・ワークステーション制御を使用して、リモートからのプログラムの起動、ウィンドウのオープンまたはクローズ、コマンド入力などの操作ができます。

## スクリーン・ビュー

スクリーン・ビュー・サービスを使用すると、リモート Netfinity システムのグラフィック画面の“スナップショット”をとり、ローカルの画面上に表示することができます。これらのスナップショットは、ビットマップとして保管し、後で参照することができます。

## 安全保護マネージャー

安全保護マネージャーを使用すると、ユーザーの Netfinity サービス・プログラムの一部またはすべてに無許可でアクセスが行われないようにすることができます。このサービスは、着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを使用するもので、ネットワークだけで使用できます。

## シリアル接続制御

シリアル接続制御サービスを使用すると、リモート Netfinity マネージャーから、電話回線とモデムを介して、ユーザーのシステムにアクセスすることができます。シリアル接続制御サービスを使用すると、ネットワークに接続されていない場合でも、Netfinity の優れたリモート・システム・アクセス機能、監視機能、および管理機能が利用できます。

注: シリアル接続制御を使用するには、少なくとも 9600 bps をサポートするモデムがシステムに正しくインストールされ、そして、構成されている必要があります。

## サービス構成マネージャー

サービス構成マネージャーを使用すると、選択したシステムの Netfinity サービスの構成を、サービス構成ファイル (SCF) として保管することができます。SCF ファイルがいったん作成されると、イベント・スケジューラーでそれを使用して、構成を同じシステムに戻して復元することもできれば、それを (イベント・スケジューラーと共に) 使用して、他のどんな類似システムを選択した場合でも、選択した類似システムに構成を転送することもできます。

## システム管理

システム管理を使用すると、多くの機能をもつシステム管理アダプターの構成および監視を行うことができます。このサービスを使用すると、リモート・システムのシステム管理アダプターに対して、ダイヤルアウトまたは直接のアクセスおよび制御を行うことができます。システム管理を使用すると、システム管理アダプター・イベント (POST、ローダー、および O/S のタイムアウト、限界温度、電圧、およびタンパーのアラート、リダンダント電源障害など) を構成することができます。

## ソフトウェア・インベントリー

ソフトウェア・インベントリーを使用すると、システムにインストールされているすべてのアプリケーション・プログラムのインストール状況を簡単に保守するためのソフトウェア製品辞書を作成、管理することができます。

## システム診断マネージャー

システム診断マネージャーを使用すると、ROM ベースの診断をサポートしているシステムに対して、各種の診断タスクを開始することができます。以前に実行したすべての診断セッションの結果がシステムに保存されているので、システム診断マネージャーを使用してこれを調べることができ、システムの問題の診断および解決に役立ちます。

## システム情報ツール

システム情報ツールを使用すると、システムのハードウェアおよびソフトウェアの構成の詳細情報を素早く簡単に入手することができます。システム情報ツールは、ほとんどすべてのコンピューターに関する情報を収集しますが、IBM のコンピューターで使用すると特に詳細な情報が得られます。このサービスは、スタンドアロン、およびネットワークのどちらでも使用することができます。

## システム・モニター

システム・モニターを使用すると、プロセッサの使用率、ディスク・スペースの使用率、ECC メモリー・エラーなどシステム内の複数の構成要素の活動を簡単に図式化して監視することができます。これらの便利なモニターは、画面上から消去することも、サイズを変更することも可能であるため、常に必要なモニターだけを表示しておくことができます。システム・モニターのしきい値マネージャーを使用すると、監視対象の構成要素にしきい値レベルを設定することができます。このしきい値の範囲を超えると、ユーザーが構成したアラートが生成されます。

データは、システムの始動時から継続的に収集されます。高精度なデータ処理技法により個々の値に重みが付けられて、複数の並行するサンプルの平均値が算出され、長時間のシステム活動を正確に反映する値として記録されます。この技法を使用すると、膨大なデータ・ファイルを作成することなくシステムの活動記録を維持できます。このサービスは、スタンドアロン、およびネットワークのどちらでも使用することができます。

## システム区画アクセス

システム区画アクセスを使用すると、ローカルおよびリモートの両方で、システム区画ファイルの処理を大幅に簡素化することができます。システム区画にある個々のファイルやディレクトリー全体の名前を変更したり削除したりすることができます。個々のファイルについては、名前の変更、削除、およびシステム区画へのコピーを行います。また、区画全体のバックアップをとったり、復元したり、削除したりすることもできます。このサービスは、システム区画を備えたシステムであれば、スタンドアロンでもネットワークでも使用できます。

## システム・プロフィール

システム・プロフィールは、特定のユーザーまたはシステムに関するデータが記録されている便利なノートを提供します。このノートには、氏名、住所、オフィスの部屋番号や位置、および電話番号などの広範囲なユーザー固有のデータを記入するための定義済みフィールドが多数あります。システム・プロフィールには、モデル、シリアル・ナンバー、購入日など、システム情報ツールでは使用することのできないシステム固有のデータを記入するための定義済みフィールドも多数含まれています。また、ユーザーが定義できる「その他」フィールドも多く含まれ、ユーザーや管理者に必要なデータを保持するために使うことができます。

## Web マネージャー構成

Web マネージャーの構成を使用すると、Netfinity マネージャー (Web 用) へのアクセスを、ユーザーが指定した TCP/IP ホスト、またはある範囲内のアドレスを持つ TCP/IP ホストに制限することができます。また、Netfinity マネージャー (Web 用) を使用可能または使用禁止にしたり、Netfinity Web サーバー機能をオンにする TCP/IP ポートの番号を指定したりすることもできます。

## OS/2 システムでの Netfinity 始動の遅延

Netfinity ネットワーク・インターフェース (NETFBASE.EXE) の自動始動を遅らせた方が都合が良い場合があります。たとえば、開始時刻に制約のあるアプリケーションを正しく始動させたり、ネットワーク操作を開始する前にシステムを完全に構成したりする場合があります。NETFBASE.EXE には、NETFBASE.EXE の始動待機時間の秒数を指定するためのパラメーター (WAIT) があります。

Netfinity のインストール時には、Netfinity ネットワーク・インターフェース・オブジェクトは始動フォルダーに入れられています。指定された秒数の間、始動前に待機するように Netfinity を構成するには、次のとおりにします。

1. Netfinity ネットワーク・インターフェースが実行されている場合は、遮断します。
2. 「始動」フォルダーをオープンします。
3. マウス・ボタン 2 を使用して、「Netfinity ネットワーク・インターフェース」オブジェクトをクリックすると Netfinity ネットワーク・インターフェースのコンテキスト・メニューがオープンします。
4. 「設定」を選択して、Netfinity ネットワーク・インターフェースの「設定」ノートブックをオープンします。
5. 「パラメーター」フィールドに、次のように入力します。

WAIT:x

x には、始動前に Netfinity ネットワーク・インターフェースが待機する秒数を指定します。

6. Netfinity ネットワーク・インターフェースの「設定」ノートブックをクローズします。

WAIT パラメーターを x に設定すると、システムを始動するたびに、Netfinity ネットワーク・インターフェースは x 秒間待機します。

注: この機能が使用できるのは、OS/2 が稼働しているシステムの場合だけです。





## 第2章 アラート・マネージャー

---

Netfinity アラート・マネージャーを使用すると、他の Netfinity サービス・プログラムが生成したアラートを受信して自動的に応答できるようになります。Netfinity は、さまざまなアラート固有の情報 (アラートの重大度、アラートを生成した Netfinity サービス・プログラムの名前、アラートのタイプ、およびアラートを生成したシステムのネットワーク・アドレスなど) を使用して、アラートをアラート・プロファイル別に分類します。アラート・プロファイルには、アラートの記録、コマンドの実行など、1 つまたは複数のアラート・マネージャーのアクションが割り当てられます。プロファイルがアクションに割り当てられると、プロファイルに適合するアラートを受信するたびに、対応するアクションを実行します。

Netfinity アラート・マネージャーには、次のようなアクションがあります。

- アラートをファイルに記録する
- アラートをポップアップ・ウィンドウに表示する
- アラートを別のワークステーションに転送する
- コマンドを実行する
- 最小化されたコマンドを実行する
- SNMP (*Simple Network Management Protocol*) バージョンのアラートを送信する (これらは、Windows 3.1 または Windows 95 が稼動しているシステムでは、ローカルには使用できません)
- アラートを SNMP にマップして送信する (アラートの SNMP 標準バージョンと同様です。ただし、各種アラート・タイプの各々に固有のエンタープライズ ID が付けられています。これらは、Windows 3.1 または Windows 95 が稼動しているシステムでは、ローカルには使用できません)
- WAV (waveform) サウンド・ファイルを再生する (マルチメディア・サポートが必要)
- モデムを介して数字ページャーにメッセージを送信する (システムにモデムが接続されていることが必要)
- モデムを介して英数字ページャーにアラート情報を送信する (システムにモデムが接続されていることが必要)
- TCP/IP SENDMAIL を使用して他のユーザーにアラートを送信する (OS/2 システムのみ使用可能。OS/2 バージョン 2.0 またはそれ以降の TCP/IP for OS/2 が必要)
- VIM (Vendor Independent Messaging) を使用してアラートを E-Mail 形式で送信する (VIM サポートが必要)

- アラートを MAPI (Message Application Programming Interface) 形式で送信する (MAPI のサポートが必要)
- Netfinity データベースにアラート情報をエクスポートする
- Lotus Notes データベースにアラート情報をエクスポートする
- デスクトップ・マネージメント・インターフェース (DMI) イベントを生成して、DMI サービス・レイヤーに送信する (DMI のサポートが必要)
- アラートを PC Server 720 の前面パネルに表示する (IBM PC Server 720 システムの場合のみ使用可能)
- エラー条件をシステムに追加する (264ページの『エラー条件』を参照)
- エラー条件をシステムから除去する (264ページの『エラー条件』を参照)
- APPC を使用して、アラートを NetView MVS などのメインフレームのアプリケーションに送信する
- シリアル接続を使用して、アラートをリモート・システムに送信する
- アラートを Windows NT のイベント・ログに追加する (Windows NT のシステムのみで使用可能)
- TCP/IP SENDMAIL を使用して、Netfinity Web マネージャー・インターフェースへのリンクを含む、TCP/IP Web メール・バージョンのアラートを別のユーザーに送信する (OS/2 システムのみ使用可能。OS/2 バージョン 2.0 またはそれ以降のTCP/IP for OS/2 が必要)
- アラートを FFST/2 に送信する (OS/2 システムのみ使用可能)



図 3. アラート・マネージャー・サービス

注: Netfinity を使用すると、Netfinity マネージャー、Netfinity クライアント・サービス、または SystemView LAN for OS/2 V1.1クライアントをリモート管理することができます。ただし、これらのシステム管理製品は、Netfinity アラート・マネージャーの機能の一部 (アラート・プロファイルなど) をサポートしていません。これらのシステム管理製品のいずれかを実行しているシステムをリモート管理する場合には、513ページの付録A、『下位レベル Netfinity システムのアラート・マネージャー』を参照してください。

アラート・マネージャーは、次の 2 つの重要なシステム管理を行います。

1. 構成可能なフィルターによって選択表示できる、受信され、記録されたすべてのアラートのログを保守する。

アラート・ログは、アラート・ログ・ファイルに現在記録されているすべてのアラートをリストしています。アラート・ログは、次のものを表示するように構成できます。

- 記録されているすべてのアラート
- 指定された範囲内の時刻または日付に受信および記録されたアラート
- 受信および記録されたアラートのうち、指定されたアラート・プロファイルに適合するもの
- 指定された範囲内の時刻または日付に受信されたアラートのうち、指定されたアラート・プロファイルに適合するもの

注: 受信後、「アラートをログ・ファイルに追加」のアラート・アクションを使用してアラート・ログに記録されたアラートだけが、「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。アラート・アクションに関しては、25ページの『Netfinity アラート・アクション』を参照してください。

アラート・ログの表示の構成については、20ページの『アラート・ログの表示』を参照してください。アラート・プロファイルについては、38ページの『アラート・プロファイル』を参照してください。

2. 受信したアラートに対し、ユーザーが指定したアクションを使って自動的に応答します。

アラート・マネージャーを使用すると、1 つまたは複数のアラート・プロファイルを選択して、それらを 1 つのアラート・マネージャーのアラート・アクションに割り当てることができます。いったん、プロファイルがアラート・アクションに割り当てられると、プロファイルと一致するアラートを受信するたびに、アクションを自動的に実行します。アラート・プロファイルについては、38ページの『アラート・プロファイル』を参照してください。アラート・プロファ

イルをアラート・アクションに割り当てる方法については、48ページの『アクションへのプロファイルの割り当て』を参照してください。

注: Netfinity を使用すると、Netfinity マネージャー、Netfinity クライアント・サービス、または SystemView LAN for OS/2 V1.1 クライアントをリモート管理することもできます。ただし、これらのシステム管理製品は、Netfinity アラート・マネージャーの機能の一部 (アラート・プロファイルなど) をサポートしていません。これらのシステム管理製品のいずれかを実行しているシステムをリモート管理する場合には、513ページの付録A、『下位レベル Netfinity システムのアラート・マネージャー』を参照してください。

## アラート・ログ

「アラート・ログ」ウィンドウは、アラート・マネージャー・サービスを始動すると最初に表示されるウィンドウです。「アラートをログ・ファイルに追加」アクションを使って記録されたアラートはすべて、「アラート・ログ」ウィンドウの下半分の「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。

「ログ内のアラート」から任意のアラートを選択すると、そのアラートに詳細情報が、「アラート・ログ」ウィンドウの上半分に表示されます。

注: 複数のファイルを削除したり、報告書を印刷したりする場合は、複数のアラートを選択できますが、画面の上半分に詳細情報が表示されるのは、現在ログで強調表示されているアラートだけです。

選択したアラートに関して表示される情報には、次のものがあります。

- アラート・テキスト
- アラート・タイプ
- 重大度
- アプリケーション ID
- アプリケーション・アラート・タイプ
- 送信元システム
- システム名
- アラートの時刻
- アラートの日付
- システム固有の ID

## アラート・テキスト

アラート・テキストには、アラートの名前、およびそのアラートを生成したアプリケーションが記述した注釈テキストが含まれています。

## アラートのタイプ

アプリケーションで指定されたアラート・タイプです。アラート・タイプは、アラート送信元 ID とそれに続くアラート・タイプ値から構成されます。アラート送信元 ID は、アラートを生成した装置の種類が、アラート・タイプ値には、アラート自体の内容を説明するものです。

アラート送信元 ID には次のものがあります。

- システム
- DASD
- ネットワーク
- オペレーティング・システム
- アプリケーション
- 装置
- 安全保護

アラート送信元が指定されていない場合もあります。その場合、アラート送信元 ID は表示されません。

アラート・タイプ値には、次のようなものがあります。

- 障害
- エラー
- 警告
- 通知

アラート・タイプ値が指定されていない場合もあります。その場合、アラート・タイプ値は表示されません。

## 重大度

アラート重大度は 0 から 7 までの値で示され、値が 0 の場合が最も重大です。たとえば、ディスク障害を示すためにはアラート重大度 0 を割り当て、一日の終わりにシステムをオフライン状態にしたことを示すためには 7 の値を割り当てたアラートが生成されるようにしたりすることができます。アラート重大度は、そのアラートを生成するアプリケーションによって定義されます。

## アプリケーション ID

アプリケーション ID は、指定されたアラートをログに送信したアプリケーションの名前です。

## アプリケーション・アラート・タイプ

アプリケーション・アラート・タイプは、アラートを生成したアプリケーションによって個々のアラートに割り当てられた数値です。多くの場合、この値はそのアプリケーションによって使用されます。

## 送信元

送信元は、アラートを生成したシステムのネットワーク・アドレスです。送信元は、ローカル・システムか、またはアラートをローカル・システムのエラー・ログに転送するよう指示されているリモート・システムの、どちらかです。

## システム名

システム名は、アラートを生成したシステムの名前です。システム名は、Netfinity のインストール時にユーザーによって指定されます。

## アラートの時刻

アラートの時刻は、アラートが生成、記録された時刻です。

## アラートの日付

アラートの日付は、アラートが生成されたカレンダー日付です。

## システム固有の ID

システム固有の ID は、16 文字のランダム文字からなる識別ストリングで、Netfinity のインストール時にシステムに割り当てられます。アラートを生成したシステムの Netfinity ディレクトリー内の NFUNIQUE.ID ファイルに格納されています。システム固有の ID が主として使用されるのは、ネットワーク・アドレスが頻繁に変更される (DHCP の使用時など) システムの識別および管理が目的です。

## アラート・ログの表示

アラートをフィルターにかけ、「ログ内のアラート」フィールドに表示されるアラート・マネージャーを構成することができます。現在のアラート・ログの表示は、「アラート・ログの表示」ボタンの横に表示されます。選択可能なアラート・ログの表示には、次のものがあります。

- 全アラートを表示

アラート・ログ内の全アラートが、「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。

- 時間でログを表示

指定された時間内に発生したアラートだけが、「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。

- プロファイルでログを表示

選択されたアラート・プロファイルに適合するアラートだけが、「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。

- 時間とプロファイルでログを表示

選択されたアラート・プロファイルに適合し、かつ指定された時間内に発生したアラートだけが、「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。

注: 受信し、「アラートをログ・ファイルに追加」のアラート・アクションを使ってアラート・ログに記録されたアラートだけが、「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。アラート・アクションに関しては、25ページの『Netfinity アラート・アクション』を参照してください。

アラート・ログ表示を変更するには、次のようにします。

1. 「アラート・ログの表示」を選択します。

「アラート・ログの表示」ウィンドウがオープンします(21ページの図4を参照)。





図 4. 「アラート・ログの表示」ウィンドウ

2. 「アラート・ログの表示」フィルターを使用可能（または使用不可）にします。

「アラート・ログの表示」フィルターには、次の 2 種類があります。

- 時刻および日付別表示（を可能にするフィルター）
- プロファイル別表示（を可能にするフィルター）

「時刻および日付別表示」フィルターを使用可能にするには、次のようにします。

- a. 「ログ内のアラート」フィールドに表示されるアラートの時刻と日付を記述するラジオ・ボタンを選択します。選択可能な値は、次のとおりです。
  - 最後の 1 時間
 

記録されたアラートのうち、1 時間前までを「ログ内のアラート」フィールドに表示します。
  - 最後の (1 ~ 48) 時間
 

アラートのうち、指定した時間内に記録されたアラートだけを「ログ内のアラート」フィールドに表示します。

- 時刻の範囲

「開始日」フィールドで指定された日の「開始時刻」フィールドと、「終了時刻」フィールドで指定された時間内に記録されたアラートだけを、「ログ内のアラート」フィールドに表示します。

- 日付の範囲

「開始日」フィールドと「終了日」フィールドで指定された期間内に記録されたアラートだけを、「ログ内のアラート」フィールドに表示します。

b. 「使用可能」を選択します。

「プロファイル別表示」フィルターを使用可能にするには、次のようにします。

a. 「非活動プロファイル」フィールドから、1 つまたは複数のアラート・プロファイルを選択します。

「ログ内のアラート」フィールドに表示したいアラートに対応するアラート・プロファイルだけを選択します。

b. 「活動化」を選択します。

選択したアラート・プロファイルが、「非活動プロファイル」フィールドから移動し、「活動プロファイル」フィールドに表示されます。

c. 不必要なアラート・プロファイルが含まれる場合は、それを「活動プロファイル」フィールドから選択し、削除します。

「活動プロファイル」フィールドに不必要なアラート・プロファイルが含まれている場合は、それらを選択してから「非活動化」を選択し、「活動プロファイル」フィールドから削除します。選択されたプロファイルが、「非活動プロファイル」フィールドに表示されます。

d. 「使用可能」を選択します。

選択したプロファイルに一致するアラートのログが、「ログ内のアラート」フィールドに表示されます。

3. 「最新表示」を選択してこの変更を保管すると、「アラート・ログの表示」ウィンドウがクローズします。

変更を保管しないでこのウィンドウをクローズする場合は、ウィンドウの左上隅をダブルクリックします。

「時刻および日付別表示」フィルターや「プロファイル別表示」フィルターを使用不可にするには、フィルターのボタン・グループにある「使用可能」の選択を取り消します。

## アラート・マネージャーの機能

アラート・マネージャーの機能は、ウィンドウ内の押しボタンによってアクティブにされます。次のようなボタンがあります。

- 削除
- 印刷
- ファイルに印刷
- プロファイル
- 最新表示
- アクション
- ヘルプ
- 終了

アラート・マネージャーの各機能を説明します。

### 削除

アラート・ログから特定のアラートを削除する場合は、「削除」を選択します。この機能を使用するには、アラート・ログから削除したいアラートを選択してから、「削除」を選択します。

### 印刷

アラート・ログ内の選択されたすべてのアラート (および選択されたアラートに関するすべての詳細アラート情報 ) のハード・コピーを印刷するには、「印刷」を選択します。

### ファイルに印刷 (保管)

選択されたすべてのアラートを、ユーザーが指定したファイルに保管するには、「ファイルに印刷」を選択します。

## プロフィール

アラート・プロフィールの構成、編集、削除を行う場合は、「プロフィール」を選択します。プロフィールの作成、編集、削除の詳細な手順については、38ページの『アラート・プロフィール』を参照してください。

## 最新表示

「アラート・ログ」ウィンドウが表示された後で、生成されたアラートを追加表示する場合は、「最新表示」を選択します。

## アクション

構成済みのアラート・プロフィールに対してアラート・アクションを割り当てる場合は、「アクション」を選択します。アラート・アクションは、アラート・マネージャーのアラート・プロフィールは含まれない個々のアラートに対しても構成することができます。アラート・プロフィールにアラート・アクションを割り当てる方法については、48ページの『アクションへのプロフィールの割り当て』を参照してください。アラート・プロフィールに含まれないアラートにアラート・アクションを対応させる構成方法については、51ページの『個々のアラートへのアクションの割り当て』を参照してください。アラート・アクションについては、25ページの『Netfinity アラート・アクション』を参照してください。

## ヘルプ

アラート・マネージャーに関するオンライン・ヘルプにアクセスする場合は、「ヘルプ」を選択します。アラート・マネージャーのすべての機能に関する詳しい説明を見ることができます。

## 終了

アラート・マネージャーを終了するには、「終了」を選択します。

# Netfinity アラート・アクション

アラート・マネージャーは、次のようなアラート・アクションを含んでいます。

- アラートをログ・ファイルに追加

アラートをアラート・ログに追加します。このアラート・アクションでは、追加情報を提供する必要はありません。

- アラートをポップアップ・ウィンドウに表示する

アラート固有のすべての情報を小さなウィンドウに表示します。このアラート・アクションでは、追加情報を提供する必要はありません。

- アラートを別のワークステーションに転送する

指定されたネットワークを介して、アラートを別のユーザーに送信します。受信されたアラートは、ローカルで生成されたアラートと同様に扱われます。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

## <P1>: ネットワーク・タイプ

アラートの転送に使用されるネットワーク・タイプです。ネットワーク・タイプは、NETBIOS、TCPIP、IPX、SNA、または SERIPC (シリアル接続用) を入力する必要があります。

注: SERIPC (シリアル接続) を使用してリモート・システムにアラートを転送するには、シリアル接続が活動状態になっていなければなりません。SERIPC の値を用いる場合には、シリアル接続が確立している場合に限ってアラートをリモート・システムに転送します。現在、アクティブになっていないシリアル接続を使用して、アラートをリモート・システムに転送する場合には、「シリアル接続を介してアラートをリモート・システムに送信する」というアラート・アクションを使用します。

## <P2>: ネットワーク・アドレス

アラートの転送先であるリモート・システムで使用されているネットワーク・タイプに固有のアドレスです。

ワークステーションのネットワーク・タイプまたはネットワーク・アドレスが明確に分からない場合には、リモート・システム・マネージャーの「システムの編集」アクション (259ページの『システムの編集』を参照) またはシステム・グループの「詳細表示」 (255ページの『詳細表示』を参照) を使用して、この情報を確認することができます。

- コマンドの実行

単一コマンドを実行します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>**: コマンドライン

システムで実行されるコマンドです。

このアクションには、アラート固有のデータをコマンドに組み込むための特別なコマンド文字列 (またはマクロ) が用意されています。コマンドラインから開始されるアプリケーションで、アラート固有のデータが使用できるようになります。マクロには、次のものがあります。

マクロ	挿入される情報
<b>%TXT</b>	アラート・テキスト
<b>%TIM</b>	アラートの時刻
<b>%DAT</b>	アラートの日付
<b>%SEV</b>	アラートの重大度
<b>%SND</b>	アラート送信元 (たとえば、“NETBIOS::USER1”)
<b>%TYP</b>	アラート・タイプ
<b>%APP</b>	アラート・アプリケーション ID
<b>%AT</b>	アラートのアプリケーション固有のタイプ
<b>%SYS</b>	システム名
<b>%P1-%P9</b>	アラート・テキストに組み込まれたアラート固有のテキスト文字列です。これらのパラメーターの内容は、アラートの種類によって決まります。詳細については、587ページの付録 J、『Netfinity アラート』を参照してください。

- 最小化されたコマンドの実行

単一の最小化されたコマンドを実行します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>**: コマンドライン

システムで実行されるコマンドです。

このアクションには、アラート固有のデータをコマンドに組み込むための特別なコマンド文字列 (またはマクロ) が用意されています。コマンドラインから開始されるアプリケーションで、アラート固有のデータが使用できるようになります。マクロには、次のものがあります。

マクロ	挿入される情報
<b>%TXT</b>	アラート・テキスト
<b>%TIM</b>	アラートの時刻
<b>%DAT</b>	アラートの日付
<b>%SEV</b>	アラートの重大度
<b>%SND</b>	アラート送信元 (たとえば、“NETBIOS::USER1”)
<b>%TYP</b>	アラート・タイプ
<b>%APP</b>	アラート・アプリケーション ID
<b>%AT</b>	アラートのアプリケーション固有のタイプ
<b>%SYS</b>	システム名
<b>%P1-%P9</b>	アラート・テキストに組み込まれたアラート固有のテキスト文字列です。これらのパラメーターの内容は、アラートの種類によって決まります。詳細については、587ページの付録 J、『Netfinity アラート』を参照してください。

- TCP/IP を通して SNMP アラートを送信

SNMP エージェントを使用して、SNMPバージョンのアラートを生成します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>**: コミュニティー・ストリング

ネットワーク内の SNMP アプリケーションで使用されるコミュニティ文字列名です。

注:

1. OS/2 環境では、このアクションは、OS/2 バージョン 2.0 またはそれ以降の IBM TCP/IP for OS/2 (バージョン 2.0 またはそれ以上のリリース) が必要です。
2. このアクションは、Windows 3.1 または Windows 95 が稼働しているシステムでは、ローカルには使用できません。
3. SNMP 管理アプリケーションで使用するための Netfinity の管理情報ベース (MIB) ファイルは、Netfinity CD の SNMP\_MIB ディレクトリーにあります。このファイルは NETFIN.MIB という名前になっています。SNMPベースのシステム管理ソフトウェアで NETFIN.MIB を使用する方法については、使用中の SNMP エージェント、またはシステム管理ソフトウェアに付属の説明書を参照してください。
4. OS/2 SNMP 管理アプリケーションで使用するための Netfinity の管理情報ベース (MIB) ファイルは、Netfinity CD の SNMP\_MIB ディレクトリーにあります。このファイルは MIB2.TBL という名前になっています。既存の MIB2.TBL ファイルにこのファイルを付加するか、または使用中の MIB2.TBL をこのファイルで置き換えることができます。



- SNMP トラップにアラートをマップ

SNMP ベースの管理アプリケーションで使用するために SNMP エージェントを使用して、エンタープライズ OID 値をもった SNMP トラップを生成します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>:** コミュニティー・ストリング

ネットワーク内の SNMP アプリケーションで使用されるコミュニティ文字列名です。

注:

1. OS/2 環境では、このアクションは、OS/2 バージョン 2.0 またはそれ以降の TCP/IP for OS/2 が必要です。
2. このアクションは、Windows 3.1 または Windows 95 が稼働しているシステムでは、ローカルには使用できません。
3. SNMP 管理アプリケーションで使用するための Netfinity の管理情報ベース (MIB) ファイルは、Netfinity CD の SNMP\_MIB ディレクトリーにあります。このファイルは NETFIN.MIB という名前になっています。SNMPベースのシステム管理ソフトウェアで NETFIN.MIB を使用方法については、使用中の SNMP エージェント、またはシステム管理ソフトウェアに付属の説明書を参照してください。
4. OS/2 SNMP 管理アプリケーションで使用するための Netfinity の管理情報ベース (MIB) ファイルは、Netfinity CD の SNMP\_MIB ディレクトリーにあります。このファイルは MIB2.TBL という名前になっています。既存の MIB2.TBL ファイルにこのファイルを付加するか、または使用中の MIB2.TBL をこのファイルで置き換えることができます。

- Waveform ファイル '<P1>' の再生 (マルチメディア・サポートが必要)

アラートに回答して、指定された WAV (Waveform) オーディオ・ファイルを再生します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>: Waveform** ファイル名

アラートに回答して再生する WAV (Waveform) ファイルの名前です。

- モデムを使用して数字ページャーを活動化 ( Hayes 社のモデムと完全に互換性のあるモデムがシステムに接続されていることが必要)

システムに接続されたモデムを使用して、デジタル・ページャー・サービスにダイヤルします。モデムがページャー・サービスに接続されると、「デジタル・ページャー表示」フィールドに指定されたすべての数値データが送信されます。デジタル・ページャー・サービスでメッセージを送信するときに # を押す必要がある場合は、「デジタル・ページャー表示」フィールド内の数値データの後に、必ず # を入力します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>: モデム COM** ポート

モデム用に構成されている COM ポートです。COMポートは、COM x と入力する必要があります。ここで、x には COM ポートの番号を指定します。

**<P2>: ページャー番号**

ページャーに情報を転送する際、モデムによってダイヤルされる電話番号です。

**<P3>: デジタル・ページャー表示**

ページャーに表示される数値データです。

注: ページャー・サービスによっては、このアラート・アクションが、<P2> フィールドの電話番号のダイヤル後、<P3> フィールドの数値データの送信までに待機する時間の長さを増やす必要がある場合があります。数値データの転送前の時間を増やすには、<P2> フィールドの電話番号の終りに、1 個または複数のコンマ (“,”) を加えます。モデムは、コンマ 1 つにつき 2 秒ずつ待ってから数値データを送信します。

- モデムを使用する TAP を通して、英数字ページャーにアラートを送信 (Hayes 社のモデムと完全に互換性のあるモデムがシステムに接続されていることが必要)

システムに接続されたモデムを使って、英数字ページャー・サービスにダイヤルします。モデムが英数字ページャー・サービスに接続されると、すべてのアラート情報が送信されます。

#### パラメーターの説明

##### <P1>: モデム COM ポート

モデム用に構成されている COM ポートです。COMポートは、COM **x** と入力する必要があります。ここで、**x** には COM ポートの番号を指定します。

##### <P2>: TAP アクセス番号

ページャーに情報を転送する際、モデムによってダイヤルされる電話番号です。

##### <P3>: ページャー ID

データの送信先ページャーの識別番号です。

##### <P4>: 送信する追加テキスト

アラート・データと共に送信する任意のテキストです。このパラメーターは任意選択です。

#### 注:

1. このアクションは、テロケータ (Telocator) 英数字プロトコル (TAP) を使うページャー・サービスでだけ機能します (TAP は日本ではサービスされていません)。
2. ページャーのページャー ID を指定する必要があります。

- TCP/IP メールとして '<P1>@<P2>' アラートを送信 (OS/2 システムのみ使用可能。バージョン 2.0 またはそれ以降のTCP/IP for OS/2 が必要)

TCP/IP SENDMAIL プログラムを使用して、Netfinity アラートを、指定された E-Mail のアドレスにノートの形式で送信します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>:ターゲット・ユーザー ID**

アラートの送信先となるシステムの TCP/IP ユーザー ID です。

**<P2>:ターゲット・ホスト・アドレス**

送信先ユーザーのシステムの TCP/IP ホスト・アドレスです。

- TCP/IP Web メールとして '<P1>@<P2>' にアラートを送信 (OS/2 システムのみ使用可能。OS/2 バージョン 2.0 またはそれ以降のTCP/IP for OS/2 が必要)

TCP/IP SENDMAIL プログラムを使用して、Netfinity アラートを、指定された E-Mail のアドレスにノートの形式で送信します。アラート・テキストは、HTML 形式になります。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>:ターゲット・ユーザー ID**

アラートの送信先システムの TCP/IP ユーザー ID です。

**<P2>:ターゲット・ホスト・アドレス**

送信先ユーザーのシステムの TCP/IP ホスト・アドレスです。

- VIM インターフェース経由で E-Mail を送信 (VIM サポートが必要)

VIM (Vendor Independent Messaging) インターフェースを使用して、32 ビットの VIM 準拠として正しく構成されたシステム (Lotus Notes など) に送信可能な VIM のアラートを生成します。

Lotus Notes を実行しているシステムの要件は、Lotus Notes データベースにデータをエクスポートする場合のシステムの要件と同じです。詳細については、*Netfinity マネージャー クイックガイド* の“Lotus Notes データベース・サポート”を参照してください。

このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>**: メール・システム・パスワード

VIM メール・システムへのアクセスに使用するパスワードです。

**<P2>**: E-Mail アドレス

アラート情報の送信先となるシステムの E-Mail アドレスです。

- MAPI インターフェースを介して E-Mail への送信 (MAPI サポートが必要)

MAPIインターフェースを使用して、MAPI 準拠のシステムに送信可能な MAPI アラートを生成します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>:** メール・システム・パスワード

MAPI メール・システムへのアクセスに使用するパスワードです。

**<P2>:** E-Mail アドレス

アラート情報の送信先となるシステムの E-Mail アドレスです。

**<P3>:** プロファイル名

MAPI 準拠のアプリケーションによっては、MAPI データを正しく処理するためのプロファイル名が必要です。このアラートの送信先となる MAPI 準拠のアプリケーションがプロファイル名を必要とする場合は、このフィールドに指定します。MAPI 準拠のアプリケーションがプロファイル名を必要としない場合、このフィールドは空白のままにしておきます。

- Netfinity データベースにエクスポート

選択された Netfinity DB2 または ODBC データベースにアラート情報をエクスポートします。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>:** データベース名

データのエクスポート先となる Netfinity データベースの名前です。

**<P2>:** ユーザー ID

この ID は、パスワードと組み合わせられた場合、指定されたデータベースへのアクセスを可能にします。

**<P3>:** パスワード

このパスワードは、ユーザー ID と組み合わせられた場合、指定されたデータベースへのアクセスを可能にします。

- Lotus Notes データベースにエクスポート

選択された Lotus Notes データベースにアラート情報をエクスポートします。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>: Lotus Notes パスワード**

Lotus Notes データベース・サーバーへのアクセスを可能にするパスワードです。

**<P2>: Lotus Notes サーバー名**

データのエクスポート先となる Lotus Notes データベース・サーバーの名前です。

- DMI サービス・レイヤーを通して DMI イベントを送信 (DMI サポートが必要)

アラートを DMI イベントに変換して、DMI サービス・レイヤーに転送します。DMI サービス・レイヤーがこれを受信すると、DMI 準拠の別の管理アプリケーションでそれを使用することができます。このアラート・アクションでは、追加情報を提供する必要はありません。

- PC Server 720 の前面パネルに表示 (IBM PC Server 720 システムでのみ使用可能)

アラートの固有情報を PC Server 720 のフロント・パネルの LED 画面に表示します。このアラート・アクションでは、追加情報を提供する必要はありません。

- 送信システムのエラー条件 '<P1>' のセット

送信元システムのエラー条件ログにエラー条件を追加します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>: エラー条件**

エラー条件ログ内で、エラーを識別するための名前です。

送信元システムのエラー条件ログは、リモート・システム・マネージャーによってアクセスされます。エラー条件の詳細については、264ページの『エラー条件』を参照してください。

- 送信システムのエラー条件 '<P1>' のクリア

システムのエラー条件ログから、以前に生成されたエラー条件を除去します。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>:** エラー条件

エラー条件ログから除去するエラー条件の名前です。

送信元システムのエラー条件ログは、リモート・システム・マネージャーによってアクセスされます。エラー条件の詳細については、264ページの『エラー条件』を参照してください。

- シリアル接続を介してリモート・システムにアラートを送信

以前に定義したシリアル接続を使用して、Netfinity のシリアル接続制御サービスを使用してアクセスできる Netfinity システムに、アラートを送信します (297ページの第20章、『シリアル接続制御』を参照してください)。このアクションを構成するには、次のパラメーターを指定する必要があります。

パラメーターの説明

**<P1>:** 接続名

シリアル接続制御で定義されたシリアル接続の名前です。

- APPC を介してホストにアラートを送信

ホスト・ベースの管理アプリケーション (NetView for MVS など) で使用できるように、Netfinity アラートをネットワーク管理ベクトル移送 (NMVT) のアラートに変換します。このアラート・アクションでは、追加情報を提供する必要はありません。

注:

Netfinity ディレクトリーにある NMVT.INI ファイルには、標準の Netfinity アラートを NMVT 形式のアラートにマップするアラート記述が含まれており、APPC および「APPC を介してホストにアラートを送信」アラート・アクションを使用してホスト・システムに正しく渡すことができます。新しい Netfinity アラートを定義する場合 (たとえば、Netfinity の GENALERT コマンドを使用して) は、このファイルを変更して、アラートが正しく変換されるようにする必要があります。詳細については、545ページの『NMVT.INIファイルへの GENALERT のアラートの記述の追加』を参照してください。



- Windows NT のイベント・ログにイベントを追加 (Windows NT のシステムのみで使用可能)

アラートに関する情報を Windows NT のイベント・ログに追加します。このアラート・アクションでは、追加情報を提供する必要はありません。

- FFST/2 にアラートを転送 (OS/2 システムのみで使用可能)

Netfinity アラートのバージョンを FFST/2 に送信します。このアラート・アクションでは、追加情報を提供する必要はありません。

## アラート・プロファイル

アラート・プロファイルは、システムが受信したアラートをより効率よく管理するための簡単なフィルターです。アラートに固有の情報を使って、アラートのクラスまたはクラスのセットをプロファイルに記述します。アラート・プロファイルを使用すると、サービス、アプリケーション、責任者、または単に緊急度別にアラートを区別することができます。アラート・プロファイルはアラート・マネージャー・アクションに割り当てられ、ネットワーク内で Netfinity システムが生成したアラートに対し、自動的にアクションを取るようになっています。また、アラート・プロファイルは、「アラート・ログ」に表示されるアラートのタイプのフィルターにも使用することができます (20ページの『アラート・ログの表示』を参照)。

Netfinity アラート・マネージャーには、ほとんどのユーザーのニーズを満たす定義済みアラート・プロファイルが多数あります。これらの定義済みアラート・プロファイルを使用すると、受信アラートに対して自動的に応答および反応するよう、アラート・マネージャーを素早く構成することができます。Netfinity の定義済みアラート・プロファイルについては、45ページの『定義済みアラート・プロファイル』を参照してください。

「アラート・ログ」ウィンドウから「プロファイル」を選択して、「アラート・プロファイル」ウィンドウをオープンします (39ページの図5を参照)。「アラート・プロファイル」ウィンドウには、使用可能なすべてのプロファイルがリストされています。編集や削除のために個々のプロファイルを選択したり、まったく新しいプロファイルを作成したりすることができます。

- 新しくアラート・プロファイルを作成するには、40ページの『アラート・プロファイルの新規作成』を参照してください。
- アラート・プロファイルを編集するには、44ページの『アラート・プロファイルの編集』を参照してください。
- アラート・プロファイルを削除するには、44ページの『アラート・プロファイルの削除』を参照してください。



図 5. 「アラート・プロファイル」ウィンドウ

## アラート・プロファイルの新規作成

新しいアラート・プロファイルを作成するには、次のようにします。

1. 「新規」を選択します。

「プロファイル・エディター」ウィンドウがオープンします (図6 を参照)。プロファイル・エディターを使って、受信アラートがアラート・プロファイルに適合するかどうかを決定するためのアラート固有の情報 (アラート条件 と呼ばれる) を指定します。



図 6. 「プロファイル・エディター」ウィンドウ

2. 「アラート条件」を設定します。

アラート・プロファイル・アクションを作成するときは、最初に、受信アラートを指定されたアラート・プロファイルに適合させるアラート条件を指定する必要があります。アラートが受信されると、アラート・マネージャーは、各条件をチェックして、アラートが定義済みアラート・プロファイルの仕様を満たしているかどうかを確認します。すべてのアラートが条件を満たしていれば、そのアラートが、アラート・プロファイルに適合していることとなります。あるアラートがアラート・プロファイルに適合する場合、そのプロファイルに割り当てられたアクションが実行されます。アラート・プロファイルにアラート・アクションを

割り当てる方法については、48ページの『アクションへのプロファイルの割り当て』を参照してください。

あるアラートがアラート・プロファイルに適合するかどうかを判断するためにアラート・マネージャーが使用するアラート条件は 5 つあります。アラートがアラート・プロファイルに適合してアクションを取るようになるには、すべてのアラート条件を満たす必要があります。5 つのアラート条件は、次のとおりです。

- アラート・タイプ
- 重大度
- アプリケーション ID
- アプリケーション・アラート・タイプ
- 送信元 ID

このアラート・プロファイルのアラート条件を指定するには、次のようにします。

- a. 「アラート・タイプ」を選択します。

アラート・タイプは、生成されたアラートの要旨を示します。これは、アラートの種類 (不明、障害、エラー、警告、通知) を記述し、またアラートの送信元 (システム、ディスク、ネットワーク、オペレーティング・システム、アプリケーション、装置、安全保護) の一般的な説明を含むこともあります。

着信アラートが特定のアラート・タイプであるかどうか検査するには、選択リストから 1 つまたは複数のアラート・タイプを選択します。特定のアラート・タイプを検査する必要がない場合は、選択リストの上の「すべて」チェック・ボックスを選択します。

- b. 「重大度」を選択します。

重大度は 0 から 7 までの数値で、生成されたアラートの重大度を示します。重大度 0 は極めて重大なアラートを示し、重大度 7 は比較的軽度のアラートを示します。

着信アラートが特定の重大度であるか検査するには、選択リストから 1 つまたは複数の重大度値を選択します。特定の重大度値による選別を必要としない場合は、選択リストの上の「すべて」チェック・ボックスを選択します。

- c. 「アプリケーション ID」を選択します。

アプリケーション ID は、アラートを生成したアプリケーションを表す英数字の識別子です。

着信アラートが特定のアプリケーション ID であるかどうかを検査するには、「アプリケーション ID」選択リストから 1 つまたは複数の ID を選択します。希望するアプリケーション ID がリストに含まれていない場合は、選択リストの上の入力フィールドにその ID を入力して **Enter** キーを押すと、アプリケーション ID をリストに追加することができます。特定のアプリケーション ID を検査する必要がない場合は、選択リストの上の「すべて」チェック・ボックスを選択します。

d. 「アプリケーション・アラート・タイプ」を選択します。

アプリケーション・アラート・タイプは、アラートを生成したアプリケーションによって個々のアラートに割り当てられた数値です。この値は、多くの場合、そのアプリケーション自体で使われます。

着信アラートが特定のアプリケーション・アラート・タイプであるかどうかを検査するには、「アプリケーション・アラート・タイプ」選択リストから 1 つまたは複数のタイプを選択します。希望するアプリケーション・アラート・タイプがリストに含まれていない場合は、選択リストの上の入力フィールドにそのアラート・タイプを入力して **Enter** キーを押すと、アプリケーション・アラート・タイプをリストに追加することができます。特定のアプリケーション・アラート・タイプを検査する必要がない場合、選択リストの上の「すべて」チェック・ボックスを選択します。

e. 「送信元 ID」を選択します。

送信元 ID は、アラートを生成したシステムのネットワーク・アドレスです。

特定の送信元 ID によって着信アラートを選別する場合は、「送信元 ID」選択リストから 1 つまたは複数の ID を選択します。希望する送信元 ID がリストに含まれていない場合は、選択リストの上の入力フィールドにその ID を入力して **Enter** キーを押すと、送信元 ID をリストに追加することができます。特定の送信元 ID を検査する必要がない場合は、選択リストの上の「すべて」チェック・ボックスを選択します。

3. アラート・プロファイルの名前を指定します。

アラート・プロファイルの名前は、「アラート・プロファイル」ウィンドウの「プロファイル・リスト」フィールドに表示される名前です。「プロファイル名」フィールドに、その名前を入力します。名前は英数半角文字で 64、DBCS 文字では 32 文字以内です。

#### 4. アラート・プロファイルを保管します。

アラート・プロファイルを保管するには、「保管」を選択します。アラート・プロファイルが、「アラート・プロファイル」ウィンドウの「プロファイル・リスト」フィールドに表示されます。

アラート・プロファイル情報を保管せずにこのウィンドウをクローズする場合は、「取消」を選択します。

## アラート・プロファイルの編集

すでに定義したアラート・プロファイルを編集するには、次のようにします。

1. 編集したいアラート・プロファイルの名前を「プロファイル・リスト」から選択します。
2. 「編集」を選択します。  
「プロファイル・エディター」ウィンドウがオープンします (40ページの図6を参照)。
3. 必要に応じて、アラート条件を変更します。  
受信したアラートがこのアラート・プロファイルに適合させるようにアラート・プロファイルを編集するには、必要に応じて、該当する新規アラート・タイプ、重大度、アプリケーション ID、アプリケーション・アラート・タイプ、送信元 ID を選択します。
4. 必要に応じて、プロファイル名を変更します。  
アラート・プロファイルの名前を変更する場合は、「プロファイル名」フィールドに新しいプロファイル名を入力します。
5. アラート・プロファイルを保管します。  
アラート・プロファイルに対して行なった変更を保管する場合は、「保管」を選択します。

アラート・プロファイル情報を変更せずにウィンドウをクローズする場合は、「取消」を選択します。

## アラート・プロファイルの削除

アラート・プロファイルを削除するには、「プロファイル・リスト」フィールドから削除するプロファイルを選択して、「削除」を選択します。



## 定義済みアラート・プロファイル

アラート・マネージャーには、定義済みアラート・プロファイルが多数組み込まれています。Netfinity システムにインストールされるすべての定義済みアラート・プロファイルのリスト、およびそれぞれのプロファイルに該当するアラート固有の情報の要旨を示します。

プロファイル名	アラートの説明
電源オン・エラー検出アラート	Netfinity システムで、電源オン・エラー検出が POST エラーが検出しました。
電源オン・エラー検出情報アラート	Netfinity システムで、電源オン・エラー検出が始動時システム区画アクセスを検出しました。
事前障害分析アラート	事前障害分析が PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブの緊急障害を検出しました。
ファイル変更アラート	クリティカル・ファイル・モニターが、監視対象のファイルが変更されたことを検出しました。
ファイル削除アラート	クリティカル・ファイル・モニターが、監視対象のファイルが削除されたことを検出しました。
ファイル作成アラート	クリティカル・ファイル・モニターが、監視対象のファイルが作成されたことを検出しました。
プロセス終了アラート	プロセス・マネージャーが、監視対象のプロセスが終了したことを検出しました。
プロセス開始アラート	プロセス・マネージャーが、監視対象のプロセスが開始したことを検出しました。
プロセス開始の失敗アラート	プロセス・マネージャーが、監視対象のプロセスの開始が失敗したことを検出しました。
システム・オンライン・アラート	リモート・システム・マネージャーが、特定のリモート・システムがオンラインまたは作動中と通知しました。
システム・オフライン・アラート	リモート・システム・マネージャーが、特定のリモート・システムがオフラインまたはアクセス不可と通知しました。

**アクセス付与アラート** 安全保護マネージャーが、ユーザー ID とパスワードの組み合わせを提示したリモート・ユーザーに対し、システムへのアクセスを許可しました。

**パブリック・アクセス付与アラート**  
安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーに対し、システムへのパブリック・アクセスを許可しました。

**システム・アクセス拒否アラート**  
安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーに対し、システムへのアクセスを拒否しました。

**システム再始動開始アラート**  
安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーからのシステム再始動開始要求を検出し、許可しました。

**システム再始動リジェクト・アラート**  
安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーからのシステム再始動要求を検出し、拒否しました。

**サービス開始要求アラート**  
Netfinity サービス・マネージャーが、リモート・ユーザーに対し、Netfinityサービスの使用を許可しました。

**サービス開始リジェクト・アラート**  
Netfinity サービス・マネージャーが、リモート・ユーザーに対し、Netfinity サービスの使用を拒否しました。

**しきい値エラー・アラート**  
システム・モニターが、しきい値の状態がエラーに相当することを検出しました。

**しきい値警告アラート** システム・モニターが、しきい値の状態が警告に相当することを検出しました。

**しきい値の標準への復帰アラート**  
以前に記録された、システム・モニターによるしきい値の警告またはエラー状態から、正常に戻ったことが検出されました。

**物理 RAID ドライブ・オンライン・アラート**  
システムに接続されている物理 RAID ドライブの状態が、「オンライン」に変わりました。

**物理 RAID ドライブ・スタンバイ・アラート**  
システムに接続されている物理 RAID ドライブの状態が、「スタンバイ」に変わりました。

#### 物理 RAID ドライブ不良アラート

システムに接続されている物理 RAID ドライブの状態が、「不良」に変わりました。

#### 論理 RAID デバイス・オンライン・アラート

システムに接続されている論理 RAID デバイスの状態が、「オンライン」に変わりました。

#### 論理 RAID デバイス・クリティカル・アラート

システムに接続されている論理 RAID デバイスの状態が、「クリティカル」に変わりました。

#### 論理 RAID デバイス・オフライン・アラート

システムに接続されている論理 RAID デバイスの状態が、「オフライン」に変わりました。

#### 物理 RAID ドライブ PFA アラート

システムに接続されている物理 RAID ドライブが、RAID アレイ内の PFA利用可能ハード・ディスク・ドライブで緊急の障害を検出しました。

重大度 0 アラート 重大度 0 のアラートが受信されました。

重大度 1 アラート 重大度 1 のアラートが受信されました。

重大度 2 アラート 重大度 2 のアラートが受信されました。

重大度 3 アラート 重大度 3 のアラートが受信されました。

重大度 4 アラート 重大度 4 のアラートが受信されました。

重大度 5 アラート 重大度 5 のアラートが受信されました。

重大度 6 アラート 重大度 6 のアラートが受信されました。

重大度 7 アラート 重大度 7 のアラートが受信されました。

すべてのアラート アラートが受信されました。

システムが特定のソフトウェアまたはコミュニケーション製品 (コミュニケーション・マネージャーまたは LAN サーバーなど) を使用する場合は、多くの追加アラート・プロファイルがインストールされます。

新しいアラート・プロファイルを作成する場合は、40ページの『アラート・プロファイルの新規作成』を参照してください。既存のアラート・プロファイルを編集する場合は、44ページの『アラート・プロファイルの編集』を参照してください。

## アクションへのプロファイルの割り当て

アラート・マネージャーが受信アラートに自動的に応答するには、アラート・プロファイルをアラート・アクションに割り当てる必要があります。アラート・プロファイルがアラート・アクションに割り当てられると、そのプロファイルにあったアラートを受け取るたびに、対応するアクションを自動的に実行します。複数のプロファイルを1つのアラート・アクションに割り当てたり、1つのアラート・プロファイルを複数のアクションに割り当てたりすることが可能です。

アラート・プロファイルをアラート・アクションに割り当てるには、次のようにします。

1. 「アラート・ログ」ウィンドウから「アクション」を選択します。

「アラート・アクション」ウィンドウがオープンします (図7 を参照)。このウィンドウは、現在構成されているすべてのアラート・アクションのリストを含んでいます。



図 7. 「アラート・アクション」ウィンドウ

2. 「新規」を選択します。

「アクション・エディター」ウィンドウがオープンします (49ページの図8 を参照)。



図 8. 「アクション・エディター」ウィンドウ

3. 「バインド方法」プルダウン・メニューから「プロファイル」を選択すると、「アクション・エディター」ウィンドウが「プロファイル」ビューに切り替わります。
4. 1 つまたは複数のアラート・プロファイルを 1 つのアラート・アクションに割り当てます。

アラート・プロファイルをアラート・アクションに割り当てるには、まず、アクションをトリガー（起動）するプロファイルを選択し、次にアラート・アクションを選択したり、必要な定義情報を指定したりします。

- a. 1 つまたは複数のアラート・プロファイルを選択して、1 つのアクションに割り当てます。

現在使用可能で、かつ未使用のアラート・プロファイルは、すべて「その他のプロファイル」フィールドにリストされています。このリストから、1 つまたは複数のアラート・プロファイルを選択し、次に「トリガーする」を選択します。選択したすべてのプロファイルが、「トリガー・プロファイル」フィールドに表示されます。「トリガー・プロファイル」フィールドに表示されるプロファイルのどれかに適合するアラートを受信すると、アラート・マネージャーはアラート・アクションを実行します。

注: 「トリガー・プロファイル」フィールドからアラート・プロファイルを削除するには、削除したいプロファイルを選択してから、「トリガーしない」を選択します。選択したプロファイルは「その他のプロファイル」フィールドに移動します。

b. アラート・アクションを選択します。

利用可能なアラート・アクションを表示するには、「アクション」フィールドの右のスピン・ボタンを使用します。

c. 必要に応じて、追加情報を入力します。

アラート・アクションによっては、アラートの送信先を、実行するコマンドなどの追加情報を指定する必要があります。追加情報が必要な場合には、「アクション」パラメーター・フィールドに <P#> の形式でパラメーターが表示されます。# は、パラメーターの番号です。「アクション定義」パラメーター・フィールドには、必要なパラメーター、および必要な情報の要旨が表示されます。各フィールドに必要な情報を入力します。

5. このアクションにラベルを付けます。

「アクション・ラベル」フィールドに、このアラート・プロファイルとアラート・アクションの組み合わせの簡単な記述を入力します。この記述は英数半角で 32、DBCS で 16 文字以内です。アラート・プロファイルとアラート・アクションの割り当てが完了すると、「アラート・アクション」ウィンドウの「利用可能なアクション」フィールド内のアラート・アクションの名前の前に「アクション・ラベル」が表示されます。

6. アラート・プロファイルの選択されたアラート・アクションへの割り当てを終了します。

「保管」を選択して、アラート・プロファイルの選択したアクションへの割り当てを終了します。「アクション・エディター」ウィンドウがクローズし、「アラート・アクション」ウィンドウの「利用可能なアクション」フィールドに「アクション・ラベル」とそれに伴う選択したアラート・アクションの名前が表示されます。

情報を保管せずにこのウィンドウをクローズする場合は、「取消」を選択します。

## 個々のアラートへのアクションの割り当て

アラート・マネージャーに、定義済みアラート・プロファイルの一部ではない個々のアラートに自動的に応答させるには、希望するアクションを特定のアラート条件に割り当てる必要があります。いったん、アラート・プロファイルが特定のアラート条件に割り当てられると、指定された条件のすべてが一致するアラートをアラート・マネージャーが受信するたびに、対応するアクションが自動的に実行されます。

アクションの構成手順は、次の 2 つのステップからなります。最初に、アラート・マネージャーが応答するアラート条件を設定する必要があります。次に、アラート・マネージャーが受信したアラートに対応してどのアクションを実行するかを定義するために、アクション定義を設定する必要があります。次に、この手順について詳しく説明します。

1. 「アラート・ログ」ウィンドウから「アクション」を選択します。  
「アラート・アクション」ウィンドウがオープンします (48ページの図7 を参照)。このウィンドウは、現在構成されているすべてのアラート・アクションのリストを含んでいます。
2. 「アラート・アクション」ウィンドウから「新規」を選択します。  
「アクション・エディター」ウィンドウがオープンします。
3. 「バインド方法」プルダウン・メニューから「アラート条件」を選択します。
4. 「アラート条件」を設定します。

アクションを定義する際、まず、アラート・マネージャーが定義したアクションを実行する際、それを満たす「アラート条件」を設定する必要があります。アラートが受信されると、アラート・マネージャーはこれらの条件を調べて、定義されたアクションの指定内容に一致するかどうかを検査します。すべてのアラート条件が満たされると、定義されたアクションが実行されます。

アラート・マネージャーが、対応するアクションの応答の判別に使用するアラート条件は、5 つあります。アラートがアクションをトリガーするには、そのアラートが、対応するアラート条件をすべて満たす必要があります。5 つのアラート条件は、次のとおりです。

- アラート・タイプ
- 重大度
- アプリケーション ID
- アプリケーション・アラート・タイプ
- 送信元 ID

「アラート条件」を指定するには、次のようにします。

- a. 「アラート・タイプ」を選択します。

アラート・タイプは、生成されたアラートの要旨を示します。これは、アラートの種類 (不明、障害、エラー、警告、通知) を記述し、またアラートの送信元(システム、ディスク、ネットワーク、オペレーティング・システム、アプリケーション、装置、安全保護) を含むこともあります。

特定のアラート・タイプによって着信アラートを選別する場合は、選択リストから 1 つまたは複数のアラート・タイプを選択します。特定のアラート・タイプによる選別を必要としない場合は、選択リストの上の「すべて」チェック・ボックスを選択します。

- b. 「重大度」を選択します。

重大度は 0 から 7 までの数値で、生成されたアラートの重大度を示します。重大度 0 は極めて重大なアラートを示し、重大度 7 は比較的軽度のアラートを示します。

特定の重大度値によって着信アラートを選別するには、選択リストから 1 つまたは複数の重大度値を選択します。特定の重大度値による選別を必要としない場合は、選択リストの上の「すべて」チェック・ボックスを選択します。



c. 「アプリケーション ID」を選択します。

アプリケーション ID は、アラートを生成したアプリケーションを表す英数字の識別子です。

特定のアプリケーション ID によって着信アラートを選別する場合は、「アプリケーション ID」選択リストから 1 つまたは複数の ID を選択します。希望するアプリケーション ID がリストに含まれていない場合は、選択リスト上の入力フィールドにその ID を入力して、**Enter** キーを押せば、アプリケーション ID をリストに追加することができます。特定のアプリケーション ID による選別を必要としない場合は、選択リスト上の「すべて」チェック・ボックスを選択してください。

d. 「アプリケーション・アラート・タイプ」を選択します。

アプリケーション・アラート・タイプは、アラートを生成したアプリケーションによって個々のアラートに割り当てられた数値です。この値は、多くの場合、そのアプリケーション自体で使われます。

特定のアプリケーション・アラート・タイプによって着信アラートを選別するには、「アプリケーション・アラート・タイプ」選択リストから 1 つまたは複数のタイプを選択します。希望するアプリケーション・アラート・タイプがリストに含まれていない場合は、選択リスト上の入力フィールドにそのアラート・タイプを入力し、**Enter** キーを押せば、アプリケーション・アラート・タイプをリストに追加することができます。特定のアプリケーション・アラート・タイプによる選別を必要としない場合は、選択リスト上の「すべて」のチェック・ボックスを選択します。

e. 「送信元 ID」を選択します。

送信元 ID は、アラートを生成したシステムのネットワーク・アドレスです。

特定の送信元 ID によって着信アラートを選別する場合は、「送信元 ID」選択リストから 1 つまたは複数の ID を選択します。希望する送信元 ID がリストに含まれていない場合は、選択リスト上の入力フィールドにその ID を入力し、**Enter** キーを押せば、送信元 ID をリストに追加することができます。特定の送信元 ID による選別を必要としない場合は、選択リスト上の「すべて」チェック・ボックスを選択します。

5. 「アクション定義」を設定します。

特定のアクションを選択して、そのアクションを完了に必要な情報を入力する必要があります。

a. 「アクション」を選択します。

アクションは、ユーザーが指定したアラート条件を満たすアラートに対応して実行されるプログラムです。使用可能なアクション・ハンドラーを見るには、「アクション」フィールドの右のスピン・ボタンを使用します。

b. 必要に応じて、追加情報を入力します。

追加情報が必要な場合には、「アクション」パラメーター・フィールドに <P#> の形式でパラメーターが表示されます。# はパラメーターの番号です。「アクション定義」パラメーター・フィールドには、必要なパラメーター、および必要な情報の要旨が表示されます。各フィールドに適切な情報を入力します。

6. 定義したアクションを保管します。

アラート条件とアクション定義情報をすべて入力後、「保管」を選択し、構成したアクションを保管します。このアクションは、「アラート・アクション」ウィンドウの「利用可能なアクション」フィールドに表示されます。「完了」を選択すると、「アラート・アクション」ウィンドウは自動的にクローズされます。

## 下位レベル Netfinity システムのリモート管理

Netfinity アラート・マネージャー を使用して、下位レベルの Netfinity マネージャー、Netfinity クライアント・サービス、または SystemView LAN for OS/2 V1.1 クライアントを使用しているシステムをリモート管理している場合は、アラート・プロファイルにアラート・アクションを割り当てることはできません。これらのシステム管理製品のどれかを実行しているシステムをリモート管理する場合は、各アラート・アクションは指定された個々のアラート条件に応答するように構成する必要があります。これらの製品を実行しているシステムをリモート管理する方法については、513ページの付録A、『下位レベル Netfinity システムのアラート・マネージャー』を参照してください。

## 基本障害サポート・テクノロジー (FFST) からのアラートの受信

OS/2 Warp バージョン 3.0 以降が稼働しているシステムで、OS/2 Warp の基本障害サポート・テクノロジー (FFST) を使用して、他の製品の問題を追跡する場合は、Netfinity がすべての FFST の情報を受信し、FFST トラップを Netfinity アラートに変換するように設定できます。システムで FFST が使用可能になっている場合は、インストール中に、FFST トラップ情報を Netfinity アラート・マネージャーに転送するかどうか聞いてきます。「はい」を選択して、この機能を使用可能にしてください。この機能を使用可能にすると、FFST トラップ情報が Netfinity アラートに自動的に変換されます。また、FFST がインストールされているシステムでは、(IBM コミュニケーション・マネージャーまたは LAN サーバーなどの) FFST が使用可能なさまざまな製品と共に作動するように特別に設計された追加のアラート・プロファイルが使用可能になります。



## 第3章 Alert on LAN 構成

LAN 機能が使用できるシステムでのアラートのオプションを、ローカルまたはリモートで監視できるよう構成するには、Alert on LAN を使用します。Alert on LAN 機能を持つシステムは、システムのクリティカル状況情報を提供します。データは、TCP/IP を使用して、ハードウェアまたはソフトウェア (システムの電源が入っているかどうかによって異なります) により報告されます。以下に、報告される状況情報の一部を示します。

- 見つからないプロセッサの喪失
- シャーシ侵害
- LAN 接続の切断



図 9. 「Alert on LAN の構成」サービス

Alert on LAN を正しく動作させるには、以下のオプションを構成する必要があります。

#### オプション 説明

##### **Alert on LAN** の送信状況

このオプションを使用して、構成するシステムのAlert on LAN 機能を使用可能または使用不可にします。

##### **Netfinity** マネージャー IP アドレス

Netfinity マネージャーが稼動しているシステムのIP アドレスを入力します。構成するシステムの Alert on LAN 機能は、すべてこの IP アドレスにデータを報告します。

##### **Netfinity** マネージャー UDP ポート番号

「**Netfinity** マネージャー IP アドレス」フィールドで入力した IP アドレスを持つ、Netfinity マネージャーが稼動しているシステムのポート番号を入力します。構成するシステムの Alert on LAN 機能は、すべてこのポート番号にデータを報告します。

##### ハート ビート・タイマー間隔

このフィールドで選択可能な値を使用して、Alert on LAN が、ハートビート・メッセージを「**Netfinity** マネージャー IP アドレス」フィールドで指定した IP アドレスを持つ Netfinity マネージャーに送信する場合の間隔時間を設定します。メッセージの送信に失敗すると、Netfinity マネージャーは、アラートを送信します。

注: この間隔は、43 秒の倍数でなければなりません。

##### ウォッチ・ドッグ・タイマー間隔

このフィールドで設定可能な値を使用して、オペレーティング・システムの破壊時に、Alert on LANが送信するアラートの間隔時間を設定します。

注: この間隔は、86 秒の倍数でなければなりません。

##### 再送タイマー間隔

このフィールドで選択可能な値を使用して、Alert on LAN が、送信された各アラートに対するメッセージ・パケットを送信する間隔時間を設定します。

注: これらのアラートは、3 秒の倍数時に送信されます。

#### エージェント・ポーリング間隔

このフィールドで選択可能な値を使用して、Alert on LANソフトウェアがハードウェアの状況を検査する間隔時間を構成します。

#### モニタ イベント

Alert on LAN が監視できる個々のイベントを使用可能にしたり、使用不可にしたりします。





## 第4章 キャパシティー管理

キャパシティー管理は、ネットワーク管理者用の使用しやすい資源管理・計画ツールです。この機能を利用すると、リモートからネットワーク上のすべてのサーバーのパフォーマンスをモニターできます。

IBM キャパシティー管理は、将来、ネットワークに要求されるキャパシティーを計画するために、CPU、ディスク、またはメモリーの必要量などについて、ネットワークに潜在的に存在するボトルネックを検証し、ネットワークのスローダウンや停止時間などを防ぐことができるようになります。したがって、将来のハードウェア・アップグレードに関する有効な計画、および増強しなければならない資源 (resource) に最適に投資するように計画できます。

キャパシティー管理には、オンライン・ツアーも含めた、広範囲にわたるオンライン・ヘルプが組み込まれています。オンライン・ツアーは対話式ヘルプで、キャパシティー管理の全機能が説明されているので、キャパシティー管理を極めて簡単に学習し理解することができます。オンライン・ツアーを使用する場合は、「キャパシティー管理」ウィンドウの「生成プログラムのツアー」、「スケジューラーのツアー」、または「ビューアーのツアー」を選択します (図10 を参照してください)。



図 10. 「キャパシティー管理」ウィンドウ

注: キャパシティー管理が利用できるのは、Windows NT および Windows 95上で、Netfinity マネージャーが稼働しているシステムで使用する場合があります。ただし、Netfinity クライアント・サービス (OS/2 版、Windows 95 版、Windows NT 版、または NetWare 版) が稼働しているリモート・システムからは、データ収集を行うことはできません。

## レポートの生成

キャパシティー管理レポートの生成は、次のようにします。

1. 「キャパシティー管理」ウィンドウの「生成」を選択します。

これで「レポートの生成」ノートブックがオープンします。最初、ノートブックは「概要」のページがオープンしています。このページには、レポートの生成に関する手順が簡単に説明してあります。レポートの生成を開始する準備が整ったら、「次へ」を選択します。「レポートの生成」ノートブックの「レポートの定義」のページがオープンします (図11 を参照)。



図 11. 「レポートの生成」ノートブック - 「レポートの定義」のページ

## 2. 「レポートの定義」を選択します。

「レポートの生成」ノートブックの「レポートの定義」定義のページには、以前定義したすべてのレポートの定義を含んでいます。レポートの定義では、キャパシティー管理レポート用として収集されるデータを指定します。次のことができます。

- 以前定義したレポートの定義の選択

以前定義したレポートの定義を選択する場合は、「レポートの定義」を選択し、「次へ」を選択します。「レポートの生成」ノートブックの「システム」のページがオープンします。以前作成したレポートを使用している場合は、4 (64ページ) に進んでください。

- 以前定義したレポートの定義の編集

以前定義したレポートの定義を編集する場合は、「レポートの定義」を選択し、「編集」を選択します。「レポートの定義」ウィンドウがオープンします (図12 を参照)。

- 新しいレポートの定義の作成

新しいレポートの定義を作成する場合は、「新規」を選択します。「レポートの定義」ウィンドウがオープンします (図12 を参照)。



図 12. 「レポートの定義」ウィンドウ

3. レポートの定義を作成 (または編集) します。

「レポートの定義」ウィンドウで選択可能な項目を使用して、レポートの定義を構成します。次の指定が必要です。

- データの収集を行う期間
- 収集対象データの量 (グローバル・サンプリング頻度)
- データを収集する曜日 (曜日)
- レポートに組み込まれる特定のモニター・データ (レポートに含まれるモニター)

続ける場合は、「次へ」を選択します。

4. レポートに含めるシステムを選択します。



図 13. 「レポートの生成」ノートブック - 「システム」のページ

レポートに含める Netfinity グループまたはシステムを選択します。次に「次へ」を選択し、「レポートの生成」の「生成」のページ をオープンします (図14 を参照)。

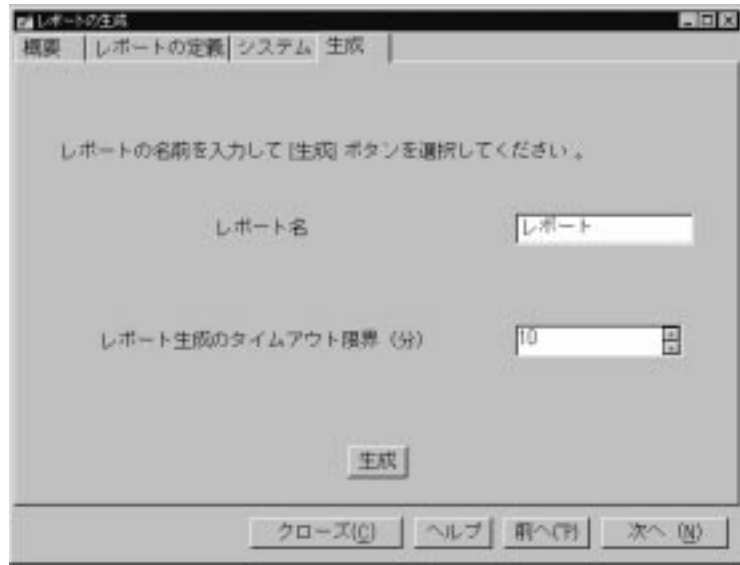


図 14. 「レポートの生成」ノートブック - 「生成」のページ

5. レポートの名前を指定し、レポート生成のタイムアウト限界を指定します。

レポートに名前を付ける必要があります。レポート生成のタイムアウト限界では、キャパシティー管理がレポートの定義で指定されたシステムからのデータ収集を試みる時間を指定します。キャパシティー管理がシステムからのデータを収集できないうちにタイムアウト限界を超えた場合、キャパシティー管理は、該当のシステムを無視し、選択されている他のシステムを使用してレポートの生成を続行します。

6. 「生成」を選択して、キャパシティー管理レポートを生成します。

キャパシティー管理は、レポートの定義に基づいて、即時にレポートの生成、編集を開始します。レポートが完成すると、「レポート・ビューアー」ウィンドウに表示されます。



図 15. 「レポート・ビューアー」ウィンドウ

## レポートのスケジュール

キャパシティー管理を使用すると、データの収集とレポートの作成を自動的に行うことができます。「キャパシティー管理」ウィンドウの「スケジュール」を選択し、Netfinity イベント・スケジューラー・サービスをオープンします。次に、キャパシティー管理タスクを使用して、新たにスケジュールされたイベントを作成します。詳細については、166ページの『「キャパシティー管理」タスク固有ウィンドウ』を参照してください。

## レポートの表示

レポートの作成後、キャパシティー管理のレポート・ビューアーを使用して、収集されたデータを検討することができます。レポート・ビューアーでは、収集されたデータを理解と操作しやすい画面上に表示します。このインターフェースを使用すると、収集されたモニター・データを1つまたは複数のシステムから同時に表示させることができます。

以前生成されたレポートの表示は、次のように行います。

1. 「キャパシティー管理」ウィンドウの「表示」を選択します。  
「ファイルを開く」ウィンドウがオープンします。このウィンドウを使用して、表示させたいレポート・ファイルを選択します。
2. 「開く」を選択して、選択したレポート・ファイルをオープンします。
3. レポートがレポート・ビューアーにロードされたら、そのデータがレポート・ビューアーに表示されている1つまたは複数のシステムを選択します。
4. モニター面からモニターを選択します。

一度に選択できるモニターは1つです。モニターを選択すると、選択されたシステム(複数の場合もある)から収集されたデータが、「レポート・ビューアー」ウィンドウに折れ線グラフとして表示されます。別のモニターを選択すれば、データがあらためて表示されます。





## 第5章 クラスタ・マネージャー

クラスタ・マネージャーは、Microsoft Cluster Server (MSCS) 管理コンソールのクラスタ・アドミニストレーター (Microsoft Windows NT Server バージョン 4.0 Enterprise Edition に組み込まれている) を拡張する目的で設計された、強力なアプリケーションです。クラスタ・マネージャーは、強力な MSCS を土台にして、ネットワーク上でクラスタ化されているシステムを迅速かつ容易に監視および管理することができるようにする、統合グラフィカル・インターフェースを提供します。クラスタ、クラスタを構成するノード、およびそれらの関連グループ、リソース、およびネットワーク情報が、ツリー・ビュー (tree view) として表示されるので、処理したいクラスタ要素を迅速、かつ、簡単に見つけることができます。クラスタ要素がツリー・ビューから選択されるにつれて、選択された要素に関する情報が、画面の右側の「グループ」、「リソース」、および「ノード」または「ネットワーク」情報パネルに表示されます。

注: 「ノード」または「ネットワーク」情報パネルにノードに関する情報が表示されるのは、ツリー・ビューからグループ、リソース、ノード、またはクラスタが選択された場合です。ただし、ツリー・ビューからネットワークまたはネットワーク・リソース項目が選択された場合は、このパネルに表示されるのはネットワーク情報です。



図 16. クラスタ・マネージャー

クラスタ・マネージャーには、クラスタ化されたシステム管理を容易にするための機能が追加されています。クラスタ・マネージャーを利用すると、以下のことを行うことができます。

- Netfinity マネージャー が稼働している 1 台の Microsoft NT ワークステーション・コンソールから、クラスターのすべてを管理できます。
- 動的リソースの割り振り (または再割り振り) を手動で行い、クラスター化されたサーバー上のリソースと負荷の平衡を取ることができます。
- クラスター関連イベント (障害時フェールオーバーやその他のクラスター要素変更 など) が発生したとき、Netfinity アラートを生成できます。アラートは個々のクラスターおよびクラスター要素について構成することができます。
- クラスター・マネージャーのディスカバリー機能を使用して、ネットワーク上のすべてのクラスターを検索できます。
- クラスター・マネージャーのクラスター・エキスパート・ウィザードを使用して、新しいファイルの共用、インターネット情報サーバー、および印刷サーバーのリソース・グループの作成を単純化できます。
- クラスター化されたシステムの仮想 IP アドレスの管理を単純化できます。
- クラスター・マネージャーのスケジューラーを使用して、指定された時刻または指定された日付に、(クラスター・グループをオフラインにする、クラスター・グループをオンラインにする、ノード間でクラスター・グループを移動するなど) 特定のクラスター管理タスクを自動的に実行できます。

注:

1. クラスター・マネージャーが稼働するのは、Microsoft Windows NT Workstation バージョン 4.0 サービス・パック 3 付きが稼働し、Microsoft Cluster Server (MSCS) 管理コンソールが導入されているシステムの場合だけです。MSCS は Microsoft Windows NT Server バージョン 4.0 Enterprise Edition に組み込まれています。MSCS 管理コンソールのインストール方法の説明については、Windows NT Server Enterprise Edition に付属している資料を参照してください。
2. クラスター・マネージャーがネットワーク上のクラスターと対話する場合は、TCP/IP プロトコルが必要です。
3. クラスター・マネージャーは、他の Netfinity サービス・プログラムの場合とは異なり、Netfinity マネージャー でリモート・システム・マネージャー・サービスの使用によって、リモートで使用することはできません。クラスター・マネージャーはローカルでの使用が必要であり、管理できるのは、TCP/IP を直接使用して対話できるクラスターだけです。

## クラスター・システム・マネージャー・インターフェース

クラスター・マネージャーを始動する場合は、Netfinity サービス・マネージャーの「クラスター・マネージャー」アイコンをダブルクリックします。クラスター・システム・マネージャーの始動後、ネットワーク上のクラスターへの接続をオープンする必要があります。クラスターへの接続のオープンは、次のように行います。

1. 「ファイル」プルダウン・メニューから「接続を開く」を選択します (または、ボタン・バーの「開く」ボタンを選択)。
2. 「クラスターまたはサーバー名」フィールドに、接続して管理したいクラスター名を入力します。

クラスター名が分からない場合は、クラスター・マネージャーのディスカバリー機能を使用して、ネットワーク上のクラスターを見つけます (91ページの『クラスターのディスカバリー』を参照してください)。

3. 「開く」を選択して、クラスターのビューをオープンします。

注: クラスターとの接続を確立すると、そのクラスター名が「表示」プルダウン・メニューに選択項目として表示されます。この選択項目が選択可能になった後は、「表示」プルダウン・メニューから該当のクラスター名を選択すると、そのクラスターとの接続をオープンできます。

クラスターへの接続がオープンされた後は、クラスター・マネージャー・インターフェースが、クラスターに関する詳細な情報を表示します (69ページの図16を参照)。「クラスター・マネージャー」ウィンドウは、4つのパネルに分割されます。「クラスター・マネージャー」ウィンドウの左側のパネルには、すべてのクラスター要素のツリー・ビューが表示されています。このツリー・ビューには、現在、システムに接続されているすべてのクラスター名が含まれます (クラスターへの接続方法の説明については、77ページの『クラスター管理』を参照)。

いずれかのクラスターのわきのプラス符号を選択すると、そのクラスターのツリー・ビューが展開されて、そのクラスターのグループ、リソース、リソースの種類、ネットワーク、ネットワーク・インターフェース、およびノードを表すフォルダーおよびオブジェクトが表示されます。こうして表示されたフォルダーおよびオブジェクトの一部には、そのわきにプラス符号が表示されるものがあります。追加表示されたこのようなプラス符号を選択すると、ツリー・ビューがさらに展開されて、グループ名、ネットワーク名、およびクラスター・グループ所有者名など、その他のクラスター要素が表示されます。

ツリー・ビューからクラスター要素を選択すると、ウィンドウの右側の 3 つのパネルが更新されて、選択したクラスター要素に関する情報が表示されます。3 つのパネルとは、以下に挙げるようなパネルです。

- 「グループ」パネル

「グループ」パネルには、選択されたクラスター要素に関連するすべてのグループ名、および各クラスター・グループに関する情報が表示されます。

グループの項目	意味
状態	クラスター・グループの現在の状態 (オンラインまたはオフライン)
所有者	現在、このグループを所有しているクラスター内のノード
説明	グループのユーザー定義の説明

- 「リソース」パネル

「リソース」パネルには、選択されたクラスター要素に関連するすべてのリソースの名前、ならびに各リソースに関する情報が表示されます。

リソースの項目	意味
状態	クラスター・リソースの現在の状態 (オンラインまたはオフライン)
所有者	現在、このリソースを所有しているクラスター内のノード
グループ	現在、リソースを所有しているグループ
リソースの種類	リソースのタイプ (たとえば、共有ファイル・リソース)
説明	リソースのユーザー定義の説明

- 「ノード」または「ネットワーク」パネル

ツリー・ビューからクラスター、ノード、グループ、リソース、またはネットワーク・リソースを選択した場合は、「ノード」または「ネットワーク」情報パネルに、選択された要素に関連するノード (複数の場合もある) の情報が表示されます。

ノード項目	意味
ネットワーク	ネットワーク・ノードを所有しているネットワークの名前
状態	現在のネットワーク接続の状態 (稼働または停止)
アダプター	このノードをネットワークに接続するアダプターの名前
アドレス	ノードの仮想 TCP/IP アドレス
説明	ノードのユーザー定義の説明

ツリー・ビューからネットワーク要素を選択した場合は、「ノード」または「ネットワーク」情報パネルに、クラスターのネットワーク接続およびリソースに関する情報が表示されます。

ネットワーク項目	意味
状態	現在のネットワーク接続の状態 (稼働または停止)
役割	ネットワークの役割
マスク	このネットワークのサブネット・マスク
説明	このネットワークのユーザー定義の説明

情報パネルに表示される情報は、クラスター・ツリー・ビューから選択されるクラスター要素によって異なります。たとえば、ツリー・ビューからクラスターを選択した場合は、このクラスター上で使用するために定義されたすべてのグループおよびリソースに関する情報がウィンドウの右側の情報パネルに表示されます。ただし、ツリー・ビューからノードを選択した場合は、選択されたノードが現在所有しているグループおよびリソースに関する情報だけが表示されます。さらに、ツリー・ビューからグループを選択した場合は、選択されたグループとそのリソース、および選択されたグループを現在所有しているノードだけが表示されます。

## プルダウン・メニュー

クラスターとの接続をオープンすると、クラスター・マネージャー・ウィンドウに 5 つのプルダウン・メニューが表示されます。次のメニューがあります。

- ファイル

「ファイル」プルダウン・メニューには、クラスターとの接続のオープンまたはクローズ、新しいグループまたはリソースの作成、および現在定義されているグループまたはリソースのプロパティの変更を行うことができる選択項目があります。

さらに、クラスター・マネージャーのウィンドウ・パネルのいずれかからクラスター要素が選択されると、追加選択項目もこのプルダウン・メニューに表示されます。たとえば、「リソース」パネルからリソースを選択した場合は、このリソースを所有するグループを変更したり、選択されたリソースの障害を発生させることができる、追加選択項目が表示されます。

「ファイル」プルダウン・メニューの追加選択項目はすべて、選択したクラスター要素のコンテキスト・メニューをオープンして選択することもできます。クラスター要素のコンテキスト・メニューをオープンする場合は、マウス・ボタン 2 を使用して該当の要素を選択します。

- 表示

「表示」プルダウン・メニューには、ボタン・バーおよびパネルに表示されるアイコンのサイズなどを含めて、「クラスター・マネージャー」ウィンドウの特定の要素の外観を変更することができる、選択項目があります。また、ワークステーションに現在接続されているすべてのクラスターのリストを表示させたり、「クラスター・マネージャー」ウィンドウ内の情報を最新表示する場合も、「表示」プルダウン・メニューを使用することができます。

- ユーティリティ

「ユーティリティ」プルダウン・メニューで利用できる選択項目を使用するのは、クラスター・マネージャーの強力なクラスター管理ユーティリティにアクセスする場合です。利用できる選択項目には、次のものがあります。

- クラスターの発見

「クラスターの発見」を選択するのは、ワークステーションからのアクセスが可能なクラスターの検索および識別するために、クラスター・マネージャーのディスカバリー機能を使用する場合です。詳細については、91ページの『クラスターのディスカバリー』を参照してください。

- アラート

「アラート」を選択するのは、指定したクラスター要素に対する変更が行われると自動的に実行されるクラスター・マネージャーのアラート・アクションを構成する場合です。詳細については、95ページの『アラート・サービス』を参照してください。

- スケジューラー

スケジューラー を選択するのは、指定した時刻または指定した日付に自動的に、クラスター・グループをオフライン、またはオンラインにしたり、クラスター・グループをノード間で移動する場合です。詳細については、93ページの『スケジューラー』を参照してください。

- クラスター Expert Wizard

「クラスター **Expert Wizard**」を選択するのは、新しいファイル共有リソース・グループ、インターネット情報サーバー・グループ、または印刷サーバー・グループの作成を単純化する場合です。 詳細については、107ページの『クラスター・エキスパート・ウィザード』を参照してください。

- ツール

「ツール」プルダウン・メニューで利用できる選択項目は、クラスター・エキスパート・ウィザードで使用される仮想 IP アドレス範囲をリセットする場合です。詳細については、107ページの『クラスター・エキスパート・ウィザード』を参照してください。

- ウィンドウ

「ウィンドウ」プルダウン・メニューで利用できる選択項目を使用するのは、デスクトップに現在表示されているウィンドウまたはアイコンを再配置する場合です。カスケード表示、タイル表示、および分割表示のウィンドウ・ビューが選択でき、現在表示されているアイコンの整列ができます。

- ヘルプ

「ヘルプ」プルダウン・メニューで利用できる選択項目を使用するのは、このサービスに関するオンライン・ヘルプにアクセスする場合です。

## ボタン・バー

クラスター・マネージャーのボタン・バーには 9 つのボタンがあり、それを使用すると、クラスター・マネージャーの機能の中で最も使用頻度の高い機能にアクセスすることができます。このような機能には、次のものがあります。

- 開く  
「開く」ウィンドウをオープンします。
- アラート  
「アラート」をオープンします (詳細については、95ページの『アラート・サービス』を参照)。
- 発見  
「クラスターの発見」ウィンドウをオープンします (詳細については、91ページの『クラスターのディスカバリー』を参照)。
- 最新の情報に更新  
クラスター・マネージャー・インターフェースの内容を最新表示します。
- 大きいアイコン  
クラスター・マネージャーの情報パネルのクラスター要素がすべて、大アイコンで表示されます。
- 小さいアイコン  
クラスター・マネージャーの情報パネルのクラスター要素がすべて、小アイコンで表示されます。
- 一覧  
クラスター・マネージャーの情報パネルのクラスター要素がすべて、リストで表示されます。
- 詳細  
クラスター・マネージャーの情報パネルのクラスター要素がすべて、リストで表示され、各要素ごとに詳細が表示されます。
- 詳細情報  
このバージョンのクラスター・マネージャーに関する情報を表示します。



## クラスター管理

クラスター・マネージャーを使用するのは、多様なクラスター固有の機能をもつすべてのクラスター要素を管理する場合です。クラスターへの接続をオープンすると、そのクラスターとクラスター要素（ノード、グループ、リソース、ネットワーク、およびネットワーク・リソースを含む）のツリー・ビューが表示されます。ツリー・ビューから個々のクラスター要素を選択するにつれて、ウィンドウの右側の情報パネルに表示されている情報が自動的に更新され、選択したクラスター要素に固有に関連した情報が表示されます。

クラスターを管理する場合は、あらかじめまずそのクラスターへの接続をオープンしておく必要があります。クラスターへの接続をオープンする方法は、次の 2 つあります。

- 「ファイル」プルダウン・メニューの「接続を開く」を選択する（または、ボタン・バーの「開く」ボタンを選択する）。

これで、「接続を開く」ウィンドウがオープンします。接続をオープンするためには、管理したいクラスターの名前を「クラスターまたはサーバー名」フィールドに入力し、「開く」を選択します。

- ディスカバリー機能を使用する。

管理したいクラスターの名前が分からない場合、またはネットワーク上で選択できるクラスターのリストから選択したい場合は、「ユーティリティ」プルダウン・メニューから「クラスタの発見」を選択します（または、ボタン・バーから「発見」ボタンを選択）。これで、「クラスタの発見」ウィンドウがオープンします。ディスカバリー機能の使用法の説明については、91ページの『クラスターのディスカバリー』を参照してください。

クラスターへの接続をオープンすると、そのクラスター要素のすべてが「Cluster Systems マネージャー」ウィンドウのツリー・ビューに表示されます。このウィンドウが表示されているときは、次のことが簡単に行えます。

- ノード間でのグループの移動
- グループ間でのリソースの移動
- クラスター要素のプロパティーの変更
- ノードの管理
- クラスター・グループの作成、削除、および管理
- クラスター・リソースの作成、削除、および管理

- クラスタ・ネットワークおよびネットワーク・リソースの管理

## グループの移動

グループとは、関連リソースが集まったものです。グループはクラスタ内の 1 つのノードによって所有されますが、ノードに障害が発生した場合には、クラスタ内の他のノードに引き継がれるように構成することができます。

クラスタ・マネージャーを利用すると、特定のノードにグループを手動で再割り振りすることができます。ノード間でグループを移動する場合は、グループのアイコンをドラッグし、そのグループの所有者にしたいノードのアイコンの上にドロップします。グループのアイコンをドロップすると、グループおよびそのグループのすべてのリソースは、そのノードに自動的に引き継がれます。

また、グループを選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「グループの変更」を選択しても、グループを移動することができます。

## リソースの移動

リソースとは、クラスタ上で稼働し、特定のグループに関連しているアプリケーションが共有する、クラスタの物理部分 (ディスク・ドライブや IP アドレスなど) のことです。クラスタ・マネージャーを使用すると、クラスタ上のグループ間でリソースを手動で移動することができます。

グループ間でリソースを移動する場合は、グループのリソースのアイコンをドラッグし、そのリソースの新しい所有者としたい別のグループのアイコンの上にドロップします。リソースのアイコンをドロップすると、リソースおよびそれに従属するすべてのリソースは、ドロップされた別のグループに自動的に引き継がれます。

また、リソースを選択してから、「ファイル」プルダウン・メニューの「グループの変更」を選択しても、リソースを移動することができます。

## クラスター要素プロパティーの変更

すべてのクラスター要素には、ユーザー定義可能なプロパティーがあります。クラスター要素のプロパティーを検証または変更する場合は、クラスター要素を選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「プロパティ」を選択します。選択したクラスター要素の「プロパティ」ウィンドウがオープンします。

「プロパティ」ウィンドウがオープンすると、そのクラスター要素のプロパティーを変更することができます。プロパティーに対する変更が終了したら、「OK」を選択すると、変更を保管してから、「プロパティ」ウィンドウがクローズします。変更を保管しないでウィンドウをクローズする場合は、「キャンセル」を選択します。

「プロパティ」ウィンドウの内容は、選択されたクラスター要素によって異なり、「プロパティ」ウィンドウによっては、プロパティーのページが複数に及ぶものもあります。また、ウィンドウによっては、変更を加えることができないデータ・フィールドが含まれているものもあります。

### クラスター・プロパティー

「クラスター プロパティー」ウィンドウには、次の項目があります。

名前	クラスターの名前
説明	クラスターの説明 (オプション)
フォーラム リソース	クラスターで使用される定数ディスク・リソース

### ノード・プロパティー

「ノード プロパティー」ウィンドウには、次の項目があります。

名前	ノードの名前
説明	ノードの説明 (オプション)
状態	現在のノードの状態

## グループ・プロパティ

「グループ プロパティ」ウィンドウには、次の項目があります。

- 「全般」ページ

名前	グループの名前
説明	グループの説明 (オプション)
優先所有者	グループの優先所有者であるノードの名前
状態	現在のグループの状態
ノード	現在、グループを所有しているノードの名前

- 「フェールオーバー」ページ

しきい値	指定された期間内 (「期間」フィールドの値) に、グループがオフラインになるまでに許容される障害時引き継ぎの回数。
期間	指定の障害時引き継ぎ回数 (「しきい値」フィールドの値) 後、グループをオフラインにする必要があるかどうかを決める場合に使用される指定された期間

- 「フェールバック」ページ

「フェールバックを禁止する」ラジオ・ボタン

障害時フェールオーバーが行われ、このグループの障害が復旧した後、優先所有者へ復帰させるのを許可しない場合を選択します。

「フェールバックを許可する」ラジオ・ボタン

障害時フェールオーバーが行われ、このグループの障害が復旧した後、優先所有者へ復帰させるのを許可する場合を選択します。障害が復旧した後に、復旧させる方法として「常に」および「時間帯による」ラジオ・ボタンから指定します。

## リソース・プロパティ

「リソース プロパティ」ウィンドウには、次の項目があります。

- 「全般」ページ

名前	資源の名前
説明	資源の説明 (オプション)
実行できる所有者	その資源にアクセスできるグループ。「実行できる所有者」リストに対してアクセスできるグループの追加または除去を行う場合は、「変更」を選択します。

「別のリソース モニターでこのリソースを実行する」チェック・ボックス  
別のリソース・モニターでこのリソースを実行する場合は、このチェック・ボックスを 選択し  
ます。

注: このオプションを使用するのは、別のリソースとの競合が予想される場合、またはデバッグ目的の場合だけです。

グループ	現在、リソースを所有しているグループの名前
状態	現在のリソースの状態
ノード	現在、リソースを所有しているノード

- 「依存関係」ページ

このリソースをオンラインにする前に、オンラインにしておく必要がある別のクラスターリソースをすべてリストします。このリストに対して従属するリソースの追加または除去を行う場合は、「変更」を選択します。

- 「詳細設定」ページ

「再起動しない」ラジオ・ボタン

このリソースが障害を起こした場合に、その起動を許可しない場合に選択 します。

「再起動する」ラジオ・ボタン

このリソースが障害を起こした場合に、その起動を許可する場合に選択します。現在、リソースを所有しているグループが、そのリソースの起動後、オンラインに戻るができるようになる場合は、「グループに作用させる」チェック・ボックスを選択します。



## ノード管理

ノードとは、クラスターの一部で、グループおよびそれらのリソースを所有する単一のシステムのことです。各ノードではクラスター・サーバーが稼働し、各ノードがクラスター内の他のノードと対話および互に稼働できるようにします。クラスター・マネージャーを使用すると、次のことを行うことができます。

- ノードの始動

ノード上のクラスター・サーバーを始動します。ノードを始動する場合は、ツリー・ビューからノードを選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「接続を開く」を選択します。

- ノードの停止

ノード上のクラスター・サーバーを停止します。ノードを停止する場合は、ツリー・ビューからノードを選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「ノードの停止」を選択します。

- ノードの削除

クラスターからノードを削除します。ノードを削除する場合は、ツリー・ビューからノードを選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「ノードの停止」を選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「ノードの削除」を選択します。

- ノードの一時停止

クラスターの一部としてのノードの機能を一時的に停止します。ノードを一時停止する場合は、ツリー・ビューからノードを選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「ノードの一時停止」を選択します。

- ノードの再開

一時停止したノードを再始動します。ノードを再開する場合は、ツリー・ビューからノードを選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「ノードの再開」を選択します。

- ノード・プロパティの変更

ノード・プロパティの変更に関する説明は、79ページの『クラスター要素プロパティの変更』を参照してください。

## グループの作成、削除、および管理

グループとは、クラスター上で稼働しているアプリケーションで使用される共有リソースが集まったものです。クラスター・マネージャーを使用すると、次のことを行うことができます。

- グループの作成

新しいグループは、次のようにして作成します。

1. 「ファイル」プルダウン・メニューの「新規作成」を選択し、「グループ」を選択します。

「新規グループ」ウィンドウがオープンします(図17を参照)。



図 17. 「新規グループ」ウィンドウ



2. 新しいグループの名前を「名前」フィールドに入力します。
3. グループの説明 (オプション) を「説明」フィールドに入力します。
4. 「次へ」を選択します。

「優先所有者」ウィンドウがオープンします (図18 を参照)。



図 18. 「優先所有者」ウィンドウ

5. このグループの優先所有者を選択します。
6. 「完了」を選択します。

クラスター・エキスパート・ウィザードを使用しても、リソース・グループを作成することができます。詳細については、107ページの『クラスター・エキスパート・ウィザード』を参照してください。

- グループの削除

グループを削除する場合は、ツリー・ビューからグループを選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「削除」を選択します。

- グループのオンライン化

グループをオンラインにする場合は、ツリー・ビューからグループを選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「オンラインにする」を選択します。

- グループのオフライン化

グループをオフラインにする場合は、ツリー・ビューからグループを選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「オフラインにする」を選択します。

- グループ・プロパティの変更

グループ・プロパティを変更すると、グループの名前の変更、グループの優先所有者の変更、およびグループに関する障害時引き継ぎおよび障害時復帰ポリシーの設定を行うことができます。グループ・プロパティの変更については、79ページの『クラスター要素プロパティの変更』を参照してください。

- 別のノードへのグループの移動

グループの移動については、78ページの『グループの移動』を参照してください。

## リソースの作成、削除、および管理

リソースとは、クラスター上で稼働し、特定のグループに関連しているアプリケーションが共有する、クラスターの物理部分（ディスク・ドライブや IP アドレスなど）のことです。クラスター・マネージャーを使用すると、次のことを行うことができます。

- リソースの作成

クラスター内にリソースを作成する場合は、以下のようにします。

1. 「ファイル」プルダウン・メニューの「新規作成」の「リソース」を選択します。

「新規リソース」ウィンドウがオープンします(図19を参照)。



図 19. 「新規リソース」ウィンドウ

2. リソースの名前を「名前」フィールドに入力します。
3. リソースの説明（オプション）を「説明」フィールドに入力します。
4. 「リソースの種類」選択リストから作成したいリソースの種類を選択します。
5. 「グループ」選択リストからリソースが作成されるグループの名前を選択します。

6. 必要があれば、「別のリソース・モニターでこのリソースを実行する」チェック・ボックスを選択します。

注: このオプションを使用するのは、別のリソースとの競合が予想される場合、またはデバッグ目的の場合だけです。

7. 「次へ」を選択します。 リソースに関する「プロパティ」ウィンドウがオープン します (図20 を参照)。

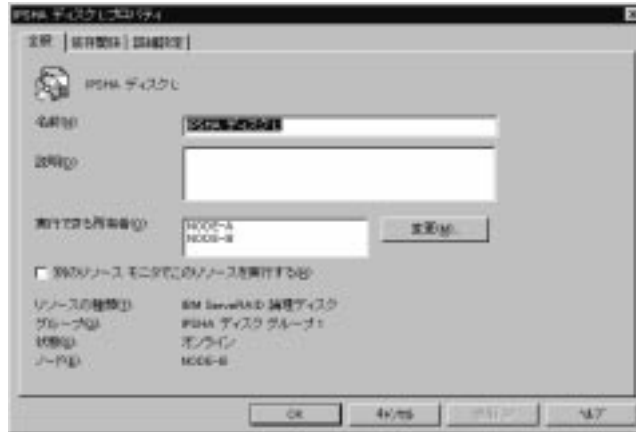


図 20. 「リソース プロパティ」ウィンドウ

8. このリソースの所有者となりうるグループを指定します。「実行できる所有者」フィールドに表示されている所有者のリストに 対して所有者となりうるグループの追加または除去を行う場合は、「変更」を選択します。
9. 「次へ」を選択します。「依存関係」ウィンドウがオープンします (89ページの図21 を参照)。



図 21. 「依存関係」ウィンドウ

10. このリソースの従属リソース (もしあれば) を選択し、「追加」を選択すると、従属リソースが追加されます。
  11. 「次へ」を選択し、「完了」を選択すると、新しいリソースが作成されます。
- リソースの削除  
リソースを削除する場合は、ツリー・ビューからリソースを選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「削除」を選択します。
  - リソースのオンライン化  
リソースをオンラインにする場合は、ツリー・ビューからリソースを選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「オンラインにする」を選択します。
  - リソースのオフライン化  
リソースをオフラインにする場合は、ツリー・ビューからリソースを選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「オフラインにする」を選択します。
  - リソース障害の開始  
障害時フェールオーバーおよび障害時復帰の機能をテストする場合は、リソース障害を開始することができます。リソース故障を開始する場合は、ツリー・ビューからリソースを選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「障害の発生」を選択します。

- リソース・プロパティの変更

リソース・プロパティを変更すると、所有者となりうるグループの名前の変更、追加、または除去、従属リソースの追加または除去、ポリシーの再始動、ポーリング間隔の指定、およびリソースに関する保留タイムアウト値の設定を行うことができます。リソース・プロパティの変更については、79ページの『クラスター要素プロパティの変更』を参照してください。

- 他のグループへのリソースの移動

リソースの移動については、78ページの『リソースの移動』を参照してください。

## クラスター・ネットワークとネットワーク・リソースの管理

クラスター・ネットワークおよびネットワーク・リソースは、他のクラスター・リソースに非常によく似ています。クラスター・ネットワーク・リソースの管理はすべて、「ネットワーク プロパティ」ウィンドウを使用して実行します。このウィンドウを使用すると、ネットワークの名前の変更、クラスターによる使用のためにネットワークを使用可能または使用不能、クラスターによるネットワークの使用の仕方を指定することができます。ネットワーク・プロパティの変更については、79ページの『クラスター要素プロパティの変更』を参照してください。

## クラスターのディスカバリー

クラスター・マネージャーのディスカバリー機能を使用すると、TCP/IP ネットワークを検索して、ワークステーションからアクセス可能なクラスターをすべて見つけ出すことができます。リモート・クラスターが検出された後は、検出されたクラスターのいずれに対しても接続をオープンし、その管理を即時に開始することができます。ディスカバリー機能では、ネットワーク内のすべてのドメインのクラスターを検索することもできれば、指定したドメインだけ検索するように指定することもできます。

クラスター・マネージャーのディスカバリー機能を使用する場合は、次のようになります。

1. 「ユーティリティ」プルダウン・メニューの「クラスタの発見」を選択するか、「クラスター・マネージャー」ウィンドウのボタン・バーの「発見」ボタンを選択します。「クラスタの発見」ウィンドウがオープンします (88ページの図20 を参照)。

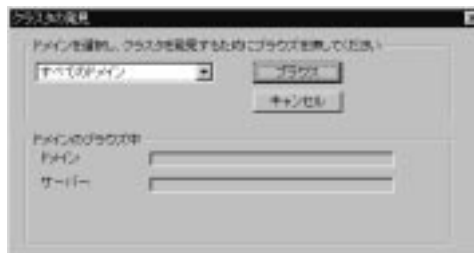


図 22. 「クラスタの発見」ウィンドウ

2. クラスタ検索の対象となる TCP/IP ドメインを指定します (オプション)。

ディスカバリー機能の省略時指定は、ネットワーク上のすべての TCP/IP ドメインのクラスターを検索します。ディスカバリー検索を特定の TCP/IP ドメインに限定する場合は、「ドメイン」選択リストからドメインを選択します。

3. 「ブラウザ」を選択して、クラスター検索を開始します。

TCP/IP ネットワーク上で見つかったすべてのクラスターのリスト (または、検索を特定のドメインに限定した場合であれば、指定した TCP/IP ドメインで見つかったすべてのクラスターのリスト) が、「**Discovered Cluster Process**」ウィンドウに表示されます (図23 を参照)。このウィンドウから、「Cluster Systems Manager」ウィンドウ内にクラスターのビューをオープンするか、検出されたクラスターに関するアラートを定義することができます (アラートの詳細については、95 ページの『アラート・サービス』を参照)。「Cluster Systems Manager」ウィンドウ内に、検出されたクラスターのビューをオープンする場合は、検出されたクラスターをダブルクリックします。



図 23. 「Discovered Clusters Process」ウィンドウ

注: アラートは「Cluster Discovery Service」ウィンドウからでも定義できます。このウィンドウからアラートを定義する方法は、クラスター・マネージャーのアラート・サービスを使用してアラートを定義する方法と同一です。ただし、クラスター・ディスカバリー・サービスから定義できるのは、あるタイプのクラスター要素のすべて (たとえば、クラスター内のすべてのグループまたはクラスター内のすべてのノード) に影響するクラスター・イベントだけです。詳細については、95 ページの『アラート・サービス』を参照してください。





「スケジューラー」ウィンドウは、3つのパネルに分割されています。ウィンドウの左側のビューには、スケジュール時刻ツリー（年、月、日、時、および5分間隔で階層的に編成されています）が表示されます。ウィンドウの右上のビューには、スケジュールできるタスクのリストが表示されます。右下のビューには、現在スケジュールされているタスクが表示されます。

「スケジューラー」ウィンドウに表示されている情報を更新する場合は、「表示」プルダウン・メニューで「最新の情報に更新」を選択するか、ボタン・バーの「最新の情報に更新」ボタンを選択します。

## クラスター・タスクのスケジュール

クラスター・マネージャーのタスクのスケジュールは、次のようにして行います。

1. クラスター・マネージャーのスケジューラーを始動します。
2. 「スケジューラー」ウィンドウの右上のパネルでタスクを選択します。
3. 選択したタスクを「スケジュール タイム」ツリー・ビューまでドラッグし、タスクが実行される期間の上にドロップします。

タスクのスケジュールが終了すると、「スケジューラー」ウィンドウの下の「スケジュールされたクラスター タスク」パネルに表示されます。タスクは、ドロップした時刻になると、自動的に実行されます。

## スケジュールされたクラスター・タスクの削除

以前にスケジュールしたタスクを削除する場合は、マウス・ボタン 2 を使用して「スケジューラー」ウィンドウからスケジュールされているタスクを選択し（これによって、タスクのコンテキスト・メニューが表示されます）、コンテキスト・メニューの「削除」を選択するか、またはスケジュールされているタスクを「スケジューラー」ウィンドウから選択し、「ファイル」プルダウン・メニューの「削除」を選択します。

## アラート・サービス

クラスター・マネージャーは、ネットワーク上のクラスターについてクラスター関連変更 (クラスター要素の追加、削除、または状態変更など) がないかどうか監視するように構成することができます。このようなイベントが発生した場合にも、自動的に Netfinity アラートを生成し、アラートに対する応答として、さまざまなアラート・アクションの 1 つを実行するように、クラスター・マネージャーを構成することができます。

アラートは、次のどちらかの方法でも構成できます。

- アラート・サービスの使用

クラスターとの接続を (「接続を開く」) を使用してクラスターへ接続する、またはディスカバリー機能を使用して検出したクラスターをダブルクリックする) オープン後、アラート・サービスを使用して、アラートを構成することができます。「Alert Service」ウィンドウを使用する場合は、個々のグループおよびリソースも含めたどのようなクラスター要素の場合でも、イベントおよびアラートを割り当てることができます。

- 「Cluster Discovery Service」ウィンドウの使用

クラスターを検出後、「Cluster Discovery Service」ウィンドウ（「Alert Service」ウィンドウに非常によく似たウィンドウ）のツリー・ビューに表示されます（92ページの図23を参照）。アラートは、このウィンドウを使用して構成することができます。ただし、「Cluster Discovery Service」ウィンドウを使用してアラートを定義する場合、アラートを生成するために割り当てることができるのは、クラスター上のすべてのクラスター要素（たとえば、すべてのリソース、ノード、またはグループ）に影響するイベントだけです。このウィンドウでは個々のクラスター要素にイベントおよびアラートを割り当てることはできませんが、「Cluster Discovery Service」ウィンドウでは、ネットワーク上の複数のクラスターにアラートを同時に割り当てることが簡単にできます。



図 25. 「Alert Service」ウィンドウ

アラート・サービスまたはクラスター・ディスカバリー機能を使用して、アラートを定義するときの方法は、クラスター要素イベントの選択、クラスターまたはクラスター要素へのその割り当て、およびイベントに対する応答として生成されるアラートおよび応答の構成に使用されるプロセスは同一です。

1. クラスターへの接続をオープンします。

クラスターへの接続のオープンは、次のように行います。

- a. 「ファイル」プルダウン・メニューの「接続を開く」を選択します (または、ボタン・バーの「開く」ボタンを選択)。
- b. 「クラスターまたはサーバー名」フィールドに、接続して管理したいクラスター名を入力します。
- c. 「開く」を選択して、クラスターのビューをオープンします。

クラスターの名前が分からない場合は、クラスター・マネージャーのディスカバリー機能を使用して、ネットワーク上のクラスターを見つけ出し、検出されたクラスターをダブルクリックします。ディスカバリー機能については、91ページの『クラスターのディスカバリー』を参照してください。

2. 「ユーティリティ」プルダウン・メニューの「アラート」を選択します (または、ボタン・バーの「アラート」ボタンを選択)。

「クラスタの発見」ウィンドウをオープンする方法については、91ページの『クラスターのディスカバリー』を参照してください。

## クラスター・アラートの定義

クラスター・イベント・アラートおよびアラート・アクションの応答の定義は、次のように行います。

1. アラート・サービスを始動します (または、「クラスタの発見」ウィンドウをオープンします。「クラスタの発見」ウィンドウをオープンする方法については、91ページの『クラスターのディスカバリー』を参照してください)。
2. 監視の対象としたいイベントを「アラート サービス イベント」パネル (ウィンドウの 右上のパネル) から選択します。

クラスター・マネージャーのアラート・サービスを使用して監視することができるクラスター・イベントについては、102ページの『使用可能なクラスター・イベント』を参照してください。

3. 「イベント」パネルから「クラスタ イベント ツリー表示」パネル (ウィンドウの左上のパネル) までイベントをドラッグし、イベントを適用したいクラスター要素の上にドロップします。

たとえば、クラスターについてすべてのクラスター・イベントを監視したい場合は、「イベント」パネルから「すべてのクラスタ イベント」をドラッグし、「クラスタ ツリー表示」パネルのクラスターのアイコンの上にそれをドロップします。選択されたクラスター要素に関する「アラートの構成」ウィンドウがオープンします (図26 を参照)。ウィンドウのタイトル・バーに選択されたクラスター要素の名前が表示されます。

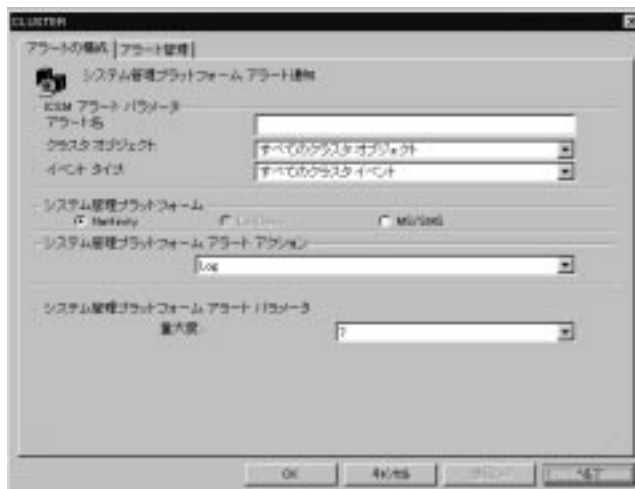


図 26. 「アラートの構成」ウィンドウ

4. 「名前」フィールドにアラートの名前を入力します。
5. 「クラスタ オブジェクト」選択リストから監視したいクラスタ要素を選択します (オプション)。

クラスタ・イベントをドロップした先のクラスタ要素の名前が、このウィンドウに表示されます。

6. 「イベント タイプ」選択リストから監視したいクラスタ・イベントを選択します (オプション)。

「クラスタ イベント」ツリー表示から選択したクラスタ・イベントの名前が、このウィンドウに表示されます。

7. 「システム管理プラットフォーム」ボタン・グループから「**Netfinity**」を選択します。

この選択で、生成されるアラートの形式、およびアラートに対する応答として対応するアクションが決まります。システムに Intel LANDesk または Microsoft SMS もインストールされている場合は、これらの製品についてのボタンも使用可能です。ただし、本書で説明するのは Netfinity 機能だけに限られています。使用可能な他のシステム管理プラットフォームのアラートおよびアクションの説明については、クラスタ・マネージャーのオンライン・ヘルプを参照するか、*IBM Cluster Systems Management User's Guide* を参照してください。

8. 「システム管理プラットフォーム アラート アクション」選択リストから、アラートに対する応答として取られるアラート・アクションを選択し、必要な追加パラメーターがあれば、それを指定します。

アラート・アクションを選択すると、「システム管理プラットフォーム アラート アクション」選択リストの下に、追加パラメーター・フィールドが表示される場合があります。追加パラメーターを必要とするアラート・アクションを構成する場合は、必要な追加情報を指定する必要があります。

クラスタ・マネージャーのアラート・サービスで使用できる Netfinity アラート・アクションについては、104ページの『使用可能なクラスタ・アラート・アクション』を参照してください。

9. アラートの重大度を指定します。

重大度は 0 から 7 までの数値で、生成されたアラートの重大度を示します。重大度 0 は極めて重大なアラートを示し、重大度 7 は比較的軽度のアラートを示します。

10. 「OK」を選択して、このクラスター・アラート・アクションを保管します。

定義および保管されたクラスター・アラートは、「アラート サービスのアラート」情報パネル (「Alert Service」ウィンドウの下半分) に表示されます。

クラスター・アラート情報を保管しないでこのウィンドウをクローズする場合は、「キャンセル」を選択します。



## クラスター・アラートの削除

前に定義したクラスター・アラート・アクションを削除する場合は、次のようにします。

1. アラート・サービスを始動します (または、「Cluster Discovery Service」ウィンドウをオープン)。
2. 「アラート サービス イベント」パネル (ウィンドウの右上のパネル) のいずれかのイベントをダブルクリックします。

選択された要素に関する「アラートの構成」ウィンドウがオープンします。

3. 「アラートの構成」ウィンドウの「アラート管理」タブを選択します。「アラートの構成」ウィンドウのビューから、クラスターに関して現在定義されているすべてのイベントおよびアラートのビューに切り替わります (図27 を参照)。

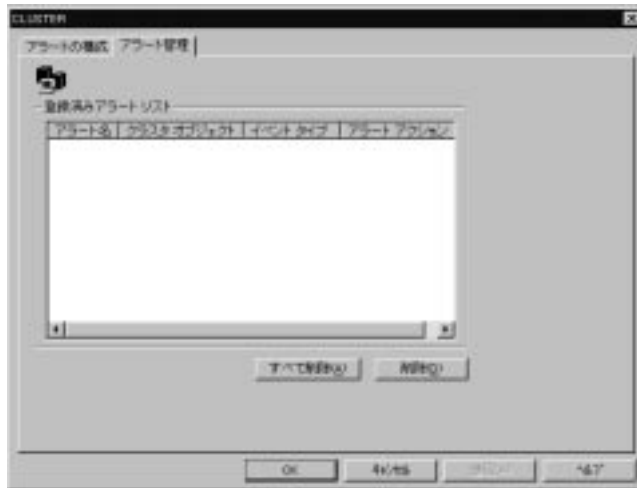


図 27. 「アラート管理」ビュー

4. 削除したい 1 つまたは複数のクラスター・アラートを選択します。
5. 「削除」を選択します。

定義されているクラスター・アラートをすべて削除する場合は、「すべて削除」を選択します。

## 使用可能なクラスター・イベント

クラスター・マネージャーを使用すると、次のようなクラスター・イベントについて監視することができます。アラート・サービスを使用してクラスター・アラートが構成されている場合、イベントが発生すると Netfinity アラートが生成され、アラートに対する応答として、アラート・アクションが自動的に取られます。

- すべてのクラスター・イベント  
すべてのクラスター・イベントに対して、アラートが生成されます。
- すべてのノード・イベント  
すべてのノード・イベント (ノードの状態、ノードの追加、ノードの削除) に対して、アラートが生成されます。
- ノード状態 (稼働、停止、一時停止)  
ノードの状態が変更された場合に、アラートが生成されます。
- ノード追加  
クラスターにノードが追加された場合に、アラートが生成されます。
- ノード削除  
クラスターからノードが削除された場合に、アラートが生成されます。
- すべてのグループ・イベント  
すべてのグループ・イベント (グループの状態、グループの追加、グループの削除) に対して、アラートが生成されます。
- グループ状態 (オンライン、オフライン、失敗)  
グループの状態が変更された場合に、アラートが生成されます。
- グループ追加  
ノードにグループが追加された場合に、アラートが生成されます。
- グループ削除  
ノードからグループが削除された場合に、アラートが生成されます。
- すべてのリソース・イベント  
すべてのリソース・イベント (リソースの状態、リソースの追加、リソースの削除) に対して、アラートが生成されます。

- リソース状態 (オンライン、オフライン、失敗)  
リソースの状態が変更された場合に、アラートが生成されます。
- リソースの追加  
グループにリソースが追加された場合に、アラートが生成されます。
- リソースの削除  
グループからリソースが削除された場合に、アラートが生成されます。
- すべてのネットワーク・イベント  
すべてのネットワーク・イベント (ネットワークの状態、ネットワークの追加、ネットワークの削除) に対して、アラートが生成されます。
- ネットワークの状態 (稼働、パーティション、停止)  
ネットワークの状態が変更された場合に、アラートが生成されます。
- ネットワークの追加  
クラスターにネットワークが追加された場合に、アラートが生成されます。
- ネットワークの削除  
クラスターからネットワークが削除された場合に、アラートが生成されます。
- すべてのネットワーク・インターフェース・イベント  
すべてのネットワーク・インターフェース・イベント (ネットワーク・インターフェースの状態、ネットワーク・インターフェースの追加、ネットワーク・インターフェースの削除) に対して、アラートが生成されます。
- ネットワーク・インターフェースの状態 (稼働、到達不能、失敗)  
ネットワーク・インターフェースの状態が変更された場合に、アラートが生成されます。
- ネットワーク・インターフェースの追加  
クラスターにネットワーク・インターフェースが追加された場合に、アラートが生成されます。
- ネットワーク・インターフェースの削除  
クラスターからネットワーク・インターフェースが削除された場合に、アラートが生成されます。

## 使用可能なクラスター・アラート・アクション

クラスター・マネージャーのアラート・サービスを使用すると、次のような Netfinity アラート・アクションが利用できます。

- ログ

アラートを Netfinity アラート・ログに送信する場合は、「**Log**」を選択します。

- NT イベント・ログ

Netfinity を使用して NT イベント・ログにアラートを記録する場合は、「**NTLOG**」を選択します。

- デジタル・ページャー

Netfinity を使用して、システムに接続されているモデムを使用して、デジタル・ページャー・サービスにダイヤルして、情報を送信する場合は、「**DPager**」を選択します。

追加パラメーター

- <P1> モデム COM ポート

モデムが使用する COM ポート。COM ポート・パラメーターはパラメーター・フィールドに COM *x* と入力する必要があります。ただし、*x* は COM ポートの番号です。

- <P2> ページャー番号

デジタル・ページャーに情報を転送する場合に、モデムがダイヤルする電話番号。

- <P3> デジタル・ページャー表示

ページャーに表示される数値データ。

注: ページャー・サービスによっては、パラメーター・フィールド <P2> の電話番号にダイヤル後、パラメーター・フィールド <P3> の数値データを送信するまでに、このアラート・アクションが待機する時間の長さを増やす必要がある場合があります。数値データの送信前に待機時間の長さを増やすには、フィールド <P2> の電話番号の末尾に、1 つまたは複数のコンマ ( “,” ) を付け加えます。モデムは、コンマ 1 つにつき 2 秒ずつ待ってから数値データを送信します。

- 英数字ページャー

Telocator 英数字プロトコル (TAP) を使用する英数字ページャーに、システムに接続されているモデムから、すべてのアラート情報、および追加テキスト (必要な場合) を送信する場合は、「**APager**」を選択します。

追加パラメーター

- <P1> モデム COM ポート

モデムが使用する COM ポート。COM ポート・パラメーターはパラメーター・フィールドに COM x と入力する必要があります。ただし、x は COM ポートの番号です。

- <P2> TAP アクセス番号

英数字ページャーに情報を転送する場合に、モデムがダイヤルする電話番号。

- <P3> ページャー ID

データの送信先ページャーの識別番号。

- <P4> 送信する追加テキスト

アラート・データと共に送信する任意のテキスト。このパラメーターは任意選択です。

注:

1. このアクションは、Telocator 英数字プロトコル (TAP) を使うページャー・サービスでだけ機能します (TAP は日本ではサービスされていません)。
2. ページャーのページャー ID を指定する必要があります。

- コマンドの実行

アラートを受信して、コマンドを実行する場合は、「**ExCommand**」を選択します。

追加パラメーター

- <P1> コマンド

システムで実行されるコマンド。

- メッセージ・ポップアップ

ポップアップ・ウィンドウにアラートを表示する場合は、「**MsgPopup**」を選択します。

## クラスター・エキスパート・ウィザード

クラスター・マネージャーのクラスター・エキスパート・ウィザードを使用すると、次のような、一般的に使用されるリソース・グループを迅速かつ容易に作成することができます。

- ファイル共有リソース・グループ
- インターネット情報サーバー (IIS) リソース・グループ
- 印刷スプーラー・リソース・グループ

クラスター・エキスパート・ウィザードは、既存のリソース・グループ内に新しいリソース・グループを定義すると、グループを作成することができます。これが特に有用なのは、環境での複数の目的に役立てるために必要な物理ディスクの数が限られている場合です。たとえば、1つの物理ディスクを使用して、複数のファイルの共有および複数の IIS 用のデータを保管することができます。

システムの始動中に、クラスター・マネージャーは、仮想 IP アドレスの範囲の入力を指示するプロンプトを表示します。順番に並んでいる範囲の IP アドレスが、システムで使用するために作成されます。

注: 番号の範囲を追加する場合は、現在アクティブな番号は含めないようにします。たとえば、9.9.9.10 というアドレスが割り当てられている場合は、9.9.9.1 ~ 9.9.9.100 の範囲を使用しないで、9.9.9.11 ~ 9.9.9.109 から始めます。

IP アドレスが削除された場合は、それが使用されなくなった時点で、クラスター・エキスパート・ウィザードは、その番号を使用可能 IP アドレスのリストに追加しません。

クラスター・エキスパート・ウィザードを始動するには、「ユーティリティ」プルダウン・メニューの「クラスタ **Expert Wizard**」から、作成したいリソース・グループを選択します。

## ファイル共有リソース・グループの作成または変更

ファイル共有リソース・グループは、構成内の 1 つの共有ディスクのサーバーのディレクトリーを共有します。ファイル共有の構成は、Windows NT Explorer のファイル共有の構成と同じです。たとえば、ファイルはサーバー上の共有ディレクトリーに保存できますが、アクセスは 1 つのクライアント・グループにしか与えられません。

ファイル共有リソース・グループを作成したり、既存のファイル共有リソース・グループを変更したりすることができます。

注: ファイル共有リソースを作成する場合は、その前に必ずディスク・ドライブを使用可能にしておきます。ハード・ディスクが使用可能になっていない場合は、省略時値でファイル共有リソースを変更することになります。

新しいファイル共有リソースの作成は、次のように行います。

1. 「ユーティリティ」プルダウン・メニューの「クラスタ **Expert Wizard**」から「ファイル共有」を選択します。

「Expert Wizard」ウィンドウが表示され、利用できるファイル共有リソースに関連する情報が表示されます (図28 を参照)。



図 28. 「ファイル共有リソース」ウィンドウ

2. 「新規グループの作成」を選択します。
3. ファイル共有リソース・グループに関する共有名、パス、およびネットワーク名を指定します。
4. ファイル共有リソース・グループのネットワーク・インターフェースを指定します。



5. ファイル共有リソース・グループ用のディスク・ドライブを選択します。
6. 「完了」を選択します。

ファイル共有リソース・グループの変更は、次のように行います。

1. 「ユーティリティ」プルダウン・メニューの「クラスタ **Expert Wizard**」から「ファイル共有」を選択します。  
  
「Expert Wizard」ウィンドウが表示され、利用できるファイル共有リソースに関連する情報が表示されます (108ページの図28 を参照)。
2. 「既存グループの変更」を選択します。
3. 「ファイル共有リソース」選択リストから、変更したいファイル共有リソースの名前を選択します。
4. ファイル共有プロパティを必要に応じて変更します。
5. 「完了」を選択します。

## インターネット情報サーバー・リソース・グループの作成

インターネット情報サーバー (IIS) リソース・グループは、Microsoft インターネット情報サーバーの WWW、FTP、および Gopher 構成要素の高い可能性を提供します。1 つのノードに障害が発生しても、他のノードがクライアントにデータを供給します。

インターネット情報サーバー・リソース・グループの作成は、次のように行います。

1. 「ユーティリティ」プルダウン・メニューの「クラスタ **Expert Wizard**」から、「**IIS 仮想ルート**」を選択します。

「Expert Wizard」ウィンドウが表示され、利用できる IIS リソースに関連する情報が表示されます (図29 を参照)。



図 29. 「IIS リソース・グループ」ウィンドウ

2. 「新規グループの作成」を選択します。
3. IIS リソース・グループに関するディレクトリー、別名、およびネットワーク名を指定します。
4. IIS リソース・グループのネットワーク・インターフェースを指定します。
5. IIS リソース・グループ用のディスク・ドライブを選択します。
6. 「完了」を選択します。

## 印刷スプーラー・リソース・グループの作成または変更

サーバーが印刷スプーラーとして機能する場合は、サーバーは印刷スプーラーがデータを格納する場所を指定する必要があります。印刷スプーラー・リソース・グループのスパール・ディレクトリーは、印刷ジョブがスパールされる共有ディスク上に取られます。

印刷スプーラー・リソース・グループを作成したり、既存の印刷スプーラー・リソース・グループを変更したりすることができます。

印刷スプーラー・リソース・グループの作成は、次のように行います。

1. 「ユーティリティ」プルダウン・メニューの「クラスタ **Expert Wizard**」から、「印刷スプーラ」を選択します。

「Expert Wizard」ウィンドウが表示され、利用できる印刷スプーラー・リソースに関連する情報が表示されます (図30 を参照)。

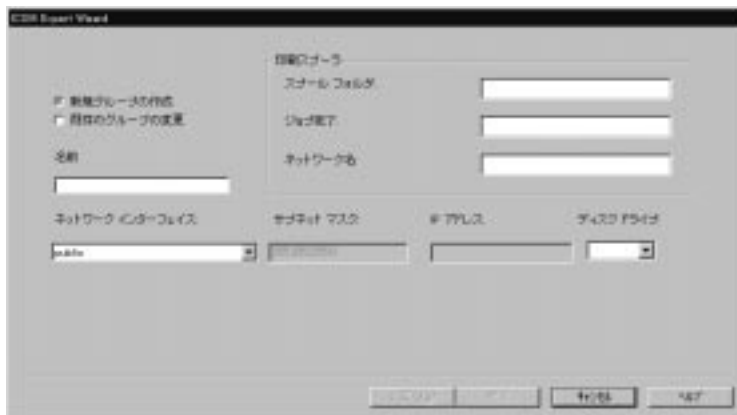


図 30. 「印刷スプーラ リソース グループ」ウィンドウ

2. 「新規グループの作成」を選択します。
3. 印刷スプーラーに関するスパール・フォルダー、ジョブ完了、およびネットワーク名を指定します。
4. 印刷スプーラーのネットワーク・インターフェースを指定します。
5. 印刷スプーラー用のディスク・ドライブを選択します。
6. 「完了」を選択します。

印刷スプーラー・リソース・グループの変更は、次のように行います。

1. 「ユーティリティー」プルダウン・メニューの「クラスタ **Expert Wizard**」から、「印刷スプーラ」を選択します。  
「Expert Wizard」ウィンドウが表示され、利用できる印刷スプーラー・リソースに関連する情報が表示されます (111ページの図30 を参照)。
2. 「既存グループの変更」を選択します。
3. 「印刷スプーラ リソース」選択リストから、変更したい印刷スプーラー・リソースの名前を選択します。
4. 印刷スプーラー・プロパティを必要に応じて変更します。
5. 「完了」を選択します。

## 第6章 クリティカル・ファイル・モニター

クリティカル・ファイル・モニターを使用すると、ネットワーク内のシステム上の重要なシステム・ファイルの削除または変更時には、必ず警告を受けることができます。クリティカル・ファイル・モニターによって、重要なシステム・ファイル (CONFIG.SYS ファイルなど) の日付、時刻、サイズの変更、削除または作成された場合に、Netfinity アラートを簡単に生成することができます。また、クリティカル・ファイル・モニターを使用すれば、Netfinity システムに常駐するどのようなファイルでも監視することができます。

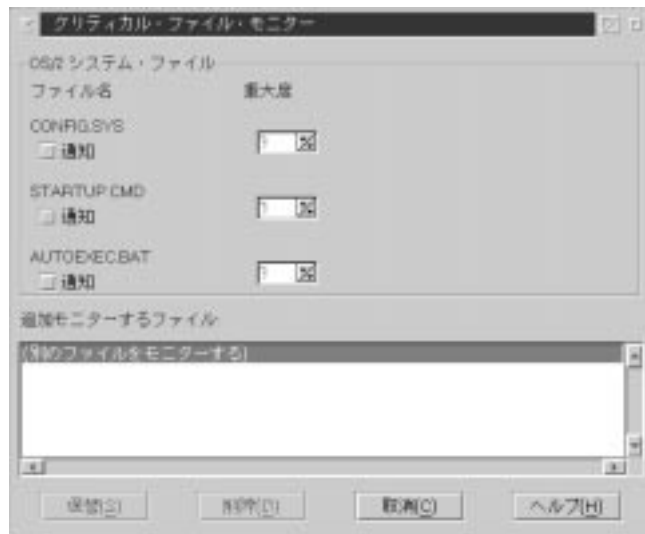


図 31. クリティカル・ファイル・モニター

## システム・ファイルの監視

クリティカル・ファイル・モニターによって監視できるシステム・ファイルは、オペレーティング・システムによって異なります。システムが使用しているオペレーティング・システムの名前は、「システム・ファイル」フィールド・グループのタイトル領域に表示されます。監視可能なシステム・ファイルの名前は、チェック・ボックスの隣に表示されます。

注:

1. クリティカル・ファイル・モニターを使用すると、システム上のあらゆるファイルを監視することができます。「クリティカル・ファイル・モニター」ウィンドウの一番上に表示されるシステム・ファイルは、監視の必要性が最も高い重要なファイルです。ほかのファイルを監視する方法については、116ページの『別のファイルの監視』を参照してください。
2. ネットワーク・ドライブ上にあるファイルは、監視することができません。

## OS/2 のシステム・ファイル

「システム・ファイル」フィールド・グループに表示される OS/2 のシステム・ファイルは、次のとおりです。

- CONFIG.SYS
- STARTUP.CMD
- AUTOEXEC.BAT

## Windows 3.1、および Windows 95 のシステム・ファイル

「システム・ファイル」フィールド・グループに表示される Windows のシステム・ファイルは、次のとおりです。

- CONFIG.SYS
- AUTOEXEC.BAT
- WIN.INI
- SYSTEM.INI

## Windows NT のシステム・ファイル

「システム・ファイル」フィールド・グループに表示される Windows NT のシステム・ファイルは、次のとおりです。

- WIN.INI
- SYSTEM.INI

## NetWare のシステム・ファイル

「システム・ファイル」フィールド・グループに表示される NetWare のシステム・ファイルは、次のとおりです。

- AUTOEXEC.NCF
- STARTUP.NCF
- VOL\$LOG.ERR
- SYS\$LOG.ERR

1 つまたは複数のシステム・ファイルを監視するには、次のようにします。

1. 監視したいシステム・ファイルを選択します。

監視したいシステム・ファイルの名前の下の「通知」チェック・ボックスを選択します。チェック・マークがボックス内に表示されます。

2. 「重大度」を選択します。

「システム・ファイル」フィールド・グループ内の各システム・ファイルの名前の隣には、「重大度」フィールドがあります。スピン・ボタンを利用して、監視したい各システム・ファイルの重大度値を選択します。この重大度値は、システム・ファイルが作成、削除、または変更されたときに生成される Netfinity のアラートに割り当てられます。重大度値は、0 (最も重大) から 7 (最も軽微) までの値から選択することができます。

3. 「ローカル通知」(任意選択) を選択します。

監視しているシステムにアラートを送信したい場合、「ローカル通知」を選択します。

4. 「保管」を選択して、このクリティカル・ファイル・モニターに対する設定値を保管します。

変更内容を保管せずにクリティカル・ファイル・モニターをクローズするには、「取消」を選択します。

## 別のファイルの監視

クリティカル・ファイル・モニターを使用すると、システム上のあらゆるファイルを監視できます。「追加モニターするファイル」フィールドには、現在監視中の他のすべてのファイルのリストが示されます。

監視したいファイルを選択するには、次のようにします。

1. 「追加モニターするファイル」フィールドで、「別のファイルをモニターする」を選択します (113ページの図31 を参照)。  
「モニター」ウィンドウがオープンします (図32 を参照)。

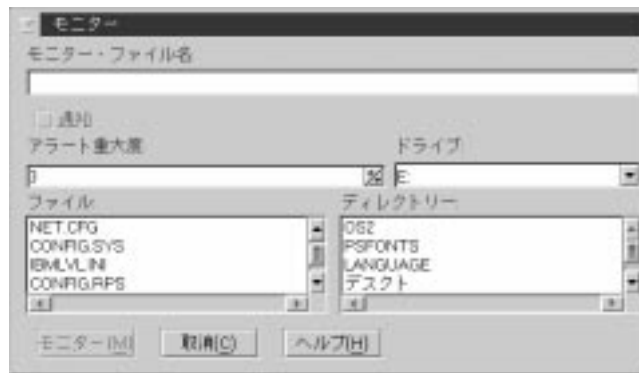


図 32. クリティカル・ファイル・モニター - 「モニター」ウィンドウ

2. 「ドライブ」リストから、監視したいファイルがあるドライブ名を選択します。
3. 「ディレクトリー」フィールドで、監視したいファイルが入っているディレクトリーを選択します。
4. 「ファイル」リストから、監視したいファイルの名前を選択します。
5. 「アラート重大度」フィールドの隣にあるスピン・ボタンを使用して、選択したファイルが変更または削除された場合に生成されるアラートの重大度を設定します。
6. 「ローカル通知」(任意選択) を選択します。  
監視しているシステムにアラートを送信したい場合、「ローカル通知」選択します。



7. 「モニター」を選択して、選択したファイルの監視プロセスを開始します。

加えた変更を保管せずにクリティカル・ファイル・モニター・サービスをクローズするには、「取消」を選択します。

注: クリティカル・ファイル・モニターは、システムに存在しない特定のファイルが作成された場合に、アラートを出すよう設定することができます。詳細については、『ファイル作成の監視』を参照してください。

## ファイル作成の監視

指定されたファイルが作成されたときに、クリティカル・ファイル・モニターによってアラートを生成することもできます。アラートを生成するようにクリティカル・ファイル・モニターを構成するには、次のようにします。

1. 「ドライブ」フィールドで、ファイル作成を監視したいディスク・ドライブ名を選択します。
2. 「モニター・ファイル名」フィールドに、監視したいファイルのパスと名前を入力します。

たとえば、PROGRAM という名前のディレクトリー内に ERROR.LOG という名前のファイルが作成されたときに、クリティカル・ファイル・モニターにアラートを生成させるには、「モニター・ファイル名」フィールドに次のように入力します。

```
PROGRAM¥ERROR.LOG
```

3. 「アラート重大度」フィールドの隣にあるスピン・ボタンを使用して、選択したファイルが作成されると生成されるアラートの重大度を設定します。
4. 「ローカル通知」(任意選択) を選択します。  
監視しているシステムにアラートを送信したい場合、「ローカル通知」選択します。
5. 「モニター」を選択し、指定したファイルの監視プロセスを開始します。



Netfinity デスクトップ・マネージメント・インターフェース (DMI) ブラウザー・サービスを使用すると、システムにインストール、または接続されている DMI 準拠のハードウェア製品やソフトウェア製品 (DMI 構成要素) についての情報を調べることができます。

DMI ブラウザーによって、次のことができます。

- DMI 構成要素についての情報の表示
- 製品に関する問題またはエラーについての通知を DMI サービス・レイヤーから受信
- DMI 構成要素に関連する問題またはエラーのログの表示

注:

1. このサービスは、DMI サービス・レイヤーをインストールしてそれが活動中であるシステムでのみ使用可能です。 DMI サービス・レイヤーは、Netfinity でサポートされているほとんどのオペレーティング・システムで使用できます。Netfinity をインストールする場合、DMI サービス・レイヤーがインストールされていて、活動中でないと、DMI ブラウザーまたは Netfinity 固有の DMI 構成要素はインストールされません。Netfinity のインストール後に DMI サービス・レイヤーをインストールする場合は、Netfinity の DMI 構成要素インスツルメンテーションをインストールして使用するためには、Netfinity を再インストールする必要があります。
2. Netfinity DMI ブラウザー・サービスは、DMI サービス・レイヤーと共に提供される DMI ブラウザーの特殊バージョンです。DMI ブラウザーで使用できる機能の一部は、Netfinity の DMI ブラウザー・サービスでは使用できません。

## DMI について

デスクトップ・マネージメント・インターフェース (DMI) は、コンピューター・システムに接続またはインストールされた、ハードウェア製品およびソフトウェア製品の管理を簡略化するための業界標準です。コンピューター・システムとは、スタンドアロンのデスクトップ・システム、ネットワーク上のノード、またはネットワーク・サーバーのどれかをいいます。DMI は、デスクトップのオペレーティング・システム、環境、ハードウェア・プラットフォーム、およびアーキテクチャーで作動するように設計されています。

DMI は、ハードウェア製品とソフトウェア製品についての情報を標準のフォーマットで入手する方法を提供します。一度データを入手すると、デスクトップとネットワークのソフトウェア・アプリケーションは、このデータを使用して、これらのコンピューター製品を管理することができます。DMI 技術が進歩するにつれて、デスクトップ・コンピューターの製品のインストールと管理が容易になり、ネットワークでのデスクトップ・コンピューターの管理が容易になります。

## DMI の動作

完全な DMI の構造は、次の 3 つの独立した要素からなっています。

- DMI 構成要素
- DMI サービス・レイヤー
- DMI 準拠の管理アプリケーション

## DMI 構成要素

各 DMI 構成要素には、関連する製品に関する情報が含まれています。この情報は、製品固有のグループに編成されます。この情報は、管理情報ファイル (MIF) に含まれています。MIF は、DMI 構成要素または製品の管理可能な属性を記述するものです。

各グループは、さまざまなグループ固有の属性を含んでいます。グループ内にある属性は、そのグループに完全に依存するものです。たとえば、あるソフトウェア製品の構成要素 ID グループには、次の属性が含まれます。

- 製造元
- 製品
- バージョン
- シリアル番号
- インストール
- 検査

また、PC システムの構成要素に含まれるプロセッサ・グループの属性には、次の属性が含まれます。

- タイプ
- プロセッサ・ファミリー
- バージョン情報
- 最大速度
- 現行速度
- プロセッサ・アップグレード

グループの各属性は、一連のデータ項目によって完全に定義されます。グループで使用可能な項目は、製品のタイプによって異なりますが、ほとんどの属性は次のデータ項目を含んでいます。

<b>ID</b>	<b>ID</b> とは、属性のグループに固有のシーケンス番号のことをいいます。
<b>タイプ</b>	データのタイプは、DMI によって定義される 8 つのタイプのいずれかになります。これらのデータのタイプは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"><li>• 整数</li><li>• 64 ビット整数</li><li>• カウンター</li><li>• 64 ビット・カウンター</li></ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ゲージ</li> <li>• 表示文字列</li> <li>• オクテット文字列</li> <li>• 日付</li> </ul>
アクセス	<p>データをアクセスする方法です。アクセス値は、次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 読取専用</li> <li>• 読取り / 書込み</li> <li>• 書込み専用</li> </ul> <p>注: 読取り / 書込み、または書込み専用のアクセスの値を持つ属性は、ほかの属性の一部を変更することができます。詳細については、128ページの『属性情報の変更』を参照してください。</p>
名前	<p>名前は、DMI 標準から得られるか、またはメーカーによって提供されます。</p>
値	<p>値は、属性の特定のオカレンスのことをいいます。たとえば、アプリケーションのバージョン番号として 2.1 という属性値を設定することができます。場合によっては、値が読み取り専用であり、変更できない場合があります。そのような値は、MIF ファイルで直接指定することができます。ただし、ほとんどの値は時間がたつと変化します。通常、更新は自動的に行われ、構成要素のメーカーが提供するプログラムによって管理されます。</p> <p>値は、列挙型値 (ENUM) として MIF ファイルに定義された使用可能な値のテーブルに指標付けをすることもできます。</p>
説明	<p>構成要素の記述とは、その構成要素のメーカーによって提供される技術情報のことをいいます。</p>

## Netfinity DMI 構成要素インストールメンテーション

Netfinity DMI 構成要素インストールメンテーションは、DMI ベースの管理アプリケーションに対して、Netfinity のリモート・システム・マネージャー、システム・モニター、およびシステム情報ツールからの情報を提供します。DMI ベースの管理アプリケーションが必要な MIF ファイルは、Netfinity のインストール時に、Netfinity の DMI インストールメンテーションの一部としてインストールされます。

注:

1. Netfinity をインストールする場合、DMI サービス・レイヤーがインストールされていて、活動中でないと、DMI ブラウザーまたは Netfinity 固有の DMI 構成要素はインストールされません。
2. DMI ベースの Netfinity のデータは、Netfinity サポート・プログラムが実行中の場合にだけ、他の DMI ベースのアプリケーションで使用可能です。

## DMI サービス・レイヤー

DMI サービス・レイヤーは、DMI 構成要素の情報を収集して、標準のフォーマットに編成するプログラムです。このデータを編成して利用可能にすると、DMI 準拠の構成要素エージェント (たとえば、Netfinity の DMI ブラウザー・サービスなど) は、DMI サービス・レイヤーにアクセスして、任意の DMI 構成要素に関する情報を要求することができます。

注: Netfinity の DMI ブラウザーが機能するためには、システムに DMI サービス・レイヤーがインストールされて、活動中になっている必要があります。

DMI サービス・レイヤーは、インストールされている MIF ファイルから構成情報を収集して、データベースを作成し、要求に応じて、管理アプリケーションに情報を渡します。管理アプリケーションとは、DMI サービス・レイヤーからデータを受信して、デスクトップまたはネットワークの管理のためにこれらのデータを使用できるようにするプログラムのことをいいます。

DMI サービス・レイヤーは、MIF データを収集して構成するだけでなく、各種の DMI 構成要素で生じた問題やエラーに関する情報を収集することもできます。Netfinity DMI ブラウザーを使用すると、DMI 構成要素に関する問題やエラーの通知を受信したり、DMI 構成要素に関する問題やエラーのログを表示することができます。

Netfinity DMI ブラウザーは、次の DMI サービス・レイヤーで動作します。

オペレーティング・システム サポートされる **DMI サービス・レイヤー**

**OS/2 Warp 3.0** またはそれ以上

IBM SystemView Agent バージョン 1.4.2 またはそれ以上

**Windows NT 3.51 (サービス・パック 5)** またはそれ以上

WIN32 版 IBM SystemView Agent (バージョン 1.3.2)、Intel DMI Service Provider 2.0

**Windows 95**

WIN32 版 IBM SystemView Agent (バージョン 1.3.2)、Intel DMI Service Provider 2.0

**Windows 3.1**

Intel DMI SDK バージョン 2.0 またはそれ以上



## 管理アプリケーション

管理アプリケーションとは、DMI サービス・レイヤーとインターフェースをとって、DMI 構成要素の情報を収集して利用できる、DMI 準拠のシステム管理アプリケーションのことをいいます。

## DMI ブラウザーの使用

Netfinityの DMI ブラウザーを使用すると、次のことができます。

- インストールされている DMI 準拠製品の DMI 構成要素、グループ、および属性に関する情報の表示
- DMI サービス・レイヤーからの製品に関する問題またはエラーについての通知の受信
- DMI 構成要素に関連する問題またはエラーのログを表示する

DMI ブラウザーの機能は、メニュー・バーからメニュー項目を選択するか、ファースト・パス・アイコン・バーから、その機能に対応するオブジェクトを選択することによって、アクセスすることができます。

このメニュー・バーには、次の機能が示されます。

- オプション： イベント・ログの表示または DMI ブラウザー・サービスの終了
- 情報： サービス・レイヤーのバージョン情報と DMI ブラウザーの製品情報の表示



図 33. 「DMI ブラウザー」ウィンドウ

操作を効率的に行うには、マウスを使用して、「アイコン・バー」から必要なアイコンを選択します。または、メニュー項目を選択してから、プルダウン・メニューから選択することもできます。アイコンの意味が分からない場合は、マウス・ポインターをその上に移動します。そのアイコンの簡単な説明が、ウィンドウの一番下に表示されます。

## DMI 構成要素情報の表示

マウス・ボタン 1 を使用して、オープンしたい DMI 構成要素をダブルクリックします。「構成要素情報」ウィンドウがオープンします。

終了したら、「クローズ」を選択して、「構成要素情報」ウィンドウをクローズします。

## グループ情報の表示

各 DMI 構成要素のグループに関する情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 1 を使用して、表示したいグループ・データが入っている DMI 構成要素の左側にあるプラス符号 (+) をクリックします。
2. マウス・ボタン 1 を使用して、表示したいグループの名前をダブルクリックします。グループの属性のリストを示すウィンドウがオープンします。

## 属性情報の表示

あるグループのどれかの属性に関する情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 1 を使用して、表示したいグループ・データが入っている DMI 構成要素の左側にあるプラス符号 (+) をクリックします。
2. マウス・ボタン 1 を使用して、表示したいグループの名前をダブルクリックします。グループの属性のリストを示すウィンドウがオープンします。
3. マウス・ボタン 1 を使用して、表示したい属性の名前をダブルクリックします。「属性情報」ウィンドウがオープンします。

## 属性情報の変更

読書き または 書込み専用 のアクセス値を持つ属性は構成することができます。属性情報を変更するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 1 を使用して、変更したい特定の属性をダブルクリックします。「属性情報」ウィンドウがオープンします。
2. 新しい属性情報を入力します。すべての属性情報項目を変更することはできないことに注意してください。
3. 「適用」を選択して、属性情報を変更します。

変更を中断する場合は、「リセット」を選択して、属性情報を前回保管されていた値に復元します。

変更を保管しないでウィンドウをクローズする場合は、「取消」を選択します。

## 問題またはエラーの通知の受信

サービス・レイヤーは、必要に応じて問題やエラーの発生を管理アプリケーションに通知します。これらの問題およびエラーに関するメッセージは、イベントと呼ばれます。これらのイベントは、イベント・ログに保管されて、後で問題またはエラーを修正するために使用されます。

DMI ブラウザー・サービスは、DMI サービス・レイヤーから、DMI 構成要素イベントの通知を自動的に受信します。DMI ブラウザー・サービスがイベント・メッセージを受信すると、電話オブジェクトが、DMI ブラウザーのアイコン・バーに表示されます。この電話アイコンを選択 (または「オプション」プルダウン・メニューから「イベント・ログの表示」を選択) して「DMI ブラウザー・イベント・ログ」をオープンします。

## 第8章 ECC メモリー・セットアップ

Netfinity ECC メモリー・セットアップを使用すると、ECC メモリーを監視および管理することができます。ユーザーが選択できるオプションは次のとおりです。

- シングル・ビット・エラー修正
- シングル・ビット・エラー・カウント
- シングル・ビット・エラーしきい値マスク不能割り込み (NMI)

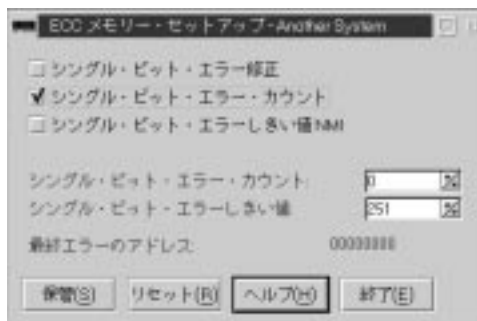


図 34. ECC メモリー・セットアップ

ECC メモリー・セットアップを構成するには、次のようにします。

### 1. ECC メモリー・セットアップで実行したいアクションを選択します。

- シングル・ビット・エラーが発生した場合、自動的にエラーを訂正するには、「シングル・ビット・エラー修正」オプションをアクティブにします。このオプションを選択すると、システムによってはパフォーマンスが若干低下することがありますが、データの保全性は大幅に向上します。詳細については、ご使用のシステムの説明書を参照してください。
- 発生したすべての ECC メモリー・エラーのカウントを実行させるには、「シングル・ビット・エラー・カウント」オプションをアクティブにします。
- シングル・ビット・エラーの数が、ユーザーが指定したしきい値を超えた場合にマスク不能割り込み (NMI) を発生させるには、「シングル・ビット・エラーしきい値 NMI」オプションをアクティブにします。

注: NMI が発生すると、システムが停止する可能性があります。

2. 必要に応じて、シングル・ビット・エラー・カウントを変更します。

「シングル・ビット・エラー・カウント」フィールドには、現行セッション中に ECC メモリー・セットアップによって検出されたシングル・ビット・エラーの数が表示されます。

注: ビット・エラー・カウントは、現行セッション<sup>だけ</sup>を対象としています。このカウントは、システムの再始動時に 0 にリセットされます。前セッションのカウントを繰り越したい場合は、構成画面から手動でエラー・カウントを入力する必要があります。

3. 「シングル・ビット・エラーしきい値 NMI」オプションを選択した場合は、シングル・ビット・エラーのしきい値を設定します。

「シングル・ビット・エラーしきい値」フィールドには、ECC メモリー・セットアップがマスク不能割り込み (NMI) を起動する (発生させる) までに許される、ユーザーが指定した ECC のシングル・ビット・エラーの数が表示されます。

注: NMI が発生するのは、「シングル・ビット・エラーしきい値 NMI」オプションをアクティブにした場合だけです。

4. 選択した内容に誤りがないことを確認した上で、「保管」を選択します。

5. ECC メモリー・セットアップの構成を完了し、「終了」を選択します。

## 第9章 イベント・スケジューラー

イベント・スケジューラーを使用して、多くのハードウェア・システム管理作業を簡単に自動化することができます。スケジュールされたイベントを作成したり、それらのイベントを複数のリモート・システムまたはシステム・グループ全体で自動的に実行したり、スケジュールされたイベントの結果の詳細なログを維持したりする場合は、イベント・スケジューラーを使用します。また、すでにスケジュールされたイベントを、必要に応じて編集または削除することもできます。

イベント・スケジューラーを使用することによって、1 つまたは複数の各システム、またはシステム・グループ全体で、次のいずれかを自動的に実行するようにスケジュールされたイベントを、作成することができます。

- システム情報ツールを使用して、指定したすべてのシステムからデータを収集した後で、次のことを行う。
  - 情報を履歴ファイルとして保管
  - 情報をプリンターで印刷するか、あるいはファイルに保管
  - データを Netfinity データベースにエクスポート
- ローカル・システムとリモート・システムの間でファイルおよびディレクトリーを転送したり、ファイルをローカルまたはリモートで削除したりする。
- リモート・システムでコマンドを実行する。
- リモート・システムのシステム区画にアクセスし、管理する。
- ソフトウェア・インベントリー・サービスを使用して、指定したすべてのシステムからデータを収集した後、次のことを行う。
  - 収集した情報をファイルに保管する。
  - 収集した情報を Netfinity データベースにエクスポートする
- システム・モニターのデータを Netfinity データベースにエクスポートする。
- SCF ファイル (サービス構成マネージャーを使用して作成する) を使用して、リモート・システム上に Netfinity サービスを構成する。
- リモート RAID システム上の RAID ドライブを同期 (修正) する。
- リモート・システムの再始動、シャットダウン、または電源遮断を行う。
- 複数のリモート・システムに対して Netfinity コマンド・ライン・インターフェースを使用する。

- キャパシティ管理レポートを自動的に生成する。

「スケジュールされたイベント」を構成して、完全に自動化されたシステム管理機能(簡略化されたハードウェア目録管理など)を、指定された時間間隔(毎時、毎日、毎週、毎月、または毎年)で繰り返し実行したり、特定の状況で1回だけ実行したり(データの収集と配布、システム区画の更新などの場合)することができます。さらに、イベント・スケジューラーはすべての「スケジュールされたイベント」の結果の詳細なログを維持するため、ユーザーは、自動化された作業が正しく実行されているかどうかを確認することができます。



図 35. 「スケジューラー・サービス」ウィンドウ

イベント・スケジューラーを使用して、次のどれかのアクションを実行します。

- 新規イベントをスケジュールする。
- 作成済みの「スケジュールされたイベント」を削除する。
- 作成済みの「スケジュールされたイベント」を表示する。
- 作成済みの「スケジュールされたイベント」を編集する。
- 「スケジュールされたイベント」リストを最新表示する。
- スケジューラー・ログを表示する。
- 現在構成されている「スケジュールされたイベント」の状況をチェックする。



イベント・スケジューラーのオンライン・ヘルプにアクセスする場合は、「ヘルプ」を選択します。

「スケジューラー・サービス」ウィンドウをクローズして Netfinityサービス・マネージャーに戻るには、「スケジューラー・サービス」ウィンドウから「終了」を選択します。

## 新規イベントのスケジュール

新規イベントをスケジュールするには、次のようにします。

1. 「新規」を選択して、「新しいイベントのスケジュール」ウィンドウをオープンします (図36 を参照 )。

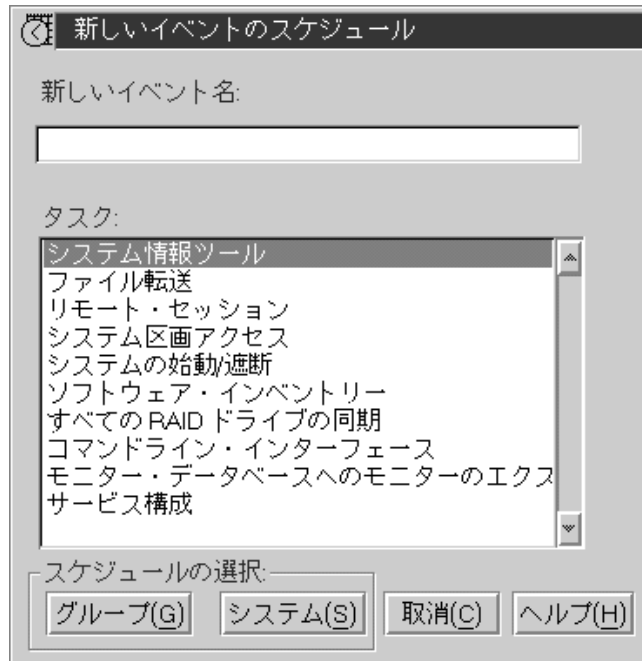


図 36. 「新しいイベントのスケジュール」ウィンドウ

2. スケジュールするイベントの名前を「新しいイベント名」フィールドに入力します。
3. 「スケジュールされたイベント」が実行するアクションを「タスク」選択リストから選択します。使用可能なタスクは次のとおりです。

- ファイル転送

ローカル・システムとリモート・システムの間でファイルやディレクトリーを自動的に転送したり、ローカルまたはリモートでファイルを自動的に削除したりするには、「ファイル転送」を選択します。

- リモート・セッション

選択したすべてのシステムでコマンドを自動的に実行するには、「リモート・セッション」を選択します。

- システム情報ツール

選択したリモート・システムからハードウェアおよび構成に関するデータを収集するには、「システム情報ツール」を選択します。データは履歴ファイルとして保管する、プリンターで印刷する、ファイルに保管する、Netfinity データベースにエクスポートする、または、データベース・ファイルとして保管することができます。

- システム区画アクセス

選択したすべてのシステムのシステム区画を自動的に管理するには、「システム区画アクセス」を選択します。

- ソフトウェア・インベントリー

選択したリモート・システムにインストールされているソフトウェアに関するデータを収集するには、「ソフトウェア・インベントリー」を選択します。このデータを使用すると、ネットワーク上のシステムにインストールされているソフトウェアの要約を作成したり、選択した各リモート・システムにどのソフトウェアがインストールされているかを示す詳しい報告書を作成したりすることができます。また、ソフトウェア・インベントリーが収集したすべてのデータを、Netfinity データベースに自動的にエクスポートすることができます。

- モニター・データベースへのモニターのエクスポート

システム・モニターによって収集したデータを Netfinity データベースにエクスポートする場合は、「モニター・データベースへのモニターのエクスポート」を選択します。

- すべての RAID ドライブの同期

すべての RAID システム上の RAID ドライブを自動的に同期する場合は、「すべての RAID ドライブの同期」を選択します。

- システムの始動 / 遮断

リモート・システムの再始動、遮断、または電源遮断を行うには、「システムの始動 / 遮断」を選択します。

注: これらの機能の一部は、これらの機能をサポートするハードウェアまたはオペレーティング・システムをもつシステムだけで作動します。

- サービス構成

SCF ファイル (サービス構成マネージャーを用いて作成) を使用して、リモート・システム上の指定された Netfinity サービスの構成の更新または置き換えを行う場合は、「サービス構成」を選択します。SCF ファイルおよびサービス構成マネージャーについては、309ページの第21章、『サービス構成マネージャー』を参照してください。

- コマンドライン・インターフェース

Netfinity コマンドライン・インターフェースを使用して、1 つまたは複数のシステム上でシステム管理タスクを実行する場合は、「コマンドライン・インターフェース」を選択します。Netfinity コマンドライン・インターフェースについては、Netfinity マネージャー コマンドライン・インターフェース・リファレンスを参照してください。

4. 「グループ」または「システム」を選択します。

- 選択された作業をシステム・グループ全体で実行するには、「グループ」を選択します。
- 選択された作業を各システムで実行するには、「システム」を選択します。

これらのボタンのどちらかを選択すると、「グループまたはシステムのスケジュール」ウィンドウがオープンします (図37 を参照 )。



図 37. 「グループまたはシステムのスケジュール」ウィンドウ

5. 「スケジュールされたイベント」を実行するシステム・グループまたはシステムを、該当するフィールドから選択します。次に、「スケジュール」を選択してこの情報を保管し、タスク固有のウィンドウをオープンします。

「スケジュール」を選択したときにオープンするタスク固有ウィンドウは、ステップ 3 (134ページ) で選択したタスクによって異なります。それぞれのタスク固有ウィンドウについては、この節の終わりで詳しく説明します。

- 「ファイル転送」タスク固有ウィンドウの説明については、140ページの『「ファイル転送」タスク固有ウィンドウ』を参照してください。
- 「リモート・セッション」タスク固有ウィンドウの説明については、142ページの『「リモート・セッション」タスク固有ウィンドウ』を参照してください。
- 「システム情報ツール」タスク固有ウィンドウの説明については、143ページの『「システム情報ツール」タスク固有ウィンドウ』を参照してください。
- 「システム区画」作業固有ウィンドウの説明については、149ページの『「システム区画アクセス」タスク固有ウィンドウ』を参照してください。
- 「ソフトウェア・インベントリー」作業固有ウィンドウの説明については、155ページの『「ソフトウェア・インベントリー」タスク固有ウィンドウ』を参照してください。
- 「モニター・データベースへのモニターのエクスポート」タスク固有ウィンドウの説明については、161ページの『「モニター・データベースへのモニターのエクスポート」タスク固有ウィンドウ』を参照してください。
- 「システムの始動 / 遮断」タスク固有ウィンドウの説明については、163ページの『「システムの始動 / 遮断」タスク固有ウィンドウ』を参照してください。
- 「サービスの構成」タスク固有ウィンドウの説明については、164ページの『「サービス構成」タスク固有ウィンドウ』を参照してください。

- 「コマンドライン・インターフェース」タスク固有ウィンドウの説明については、165ページの『「コマンドライン・インターフェース」タスク固有ウィンドウ』を参照してください。
- 「キャパシティー管理」タスク固有ウィンドウの説明については、166ページの『「キャパシティー管理」タスク固有ウィンドウ』を参照してください。

「すべての RAID ドライブの同期」タスクに関するタスク固有ウィンドウはありません。

6. 「スケジュールされたイベント」を実行する特定のタスクに必要な情報を入力します。「保管」を選択してこの情報を保管し、タスク固有ウィンドウをクローズして、「時刻および日付のスケジュール」ウィンドウをオープンします(図38を参照)。



図 38. 「時刻および日付のスケジュール」ウィンドウ

7. 「スケジュール頻度」ボタンと「日付および時刻のスケジュール」フィールド・グループを使用して、「スケジュールされたイベント」に関する時間間隔と日付および時刻の設定値を構成します。

「スケジュール頻度」ボタン・グループには6つのラジオ・ボタンがあります。各ラジオ・ボタンによって、「スケジュールされたイベント」を実行する時間間隔が決定されます。選択可能な値は、次のとおりです。

- 1回
- 毎時
- 毎日
- 毎週
- 毎月
- 毎年

注: ユーザーがボタンを選択すると、その時間間隔を正しく構成するために必要なフィールドだけがアクティブになります。

「日付および時刻のスケジュール」フィールド・グループには、日付と時刻の情報を設定するためのフィールドがあります。選択された「スケジュール頻度」とこれらのフィールドを組み合わせると、「スケジュールされたイベント」を実行する日付と時刻が決まります。アクティブになるフィールドは、選択した「スケジュール頻度」によって異なります。各フィールドでは、アスタリスク(\*)で示されるワイルドカード値を使用することができます。この値を選択すると、現在の日付と時刻に基づいて「日付および時刻のスケジュール」が作成されます。

注: 「日付および時刻のスケジュール」の値を変更すると、「次回」値もそれに応じて変化します。

8. 「保管」を選択して、「スケジュールされたイベント」を保管し、「スケジューラー・サービス」ウィンドウに戻ります。構成が終わったら「スケジュールされたイベント」の名前が「スケジュールされたイベント」リストに表示されていることを確認してください。

## 「ファイル転送」タスク固有ウィンドウ

ローカル管理システムと選択したすべてのリモート・システムとの間で、各ファイル、各ディレクトリー、またはディレクトリー・ツリー全体を転送するように「スケジュールされたイベント」を構成するには、このタスク固有ウィンドウを使用します。また、このウィンドウを使用して、特定のローカルまたはリモート・ファイルを削除するように「スケジュールされたイベント」を構成することもできます。

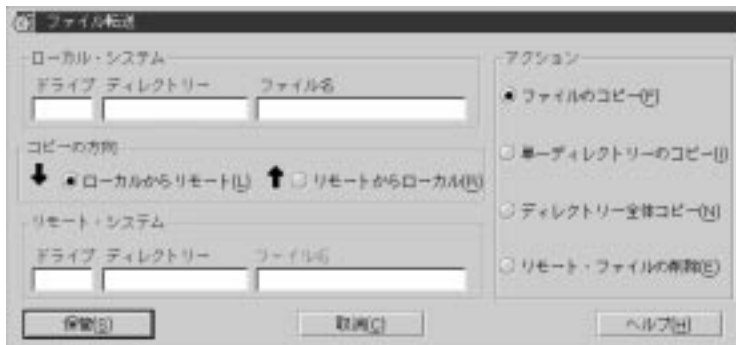


図 39. 「ファイル転送」タスク固有ウィンドウ

### 重要:

DOS では、63 文字を超えるパス名はサポートされません。Netfinity マネージャー (Windows 版) または Netfinity マネージャー クライアント・サービス (Windows 版) を実行しているシステムに、ネストしたディレクトリーを転送する場合は、パス名全体の合計長が 63 文字を超えないように注意してください。パス名の合計長が 63 文字を超えると、ネストしたサブディレクトリーの一部、およびそれに含まれるファイルが失われます。

「ファイル転送」の「スケジュールされたイベント」を構成するには、次のようになります。

1. 「アクション」を選択します。

「ファイル転送」タスク固有ウィンドウでアクティブになるフィールドは、選択した「アクション」ボタンによって異なります。使用可能なアクションは、次のとおりです。



- ファイルのコピー

ローカル・システムとの間で特定のファイルを自動的に転送するように「スケジュールされたイベント」を作成するには、「ファイルのコピー」を選択します。

- 単一ディレクトリーのコピー

ローカル・システムとの間で特定のディレクトリーを自動的に転送するように「スケジュールされたイベント」を作成するには、「単一ディレクトリーのコピー」を選択します。

- ディレクトリー全体コピー

ローカル・システムとの間で特定のディレクトリーとそのすべてのサブディレクトリーを自動的に転送するように「スケジュールされたイベント」を作成するには、「ディレクトリー全体コピー」を選択します。

- リモート・ファイルの削除

特定のファイルをリモート・システムから自動的に削除するように「スケジュールされたイベント」を作成するには、「リモート・ファイルの削除」を選択します。

注: ユーザーがボタンを選択すると、その「スケジュールされたイベント」を正しく構成するために必要なフィールドとボタンだけがアクティブになります。

2. 「コピーの方向」を選択します。

ファイルまたはディレクトリーの転送を行う場合は、「コピーの方向」(「ローカルからリモート」または「リモートからローカル」)を選択します。ファイルの削除を行う場合には、「コピーの方向」を選択する必要はありません。

3. ローカル・システムとリモート・システムの情報を入力します。

ファイルの転送元およびファイルの転送先に関する情報を入力します。ファイルを削除する場合に入力する必要があるのは、削除するファイルの存在場所に関する情報だけです。

4. タスク固有情報を保管します。

「保管」を選択してこの情報を保管し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

## 「リモート・セッション」タスク固有ウィンドウ

1つまたは複数のリモート・システムで特定のコマンドを自動的に実行するように「スケジュールされたイベント」を作成するには、このタスク固有ウィンドウを使用します。



図 40. 「リモート・セッション」タスク固有ウィンドウ

「リモート・セッション」の「スケジュールされたイベント」を構成するには次のようになります。

1. 選択したシステムで実行するコマンドを「ファイル名またはコマンドを入力してください」フィールドに、入力します。
2. 「保管」を選択してタスク固有の情報を保管し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

## 「システム情報ツール」タスク固有ウィンドウ

1 つまたは複数のリモート・システムからシステムのハードウェア情報を収集するように「スケジュールされたイベント」を作成するには、このタスク固有ウィンドウを使用します。収集された情報は、後で表示するために履歴ファイルとして保管、プリンターでの印刷、ファイルへの保管、およびデータベースへのエクスポートを行うことができます。

このウィンドウを使用して、選択した各システムに関して次のいずれかを実行することができます。

- 履歴ファイルの作成
- 出力の印刷またはファイルへの保管
- 出力をデータベースに送信

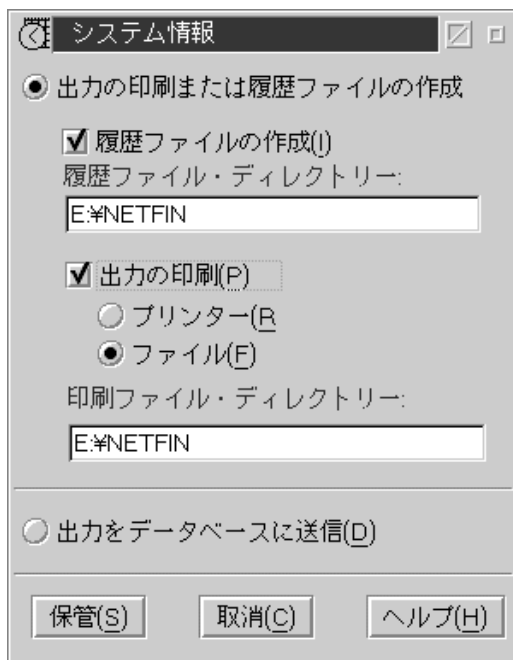


図 41. 「システム情報ツール」タスク固有ウィンドウ

## 履歴ファイルの作成

イベントを実行する各システムに関する履歴ファイルを作成するように「システム情報」の「スケジュールされたイベント」を構成するには、次のようにします。

1. 「出力の印刷または履歴ファイルの作成」を選択します。
2. 「履歴ファイルの作成」を選択します。
3. 「履歴ファイル・ディレクトリー」フィールドに、生成された履歴ファイルを保管するローカル・ディレクトリーの完全パスを入力します。
4. 「保管」を選択して、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

注： 情報の収集元となる各システムの履歴ファイルは、システムごとに異なるファイル名が作成されます。このファイル名を作成するために、システムの「システム名」の最初の 4 文字が取られ、次に「システム名」全体にアルゴリズムを適用して 4 桁の英数字文字列が作成されます。これらの 2 つの部分が結合して、ファイル名が生成されます。

たとえば、USER1 というシステムに関して「履歴ファイルの作成」の「スケジュールされたイベント」によって作成される履歴ファイルは、常に USER11BN.HST という名前になります。これによって、類似した名前のシステムについて同一名の履歴ファイルが作成されることがなくなり、また、「スケジュールされたイベント」を実行するたびに、各システムで同じファイル名が作成されます。

## 出力の印刷またはファイルへの保管

イベントが実行される各システムについての出力を印刷するように、「システム情報」の「スケジュールされたイベント」を構成するには、次のようにします。

1. 「出力の印刷または履歴ファイルの作成」を選択します。
2. 「出力の印刷」を選択します。
3. 出力装置を選択します。
  - 収集したデータを LPT1 に接続されたプリンターで印刷する場合は、「プリンター」を選択します。
  - 収集したデータを印刷可能ファイルに保管する場合は、「ファイル」を選択します。

「ファイル」を選択した場合は、作成された印刷ファイルを保管するディレクトリーの完全パスを「印刷ファイル・ディレクトリー」フィールドに入力します。
4. 「保管」を選択して、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

注: 情報の収集元となる各システムの印刷ファイルは、システムごとに異なるファイル名が作成されます。このファイル名を作成するために、システムの「システム名」の最初の 4 文字が取られ、次に「システム名」全体にアルゴリズムを適用して 4 桁の英数字文字列が作成されます。これらの 2 つの部分が結合して、ファイル名が生成されます。

たとえば、USER1 というシステムに関して、「出力のファイルへの印刷」の「スケジュールされたイベント」によって作成される印刷ファイルは、常に USER11BN.RPT という名前になります。これによって、類似した名前のシステムについて同一名の印刷ファイルが作成されることがなくなり、また、「スケジュールされたイベント」を実行するたびに、各システムで同じファイル名が作成されます。

## データベースへの出力の送信

イベントが実行される各システムからデータベースに出力を送信するように「システム情報」の「スケジュールされたイベント」を構成するには、次のようにします。

1. 「出力をデータベースに送信」を選択します。
2. 「保管」を選択してこの情報を保管し、「データベース選択」ウィンドウをオープンします (図42 を参照)。

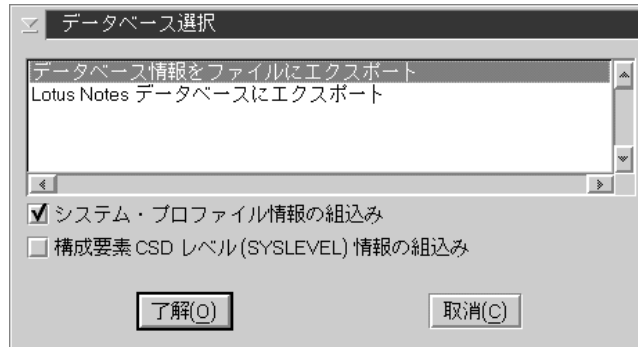


図 42. 「データベースの選択」ウィンドウ

3. 「データベース選択」フィールドからデータベース・エクスポート機能を選択します。

データは、ファイル、またはサポートされているデータベース形式にエクスポートすることができます。

- システム情報をファイルにエクスポートする場合は、「データベース情報をファイルにエクスポート」を選択します。
- システム情報をサポートされているデータベースにエクスポートする場合は、管理用システムが接続されているデータベース・サーバーのエクスポート機能を選択します。管理用システムに複数のデータベース・サーバーが接続されている場合、「データベース選択」フィールドには各タイプについてのエントリが表示されます。たとえば、Lotus Notes データベース・サーバーと DB2 データベース・サーバーの両方を使用するように構成されている場合は、「データベース選択」フィールドには「**Lotus Notes** データベースにエクスポート」および「**DB2** データベースにエクスポート」という 2 つのデータベースへのエクスポート選択項目が含まれます。

注: 管理用システムがデータベース・システムにアクセスできない場合、またはデータベース・システムを使用するように構成されていない場合は、このオプションは表示されません。詳細については、*Netfinity マネージャー クイックガイド* の“Netfinity データベース・サポート”を参照してください。

システム情報ツールで「システム・プロファイル」ノートブックから情報を収集し、その情報をデータ・セットに含めたい場合は、「システム・プロファイル情報の組み込み」チェック・ボックスを選択します。

4. 「了解」を選択して、この情報を保管します。

- 「データベース情報をファイルにエクスポート」を選択した場合は、「ファイルにエクスポート」ウィンドウが表示されます (図43を参照)。



図 43. 「ファイルにエクスポート」ウィンドウ

すべてのファイル固有情報を入力してから「了解」を選択し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

- 「システム情報をデータベースにエクスポート」を選択した場合は、「サーバー選択」ウィンドウが表示されます。



図 44. 「サーバー選択」ウィンドウ

データのエクスポート先データベースを「サーバー選択」ウィンドウから選択した後で、「了解」を選択し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。



## 「システム区画アクセス」タスク固有ウィンドウ

選択されたすべてのシステムのシステム区画にある特定のファイルおよびディレクトリーを自動的に更新、バックアップ、または削除するように「スケジュールされたイベント」を構成する場合は、このタスク固有ウィンドウを使用します。

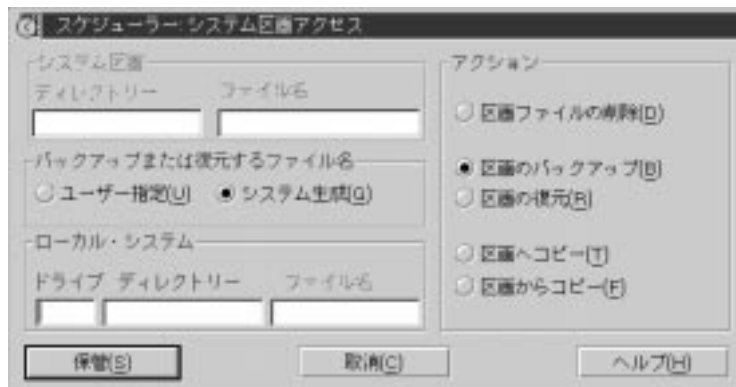


図 45. 「システム区画アクセス」タスク固有ウィンドウ

次のいずれかを実行する「スケジュールされたイベント」を構成することができます。

- 区画ファイルの削除

選択した各リモート・システムのシステム区画から特定のファイルを消去する場合は、「区画ファイルの削除」を選択します。

- 区画のバックアップ

選択した各リモート・システムのシステム区画のバックアップ・イメージを作成する場合は、「区画のバックアップ」を選択します。

- 区画の復元

選択した各リモート・システムのシステム区画を復元する場合は、「区画の復元」を選択します。バックアップ・イメージは、ローカル・システムにあるイメージから復元します。

- 区画へコピー

選択したすべてのリモート・システムのシステム区画に、ローカル・システムから特定のファイルをコピーする場合は、「区画へコピー」を選択します。

- 区画からコピー

選択したすべてのリモート・システムのシステム区画から特定のファイルをコピーする場合は、「区画からコピー」を選択します。ファイルは、ローカル・システムのドライブおよびディレクトリーにコピーされます。

## 区画ファイルの削除

選択した各リモート・システムのシステム区画から特定のファイルを消去する場合は、「区画ファイルの削除」を選択します。

「区画ファイルの削除」アクションを構成するには、次のようにします。

1. 「区画ファイルの削除」ラジオ・ボタンを選択します。
2. 削除するファイルが入っているシステム区画ディレクトリーがある場合は、そのディレクトリーの名前をシステム区画の「ディレクトリー」フィールドに入力します。
3. 「スケジュールされたイベント」によって削除されるシステム区画ファイルの名前を、システム区画の「ファイル名」フィールドに入力します。
4. 「保管」を選択してこの情報を保管し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

## システム区画のバックアップ

選択した各リモート・システムのシステム区画のバックアップ・イメージを作成する場合は、「区画のバックアップ」を選択します。

「区画のバックアップ」アクションを構成するには、次のようにします。

1. 「区画のバックアップ」ラジオ・ボタンを選択します。
2. 「バックアップまたは復元するファイル名」オプションを選択します。  
「バックアップまたは復元するファイル名」オプションは、次の 2 つから選択できます。
  - ユーザー指定
  - システム生成
3. バックアップ・イメージ・ファイルを保管するために使用するローカル・システムのディスク・ドライブのドライブ名を、ローカル・システムの「ドライブ」フィールドに入力します。

4. バックアップ・イメージを保管するために使用するローカル・システムのディレクトリーの名前を、ローカル・システムの「ディレクトリー」フィールドに入力します。
5. 「ユーザー指定」を選択した場合は、バックアップ・イメージ・ファイルに割り当てる名前をローカル・システムの「ファイル名」フィールドに入力します。

注: 「システム生成」を選択した場合は、「システム区画アクセス」タスクによって、「スケジュールされたイベント」を実行するシステムごとに異なるファイル名が生成されます。このファイル名を生成するために、リモート・システムの「システム名」の最初の 4 文字が取られ、次に「システム名」全体にアルゴリズムを適用して 4 桁の英数字文字列が生成されます。これらの 2 つの部分が結合して、そのイメージのファイル名が生成されます。

たとえば、USER1 というシステムに関して、「区画のバックアップ」の「スケジュールされたイベント」が「システム生成」ファイル名オプションで生成するシステム区画バックアップ・イメージ・ファイルは、常に USER11BN.IMG という名前になります。これによって、類似した名前のシステムについて同一名の区画バックアップ・イメージ・ファイルが生成されることがなくなり、また、「スケジュールされたイベント」を実行するたびに、各システムで同じファイル名が生成 (あるいは、同じイメージが復元) されます。

6. 「保管」を選択してこの情報を保管し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

## システム区画の復元

選択した各リモート・システムのシステム区画を復元する場合は、「区画の復元」を選択します。バックアップ・イメージは、ローカル・システムにある指定されたイメージから復元されます。

「区画の復元」アクションを構成するには、次のようにします。

1. 「区画の復元」ラジオ・ボタンを選択します。
2. 「バックアップまたは復元するファイル名」オプションを選択します。

「バックアップまたは復元するファイル名」オプションは、次の 2 つから選択できます。

- ユーザー指定
- システム生成

3. システム区画を復元するために使用するイメージ・ファイルを含むローカル・システムのディスク・ドライブのドライブ名を、ローカル・システムの「ドライブ」フィールドに入力します。
4. システム区画を復元するために使用するイメージ・ファイルを含むローカル・システムのディレクトリーの名前を、ローカル・システムの「ディレクトリー」フィールドに入力します。
5. 「ユーザー指定」を選択した場合は、システム区画の復元に使用するバックアップ・イメージ・ファイルの名前を、ローカル・システムの「ファイル名」に入力します。

注: 「システム生成」を選択した場合は、「システム区画アクセス」タスクによって、「スケジュールされたイベント」を実行するシステムごとに異なるファイル名が生成されます。このファイル名を生成するために、リモート・システムの「システム名」の最初の 4 文字が取られ、次に「システム名」全体にアルゴリズムを適用して 4 桁の英数字文字列が生成されます。これらの 2 つの部分が結合して、そのイメージのファイル名が生成されます。

たとえば、USER1 というシステムに関して、「区画のバックアップ」の「スケジュールされたイベント」が「システム生成」ファイル名オプションで生成するシステム区画バックアップ・イメージ・ファイルは、常に USER11BN.IMG という名前になります。これによって、類似した名前のシステムについて同一名の区画バックアップ・イメージ・ファイルが生成されることがなくなり、また、「スケジュールされたイベント」を実行するたびに、各システムで同じファイル名が生成 (あるいは、同じイメージが復元) されます。

バックアップまたは復元ファイル名の「システム生成」オプションを使用してシステム区画イメージを生成する場合は、これらのシステム区画を復元するときに「システム生成」を選択する必要があります。

6. 「保管」を選択してこの情報を保管し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

## 区画へのファイルのコピー

選択したすべてのリモート・システムのシステム区画に、ローカル・システムから特定のファイルをコピーする場合は、「区画へコピー」を選択します。

「区画へコピー」アクションを構成するには、次のようにします。

1. 「区画へコピー」ラジオ・ボタンを選択します。
2. システム区画にコピーするファイルを含むローカル・システムのディスク・ドライブのドライブ名を、ローカル・システムの「ドライブ」フィールドに入力します。
3. システム区画にコピーするイメージ・ファイルを含むローカル・システムのディレクトリーの名前を、ローカル・システムの「ディレクトリー」フィールドに入力します。
4. システム区画にコピーするファイルの名前を、ローカル・システムの「ファイル名」フィールドに入力します。
5. 「保管」を選択してこの情報を保管し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

## 区画からのファイルのコピー

選択したすべてのリモート・システムのシステム区画から、ローカル・システム上の指定されたドライブおよびディレクトリーに特定のファイルをコピーする場合は、「区画からコピー」を選択します。

「区画からコピー」アクションを構成するには、次のようにします。

1. 「区画からコピー」ラジオ・ボタンを選択します。
2. ローカル・システムにコピーするファイルを含むシステム区画ディレクトリーがある場合は、このディレクトリーの名前をシステム区画の「ディレクトリー」フィールドに入力します。
3. ローカル・システムにコピーするシステム区画ファイルの名前を、システム区画の「ファイル名」フィールドに入力します。
4. システム区画ファイルを保管するために使用するローカル・システムのディスク・ドライブのドライブ名を、ローカル・システムの「ドライブ」フィールドに入力します。
5. システム区画ファイルを保管するために使用するローカル・システムのディレクトリーの名前を、ローカル・システムの「ディレクトリー」フィールドに入力します。
6. 「保管」を選択してこの情報を保管し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

## 「ソフトウェア・インベントリ」タスク固有ウィンドウ

1 つまたは複数のリモート・システムにインストールされているソフトウェアに関するデータを収集するように、「スケジュールされたイベント」を作成するには、このタスク固有ウィンドウを使用します。収集された情報は、データベースにエクスポートする、データベース・ファイルに保管する、または各種の報告書を生成するために使用したりすることができます。

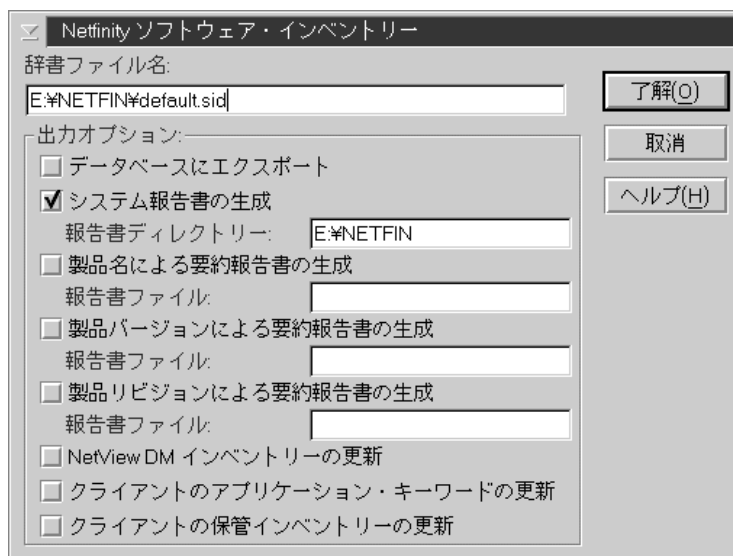


図 46. 「ソフトウェア・インベントリ」タスク固有ウィンドウ

「ソフトウェア・インベントリ」の「スケジュールされたイベント」の構成を続けるには、次のようにします。

1. 各リモート・システム上のソフトウェア製品の存在を判別するために使用するソフトウェア・インベントリ辞書ファイルの名前を、「辞書ファイル名」フィールドに入力します。

2. 1 つまたは複数の出力オプションを選択します。

最大 8 つの出力オプションが選択できます。

- データベースにエクスポート

ソフトウェア・インベントリーのデータをデータベースまたはデータベース・ファイルにエクスポートするには、次のようにします。

a. 「データベースにエクスポート」を選択し、「了解」を選択します。

注: その他の出力オプションを選択することもできます。 次の手順は、「了解」を選択して「Netfinity ソフトウェア・インベントリー」タスク固有ウィンドウをクローズした後に実行します。

b. 「データベース選択」フィールドから、実行したいデータベース・データ・エクスポートのタイプを選択します。

データは、ファイル、またはサポートされているデータベース形式にエクスポートすることができます。

– 情報をファイルにエクスポート後、そのファイルを使用して既存の Netfinity データベースにソフトウェア・インベントリー・データを付加する場合は、次のようにします。

- 1) 「データベース情報をファイルにエクスポート」を選択します。
- 2) 「了解」を選択して「ファイルにエクスポート」ウィンドウをオープンします。
- 3) ファイルを保管するドライブとディレクトリーを選択し、作成するファイルの名前を「保管ファイル名」フィールドに入力します。



– システム情報をデータベースにエクスポートする場合は、次のようにします。

- 1) 管理用システムが接続されているデータベース・サーバーのエクスポート機能を選択します。

管理用システムに複数のデータベース・サーバーが接続されている場合、「データベース選択」フィールドには各タイプについてのエントリーが表示されます。たとえば、Lotus Notes データベース・サーバーと DB2 データベース・サーバーの両方を使用するように構成されている場合は、「データベース選択」フィールドには「**Lotus Notes** データベースにエクスポート」および「**DB2** データベースにエクスポート」という 2 つのデータベースへのエクスポート選択項目が含まれます。

- 2) 「了解」を選択して「データベース選択」ウィンドウをオープンします。
- 3) ソフトウェア・インベントリー・データをエクスポートするデータベースを選択します。

注: 管理用システムがデータベース・システムにアクセスできない場合、またはデータベース・システムを使用するように構成されていない場合は、この機能は使用できません。詳細については、*Netfinity* マネージャー クイックガイドの“Netfinity データベース・サポート”を参照してください。

「情報をデータベースにエクスポート」を選択した場合は、次のようにします。

- 1) 「了解」を選択して「データベース選択」ウィンドウをオープンします。
- 2) ソフトウェア・インベントリー・データのエクスポート先となるデータベースを選択します。

c. 「了解」を選択してこの情報を保管し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

- システム報告書の生成

各リモート・システムで検出されたすべてのソフトウェア製品の報告書を生成するには、このオプションを選択します。この報告書は、ローカル・システム上の指定されたディレクトリーに保管されます。

各システムのソフトウェア・インベントリー報告書を生成するには、次のようにします。

- a. 「システム報告書の生成」を選択します。
- b. 「報告書ディレクトリー」フィールドに、システム報告書の保管先となる管理システム上のディレクトリーの全パスを入力します。

注： 情報を収集する各システムの報告書は、それぞれ異なる名前となります。このファイル名を作成するために、システムの「システム名」の最初の 4 文字が取られ、次に「システム名」全体にアルゴリズムを適用して 4 桁の英数字文字列が作成されます。これらの 2 つの部分が結合して、ファイル名が生成されます。

たとえば、「システム報告書の作成」の「スケジュールされたイベント」によって、USER1 という名前のシステムに関して生成された報告書ファイルは、常に USER11BN.RPT という名前になります。これによって、類似した名前のシステムについて同一名の報告書が生成されることがなくなり、また、「スケジュールされたイベント」を実行するたびに、各システムで同じ報告書名が生成されるようになります。

- 製品名による要約報告書の生成

選択したすべてのリモート・システム上にあるすべてのソフトウェア製品の要約を含む報告書を生成するには、「製品名による要約報告書の生成」を選択します。この報告書には、ソフトウェア・インベントリーによって検出されたそれぞれ異なる製品名すべてに関する情報が示されます。

製品名による要約報告書を生成するには、次のようにします。

- a. 「製品名による要約報告書の生成」を選択します。
- b. 「報告書ファイル」フィールドに、生成される報告書ファイルの名前を入力します。

- 製品バージョンによる要約報告書の生成

選択したすべてのリモート・システム上にある すべてのソフトウェア製品の要約を含む報告書を生成するには、「製品バージョンによる要約報告書の生成」を選択します。この報告書には、ソフトウェア・インベントリーによって検出されたそれぞれ異なる製品名の製品バージョンすべてに関する情報が示されます。

製品バージョンによる要約報告書を生成するには、次のようにします。

- a. 「製品バージョンによる要約報告書の生成」を選択します。
- b. 「報告書ファイル」フィールドに、生成される報告書ファイルの名前を入力します。

- 製品リビジョンによる要約報告書の生成

指定したすべてのリモート・システム上にある すべてのソフトウェア製品の要約を含む報告書を生成するには、「製品リビジョンによる要約報告書の生成」を選択します。この報告書には、ソフトウェア・インベントリーによって検出されたそれぞれ異なる製品名の各製品バージョンのリビジョンすべてに関する情報が示されます。

製品リビジョンによる要約報告書を生成するには、次のようにします。

- a. 「製品リビジョンによる要約報告書の生成」を選択します。
- b. 「報告書ファイル」フィールドに、生成される報告書ファイルの名前を入力します。

- NetView DM インベントリーの更新

NetView DM を実行している選択したすべてのリモート・システムの NetView DM インベントリー・ファイルを更新するには、「**NetView DM インベントリーの更新**」を選択します。リモート・システムが NetView DM を実行している場合、ソフトウェア・インベントリーは現在ロードされている辞書ファイルから NetView DM 変更オブジェクトを含む製品定義を走査し、それらを NetView DM ソフトウェア・インベントリー・インポート・ファイル (FNDSWINV) に追加します。位置トークン情報は、NetView DM エージェント・ソフトウェア・ベース・パス上の FNDTKINV と呼ばれるファイルに書き込まれます。

これによって、ユーザー作成の exit ルーチンは、適切な NetView DM INV コマンドと NetView DM UPDTG コマンドを呼び出し、インポート・ファイル内のデータを、ワークステーションの NetView DM ソフトウェア変更活動記録データベースに移動することができるようになります。

- クライアントのアプリケーション・キーワードの更新

リモート・クライアントが使用するアプリケーション・キーワード・リストを更新するには、「**クライアントのアプリケーション・キーワードの更新**」を選択します。

- クライアントの保管インベントリーの更新

リモート・クライアント上で保管されている (SNMP または DMI を使用する製品など他の管理用製品で使用するための) インベントリー・リストを更新するには、「**クライアントの保管インベントリーの更新**」を選択します。

3. 「了解」を選択してこの情報を保管し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

## 「モニター・データベースへのモニターのエクスポート」タスク固有ウィンドウ

1 つまたは複数のリモート・システムから指定した期間にシステム・モニター・データを収集するように「スケジュールされたイベント」を作成するには、このタスク固有ウィンドウを使用します。収集された情報は、データベースにエクスポートしたり、データベース・ファイルに保管するために使用することができます。

「モニター・データベースへのモニターのエクスポート」の「スケジュールされたイベント」を構成するには、次のようにします。

1. 「モニター」リストから、記録したデータをデータベースにエクスポートするモニターの名前を選択します。
2. 「エクスポートの時間枠」フィールドのスピン・ボタンを使用して、データベースにエクスポートする記録済みデータの時間、日、または週の数を選択します。
3. 「了解」を選択してこの情報を保管し、「データベース選択」ウィンドウをオープンします。
4. 「データベース選択」ウィンドウから、実行するデータベース・データ・エクスポートのタイプを選択します。

この「スケジュールされたイベント」を使用して、収集されたデータを次の方法で処理することができます。

- データベース情報をファイルにエクスポート

情報をファイルにエクスポートし、後でそのファイルを使用して既存の Netfinity データベースにシステム・モニター・データを付加する場合は、このオプションを選択します。

「データベース情報をファイルにエクスポート」を選択した場合は、次のようにします。

- a. 「了解」を選択して「ファイルにエクスポート」ウィンドウをオープンします。
- b. ファイルを保管するドライブとディレクトリーを選択し、作成するファイルの名前を「保管ファイル名」フィールドに入力します。

- 情報をデータベースにエクスポート

管理用システムがアクセスできる Netfinity データベース・システムに情報を直接エクスポートする場合は、このオプションを選択します。

注: 管理用システムがサポートしているデータベース・システムにアクセスできない場合、またはサポートしているデータベース・システムを使用するように構成されていない場合は、このオプションは表示されません。詳細については、*Netfinity マネージャー クイックガイド* の「Netfinity データベース・サポート」を参照してください。

「情報をデータベースにエクスポート」を選択した場合は、次のようにします。

- a. 「了解」を選択して「データベース選択」ウィンドウをオープンします。
- b. システム・モニターのデータをエクスポートするデータベースを選択します。

- Lotus Notes データベースに情報をエクスポート

Netfinity の Lotus Notes データベース・システムに情報を直接エクスポートする場合は、このオプションを選択します。

注: 管理用システムが Lotus Notes にアクセスできない場合、または Lotus Notes を使用するように構成されていない場合は、このオプションは表示されません。

「Lotus Notes データベースに情報をエクスポート」を選択した場合は、次のようにします。

- a. 「了解」を選択して「サーバー選択」ウィンドウをオープンします。
- b. 「データベース・サーバーの選択」フィールドから、システム・モニターのデータをエクスポートする Lotus Notes サーバーを選択します。
- c. 「了解」を選択します。 選択したサーバーにアクセスできない場合は、このイベントへのアクセスを可能にするためのパスワードを入力するように求められます。

5. 「了解」を選択してこの情報を保管し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

## 「システムの始動 / 遮断」タスク固有ウィンドウ

「システムの始動 / 遮断」タスクを使用して、Wake on LAN システムの再始動、シャットダウン、電源遮断、またはウェイクアップをリモートで行います。

「システムの始動 / 遮断」の「スケジュールされたイベント」を構成するには、「システムの始動 / 遮断オプション」ウィンドウで実行するアクションを選択して、次に「了解」を選択し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。

次の「システムの始動 / 遮断オプション」が使用可能です。

- システム再始動の試行

指定したシステムの再始動を試み、リモート・システム・マネージャーで各システムのコンテキスト・メニューから「システム再始動」を選択した場合とまったく同じ動作をします。このアクションは、リモート・システムの安全保護マネージャーのサービスにアクセスできる場合だけ、正常終了します。

- システムの遮断の試行

このオプションは、指定したシステムのオペレーティング・システムの遮断を試みます。このアクションは、リモート・システムが Windows 3.1、Windows 95、Windows NT 3.51 またはそれ以上、または NetWare を実行していて、さらにリモート・システムの安全保護マネージャーのサービスにアクセスできる場合だけ、正常終了します。

- システム・ウェイクアップの試行

Wake on LAN のサポートが使用可能になっているすべての指定したシステムのウェイクアップを試みます。Wake on LAN 構成の詳細については、615ページの付録K、『Wake-On-LAN システムのトラブルシューティング』を参照してください。

- システム・パワー・ダウンの試行

指定したすべてのシステムの電源遮断を試みます。この機能は、Windows 95 を実行し、APM (拡張電源管理機能) が使用可能で、安全保護マネージャーのサービスにアクセスできる場合だけ、正常終了します。

## 「サービス構成」タスク固有ウィンドウ

「サービス構成」タスクを使用して、サービス構成マネージャーを使用して作成されたサービス構成ファイル (SCF) によって、特定の Netfinity サービスで使用される構成の更新または置換を行います。

「サービス構成」の「スケジュールされたイベント」を構成するには、次のようにします。

1. 他のシステムに転送するサービス構成データを含むサービス構成ファイルの完全な名前を、「サービス構成ファイルのファイル名の入力」フィールドに入力します。

入力する名前は、Netfinity インストール・ディレクトリーの SCF サブディレクトリーにあるファイル名の名前で、ファイル名は、ファイル拡張子を含めて正確に一致する必要があります。たとえば、ALERT.SCF という名前の SCF ファイルは、ALERT.SCF と入力する必要があります。単に ALERT と入力すると、サービス構成の更新は失敗します。

2. 「連結」の設定を選択します。

この「スケジュールされたイベント」を使用して、SCF ファイルに指定された変更を次の 2 つのどちらかの方法で適用することができます。

- 既存の構成の上書き

各リモート・システム上のサービス固有の構成を、指定した SCF ファイルに定義された構成に完全に置き換えるには、「既存の構成の上書き」を選択します。

- 既存の構成に追加

SCF ファイルに現れるすべての構成レコードを、すでにリモート・システム上に存在するサービス構成に追加するには、「既存の構成に追加」を選択します。

3. 「保管」を選択してこの情報を保管し、「スケジュールされたイベント」の構成を続けます。



## 「コマンドライン・インターフェース」タスク固有ウィンドウ

「コマンドライン・インターフェース・サービス」ウィンドウを使用して、すべての指定したシステムに対して Netfinity のコマンドライン・インターフェース (CLI) タスクを開始します。Netfinity コマンドライン・インターフェースの使用方法については、*Netfinity マネージャー コマンドライン・インターフェース リファレンス* を参照してください。

「コマンドライン・インターフェース」の「スケジュールされたイベント」を構成するには、次のようにします。

1. 「コマンドライン・インターフェース **EXE**」フィールドに、使用したい Netfinity コマンドの名前を入力します。
2. 「コマンドライン・パラメーター」フィールドに、この Netfinity コマンドで使用する任意の追加パラメーターを入力します。/N パラメーターまたは /S パラメーターを入力しないでください。通常、これらのパラメーターは、コマンドを実行するシステムのネットワーク・アドレスおよびシステム名を決定するために使用します。イベント・スケジューラーは、すべてのシステムに対するこの情報を自動的に提供します。
3. すべてのコマンドラインの出力を管理システム上のファイルに送信するには、「**CLI** 出力をファイルに送る」を選択します (オプション)。
4. 「了解」を選択します。 選択したサーバーにアクセスできない場合は、このイベントへのアクセスを可能にするためのパスワードを入力するように求められます。

## 「キャパシティー管理」タスク固有ウィンドウ

「キャパシティー管理」タスクを使用すると、キャパシティー管理レポートが自動的に作成されます。

「キャパシティー管理」の「スケジュールされたイベント」を構成するには、次のようにします。

### 1. 「レポートの定義」を選択します。

「レポートの生成」ノートブックの「レポートの定義」のページには、すべての以前定義したレポートの定義があります。レポートの定義では、キャパシティー管理レポート用として収集されるデータを指定します。次のことができます。

- 以前生成されたレポートの定義の選択

以前作成したレポートの定義を選択する場合は、「レポートの定義」を選択し、「次へ」を選択します。「レポートの生成」ノートブックの「システム」のページがオープンします。以前作成したレポートを使用している場合は、3 (168ページ) に進んでください。

- 以前定義したレポートの定義の編集

以前作成したレポートの定義を編集する場合は、「レポートの定義」を選択し、「編集」を選択します。「レポートの定義」ウィンドウがオープンします (167ページの図47 を参照)。

- 新しいレポートの定義の作成

新しいレポートの定義を作成する場合は、「新規」を選択します。「レポートの定義」ウィンドウがオープンします (63ページの図12 を参照)。



図 47. 「レポートの定義」ウィンドウ

2. レポートの定義を作成 (または編集) します。

「レポートの定義」ウィンドウで選択可能な項目を使用して、レポートの定義を構成します。次の指定が必要です。

- データの収集を行う期間
- 収集対象データの量
- データを収集する時点
- レポートに組み込むモニター

続ける場合は、「次へ」を選択します。

3. レポートに含めるシステムを選択します。



図 48. 「レポートの生成」ノートブック - 「システム」のページ

レポートに含める Netfinity グループまたはシステムを選択します。「スケジュールされたイベント」の構成を続ける場合は、次に「次へ」を選択します。

## 「スケジュールされたイベント」の削除

構成済みの「スケジュールされたイベント」を削除するには、次のようにします。

1. 「スケジューラー・サービス」ウィンドウの「スケジュールされたイベント」フィールドから、削除する「スケジュールされたイベント」を選択します。
2. 「削除」を選択します。確認後、「スケジュールされたイベント」を削除します。

## 「スケジュールされたイベント」の表示

構成済みの「スケジュールされたイベント」を表示するには、次のようにします。

1. 「スケジューラー・サービス」ウィンドウの「スケジュールされたイベント」フィールドから、表示する「スケジュールされたイベント」を選択します。
2. 「表示」を選択します。これによって、「スケジュールされたイベントの表示」ウィンドウがオープンします (図49を参照)。



図 49. 「スケジュールされたイベントの表示」ウィンドウ

「スケジュールされたイベントの表示」ウィンドウには、選択した「スケジュールされたイベント」に固有の情報（イベント名、タスク名、スケジュールされたシステム、および次回のスケジュール）が表示されます。

注： 「スケジュールされたイベントの表示」ウィンドウ上に表示された情報は、変更できません。

3. 「了解」を選択して、「スケジュールされたイベントの表示」ウィンドウをクローズします。

## 「スケジュールされたイベント」の編集

構成済みの「スケジュールされたイベント」を編集するには、次のようにします。

1. 「スケジューラー・サービス」ウィンドウの「スケジュールされたイベント」フィールドから編集する「スケジュールされたイベント」を選択します。
2. 「編集」を選択します。これによって、「スケジュールされたイベントの編集」ウィンドウがオープンします (図50 を参照)。

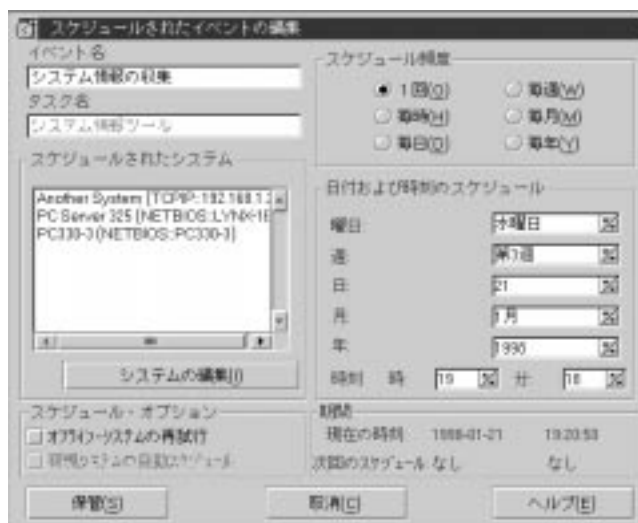


図 50. 「スケジュールされたイベントの編集」ウィンドウ

「スケジュールされたイベントの編集」ウィンドウには、選択した「スケジュールされたイベント」に固有の情報が表示されます。このウィンドウで、次のことができます。

- a. 「スケジュールされたイベント」の名前を変更します。

選択したイベントの名前を変更するには、「イベント名」フィールドに新しい名前を入力します。

- b. 選択したイベントのタスクが実行されるシステムまたはシステム・グループを変更します。

タスクが実行されるシステムまたはシステム・グループを変更するには、「グループ」または「システムの編集」を選択します。これによって、「グループまたはシステムのスケジュール」ウィンドウがオープンします (136ページの図37を参照)。システムを選択または選択解除してから、「スケジュール」を選択し、「スケジュールされたイベントの編集」ウィンドウに戻ります。

- c. 「スケジュールされたイベント」の「スケジュール頻度」を変更します。

「スケジュール頻度」ボタン・グループから、「スケジュールされたイベント」の新しい頻度を選択します。

- d. 「スケジュールされたイベント」の「日付および時刻のスケジュール」設定値を変更します。

「日付および時刻のスケジュール」フィールド・グループにある日付と時刻設定フィールドを調整します。

- 3. 「スケジュールされたイベント」の編集が終了したら、「保管」を選択して、新しい「スケジュールされたイベント」の情報を保管します。

## 「スケジュールされたイベント」リストの最新表示

他の Netfinity マネージャー がユーザーのイベント・スケジューラーにアクセスできる場合は、これらのマネージャーにより、ユーザーのシステム上の「スケジュールされたイベント」がリモートで作成、編集、および削除されることがあります。この場合、通常は「スケジューラー・サービス」ウィンドウをクローズした後、再びオープンするまで、「スケジュールされたイベント」リストには変更が反映されません。「スケジュールされたイベント」リストをすぐに更新するには、「スケジューラー・サービス」ウィンドウで「現行状況を最新表示」を選択します。

## スケジューラー・ログの表示

スケジューラー・ログには、イベント・スケジューラーによって実行されたすべてのアクションの記録が含まれています。この記録には、「スケジュールされたイベント」の名前、「スケジュールされたイベント」を実行するために使用した Netfinity サービスの名前、イベントが実行された日付と時刻、イベントが実行された各システムの名前、および各システムにおける「スケジュールされたイベント」の結果（成功または失敗）が含まれます。



図 51. 「スケジューラー・ログ」ウィンドウ

スケジューラー・ログを表示するには、「スケジューラー・サービス」ウィンドウから「ログの表示」を選択します。ログの内容を消去するには、「ログの消去」を選択します。スケジューラー・ログの表示中にその内容を更新するには、「最新表示」を選択します。「スケジューラー・ログ」ウィンドウをクローズするには、「了解」を選択してください。



ファイル転送を使用すると、ローカル・システムとリモートNetfinity システムの間でファイルおよびディレクトリーを転送することができます。このように基本的なファイルおよびディレクトリーの管理機能の他に、ファイル転送はクリーンアップ援助機能も含んでいます。この機能を使用すると、リモート・システムのハード・ディスクの内容を検索して、重複したファイル、特定のサイズよりも大きいファイル、古くて陳腐化したファイル、または特定のタイプのファイルがないかどうかを調べることができます。これらのファイルが検出されたら、貴重なディスク領域を浪費しているファイルを選択して削除することができます。ファイル転送を使用すると、指定したディレクトリーの内容を同期させ、ローカル・システムとリモート・システムのすべてのディレクトリーの内容を完全に一致させることができます。

ファイル転送機能の詳細については、次の項目を参照してください。

- 177ページの『リモート・システムからのディレクトリーまたはファイルの受信』
- 178ページの『リモート・システムへのディレクトリーまたはファイルの送信』
- 179ページの『ローカルのディレクトリーまたはファイルの削除』
- 179ページの『リモートのディレクトリーまたはファイルの削除』
- 180ページの『ローカル・ディレクトリーとリモート・ディレクトリーの同期』
- 183ページの『クリーンアップ援助』

注:

1. ファイル転送は、*リモート専用*のサービスです。リモート・システムにアクセスしている場合だけ利用可能です。ファイル転送のオブジェクトは、ローカルのサービス・マネージャーでは表示されません。
2. ファイル転送は自動ファイル圧縮処理を使用していて、速度の遅いネットワーク上でファイルまたはディレクトリーを移動するために要する時間を最小限に抑えます。ただし、高速ネットワークを使用している場合は、ファイル転送は圧縮を使用しません。これは、データの圧縮処理に要する時間によって、実際にはデータ転送にかかる時間が増えてしまうためです。この処理は自動的に行われるため、入力は不要です。ファイル転送のデータ圧縮機能を使用不可にしたい場合は、187ページの『データ圧縮を使用不可にする』を参照してください。

3. FAT (File Allocation Table) ドライブに転送する HPFS (High Performance File System) ファイルの拡張ファイル名は、適切な FAT ファイル名に変換されます。

**重要：**

- ファイル転送を誤って使用すると、ローカルまたはリモートのデータが失われる可能性があります。データの損失を避けるために、安全保護マネージャーによってファイル転送の使用を制限してください。
- DOS では、63 文字を超えるパス名はサポートされません。Netfinity クライアント・サービス (Windows 版) を実行しているシステムに、ネストしたディレクトリーを転送する場合は、パス名全体の長さが上限の 63 文字を超えないように注意してください。パス名の合計長が 63 文字を超えると、ネストしたサブディレクトリーの一部、およびそれに含まれるファイルが失われます。

## ドライブ、ディレクトリー、およびファイルの選択

他のシステムに入っているファイル転送の機能を使用するには、その前に、リモート・システム・マネージャーのシステム・グループからそのシステムを選択する必要があります。その後で、リモート・システムのファイル転送オブジェクトを選択します。これで、選択したシステムとの間でファイルまたはディレクトリーの送受信を行うことができるようになります。「ファイル転送」ウィンドウの左半分にはユーザーのローカル・システムが表示され、右半分にはユーザーがアクセスしているリモート・システムが表示されます。リモート・システムのシステム名は、「リモート・システム」フィールドの上とウィンドウのタイトル・バーに表示されます。

ファイル転送のディレクトリーまたはファイルの処理機能を使用するには、転送、同期、または削除を行う対象となる、リモートおよびローカルのディレクトリーまたはファイルを選択する必要があります。すべてのディレクトリーおよびファイルの選択は、「ファイル転送」ウィンドウで行います(図52を参照)。ドライブ、ディレクトリー、およびファイルを選択すると、ファイル転送は、選択したディレクトリーまたはファイルで使用可能なボタンおよびフィールドを自動的に表示します。



図 52. 「ファイル転送」ウィンドウ

## ドライブまたはボリュームの選択

ローカル・システムまたはリモート・システムのドライブとボリュームは、それぞれ「ローカル」グループおよび「リモート」グループ内の「ドライブ/ボリューム」選択リストに表示されます。ドライブを選択するには、「ドライブ/ボリューム」フィールドの右側の小さな矢印を選択してから、リストからドライブまたはボリュームを選択します。ドライブまたはボリュームを新たに選択すると、「ディレクトリー」フィールドおよび「ファイル」フィールドの内容が自動的に更新されます。

## ディレクトリーの選択

ローカル・システムまたはリモート・システムのディレクトリーは、それぞれ「ローカル」グループおよび「リモート」グループ内の「ディレクトリー」フィールドに表示されます。ディレクトリーを選択するには、ディレクトリー名をクリックします。複数のディレクトリーを選択するには、**Ctrl** キーを押しながら追加のディレクトリーをクリックします。ディレクトリーをオープンするには、オープンするディレクトリーをダブルクリックします。ディレクトリーをオープンすると、「ディレクトリー」フィールドおよび「ファイル」フィールドの内容が自動的に更新されます。

「すべて」ボタンを使用して、「ディレクトリー」フィールドに表示されたすべてのディレクトリーを選択または選択解除することができます。

## ファイルの選択

ローカル・システムまたはリモート・システムのファイルは、それぞれ「ローカル」グループおよび「リモート」グループ内の「ファイル」フィールドに表示されます。ファイルを選択するには、ファイル名をクリックします。複数のファイルを選択するには、**Ctrl** キーを押しながら追加のファイル名をクリックします。

「すべて」ボタンを使用して、「ファイル」フィールドに表示されたすべてのファイルを選択または選択解除することができます。

## リモート・システムからのディレクトリーまたはファイルの受信

リモート・システムから 1 つまたは複数の、ディレクトリーまたはファイルを受信するには、次のようにします。

1. 「ローカル」グループから受信先ドライブおよびディレクトリーを選択します。

受信先ドライブおよびディレクトリーは、リモートのドライブおよびディレクトリーの転送先となる、ユーザーのシステム上のドライブおよびディレクトリーです。

2. 「リモート」グループから受信元ドライブおよび 1 つ (または複数) の受信元ディレクトリーを選択します。

受信元ドライブおよびディレクトリーは、転送するディレクトリーまたはファイルを含むリモート・システム上のドライブおよびディレクトリーです。

3. 転送モードを選択します。

次の 2 つの転送モードのうちの 1 つを選択することができます。

**コピー** 送信元システムから転送されるディレクトリーまたはファイルは送信元システムに残され、受信先システムにコピーします。

**移動** 送信元システムから転送されるディレクトリーまたはファイルは送信元システムから削除され、受信先システムに移動します。

4. ディレクトリーを転送し、選択した受信元ディレクトリー内にネストされたサブディレクトリーを受信する場合は、「ネスト」チェック・ボックスをチェックします。
5. 選択したリモート・ディレクトリーをローカル・システムに転送するには「ディレクトリー」グループの「受信」を、選択したファイルをローカル・システムに転送するには「ファイル」グループの「受信」を選択します。

## リモート・システムへのディレクトリーまたはファイルの送信

リモート・システムへ 1 つまたは複数の、ディレクトリーまたはファイルを送信するには、次のようにします。

1. 「ローカル」グループからソース・ドライブおよび 1 つ (または複数) の送信元ディレクトリーまたは送信元ファイルを選択します。

送信元ドライブおよびディレクトリーは、転送するディレクトリーまたはファイルを含むローカル・システム上のドライブおよびディレクトリーです。

2. 「リモート」グループからターゲット・ドライブおよび 1 つの送信先ディレクトリーを選択します。

送信先ドライブおよびディレクトリーは、ローカルのドライブおよびディレクトリーの転送先となる、リモート・システム上のドライブおよびディレクトリーです。

3. 転送モードを選択します。

次の 2 つの転送モードのうちの 1 つを選択することができます。

**コピー** 送信元システムから転送されるディレクトリーまたはファイルは送信元システムに残され、受信先システムにコピーします。

**移動** 送信元システムから転送されるディレクトリーまたはファイルは送信元システムから削除され、受信先システムに移動します。

4. ディレクトリーを転送し、選択した送信元ディレクトリー内にネストされたサブディレクトリーを送信する場合は、「ネスト」チェック・ボックスをチェックします。
5. 選択したローカル・ディレクトリーをリモート・システムに転送するには「ディレクトリー」グループの「送信」を、選択したファイルをリモート・システムに転送するには「ファイル」グループの「送信」を選択します。

## ローカルのディレクトリーまたはファイルの削除

1 つまたは複数の、ローカルのディレクトリーまたはファイルを削除するには、次のようにします。

1. 「ローカル」グループから削除するドライブおよび 1 つ (または複数) の削除するディレクトリーまたは削除するファイルを選択します。

*削除するドライブおよびディレクトリーは、削除するディレクトリーまたはファイルを含むローカル・システム上のドライブおよびディレクトリーです。*

2. 選択したすべてのディレクトリーを削除するには「ディレクトリー」グループの「削除」を、選択したすべてのファイルを削除するには「ファイル」グループの「削除」を選択します。

## リモートのディレクトリーまたはファイルの削除

1 つまたは複数の、リモートのディレクトリーまたはファイルを削除するには、次のようにします。

1. 「リモート」グループから削除するドライブおよび 1 つ (または複数) の削除するディレクトリーまたは削除するファイルを選択します。

*削除するドライブおよびディレクトリーは、削除するディレクトリーまたはファイルを含むリモート・システム上のドライブおよびディレクトリーです。*

2. 選択したすべてのディレクトリーを削除するには「ディレクトリー」グループの「削除」を、選択したすべてのファイルを削除するには「ファイル」グループの「削除」を選択します。

## ローカル・ディレクトリーとリモート・ディレクトリーの同期

ファイル転送の同期を使用すると、ローカル・ディレクトリーとリモート・ディレクトリーの内容がまったく同一になるように保証することができます。ファイル転送には、次の3つの同期モードがあります。

- |           |   |
|-----------|---|
| ローカルがマスター | リモート・システムのディレクトリーの内容をローカル・システムのディレクトリーの内容に同期させる場合は、「ローカルがマスター」モードを使用します。リモート・システムのディレクトリーに含まれ、ローカル・システムのディレクトリーにないすべてのファイルが削除されます。  |
| リモートがマスター | ローカル・システムのディレクトリーの内容をリモート・システムのディレクトリーの内容に同期させる場合は、「リモートがマスター」モードを使用します。ローカル・システムのディレクトリーに含まれ、リモート・システムのディレクトリーにないすべてのファイルが削除されます。  |
| 対等機能      | リモート・ディレクトリーおよびローカル・ディレクトリーを、両方のディレクトリーにあるすべてのファイルで同期させる場合は、「対等機能」モードを使用します。このモードでは、同期化によって、ローカル・ディレクトリーおよびリモート・ディレクトリーの両方にあるすべてのファイルを、ファイルの最新版で更新します。また、一方のディレクトリーだけにあるファイルは、もう一方のディレクトリーにコピーされます。 |

ローカル・システムのディレクトリーの内容をリモート・システムのディレクトリーに同期させるには、次のようにします。

1. 「ローカル」グループからドライブおよびディレクトリーを選択します。
2. 「リモート」グループからドライブおよびディレクトリーを選択します。



3. 「同期」を選択します。

「ディレクトリーの同期化」(図53)ウィンドウがオープンします。同期モードおよび同期処理を指定することができます。

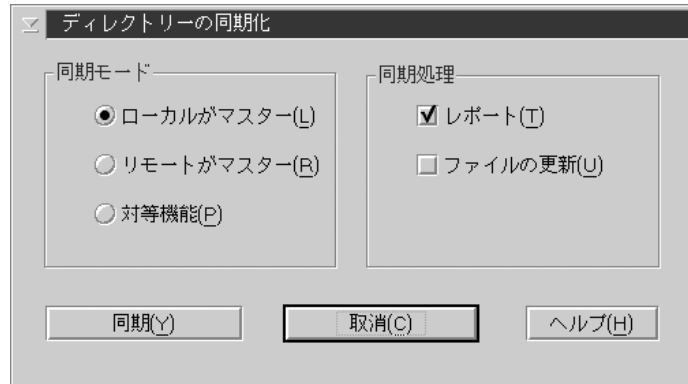


図 53. 「ディレクトリーの同期化」ウィンドウ

4. 「同期モード」を選択します。

- 選択したリモート・ディレクトリーの内容を選択したローカル・ディレクトリーの内容に同期させるには、「ローカルがマスター」を選択します。リモートディレクトリーだけにあるすべてのファイルが削除されます。
- 選択したローカル・ディレクトリーの内容を選択したリモート・ディレクトリーの内容に同期させるには、「リモートがマスター」を選択します。ローカル・ディレクトリーだけにあるすべてのファイルが削除されます。
- 選択したリモート・ディレクトリーおよびローカル・ディレクトリーを互いに同期させるには、「対等機能」を選択します。一方のディレクトリーだけにあるファイルは、もう一方のディレクトリーに自動的にコピーされます。両方のディレクトリーにあり、タイムスタンプが異なるファイルは、両方のディレクトリーに最新のファイルがあるように同期化されます。

5. 同期処理を少なくとも 1 つチェックします。

「同期処理」グループ内の選択可能な「同期処理」チェック・ボックスから 1 つまたは複数をチェックします。

- レポート

選択した同期処理が成功するためにはどのファイルを変更または削除する必要があるかについての情報を受け取るには、「レポート」チェック・ボックスをチェックします。「レポート」チェック・ボックスだけをチェックした場合は、選択した同期モードが完了するためにはどのファイルを更新、置換、または削除する必要があるかに関して情報を受け取ります。ただし、「ファイルの更新」の同期処理をチェックしない限り、選択したディレクトリーの内容は更新されません。

- ファイルの更新

ディレクトリーの同期処理が、選択したディレクトリーの内容を更新できるようにするには、「ファイルの更新」チェック・ボックスをチェックします。選択したディレクトリーの内容は、「ファイルの更新」チェック・ボックスがチェックされている場合にだけ更新されます。

6. 同期の手順を完了するには、「同期」を選択します。

## クリーンアップ援助

リモート・システム上でファイルのクリーンアップ手順を実行するには、「リモート・クリーンアップ」を選択します。これによって、リモート・システムのハード・ディスクを走査して、次のようなファイルを探することができます。

- 不要なファイル
- 古いまたは陳腐化したファイル
- 非常に大きいファイル
- 他のディレクトリーで重複しているファイル

このようなファイルが検出されたら、これらの一部またはすべてを削除するか、または後で参照するために単に結果を保管して印刷するかを選択することができます。クリーンアップ手順を開始するには、「リモート・クリーンアップ」を選択します。

「クリーンアップ援助」ウィンドウ (185ページの図55) がオープンします。



図 54. 「クリーンアップ援助」ウィンドウ

「クリーンアップ援助」ウィンドウで、「分析」を選択すると、リモート・システムのハード・ディスクのクリーンアップ援助スキャンを開始することができます。

「分析」を選択すると、クリーンアップ援助は現在定義されているクリーンアップ援助プロファイルを使用して、どのファイルを検出し報告するかを判別します。現在定義されているクリーンアップ援助プロファイルを検討または編集するには、「プロファイル」を選択します。

## クリーンアップ援助プロファイル

「クリーンアップ援助プロファイル」ウィンドウを使用して、リモート・システムのハード・ディスク上のファイルをクリーンアップ援助が報告するファイルのリストに含めるかどうかを判別するためにファイル転送が使用する基準を指定します。

クリーンアップ援助プロファイルを構成するには、次のようにします。

1. 「ファイル転送」ウィンドウで、「リモート・クリーンアップ」を選択します。  
「クリーンアップ援助」ウィンドウがオープンします (185ページの図55 を参照)。
2. 「クリーンアップ援助」ウィンドウで、「プロファイル」を選択します。  
「クリーンアップ援助プロファイル」ウィンドウがオープンします。
3. クリーンアップ援助が使用する 1 つまたは複数の基準を選択します。

次の基準がクリーンアップ援助で使用可能です。

- 重複ファイルのレポート

名前、日付、時刻、およびサイズが同一であるすべてのファイルをクリーンアップ援助のレポートに含めるには、「重複ファイルのレポート」チェック・ボックスをチェックします。

- 次より大きいファイルをレポート

この選択項目の隣のフィールドに指定した単位数よりも大きなファイルをクリーンアップ援助のレポートに含めるには、「次より大きいファイルをレポート」チェック・ボックスをチェックします。

- 次より古いファイルをレポート

この選択項目の隣のフィールドに指定した単位数を超えるすべてのファイルをクリーンアップ援助のレポートに含めるには、「次より古いファイルをレポート」チェック・ボックスをチェックします。

- 突き合わせテンプレート

「テンプレート」フィールドに表示されたファイル・タイプのどれかに一致するすべてのファイルをクリーンアップ援助のレポートに含めるには、「突き合わせテンプレート」チェック・ボックスをチェックします。テンプレートの構成および使用方法の詳細については、186ページの『クリーンアップ援助プロファイルのテンプレート』を参照してください。

注: すべてのクリーンアップ援助のオプションは、独立して作動します。したがって、2 つ以上のオプションを選択すると、(2 つ以上のオプションに一致した場合に) 同じファイルが 2 回以上報告される場合があります。

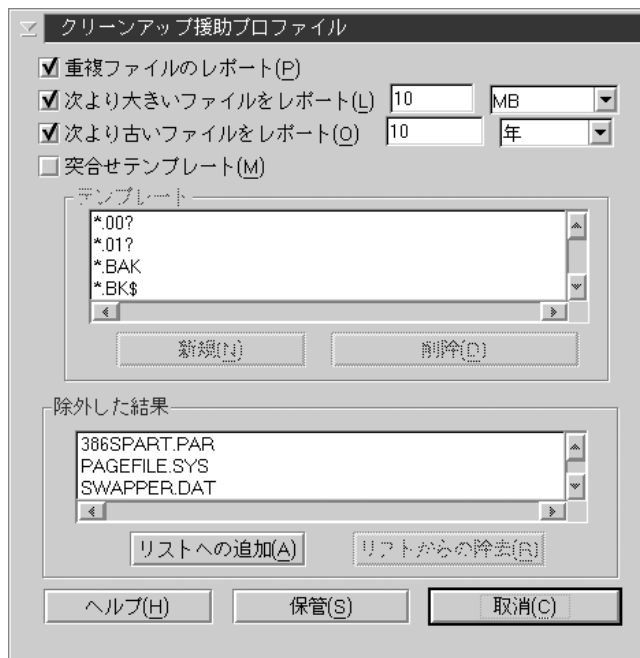


図 55. 「クリーンアップ援助プロファイル」ウィンドウ

これらのオプションからはどれでも、またはすべてを選択することができますが、少なくとも 1 つは選択する必要があります。クリーンアップ援助は、「クリーンアップ援助プロファイル」ウィンドウで選択したあらゆるオプションに一致するファイルまたはディレクトリーを報告します。

#### 4. 「結果から除外」リスト (オプション) を構成します。

クリーンアップ援助は、「結果から除外」リストに表示されるファイルは含めません。このリストを使用すれば、クリーンアップ援助にリモート・システム上の特定のファイルまたはディレクトリーを無視するように指示することができます。

- 「結果から除外」リストに項目を追加するには、「リストへの追加」を選択して、クリーンアップ援助の走査から除外したいファイルの名前を入力し、次に「保管」を選択します。
- リストから項目を削除するには、項目を選択してから「リストからの除去」を選択します。

#### 5. 「保管」を選択して新しいプロファイルを保管し、「クリーンアップ援助」ウィンドウに戻ります。

## クリーンアップ援助プロファイルのテンプレート

クリーンアップ援助プロファイルのテンプレートとは、クリーンアップ援助によるリモート・システムのハード・ディスクの走査で検出された場合に、クリーンアップ援助のレポートに含まれるファイルのことです。このテンプレートは、特定のファイル名およびファイル・タイプ (たとえば、README.TXT)、特定のファイル・タイプ拡張子をもつファイル (たとえば、\*.EXE)、ドライブおよびディレクトリーのパス情報 (たとえば、D:\NETFIN¥) などから構成される場合があります、すべての標準的なファイル名のワイルド・カードが使用されます。たとえば、クリーンアップ援助テンプレートにファイル名 A\*.DOC を指定すると、文字 A で始まり、ファイル・タイプが DOC であるすべてのファイル名がクリーンアップ援助のレポートに含まれることとなります。

注: クリーンアップ援助の走査の実行に必要な時間は、使用するテンプレートの数に正比例します。クリーンアップ援助の走査をできるだけ高速にするためには、テンプレート・リストを小さく保ったり、主に重複ファイルに注目している場合は「突き合わせテンプレート」チェック・ボックスを一時的に使用不可にします。

## データ圧縮を使用不可にする

ファイル転送の自動データ圧縮処理を使用不可にするには、次の環境変数をシステムに追加します。

```
SET NFFTCL=0
```

この環境変数を追加する方法は、オペレーティング・システムによって異なります。

- この環境変数を、OS/2 システムまたは Windows 95 システムに設定するには、この変数を CONFIG.SYS ファイルに追加してから、システムを再始動します。
- NT システムの場合は、次のようにします。

1. Windows NT の「コントロール パネル」をオープンしてから、「システム」をダブルクリックします。
2. 「環境」タブをクリックします。
3. 「システム環境変数」フィールドの任意の場所をクリックします。
4. 「変数」フィールドに次を入力します。

```
NFFTCL
```

5. 「値」フィールドに値 (0 または 1) を入力します。
6. 「設定」を選択します。
7. 「適用」を選択します。
8. 「了解」を選択します。
9. Netfintiy サポート・プログラムを遮断してから、再始動します。

この環境変数を追加すると、ファイル転送は、どのような状況のもとでも、自動データ圧縮処理機能を使用しません。





## 第11章 電源オン・エラー検出

電源オン・エラー検出を使用すると、IBM のマイクロチャンネル・アーキテクチャーおよび電源入力自己診断 (POST) 技法を最大限に活用することができます。マイクロチャンネル・システムの電源をオンにすると、POST 処理が開始されます。POST 処理中に、マイクロチャンネル・システムは、システムのハードウェアとその構成について広範囲で詳細な検査を行います。この検査では、すべての構成要素が正常に作動していること、そのシステムのハードウェア構成が、前回システムが電源オンされたときと同じであることなどの確認が行われます。

問題や矛盾が検出されると、POST は警告メッセージを生成し、適切なアクション (システム区画からシステム構成ユーティリティーを開始するなど) を実行します。しかし、システムのユーザーがその場にはいない場合、あるいはこのようなエラーが報告されたときにどう対処するのかをよく知らない場合は、技術担当者に連絡し、問題が診断され、適切な処置が取られるまでの間に貴重な時間が浪費されてしまいます。

しかし、IBM マイクロチャンネル・システムで電源オン・エラー検出ドライバーが使用可能になっていれば、システムはネットワーク・アダプターのサポート・プログラム (ドライバー) をロードし、“SOS” スタイルのメッセージをネットワーク上に送信します。このメッセージには、メッセージを送信しているシステムを明確に識別するための情報 (システムの LAN アダプターの MAC アドレス、システム情報、および使用可能な場合には VPD など) と、報告された POST エラーに関する情報が含まれます。この方法により、問題が発生すると、ただちにユーザーと技術担当者に通知され、同時に、問題の診断と解決のために必要なすべての情報が与えられます。

電源オン・エラー検出サービスはこれらのメッセージを受信し、ユーザーが次の項目を迅速に判別できるようにこのメッセージを解釈します。

- POST エラーまたはシステム区画アクセス・メッセージを生成したシステム
- 報告された POST エラー (報告されている場合)
- POST エラーの原因

このメッセージには、問題の判別と回復を迅速に行い、システムのダウン時間と生産性の損失を最小限に抑えるのに役立つハードウェア構成情報も含まれています。

LAN 接続システムで POST 時に電源オン・エラー検出機能を使用できるようにする方法については、529ページの付録C、『電源オン・エラー検出を使用可能にする方法』を参照してください。

## 「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウ

「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウには、電源オン・エラー検出機能が受信したすべてのリモート・システムの POST エラーと、システム区画アクセス・メッセージのリストが表示されます (図56 を参照)。POST エラー項目は、感嘆符を囲んだ赤い丸 ( ) で始まります。システム区画アクセス項目は、文字 *i* (*information* を表す) を囲んだ青い丸 ( ) で始まります。

注: システム区画アクセス・メッセージは、使用不可にすることができます。詳細については、193ページの『「オプション」プルダウン・メニューの選択項目』を参照してください。



オリジネーター	日付	時刻
(!) X005A1G000	1997-12-19	08:25:27
(!) X005A1G000	1997-12-19	08:25:47
(!) X005A1G000	1997-12-19	08:26:05
(!) X005A1G000	1997-12-01	08:52:07
(!) X005A1G000	1997-11-20	11:27:46
(!) X005A1G000	1997-11-19	10:40:02
(!) X005A1G000	1997-10-27	08:53:08
(!) X005A1G000	1997-10-27	08:53:02

図 56. 「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウ

電源オン・エラー検出口ログの各項目は、「日付」、「時刻」、および「オリジネーター」の値から構成されます。「日付」および「時刻」の値は、リモート・システムの POST エラーが報告された日付および時刻を表します。POST エラー・メッセージを生成したシステムが、Netfinity マネージャーのリモート・システム・マネージャー・サービスのシステム・グループで発見または追加されたシステムである場合 (233ページの第16章、『リモート・システム・マネージャー』を参照) は、表示される「オリジネーター」値はリモート・システムのシステム名になります。POST エラー・メッセージを生成したシステムが Netfinity マネージャーのリモート・システム・マネージャー・サービスのシステム・グループで発見または追加されたシステムではない場合は、表示されるオリジネーター値はリモート POST エラー・メッセージを送信したシステムのネットワーク・アダプター・カードのメディア・アクセス制御 (MAC) アドレスになります。このオリジネーター値を使用して、POST エラー・メッセージを生成したシステムの ID を確認してください。

「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウから、電源オン・エラー検出のすべての機能にアクセスすることができます。このウィンドウで次のことができます。

- 個々のエラー・メッセージに関する情報を表示する。

ある項目に関する詳細情報を表示する場合は、「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウでその項目を選択します。これによって、「電源オン・エラー検出項目の内容」ウィンドウがオープンします。詳細については、196ページの『「電源オン・エラー検出項目の内容」ウィンドウ』を参照してください。

- 項目の印刷、項目の消去、サービスの終了を行う。

「ファイル」プルダウン・メニューから選択可能な項目を使用して、「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウの内容を印刷、消去、または電源オン・エラー検出ウィンドウのクローズをすることができます。詳細については、192ページの『「ファイル」プルダウン・メニューの選択項目』を参照してください。

- 電源オン・エラー検出サービスのオプションを制御する。

「オプション」プルダウン・メニューから選択可能な項目を使用して、電源オン・エラー検出のアラートの生成、電源オン・エラー検出メッセージ受信時の電源オン・エラー検出インターフェースの自動開始、およびメッセージ・ログ・オプションにアクセスすることができます。詳細については、193ページの『「オプション」プルダウン・メニューの選択項目』を参照してください。

- 「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウの内容を選別する。

「フィルター」プルダウン・メニューから選択可能な項目を使用して、さまざまな基準に応じた項目が表示されるように「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウを構成することができます。詳細については、194ページの『「フィルター」プルダウン・メニューの選択項目』を参照してください。

- 「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウの内容をソートする。

「ソート」プルダウン・メニューから選択可能な項目を使用して、日付と時刻、またはオリジネーター値によって「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウの内容をソートすることができます。詳細については、195ページの『「ソート」プルダウン・メニューの選択項目』を参照してください。

- オンライン・ヘルプにアクセスする。

「ヘルプ」プルダウン・メニューから選択可能な項目を使用して、電源オン・エラー検出のヘルプ機能をアクセスすることができます。

## 「ファイル」プルダウン・メニューの選択項目

「ファイル」プルダウン・メニューで選択できる項目を使用して、次のことが行えます。

- 電源オン・エラー検出サービスをクローズする。

電源オン・エラー検出サービスを終了するには、「終了」を選択します。

- 「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウの内容を消去する。

「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウの内容を消去する場合は、「ログのクリア」を選択します。

- ログに記録されている項目に関する報告書をプリントする。

電源オン・エラー検出ログに現在保管されている項目に関する情報をプリントするには、「ログの印刷」を選択します。この報告書は、次の2つのタイプのどちらかとなります。

### – 要約

「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウの各項目に関する次の情報を含む短い報告書を印刷する場合は、「要約」を選択します。

- 報告日付
- 報告時刻
- オリジネーター値
- 報告された POST エラー・コード

### – 全部

「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウのすべての項目に関する詳細な報告書を印刷する場合は、「全部」を選択します。この報告書は、次の各項目に関する情報を含みます。

- 報告日付
- 報告時刻
- オリジネーター値
- 報告された POST エラー・コード
- 次の事項を含む拡張システム情報
  - アダプター

- メモリー
- ハードウェア・エラー・ログ (存在する場合)
- 重要プロダクト・データ (VPD - 利用可能な場合)

## 「オプション」プルダウン・メニューの選択項目

「オプション」プルダウン・メニューで選択できる項目を使用して、次のことが行えます。

- リモート・システムの POST エラー・メッセージを受信したときに、アラートを生成する。

リモート POST エラー・メッセージを受信したときに、電源オン・エラー検出がアラートを生成するようにするには、「エラー時のアラート」を選択します。生成されたアラートは、アラート・マネージャーによって受信されます。アラートは次のアラート情報を含みます。

- アラート・テキスト：電源オン・エラー検出アラート
- アラート・タイプ：アプリケーション障害
- 重大度：4
- アプリケーション ID: POED (Power-On Error Detect)
- アプリケーション・アラート・タイプ：0201
- 受信した日付と時刻

生成されたアラートに対する応答の構成方法については、13ページの第2章、『アラート・マネージャー』を参照してください。

- リモート・システムの POST エラー・メッセージを受信したときに、電源オン・エラー検出のグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) が自動的に開始する。

リモート・システムの POST エラー・メッセージを受信したときに、電源オン・エラー検出サービスが自動的に開始するには、「エラー時の GUI の開始」を選択します。

- システム区画アクセス・メッセージを記録 (または無視) する。

システム始動時にユーザーがシステム区画にアクセスしたときに生成される電源オン・エラー検出メッセージを、電源オン・エラー検出ログに含める場合は、「

「アクセス・エントリーのログ」を選択します。これらのメッセージを無視する場合は、「アクセス・エントリーのログ」オプションを選択しないでください。

## 「フィルター」プルダウン・メニューの選択項目

「フィルター」プルダウン・メニューで選択できる項目を使用して、さまざまな基準に応じた項目が表示されるように「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウを構成することができます。選択可能な項目は次のとおりです。

- 全部

「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウにすべての項目を表示する場合は、「全部」を選択します。

- 日付

指定された日付の範囲内に受信したリモート・システムの POST エラー・メッセージを表示するように「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウを構成する場合は、「日付」を選択します。

- 時刻

指定された時刻の範囲内に受信したリモート・システムの POST エラー・メッセージを表示するように「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウを構成する場合は、「時刻」を選択します。

- 組合せ

指定した日付の範囲でさらに指定した時刻の範囲内に受信されたリモート・システムの POST エラー・メッセージを表示するように「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウを構成する場合は、「組合せ」を選択します。

- 設定

「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウに表示する項目についてのデフォルトの日付と時刻の範囲を設定するには、「設定」を選択します。これらの値は、「全部」フィルターを選択した場合に表示する項目を決定するために使用します。

注: 「日付」、「時刻」、および「組合せ」フィルターは、「設定」を上書きします。

## 「ソート」プルダウン・メニューの選択項目

「ソート」メニューで選択可能な項目を使用すると、受信した日付と時刻、またはオリジネーター値によって、「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウの項目をソートすることができます。選択可能な項目は次のとおりです。

- 日付 / 時刻

報告された日付と時刻に基づいて項目をソートする場合は、「日付 / 時刻」を選択します。項目は、昇順または降順でソートすることができます。

- 「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウの項目を、最も古いものから順番に、日付と時刻でソートする場合は、「昇順」を選択します。
- 「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウの項目を、最も新しいものから順番に、日付と時刻でソートする場合は、「降順」を選択します。

- オリジネーター

「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウの項目を、オリジネーター値に基づいてソートする場合は、「オリジネーター」を選択します。項目は、昇順または降順でソートすることができます。

- 「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウの項目を、最も低いオリジネーター値のものから順にオリジネーター値でソートする場合は、「昇順」を選択します。
- 「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウの項目を、最も高いオリジネーター値のものから順にオリジネーター値でソートする場合は、「降順」を選択します。

## 「電源オン・エラー検出項目の内容」ウィンドウ

ある項目に関する詳細情報を表示する場合は、「電源オン・エラー検出サービス」ウィンドウでその項目を選択します。これによって、「電源オン・エラー検出エントリーの内容」ウィンドウがオープンします (図57 を参照)。



図 57. 「電源オン・エラー検出エントリーの内容」ウィンドウ

このウィンドウから、受信したリモート POST エラー・メッセージおよびそのメッセージを発信したシステムの構成に関する詳細情報にアクセスすることができます。次の項目に関する情報を得ることができます。

- アダプター情報 (アダプター名、スロット位置、実際の POS ID と構成上の POS ID)
- メモリー情報 (拡張メモリーと基本メモリーの実際の量および構成上の量)
- ハードウェア・エラー・ログ項目

注: この項目は、ハードウェア・エラー・ログが空の場合は、表示されません。

- POST エラー・コードの番号と説明

注: この項目は、「システム区画」アクセス・メッセージを選択した場合は、表示されません。



- システム情報 (使用可能であれば、モデル、サブモデル、システム・ボードの POS ID、および BIOS の改訂番号と日付など)
- 重要プロダクト・データ (VPD)

注: VPD は、必ずしもすべてのシステムで提供されるものではありません。  
この情報が提供されていない場合は、該当項目は表示されません。

システム情報および重要プロダクト・データ (存在する場合) を使用すると、ネットワーク上で POST エラー・メッセージを生成したシステムの ID が容易に確認できます。

これらのどれかの事項について実際の値と構成上の値が異なっていると判別した場合、電源オン・エラー検出は、該当事項の隣に赤い矢印を表示し、ユーザーに警告を發します。この事項には、POST エラーの原因となった問題の診断と解決に必要な情報が含まれます。

このウィンドウから項目を選択すると、表示されたシステムに関する情報を示す「電源オン・エラー検出の詳細」ウィンドウがオープンします (図58 を参照)。



図 58. 「電源オン・エラー検出の詳細」ウィンドウ

実際のデータと構成上のデータの相違が他にもある場合は、さらに矢印が示されま  
す。



事前障害分析 (PFA) サービスを使用すると、システムにローカルにインストールされているすべての PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブを監視することができます。PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブによって PFAメッセージが生成されたときには、このサービスによってただちに通知を受信することができます。また、このサービスを構成して、PFA メッセージを受信したときに Netfinity アラートを自動的に生成することもできます。

注: RAID アレイの一部として使用中の PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブによって生成された PFA メッセージは、事前障害分析サービスでは検出できません。ただし、PFA 利用可能ディスク・ドライブのためにシステム・モニター・サービスの属性モニターを使用すれば、PFA メッセージを監視および報告させることができます。詳細については、425ページの『属性モニター』を参照してください。

## 「PFA サービス」ウィンドウ

PFA 利用可能な各物理ドライブは、「PFA サービス」ウィンドウのオブジェクトによって表されます。事前障害分析サービスを利用すると、2種類のオブジェクトによって各ディスク・ドライブの状況を迅速に判別することができます。これらのオブジェクトには、次のものがあります。

オブジェクト                      説明

正常なディスク・ドライブ 正常 : このドライブについては、どのような事前障害分析メッセージも報告されていません。

壊れたディスク・ドライブ 警告 : このドライブについては、1つまたは複数の事前障害分析メッセージが報告されており、障害が発生している可能性があります。



図 59. 「PFA サービス」。ここで示した PFA ドライブ・オブジェクトは、事前障害分析メッセージが報告されていないドライブを表しています。

このドライブの識別に役立つ情報が、該当するアイコンの隣にリストされます。この情報は、次のものを含んでいます。

- アダプター

「アダプター」とは、ディスク・ドライブが接続されているアダプター・カードの値のことをいいます。

事前障害分析は、システム内の PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブを検出したときに、SCSI ハード・ディスク・ドライブ・コントローラーに関してもシステムをスキャンします。アダプターの値は、PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブが接続されている SCSI アダプターの番号です。たとえば、システムに 2 枚の SCSI ハード・ディスク・ドライブ・アダプターがインストールされていて、各 SCSI アダプターに 1 つの PFA 利用可能ハード・ディスクが接続されている場合、「PFA サービス」ウィンドウには、2 つの PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブ・オブジェクトが表示されます。最初の PFA ドライブ・オブジェクトにはアダプター値 1 が示されます。これが、事前障害分析で検出される最初の SCSI ハード・ディスク・アダプターだからです。2 つ目の PFA ドライブ・オブジェクトにはアダプター値 2 が示されます。これが、事前障害分析で検出される 2 番目の SCSI ハード・ディスク・アダプターであるためです。

- PUN および LUN

物理装置番号 (PUN) と論理装置番号 (LUN) は、ハード・ディスク・ドライブをシステム内で固有に識別するために割り当てられる値のことをいいます。

注: 1 台の物理ドライブが 2 つ以上の論理ドライブに分割されている場合は、各論理ドライブの PUN、LUN、および物理ドライブの値は、すべて同じになります。

- 物理ドライブ値

「物理ドライブ値」とは、システム内の各ハード・ディスク・ドライブに割り当てられた数値のことをいいます。これらの値は 0 から始まり、追加のハード・ディスク・ドライブがインストールされるたびに増加します (たとえば、システムに 2 つのハード・ディスク・ドライブがインストールされている場合、それらの物理ドライブ値は 0 と 1 になります)。

- 論理ドライブ値

「論理ドライブ」値とは、各ハード・ディスク・ドライブ、またはハード・ディスク・ドライブに設けられた各区画に割り当てられた文字のことをいいます。たとえば、1 GB\* のドライブがある場合に、このドライブを 200 MB の 5 区画に分割すると、論理ドライブ値は、C、D、E、F、および G になります。ただし、各論理ドライブは同じ PUN、LUN、および物理ドライブ値を共有します。

- サイズ

「サイズ」値とは、物理ドライブのサイズです。

注: サイズは、各ドライブに残っているスペースを表すものではありません。

各 PFA 利用可能ドライブについてさらに詳しい情報を得たり、各ドライブの事前障害分析サービス・オプションを構成するには、「PFA サービス」ウィンドウからそのドライブを選択します。「ドライブの PFA オプション」ウィンドウがオープンします (203ページの図60 を参照)。

---

\* ハード・ディスク・ドライブ容量を参照するときに、ギガバイトは 1000000000 バイトを意味します。ユーザーがアクセス可能な総容量は、操作環境によって異なります。

## 「ドライブの PFA オプション」ウィンドウ

選択した PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブに関する追加情報を表示する、または選択されたドライブに固有の事前障害分析サービス・オプションを構成する場合は、「ドライブの PFA オプション」ウィンドウを使用します。



図 60. 「ドライブの PFA オプション」ウィンドウ

## 詳細なディスク・ドライブ情報

「ドライブの PFA オプション」ウィンドウは、「PFA サービス」ウィンドウからドライブ固有の情報を再表示し、さらに次の追加情報を表示します。

- ベンダー ID

「ベンダー ID」は、ディスク・ドライブによって報告されたドライブの製造元の名前です。

- プロダクト ID

「プロダクト ID」は、ディスク・ドライブによって報告されたドライブ固有の製品番号を表示します。

- プロダクト・リビジョン

「プロダクト・リビジョン」は、ディスク・ドライブによって報告された製品のリビジョン・レベルを表示します。

- 状況

「状況」は、ディスク・ドライブによって報告された最新の情報を表示します。ディスク・ドライブによって PFA メッセージが生成されると、その PFA メッセージが生成された日付、および時刻が「状況」データとして表示されます。



## 事前障害分析オプション

「ドライブの PFA オプション」ウィンドウは、詳細なドライブ情報の提供に加え、次のことができます。

- このドライブ用に事前障害分析のアラート生成オプションを構成する。
- このドライブ用に事前障害分析の警告メッセージをシミュレートする。
- ドライブの状況を“警告”から“正常”にリセットする。

## アラートの生成

このディスク・ドライブで事前障害分析メッセージが生成されたときに、事前障害分析に Netfinity アラートを生成するには、「アラートの生成」のチェック・ボックスを選択します。いくつかのアラート固有情報をカスタマイズすることができます。

- アラート・テキスト

生成されるアラートに含まれる標準のアラート・テキストは、ウィンドウの中央に表示されています。このテキストに情報を追加したい場合は、「アラート・ログの追加テキスト」フィールドにその情報を入力します。

- 重大度

アラート重大度の値を設定する場合には、「重大度」フィールドの横のスピンのボタンを使用します。値は、0 (最も重大) から 7 (最も軽微) までの整数で指定することができます。

## 事前障害分析メッセージのシミュレート

このドライブの事前障害分析の警告メッセージをシミュレートするには、「シミュレート」を選択します。事前障害分析サービスは、実際の警告メッセージを受信した場合とまったく同様に作動します（「PFA サービス」ウィンドウと「ドライブの PFA オプション」ウィンドウのドライブ状況を変更し、「アラートの生成」が選択されている場合にはアラートを生成します）。ただし、「ドライブの PFA オプション」ウィンドウで報告される状況およびアラート・テキストによって、この PFA メッセージがシミュレートされたものであり、実際の PFA メッセージによるものではないことがユーザーに対して知らされます。

## ドライブの状況のリセット

「リセット」を選択すると、ドライブの状況が、「警告」から“正常”に変更されません。



## 第13章 プロセス・マネージャー

Netfinity プロセス・マネージャー・サービスを使用して、現在システム上でアクティブなすべてのプロセスに関する詳細情報を表示することができます。プロセス・マネージャーを使用して、システム上でのコマンドの実行、各プロセスの停止、指定したプロセスの監視を行い、プロセスが開始および停止した場合、または始動後に指定の時間内に開始できなかった場合に、Netfinity プロセス・アラートを生成することができます。



プログラム名	プロセスID	親プロセスID	セッションID	スレッド数
D:\IBM\COMLAN\QDEK.EXE	0830h	0830h	3089h	1
D:\IBM\COM\PROTOCOL\LANDL	0816h	0830h	3089h	1
D:\IBM\LAN\NETPROO\LSDAEM	0819h	0830h	3089h	1
D:\IBM\LAN\NETPROO\NETMSC	0820h	081Eh	3019h	4
D:\IBM\LAN\SERVICE\MSRVID	0835h	0830h	3011h	2
D:\IBM\LAN\SERVICE\MSKSTAJ	0829h	0830h	3011h	4
D:\IBM\LAN\SERVICE\MSKSTAJ	082Ah	0830h	3011h	4
D:\IBM\THIN\NAP\NPN.EXE	083Eh	0830h	3089h	2
D:\IBM\THIN\NCTRLE.EXE	083Fh	0830h	3089h	8
D:\IBM\JOB\MUG\JG8T.EXE	0836h	0830h	3011h	2
D:\NETFW\ALERT\MOR.EXE	0837h	081Eh	3019h	4
D:\NETFW\BASE.EXE	083Ah	082Fh	3017h	2

図 61. 「プロセス・マネージャー」ウィンドウ

## プロセス情報の収集

各システムまたはリモート・システムでプロセス・マネージャーを開始すると、システム上で現在アクティブなプロセスすべてに関する情報がただちに収集されます。この情報は、「プロセス・マネージャー」ウィンドウに表示されます (207ページの図 61 を参照)。各プロセスは、実行中のプロセスのタイプ (OS/2 ウィンドウまたは全画面、プレゼンテーション・マネージャーのアプリケーション、Windows のアプリケーション、32 ビット Windows のアプリケーション、NetWare ロード可能モジュール (NLM) または DOS セッション) を示すアイコンと、それに続いて各セッション・タイプに固有のデータを示します。各プロセスについて、次の情報を入手することができます。

- プログラム名 (すべてのオペレーティング・システム)  
このプロセスの名前と、プログラムのシステム上での所在を示す完全修飾パス (適用される場合には)。
- プロセス ID (OS/2、Windows、Windows 95、および Windows NT)  
プロセスのオペレーティング・システムの内部識別値。
- 親プロセスID (OS/2、Windows)  
このプロセスを開始したプロセスまたはプログラムに対するオペレーティング・システムの内部識別値。
- スレッド数 (OS/2、NetWare、および Windows NT)  
このプロセスが使用しているプログラム・スレッドの数。
- 優先度 (Windows 95 および Windows NT のみ)  
システムのプロセッサから受信したアテンションに関するプロセスの相対的な重要度。

- セッション ID (OS/2 のみ)  
このプロセスをサポートしているセッションに対するオペレーティング・システムの内部識別値。
- ユーザー ID (Windows NT のみ)  
プロセスを開始したユーザーのログオン ID。
- 説明 (NetWare のみ)  
NLM の概要。
- バージョン (NetWare のみ)  
NetWare NLM のバージョン番号。
- 日付 (NetWare のみ)  
NetWare NLM の日付。

注:

1. プロセスに関する入手可能な情報は、プロセスのタイプと、プロセスが実行されているオペレーティング・システムによって異なります。
2. OS/2 または Windows NT のもとで実行されている Windows および DOS のプロセスは、DOS セッションとして示されます。

## コマンドの実行

プロセス・マネージャーを使用して、アクセス中の Netfinity システムにコマンドを送信することができます。リモート・セッション・サービスとは異なり、プロセス・マネージャーが発行できるコマンドは一度に 1 つであるため、メッセージのフィードバックや確認を受信することはありません。

コマンドを実行するには、次のことを行います。

1. 「プロセス・マネージャー」ウィンドウの「プロセス」プルダウン・メニューから、「コマンドの実行」を選択します。
2. 「実行するコマンドを入力してください」フィールドに、このシステムで実行するコマンドを入力します。
3. 「実行」を選択してコマンドを実行します。

コマンドを実行しないで「コマンドの実行」ウィンドウをクローズするには、「取消」を選択します。

# プロセスの停止

## 重要：

プロセス・マネージャーのプロセス停止機能は、注意して使用してください。プロセス・マネージャーを使用すると、システム上で実行されているほとんどすべてのプロセスを停止することができます。プロセス・マネージャーを不用意に使用すると、データが失われて、オペレーティング・システムが停止する恐れがあります。

プロセスを停止する方法は、プロセスが実行されているオペレーティング・システムによって異なります。オペレーティング・システムについては、「システム」プルダウン・メニューの「オペレーティング・システム情報」を選択して内容を参照してください。

システム上で実行されているプロセスを停止するには、次のようにします。

1. 停止するプロセスを「プロセス・マネージャー」ウィンドウで選択します。
2. 「プロセス・マネージャー」ウィンドウのメニュー・バーで「プロセス」を選択するか、または選択したプロセスをマウス・ボタン 2 でクリックし、そのプロセスのポップアップ・メニューをオープンします。
3. システムのオペレーティング・システムに適した停止プロセスを選択します。
  - システムが OS/2 を実行している場合は、次の 3 つのプロセス停止アクションのいずれかを選択することができます。
    - 「**Ctrl+C** の送信」を選択して、Ctrl+C コマンドを選択されたプロセスに送信します。
    - 「**Ctrl+Break** の送信」を選択して、Ctrl+Break コマンドを選択されたプロセスに送信します。
    - 「プロセスの強制終了」を選択して、プロセスの強制終了コマンドを選択されたプロセスに送信します。

ほとんどのプロセスは、Ctrl+C コマンドに回答して適切にクローズします。ただし、一部のプログラムは Ctrl+C を無視するため、Ctrl+Break を使用して停止させる必要があります。プロセスが Ctrl+C または Ctrl+Break に回答しない場合は、プロセスの強制終了コマンドを使用します。プロセスの強制終了コマンドは、ほぼどのような OS/2 プロセスでも停止させます。

- システムが Windows を実行している場合は、「アプリケーションのクローズ」を選択して、選択されたプロセスを停止します。

- システムが NetWare を実行している場合は、「アンロード・モジュールの送信」を選択して、選択されたプロセスを停止します。

## プロセス・アラート

プロセス・マネージャーを使用して、指定されたプロセスが次のどれかを行った場合に Netfinity アラートを生成することができます。

- 実行の開始
- 実行の停止
- システム始動後、指定された時間内の開始に失敗

プロセスの開始、停止、または開始の失敗の際にアラートを生成するようにプロセス・マネージャーを構成するには、「プロセス」プルダウン・メニューで「プロセス・アラート」を選択します。「プロセス・アラート」ウィンドウがオープンします。「プロセス・アラート」ウィンドウの「アラート条件」フィールドには、現在構成されているすべてのプロセス・アラート条件のリストが表示されます。各「アラート条件」には、Netfinity プロセス・アラートをトリガーするプロセスの名前と、アラートを生成する条件が示されます。

「プロセス・アラート」ウィンドウで、次のことが行えます。

- プロセス・アラートの追加
- プロセス・アラートの編集
- プロセス・アラートの削除



## プロセス・アラートの追加

「プロセス・アラートの追加」ウィンドウをオープンするには、「追加」を選択します。このウィンドウを使用して、特定のプロセスが次のどれかの状態のときに Netfinity アラートを生成するように、プロセス・アラートを構成することができます。

- 実行の開始
- 実行の停止
- 指定時間内の開始に失敗

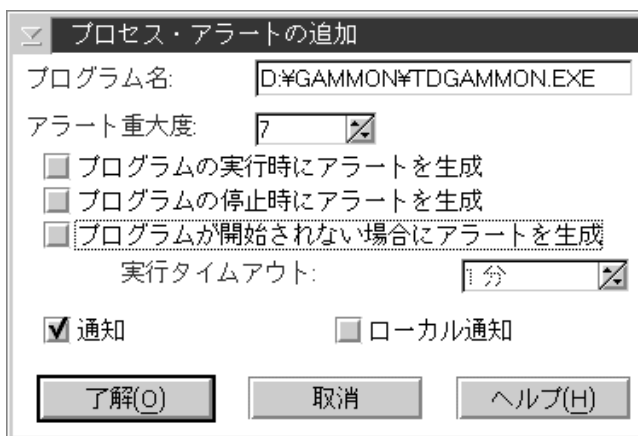


図 62. プロセス・マネージャー - 「プロセス・アラートの追加」ウィンドウ

新しいプロセス・アラートを追加するには、次のようにします。

1. 「プログラム名」フィールドに、監視するプロセスの名前を入力します。
  - 特定のディレクトリーから実行される特定のプロセスを監視する場合は、プログラムが存在する完全修飾パス (たとえば、C:\%APP%\PROGRAM.EXE) を入力します。
  - 特定の名称のプロセスを監視する場合は、プログラム名だけ (たとえば、PROGRAM.EXE) を入力します。

2. プロセス・マネージャーが生成する Netfinity アラートの重大度値を「アラート重大度」フィールドに入力します。
3. 「アラートを生成」チェック・ボックスを 1 つ (または複数) 選択します。
  - 「プログラムの実行時にアラートを生成」は、指定のプロセスが開始されたときにアラートを生成する場合に選択します。
  - 「プログラムの停止時にアラートを生成」は、指定のプロセスが停止されたときにアラートを生成する場合に選択します。
  - 「プログラムが開始されない場合にアラートを生成」は、指定のプロセスが、システム始動後の指定時間内に開始しなかったときにアラートを生成する場合に選択します。プロセス・マネージャーがアラートを生成するまでに待機する時間は、「実行タイムアウト」フィールドで指定します。
4. アラートをシステムのアラート・マネージャー (オプション) に直接転送する場合は、「通知」を選択します。

これは、選択したアラートをリモート・システム上で構成していて、プロセス・アラート用に生成されたアラートをシステムが受信するようにする場合に重要です。
5. 選択したアラートがシステム上でローカルに生成されるようにするには、「ローカル通知」を選択します (オプション)。

これは、選択したアラートをリモート・システム上で構成していて、プロセス・アラート用に生成されたアラートをそのシステムのユーザーが受信するようにする場合に重要です。
6. 「了解」を選択してこのプロセス・アラートを保管します。

変更内容を保管しないで「プロセス・アラートの追加」ウィンドウをクローズするには、「取消」を選択します。

## プロセス・アラートの編集

すでに構成されているプロセス・アラートを編集するには、次のようにします。

1. 「プロセス・アラート」ウィンドウの「アラート条件」フィールドから、編集するプロセス・アラートの名前を選択します。
2. 「編集」を選択して「プロセス・アラートの編集」ウィンドウをオープンします。
3. 選択したプロセス・アラートの構成を変更します。
4. 「了解」を選択して変更内容を保管します。

変更内容を保管しないで「プロセス・アラートの編集」ウィンドウをクローズするには、「取消」を選択します。

## プロセス・アラートの削除

すでに構成されているプロセス・アラートを削除するには、次のようにします。

1. 「プロセス・アラート」ウィンドウの「アラート条件」フィールドから、削除したいプロセス・アラートの名前を選択します。
2. 「削除」を選択します。



RAID (*Redundant Array of Independent Disks*) とは、何台かの物理記憶装置を、オペレーティング・システムにとって 1 台または複数台の物理ドライブとして認識できるように、グループ化する技術のことをいいます。RAID 技術を使用すると、RAID アレイ・ドライブを各種のデータ構成に構成することができます。これらの構成 ( *RAID レベル* と呼ばれる) には、データ保全性保護と記憶容量の各種のレベルがあります。RAID レベルの中には、データ・ミラーリングの使用によって、より高いデータ保全性を提供するものがあります。

通常の場合、ほとんどの RAID 管理作業をするには、RAID システムをオフラインにする必要があります。しかし、Netfinity の RAID マネージャー・サービスを使用すると、システムの RAID アダプター、アレイの物理ドライブ、およびアレイによって定義された仮想ドライブに関する情報を簡単に収集することができます。また、各種の重要な RAID 管理作業を、迅速かつ容易に実行することができます。これらの作業は、次のものがあります。

- 仮想ドライブの同期
- RAID 物理ドライブのフォーマットと再構築
- すべての RAID アダプター、装置、仮想ドライブ、および筐体についてのデータの収集

注:

1. RAID マネージャーを不用意に使用すると、システムおよびそのデータに重大な被害が及ぶ恐れがあります。 RAID マネージャーは、RAID アレイおよび RAID システム管理に詳しいユーザーだけが使用してください。
2. RAID マネージャーは、他の RAID 管理ユーティリティと同時に動作する設計にはなっていません。RAID マネージャーの実行中に他の RAID 管理ユーティリティを実行すると、システムが不安定になる場合があります。
3. このサービスは、サポートされている RAID アダプターがインストールされているシステムでだけ使用できます。サポートされている RAID アダプターのリストについては、537ページの付録E、『サポートされる RAID アダプター』を参照してください。

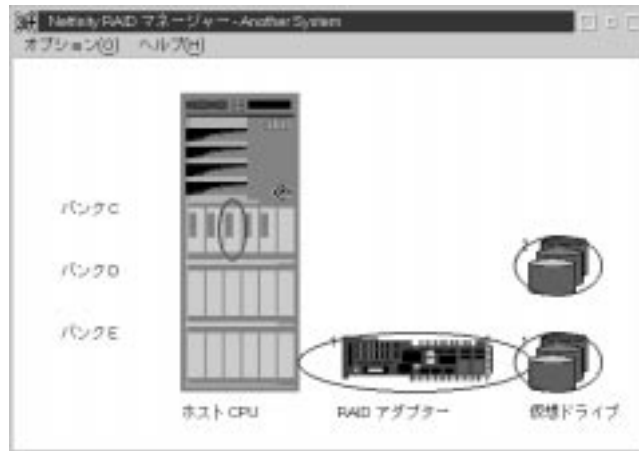


図 63. RAID マネージャー・サービス

## 「Netfinity RAID サービス」ウィンドウのオプション

「Netfinity RAID サービス」ウィンドウには、RAID システムの筐体、RAID アダプター、および仮想ディスク・ドライブがグラフィックスで表示されます。次のことができます。

- グラフィック表示のスケールの変更
- 各列に表示される仮想ドライブ数の変更
- 筐体構成の変更
- 情報の最新表示

### 表示スケールの変更

「Netfinity RAID サービス」ウィンドウに表示されるグラフィックスのスケールを変更するには、次のようにします。

1. 「オプション」プルダウン・メニューから「スケールの表示」を選択します。
2. スピン・ボタンを使用して、RAID マネージャーのグラフィックスのスケールを選択します。
3. 「了解」を選択して、この変更を有効にします。

RAID マネージャーのグラフィックスは、指定されたスケールに従ってサイズ変更されます。

### 仮想ドライブ表示の変更

列単位で表示される仮想ドライブの数を変更するには、次のようにします。

1. 「オプション」プルダウン・メニューから「仮想ドライブの表示」を選択します。
2. スピン・ボタンを使用して、各列に表示される仮想ドライブの数を選択します。
3. 「了解」を選択して、この変更を有効にします。

各列の仮想ドライブの数は、選択された値に従って調整されます。

## 筐体構成の変更

「オプション」プルダウン・メニューから「筐体の構成」を選択し、「筐体の構成」ウィンドウをオープンします (図64 を参照)。このウィンドウで次のことができます。

- 筐体の追加
- 筐体の削除
- 使用している筐体に対応するバンクおよびアダプターの構成
- 使用している筐体の各バンクごとの装置番号の構成

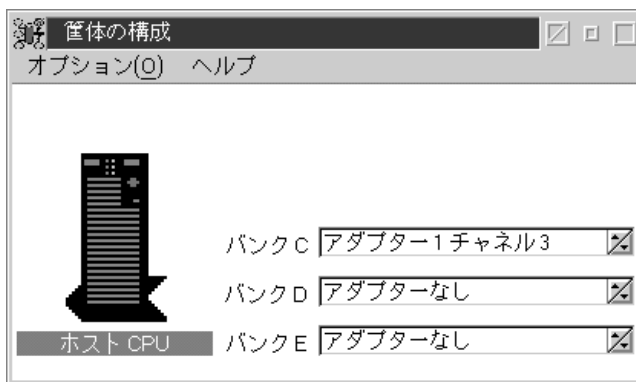


図 64. 「筐体の構成」ウィンドウ



## 筐体の追加

筐体を追加するには、次のようにします。

1. 「Netfinity RAID サービス」ウィンドウの「オプション」プルダウン・メニューから「筐体の構成」を選択します。  
「筐体の構成」ウィンドウがオープンします。
2. 「筐体の構成」ウィンドウの「オプション」プルダウン・メニューから、「筐体の追加」を選択します。  
「筐体の選択」ウィンドウがオープンします (図65 を参照)。



図 65. 「筐体の選択」ウィンドウ

3. 追加する筐体の名前を選択します。
4. 「了解」を選択します。

## 筐体の削除

筐体を削除するには、次のようにします。

1. 「Netfinity RAID サービス」ウィンドウの「オプション」プルダウン・メニューから「筐体の構成」を選択します。  
「筐体の構成」ウィンドウがオープンします。
2. マウス・ボタン 2 で、削除したい筐体を選択します。  
選択された筐体のコンテキスト・メニューがオープンします。
3. コンテキスト・メニューから「筐体の削除」を選択します。

## RAID の構成

使用している筐体で、どの RAID アダプターが、RAID ドライブのどのバンクを制御するかを指定するには、次のようにします。

1. 「Netfinity RAID サービス」ウィンドウの「オプション」プルダウン・メニューから「筐体の構成」を選択します。  
「筐体の構成」ウィンドウがオープンします。
2. 各「バンク」フィールドの横にあるスピン・ボタンを使用して、どのアダプターとチャンネルに、そのバンクを制御させるかを指定します。
3. 筐体のバンクの構成が完了したら、「筐体の構成」ウィンドウをクローズし、新しい設定を保管します。

## RAID バンクの装置番号の構成

選択されたバンク内の各 RAID 装置の装置番号を指定するには、次のようにします。

1. 「Netfinity RAID サービス」ウィンドウの「オプション」プルダウン・メニューから「筐体の構成」を選択します。  
「筐体の構成」ウィンドウがオープンします。
2. 装置番号の構成を指定したい装置を含む「バンク」フィールドからバンクを選択します。
3. 「オプション」プルダウン・メニューから「装置番号の構成」を選択します。  
「装置番号の構成」ウィンドウがオープンします (図66 を参照)。



図 66. 「装置番号の構成」ウィンドウ

4. バンク内の各装置に対応するスピン・ボタンを使用して、その装置に対する装置番号を指定します。
5. 装置番号の指定が完了したら、「装置番号の構成」ウィンドウをクローズし、新しい設定を保管します。

## RAID 情報の最新表示

「RAID マネージャー」ウィンドウに表示された、すべての情報を更新するには、「オプション」プルダウン・メニューから「最新表示」を選択します。

## RAID 情報の表示

RAID マネージャーを使用すると、RAID 筐体の構成、物理 RAID 装置、RAID アダプター、論理 RAID ドライブを含む RAID システム装置の一般情報を表示することができます。

### 筐体情報の表示

RAID マネージャーを使用すると、システムに接続されたすべての RAID 筐体に関する情報を迅速に収集できます。入手できる情報には、次のものがあります。

- 筐体モデル
- 筐体の製造元
- RAID アダプターの数
- 筐体機能

RAID 筐体についての情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 2 を使用して、調べたい筐体を選択します。筐体のコンテキスト・メニューがオープンします。
2. 筐体のコンテキスト・メニューから「筐体の表示」を選択します。

「了解」を選択して、「筐体情報」ウィンドウをクローズします。

## 物理装置情報の表示

RAID マネージャーを使用すると、RAID アレイの一部である物理装置について各種の情報を収集することができます。入手できる情報には、次のものがあります。

- 装置状況
- 装置番号
- チャンネル
- 装置タイプ
- 装置サイズ (KB)
- セクター
- 製造元
- モデル、バージョン
- シリアル番号

物理 RAID 装置についての情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 2 を使用して、調べたい装置を選択します。アダプターのコンテキスト・メニューがオープンします。
  2. 装置のコンテキスト・メニューから「装置の表示」を選択します。
- 「了解」を選択して、「標準装置情報」ウィンドウをクローズします。

## 一般アダプター情報の表示

RAID マネージャーを使用すると、インストールされているすべての RAID アダプターに関する情報を迅速に収集できます。入手できる情報には、次のものがあります。

- アダプター識別子
- アダプター・スロット
- 使用可能なバス
- 構成装置
- デバイス装置 I/O
- ホスト・バス
- アダプター状況
- 製造元
- モデル
- シリアル番号 (利用可能な場合)

RAID アダプターについての情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 2 を使用して、調べたいアダプターを選択します。アダプターのコンテキスト・メニューがオープンします。
2. 「アダプターの表示」を選択します。
3. 「一般情報」を選択します。

「了解」を選択し、「アダプター情報」ウィンドウをクローズします。

## アダプター固有情報の表示

RAID マネージャーを使用すると、インストールされているすべての RAID アダプターに関する、より詳細な情報を迅速に収集できます。入手できるアダプター固有情報には、次のものがあります。

- ストライプ・サイズ
- 再構築制御
- パリティ記憶域
- 先行読み取り

アダプター固有情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 2 を使用して、調べたいアダプターを選択します。アダプターのコンテキスト・メニューがオープンします。
2. 「アダプターの表示」を選択します。
3. 「特定情報」を選択します。

「了解」を選択して、「アダプター特定情報」ウィンドウをクローズします。

## 仮想ドライブ情報の表示

RAID マネージャーを使用すると、RAID アダプターで定義されているすべての仮想ドライブに関する情報を迅速に収集できます。入手できる情報には、次のものがあります。

- 仮想ドライブ番号
- 仮想ドライブ・サイズ
- 仮想ドライブ状況
- 仮想ドライブ RAID レベル
- 仮想ドライブ書き込みポリシー

仮想ドライブに関する情報を表示するには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 2 を使用して、調べたい仮想ドライブを選択します。仮想ドライブのコンテキスト・メニューがオープンします。
2. 「仮想ドライブ情報の表示」を選択します。

「了解」を選択して、「仮想ドライブ情報」ウィンドウをクローズします。

## RAID 装置の管理

RAID マネージャーを使用すると、RAID アレイを構成している記憶装置を管理することができます。RAID マネージャーを使用して、次のことを行うことができます。

- 装置の追加
- 装置の除去
- 装置の置換
- 装置の再構築
- 別の装置への再構築
- 装置の停止
- 装置のスタンバイに設定
- 装置をホット・スペアに設定

上記の RAID 装置管理機能のいずれかを実行するには、マウス・ボタン 2 を使用して、「Netfinity RAID サービス」ウィンドウから RAID 装置を選択した後、選択した装置のポップアップ・メニューから RAID 管理機能を選択します。

## RAID アダプター構成のバックアップ

RAID マネージャーを使用すると、RAID アダプターの構成のバックアップをとることができます。RAID アダプターの構成のバックアップをとるには、次のようにします。

1. マウス・ボタン 2 を使用して、バックアップをとりたいアダプターを選択します。
2. アダプターのコンテキスト・メニューから「アダプター機能」を選択し、「構成のバックアップ」を選択します。
3. フォーマット済みの空のディスクを挿入し、「了解」を選択します。

## RAID 仮想ドライブの管理

RAID マネージャーを使用すると、さまざまな仮想ドライブ・パラメーターを変更することができます。次の論理ドライブ管理オプションを使用することができます。

- 仮想ドライブの同期

### 仮想ドライブの同期

RAID レベル 1 または RAID レベル 5 の仮想ドライブのパリティ情報を再計算する場合は、「同期」を選択します。ドライブ上のデータは変更されません。



## 第15章 リモート・セッション

リモート・セッションを使用して、クライアント・システムとの間で完全にアクティブなリモート・コマンド・ライン・ウィンドウ・セッションを確立することができます。「リモート・セッション」ウィンドウでは、リモート・システム上のオペレーティング・システムで使用可能なすべてのコマンドライン機能が使用でき、重要なリモート・システムの管理および障害追及などに使用することができます。

注:

1. リモート・セッションは、標準のテキストだけを戻します。リモート・システムでグラフィック・アプリケーションを始動させるコマンドを入力すると、リモート・セッションは“ハング”したような状態になります。このような場合は、「リモート・セッション」ウィンドウをクローズしてからやり直してください。
2. リモート・セッションはリモート専用 サービスです。このサービスは、リモート・システムにアクセスしている場合にだけ使用可能です。リモート・セッション・サービス・オブジェクトは、ローカルのサービス・マネージャー・ウィンドウでは表示されません。
3. リモート NetWare サーバーにアクセスする場合、リモート・セッションの操作方法が多少異なります。詳細については、231ページの『NetWare システムでのリモート・セッション』を参照してください。



図 67. リモート・セッション

# OS/2 システムおよび Windows システムでのリモート・セッション

Netfinity クライアント・サービスの OS/2 版、Windows 版、Windows 95 版、または Windows NT 版が稼働しているシステムに対してリモート・セッション機能を使用している場合は、すべてのローカル・キーストロークは、リモート・システムに渡されます。ただし、キーストロークの組み合わせのいくつかは、ユーザーのローカル・システムで使用することができます。これらの組み合わせは次のとおりです。

キーストローク	結果
<b>[Alt+Esc]</b>	次のオープン・ウィンドウ、全画面セッション、またはデスクトップで最小化されているオブジェクトに切り替えます。
<b>[Alt+Shift+Tab]</b>	デスクトップ・ウィンドウを活動状態にします。
<b>[Ctrl+Alt+Del]</b>	ローカル・システムのオペレーティング・システムを再起動します。
<b>[Ctrl+Esc]</b>	ウィンドウ・リストをローカル・システムに表示します。
<b>Print Screen</b>	OS/2 が実行されている場合は、リモート・ウィンドウの内容をデフォルトのローカル・プリンターでプリントします。Windows 95 または Windows NT が実行されている場合は、ウィンドウの内容をクリップボードにコピーします。

注: これらのキーストロークの組み合わせがリモート・システムに与える影響は、リモート・システムのオペレーティング・システムによって異なります。

リモート・セッションにおける上記以外のキーストロークは、リモート・システムのデフォルト・コマンド・シェルで入力されたキーストロークと同等に取り扱われます。リモート・システムで OS/2 または Windows NT が稼働している場合は、デフォルト・コマンド・シェルは CMD.EXE です。リモート・システムで Windows 3.1 または Windows 95 が稼働している場合は、デフォルト・コマンド・シェルはリモート・システムの DOS COMMAND.COM です。詳細については、OS/2 の *ユーザーズ・ガイド* または Windows の *ユーザーズ・ガイド* を参照してください。

## NetWare システムでのリモート・セッション

リモート・セッションを使用して、リモート NetWare サーバーのシステム・コンソールを使用することができます。この機能は、NetWare に含まれている RCONSOLE.EXE ユーティリティのリモート・コンソール機能に似ています。リモート・セッションを使用してリモートで NLM をロードおよびアンロードしたり、現在使用可能なすべての画面の状況をチェックしたりすることができます。

リモート・セッションは、すべての標準英数字キーストロークをリモート NetWare サーバーに渡します。しかし、キーの組み合わせは、次のものだけが渡されます。

**Alt+F3**                      次の NetWare 画面に切り替えます。数字キーパッドの "+" キーと同じ機能です。

**Alt+F4**                      前の NetWare 画面に切り替えます。数字キーパッドの "-" キーと同じ機能です。

注: リモート・セッションは、通常は NetWare の「カレント スクリーン」リストを呼び出す Ctrl+Esc キーストロークを渡すことができません。リモート・セッションでは、「カレント スクリーン」リストにアクセスできません。



## 第16章 リモート・システム・マネージャー

---

Netfinity リモート・システム・マネージャーを使用して、ネットワーク内のシステムにインストールされている Netfinity サービスにリンクし、これにリモート・アクセスをすることができます。

リモート・システムは、システム・グループに分けられます。たとえば、ネットワーク管理者は、ソフトウェア開発者が使用するすべてのシステムをまとめるために、“開発”という名前のシステム・グループを作成することができます。

その後で、非公式のシステム名 (たとえば、“John's System”)、ネットワーク・タイプ (NetBIOS、IPX、および TCP/IP など、システムによってサポートされる構成済みの通信プロトコル)、およびシステムのネットワーク・アドレスを使用して、これらのシステム・グループに個々のシステムを追加します。

リモート・システム・マネージャーは、キーワードによる検索処理機能があります。この検索処理は、事前に割り当てられたキーワードを使用してネットワーク上の Netfinity システムを識別します。検索処理を使用すると、これらのキーワードだけに基づいて、システム・グループに複数のシステムを追加することができます。ユーザー定義のキーワードに加えて、Netfinity には多くの自動的に定義されるキーワードがあり、システムの編成を単純化することができます。バージョン 5.0 またはそれ以上の Netfinity マネージャーまたは Netfinity クライアント・サービスを実行しているシステムは、特定のシステム構成、所定の通信プロトコルまたはオペレーティング・システムの使用、および所定の Netfinity サービスの可用性を記述する定義済みのキーワード文字列に自動的に応答します。自動的に定義されるキーワードの詳細については、250ページの『自動的に定義されるキーワード』を参照してください。キーワードの割り当ておよび検索処理の詳細については、266ページの『検索処理の使用』を参照してください。

リモート・システムがラック支持ユニット (IBM PC Server ラックなど) に設置されている場合は、指定したサーバー・ラック・ユニットに取り付けられているシステムだけを含むラック・グループを定義することができます。ラック・グループは、ラック構成ファイル (\*.rk\$ ファイル拡張子をもつファイル。このファイルはラック支持システムのすべてのハード・ディスクのルート・ディレクトリーにある必要があります) に含まれる情報を使用して、関連した特定のラック固有の情報をもつシステムだけをグループに選択的に追加します。ラック構成ファイルは、PC Server ラック・コンフィギュレーターなどのシステム構成プログラムを使用、またはテキスト・エディターを使用して作成することができます。ラック・グループの定義に使用できるラック固有の情報には、ラック名、ラック ID、ラック組名、ラック組 ID、ラック集合名、ラック集合 IDなどがあります。詳細については、239ページの『ラック・グループの作成』を参照してください。

ネットワークのクラスター構成内に Windows NT Server 4.0 Enterprise Edition が稼働している場合は、指定されたクラスターだけを含んだシステムのクラスター・グループを定義することができます。各クラスターには、それぞれ固有のクラスター名が必要であり、クラスターを構成するシステムは、この固有のクラスター名を使用して識別および検出されます。詳細については、242ページの『クラスター・グループの作成』を参照してください。

## システム、ラック、およびクラスター・グループ

リモート・システム・マネージャーは、すべての Netfinity リモート・システムをグループに編成します。システム・グループ、ラック・グループ、およびクラスター・グループの3つのタイプのグループが使用できます。

システム・グループは、リモート・システム・マネージャーによって、アクセス、管理、および監視できるネットワーク接続された個々のシステムのグループです。個々のシステムは、次の2つの方法のどちらかを使用してシステム・グループに追加することができます。

- システム名、ネットワーク・アドレス、およびネットワーク・タイプの入力
- 割り当て済みのシステム・キーワードを使用した検索処理

ラック・グループとは、IBM PC Server ラックなどのラック支持ユニットに設置されているシステムのグループのことです。ラック支持システムは、ラック構成ファイルを含むように構成することができます。このファイルは、ラック名、ラック内のシステムの位置、ラックがその一部となっているラック集合組の名前などに関する情報を含んでいます。Netfinity がインストールされているシステムにこのファイルが存在している場合は、Netfinity はこのファイルに含まれている情報を使用して、ユーザー定義のラック・グループ内でラック支持システムを識別し、それらをグループ化します。ラック・グループを使用して、ラック支持ユニットに含まれるように構成されたシステムだけがグループに現れるように指定することができます。そうでない場合には、ラック・グループに含まれるシステムは、システム・グループに含まれるグループとまったく同じように作動します。

クラスター・グループとは、クラスター構成内に Windows NT Server 4.0 Enterprise Edition が稼働しているシステムのグループです。クラスター内のシステムは、すべてが共通の固有クラスター名を使用して、自らが特定のクラスターの一部であることを識別します。クラスター・グループを使用すると、特定のクラスターに組み込まれるように構成されているシステムだけが、グループ内に表示されるように指定することができます。そうでない場合には、クラスター・グループに含まれるシステムの振舞いは、システム・グループに含まれるシステムの場合とまったく変わりません。

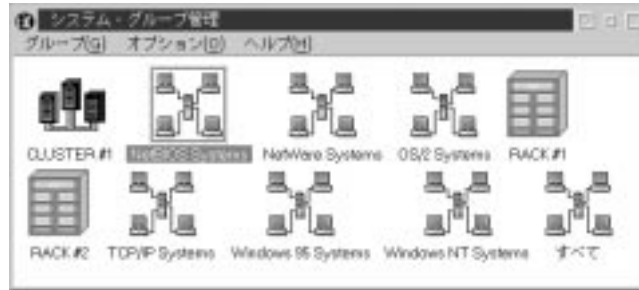


図 68. リモート・システム・マネージャー - 「システム・グループ管理」ウィンドウ



## システム・グループの作成

システム・グループは、必要に応じて必要な数だけ作成することができます。各システム・グループには固有のユーザー定義名があり、さらに検索処理の実行中にリモート・システムの追加を制御するための固有のシステム検索条件およびシステム・グループ・キーワードを指定することができます。システム・グループの名前はユーザーが参照するためのものであり、リモート・システム・マネージャーの機能には影響を与えません。システム検索条件については、266ページの『検索処理の使用』で詳細に説明します。

システム・グループを作成するには、次のようにします。

1. Netfinity サービス・マネージャー内のリモート・システム・マネージャー・オブジェクト（アイコン）を選択して、リモート・システム・マネージャーを始動します。
2. 「システム・グループ管理」ウィンドウの「グループ」プルダウン・メニューで「グループの追加」オプションを選択します。
3. システム・グループの名前を「グループ名」フィールドに入力します。

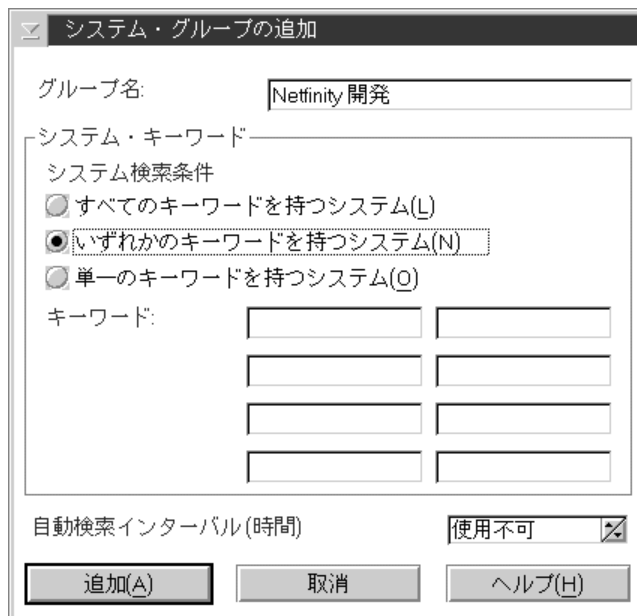


図 69. リモート・システム・マネージャー - 「システム・グループの追加」ウィンドウ

4. 「システム検索条件」を選択します。次の 3 つの選択項目から選択します。
  - すべてのキーワードを持つシステム
  - いずれかのキーワードを持つシステム
  - 単一のキーワードを持つシステム
5. 1 つまたは複数のキーワードを入力します。このキーワードによって、作成するシステム・グループに追加されるリモート・システムが決定します。
6. 自動検索インターバル (オプション) を指定します。自動検索の時間間隔を指定するには、「自動検索インターバル」フィールドのわきにあるスピン・ボタンを使用します。自動検索を使用すると、システム・グループに新しい Netfinity システムを自動的に追加することができます。自動検索は、デフォルトでは使用不可になっています。
7. システム・グループを作成するために「追加」を選択します。「システム・グループ管理」ウィンドウに戻ります。指定したシステム・グループ名を持つシステム・グループのオブジェクトが「システム・グループ管理」ウィンドウに表示されます。

次に、リモート・システムをシステム・グループに追加する必要があります。これは、2 つの方法のどちらかで行うことができます。つまり、個々のシステムを追加することも、リモート・システム・マネージャーの検索処理を使用して、システム・グループのシステム検索条件を満たす、すべてのリモート・システムを追加することもできます。個々のシステムを追加する場合は、243ページの『システム・グループまたはラック・グループへの個々のシステムの追加』を参照してください。検索処理を使用してシステムを追加する場合は、244ページの『検索処理による複数システムの追加』を参照してください。

## ラック・グループの作成

ラック・グループは、必要に応じて任意の数だけ作成することができます。それぞれのラック・グループには、独自のユーザー定義の名前があり、1 つまたは複数のラック固有の識別子を含むことができます。これらの識別子を使用して、検索処理の実行中にリモート・システムの追加を制御するために使用することができます。ラック・グループには、識別子に一致するラック支持ユニットだけが含まれます。ラック・グループの名前はユーザーが参照するためのものであり、リモート・システム・マネージャーの機能には影響を与えません。システム検索条件については、266ページの『検索処理の使用』で詳細に説明します。

ラック・グループを作成するには、次のようにします。

1. Netfinity サービス・マネージャー内のリモート・システム・マネージャー・オブジェクト (アイコン) を選択して、リモート・システム・マネージャーを始動します。
2. 「システム・グループ管理」ウィンドウの「グループ」プルダウン・メニューで「ラック・グループの追加」オプションを選択します。
3. ラック・グループの名前を「グループ名」フィールドに入力します。
4. 1 つまたは複数のラック属性を指定します。

それぞれのラック属性は、ラック構成ファイル内の項目に対応しています。ラック構成ファイルは、\*.rk\$ の拡張子をもつファイルです。このファイルは、ラック支持ユニットのすべてのハード・ディスク・ドライブのルート・ディレクトリにある必要があります。このファイルは、システムが取り付けられているラックに関する情報を含んでおり、構成ファイル生成プログラム (PC Server ラック・コンフィギュレーターなど) を使用、またはテキスト・エディターを使用して、ファイル内に 1 つまたは複数のラック属性定義を配置することによって作成することができます。

次のラック属性を使用することができます。

**ラック名** ラック・グループに関連したラックに対して定義される名前の文字列。この属性は、システム上のラック構成ファイル内の

```
RACKNAME="name"
```

項目に対応します。

**ラック ID** ラック・グループに関連したラックに対して定義される ID の文字列。この属性は、システム上のラック構成ファイル内の

```
RACKID=ID_number
```

項目に対応します。

**ラック・セット名**

ラック・グループに関連したラック・セットに対して定義される名前の文字列。この属性は、システム上のラック構成ファイル内の

```
SUITENAME="name"
```

項目に対応します。

**ラック・セット ID**

ラック・グループに関連したラック・セットに対して定義される ID の文字列。この属性は、システム上のラック構成ファイル内の

```
RACKSUITE=ID_number
```

項目に対応します。

**ラック集合名**

ラック・グループに関連したラック集合に対して定義される名前の文字列。この属性は、システム上のラック構成ファイル内の

```
COLLECTIONNAME="name"
```

項目に対応します。

**ラック集合 ID**

ラック・グループに関連したラック集合に対して定義される ID の文字列。この属性は、システム上のラック構成ファイル内の

```
SUITECOLLECTION=ID_number
```

項目に対応します。

すべての定義済みのラック属性が一致するシステムだけを、ラック・グループに追加することができます。

5. 自動検索インターバル (オプション) を指定します。自動検索の時間間隔を指定するには、「自動検索インターバル」フィールドのわきにあるスピン・ボタンを使用します。自動検索を使用すると、システム・グループに新しい Netfinity システムを自動的に追加することができます。自動検索は、デフォルトでは使用不可になっています。
6. ラック・グループを作成するには、「追加」を選択します。「システム・グループ管理」ウィンドウに戻ります。指定したラック・グループ名をもつラック・グループのオブジェクトが「システム・グループ管理」ウィンドウに表示されます。

## クラスター・グループの作成

クラスター・グループは、必要な数だけ作成することができます。各クラスター・グループにはそれぞれ固有のユーザー定義名があり、固有のクラスター名を使用して、検索処理の実行中にリモート・システムの追加を制御するために使用することができます。クラスター・グループに組み込まれるのは、固有のクラスター名に一致する、クラスター構成されたシステムだけです。クラスター・グループの名前は、ユーザーが参照するためのものであり、リモート・システム・マネージャーの機能には影響を与えません。システム検索条件については、266ページの『検索処理の使用』で詳細に説明します。

クラスター・グループを作成するには、次のようにします。

1. Netfinity サービス・マネージャー内のリモート・システム・マネージャー・オブジェクト（アイコン）を選択して、リモート・システム・マネージャーを始動します。
2. 「グループ」プルダウン・メニューの「クラスタ グループの追加」オプションを選択します。
3. クラスター・グループの名前を選定し、それを「グループ名」フィールドに入力します。
4. クラスターに組み込まれているすべてのシステムで使用される固有のクラスター名を「クラスタ名」フィールドに入力します。  
クラスター・グループに追加できるのは、固有の名前が付いているクラスター内のシステムだけです。
5. 自動検索インターバル（オプション）を指定します。自動検索の時間間隔を指定するには、「自動検索インターバル」フィールドのわきにあるスピン・ボタンを使用します。自動検索を使用すると、システム・グループに新しい Netfinity システムを自動的に追加することができます。自動検索は、デフォルトでは使用不可になっています。
6. 「追加」を選択し、クラスター・グループを作成します。「システム・グループ管理」ウィンドウに戻ります。指定したクラスター・グループ名のクラスター・グループ・オブジェクトが「システム・グループ管理」ウィンドウに表示されません。

## システム・グループまたはラック・グループへの個々のシステムの追加

システム・グループに個々のリモート・システムを追加するには、次のようにします。

1. システム・グループをオープンします。

個々のシステムの追加先となるシステム・グループをダブルクリックします。

2. 「システム」プルダウン・メニューで「システムの追加」を選択します。
3. システム名を「システム名」フィールドに入力します。この名前は、ユーザーが参照するためだけに使用されます。
4. 「ネットワーク・アドレス」フィールドにリモート・システムのネットワーク・アドレスを入力します。これは、使用するネットワーク・プロトコルのネットワーク・アドレスである必要があります。
5. 「ネットワーク・タイプ」選択リストにサポートされるネットワーク・プロトコルの中から、「ネットワーク・タイプ」を選択します。
6. 入力した情報に誤りがないことを確認してから、「追加」を選択してシステムをシステム・グループに追加します。これによって、「システムの追加」ウィンドウがクローズされ、「グループ」ウィンドウに戻ります。このシステムを表すオブジェクトが「グループ」ウィンドウに追加されています。システムがオンラインになっていない場合は、オブジェクトは薄いグレーで示されます。システムがオンラインになっている場合は、オブジェクトをダブルクリックすることによって、そのシステムにアクセスすることができます。

「グループ」ウィンドウは、2種類の表示方法があり「グループ」ウィンドウの「表示」プルダウン・メニューで選択することができます。詳細については、253ページの『グループの表示設定』を参照してください。

## 検索処理による複数システムの追加

リモート・システム・マネージャーの検索処理を使用して複数のシステムをシステム・グループに追加するには、次のようにします。

1. システム・グループをオープンします。

個々のシステムの追加先となるシステム・グループをダブルクリックします。

2. 「システム」プルダウン・メニューから「システムの検索」を選択します。

「システムの検索」が選択されると、Netfinity リモート・システム・マネージャーは、使用可能な通信ドライバーを使用し、ネットワークを介して短いメッセージを送信します。このメッセージは、ネットワーク上の該当するキーワードをもつすべてのNetfinity システムに対して、応答するように指示します。

該当するキーワードをもつリモート・システムが、検索処理を開始したシステムに対して応答を送信します。この応答には、システム・グループに個々のシステムを追加するために必要なすべての情報 (システム名、ネットワーク・アドレス、およびネットワーク・タイプ) が含まれています。その後で、個々のリモート・システムがシステム・グループに自動的に追加されます。それぞれのリモート・システムを表すオブジェクトがシステム名のアルファベット順にソートされて、「システム・グループ」ウィンドウに表示されます。このプロセス全体の所要時間は、約 45 秒です。

検索処理については、266ページの『検索処理の使用』で詳しく説明します。

「グループ」ウィンドウは、2種類の表示方法があります。これらは、その「グループ」ウィンドウの「表示」プルダウン・メニューで選択することができます。詳細については、253ページの『グループの表示設定』を参照してください。



## リモート TCP/IP サブネットでの検索システム

TCP/IP プロトコル・ドライバーを使用している場合は、リモート・システム・マネージャは、TCP/IP を使用してその TCP/IP サブネット上のリモート Netfinity システムだけを検索します。他の TCP/IP サブネット内の Netfinity システムを検索したい場合は、TCPADDR.DSC という名前のテキスト・ファイルを Netfinity ディレクトリーに作成する必要があります。このファイルには、次のフォーマットの情報が含まれている必要があります。

```
tcpipaddress subnetmask
```

*tcpipaddress* は、リモート・サブネット内にある 1 つの Netfinity システムの数値 TCP/IP アドレスで、*subnetmask* は、リモート・サブネットの TCP/IP サブネット・マスクです。たとえば、次のようになります。

```
200.100.50.25 255.255.240.0
```

TCP/IP アドレスとサブネット・マスクの間にあるスペースは必須です。TCPADDR.DSC には、複数のサブネット項目を含めることができます。

## SNA を使用しての他のシステムの検索

SNA プロトコルは、TCP/IP、NetBIOS、および IPX のようなメッセージの同報通信はサポートしていません。SNA を使用して他のリモート・システムと通信するシステムでは、SNA スタックがリモート・システムの SNA 固有のアドレスで構成されている必要があります。そのため、システムが SNA プロトコルを使用してリモート・システムと通信している場合、検索プロセスは、SNA スタックが通信するように構成されているリモート・システムだけを検索します。SNA スタックの構成の詳細については、SNA スタックに付属する説明書を参照してください。

## 動的アドレス・オプション

動的アドレス・オプションは、時間がたつと変化するネットワーク・アドレスをもつシステムの取り扱いを制御します。たとえば、TCP/IP アドレスを取得するために DHCP (Dynamic Host Configuration Protocol) プロトコルを使用するシステムでは、ネットワークに接続する際に別のアドレスが割り当てられることがよくあります。そうではないシステムでは、物理的な位置が変更される、または新しいネットワーク・アダプターがインストールされる場合に新しいアドレスが割り当てられます。

デフォルトでは、動的アドレッシングは使用不可になっています。動的アドレッシングが使用不可になっていると、システムはそのネットワーク・アドレスを使用して追跡されます。そのため、(DHCP などを使用して) システムのアドレスが変更されると、システムの識別や管理が正しく行われな場合があります。ただし、動的アドレッシングが使用可能になっている場合は、リモート・システム・マネージャーは、システム固有 ID (Netfinity のインストール時にシステムに割り当てられるランダムな 16 文字の識別文字列) を使用して、アドレスの変更に応じてシステムを追跡します。これによって、リモート・システム・マネージャーは、アドレスまたは位置がどのように変更されてもシステムを正しく識別および管理することができます。

注: システム固有 ID は、Netfinity ディレクトリーの NFUNIQUE.ID ファイルに格納されています。リモート・システム・マネージャーが動的アドレッシング・サポートを使用してシステムを見つけたり管理している場合は、システム固有 ID を変更しては*いけません*。Netfinity を再インストールする場合は、必ず NFUNIQUE.ID file ファイルを保管し、再インストールの終了後、Netfinity ディレクトリーにコピーするようにします。そうしないと、リモート・システム・マネージャーがすでに存在しているシステム・オブジェクトによって、システムを正しく識別することができなくなります。

Netfinity の動的アドレッシング・サポートが使用可能になっている場合においても、リモート・システム・マネージャーは、システムに対する PING および検索を通常通り続行します。ただし、通常 PING はシステムのアドレスに直接送信されるため、システムのアドレスが頻繁に変更される場合 (たとえば、システムが、DHCP を使用する場合など) には、効果的ではありません。この問題には、Netfinity の動的 PING サポートを使用可能にすることによって対処します。

動的 PING は、システムのアドレスを変更した場合に、以前に検索されたシステムをリモート・システム・マネージャーが検出する機能を大きく改善します。これは、同報通信メッセージを周期的に送信して、リモート・システム・マネージャーが以前に検索したが、ネットワーク上で検索できないシステムからの応答を要求することによって行われます。これは、検索要求と似ていますが、欠落している特定のシステムだけ (検索要求に一致するすべてのシステムではなく) が要求に応答するため、より効率的です。このような要求の頻度は、「動的 ping インターバル」の設定によって制御します。

Netfinity の動的アドレッシング・サポートを使用可能にしたり、構成するには、次のようにします。

1. 「システム・グループ管理」ウィンドウの「オプション」メニューで「動的アドレス・オプション」を選択します。
2. 「動的アドレス使用可能」を選択して、Netfinity の動的アドレッシング・サポートをアクティブにします。
3. 「動的 PING 使用可能」オプションを選択して、Netfinity の動的 PING サポートをアクティブにします。

動的 PING サポートが機能するには、動的アドレッシング・サポートが使用可能になっている必要があります。

4. 「動的 PING インターバル」を指定します。

動的 PING インターバルは、動的 PING 検索の時間間隔 (分) です。スピン・ボタンを使用して、時間を設定します。

5. 「了解」を選択します。

## グループ検索フィルターの使用

リモート・システム・マネージャーを使用して、指定されたオペレーティング・システムまたは通信プロトコルを使用しているシステムだけを検索することができます。これは、グループ検索フィルターを使用して行うことができます。システム・グループのどれかにグループ検索フィルターを適用すると、指定されたオペレーティング・システムのどれか、および指定された通信プロトコルのどれかを使用しているシステムだけが、検索処理によってそのグループに追加されます。

システム・グループの 1 つに検索フィルターを適用するには、次のようにします。

1. 「システム・グループ」のポップアップ・メニューをオープンします。

マウス・ボタン 2 を使用してグループをクリックし、そのグループのポップアップ・メニューをオープンします。

2. 「グループ検索フィルター」を選択します。

「グループ検索フィルター」を選択すると、「グループ検索フィルター」ウィンドウが表示されます (図70を参照)。



図 70. リモート・システム・マネージャー - 「グループ検索フィルター」ウィンドウ

3. 「選択されたプロトコルを使用中のシステムを検索」 リストから、1 つまたは複数の通信プロトコルを選択します。

デフォルトでは、選択可能なすべての通信プロトコルが選択されます。

4. 「選択されたオペレーティング・システムを実行中のシステムを検索」 リストから、1 つまたは複数のオペレーティング・システムを選択します。

デフォルトでは、選択可能なすべてのオペレーティング・システムが選択されます。

5. 「保管」 を選択して選択内容を保管し、グループ検索フィルターを適用します。

グループ検索フィルターを適用すると、システムが選択された通信プロトコルのどれか、および選択されたオペレーティング・システムのどれかをシステムが使用していて、さらに必要なシステム・キーワードを備えている場合にだけ、検索処理によって該当するシステムがシステム・グループに追加されます。

## 自動的に定義されるキーワード

Netfinity マネージャー または Netfinity クライアント・サービス バージョン 5.0 またはそれ以上が稼働しているシステムでは、インストール時に定義されるキーワードの他に使用できるキーワードをサポートします。これらのキーワードを使用すると、特定のハードウェアを備えているか、指定された通信プロトコルまたはオペレーティング・システムを使用しているか、指定されたソフトウェア・プロダクトがインストールされているか、または特定の Netfinity サービスが使用可能になっているシステムだけに、検索を限定することができます。このような自動的に定義されるキーワードのリストを、次に示します。

キーワード	キーワードが追加されるためのリモート・システム側の条件
<b>NF:WAKEUP</b>	Wake-on-LAN 機能が使用可能になっている  Wake-on-LAN 構成の詳細については、615ページの付録K、『Wake-On-LAN システムのトラブルシューティング』を参照してください。
<b>NF:SERVER</b>	ファイル・サーバーであると表示される
<b>NF:MANAGER</b>	Netfinity マネージャーである
<b>OS:NETWARE</b>	Novell NetWare サーバーである
<b>OS:OS2</b>	OS/2 が稼働している
<b>OS:WIN_NT</b>	Windows NT が稼働している
<b>OS:WINDOWS</b>	Windows または Windows 95 が稼働している
<b>PROTO:NETBIOS</b>	NetBIOS プロトコル・ドライバーが使用可能になっている
<b>PROTO:IPX</b>	IPX プロトコル・ドライバーが使用可能になっている
<b>PROTO:TCPIP</b>	TCP/IP プロトコル・ドライバーが使用可能になっている
<b>PROTO:SERIPC</b>	Netfinity シリアル・ドライバーが使用可能になっている
<b>PROTO:SNA_APPC</b>	SNA プロトコル・ドライバーが使用可能になっている

<b>SVC:ProfileBase</b>	システム・プロファイル・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:Gatherer3.0</b>	システム情報ツール・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:SCH_BASE_NODE</b>	イベント・スケジューラー・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:PFAServiceBase</b>	事前障害分析サービスが使用可能になっている
<b>SVC:RAID_BASE</b>	RAID マネージャー・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:SecMgr</b>	安全保護マネージャー・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:DMIBrowserBase</b>	DMI ブラウザー・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:AlertMgr</b>	アラート・マネージャー・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:MonSvc</b>	システム・モニター・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:ScreenID</b>	スクリーン・ビュー・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:PartionBase</b>	システム区画アクセス・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:ECCMemory</b>	ECC メモリー・セットアップ・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:FileBase</b>	ファイル転送サービスが使用可能になっている
<b>SVC:NetMgr</b>	リモート・システム・マネージャー・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:ShriekerServiceBase</b>	電源オン・エラー検出サービスが使用可能になっている
<b>SVC:SerialBase</b>	シリアル制御サービスが使用可能になっている
<b>SVC:ProcMgr</b>	プロセス・マネージャー・サービスが使用可能になっている

<b>SVC:SoftInvB</b>	ソフトウェア・インベントリ・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:CFMBase</b>	クリティカル・ファイル・モニター・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:WebFin</b>	Web マネージャー・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:RCSHD</b>	リモート・セッション・サービスが使用可能になっている
<b>SVC:CAPMGT</b>	キャパシティー管理サービスが使用可能になっている
<b>SVC:RWCService</b>	リモート・ワークステーション制御サービスが使用可能になっている。
<b>SVC:DiagMgr</b>	システム診断マネージャー・サービスが使用可能になっている。
<b>SVC:SCFMgr</b>	サービス構成マネージャー・サービスが使用可能になっている。
<b>SVC:ServiceProcessorBase</b>	システム管理サービスが使用可能になっている。
<b>SVC:UpdateConnector</b>	Update Connector マネージャー・インターフェースが使用可能になっている。
<b>SVC:Update Connector Client</b>	Update Connector マネージャー・インターフェースまたはクライアントが使用可能になっている。
<b>APP:appkey</b>	アプリケーション・キーワード <i>appkey</i> をもつアプリケーションが存在する (アプリケーション・キーワードの詳細については、390ページの『アプリケーション・キーワードの使用』を参照)。



注:

1. キーワードの大文字と小文字は区別されるので、検索するリモート・システムに対して正確に一致する必要があります。
2. Netfinity サービスが使用可能と見なされるのは、サービスの基本プログラムがリモート・システムにインストールされている場合です。ただし、リモート・ユーザーは安全保護マネージャーを構成して、指定したユーザー ID/ パスワードの組み合わせをもつユーザーにだけ、サービスへのアクセスを許可することができます。したがって、使用可能であると見なされたサービスが、必ずしもアクセス可能であるとは限りません。

## グループの表示設定

システム・グループにシステムを追加した後で、システム・グループの表示の設定を選択することができます。使用可能な表示の設定は次の 2 つです。

- アイコン表示

アイコン表示設定の詳細については、254ページの『アイコン表示』を参照してください。

- 詳細表示

詳細表示設定の詳細については、255ページの『詳細表示』を参照してください。

## アイコン表示

アイコン表示では、各システムは、そのシステムを表す大きなアイコンで表示されま  
す。システム名はアイコンの下に表示されます (図71を参照)。リモート・システム  
がサーバー・ソフトウェア (Novell NetWare や IBM OS/2 LAN サーバーなど) を  
実行している場合は、システム名の下に(サーバー)と表示されます。 リモート・シ  
ステムでNetfinity マネージャーが稼働している場合は、システム名の下に (マネ  
ージャー) と表示されます。すべてのシステムは、システム名でアルファベット順にソ  
ートされています。

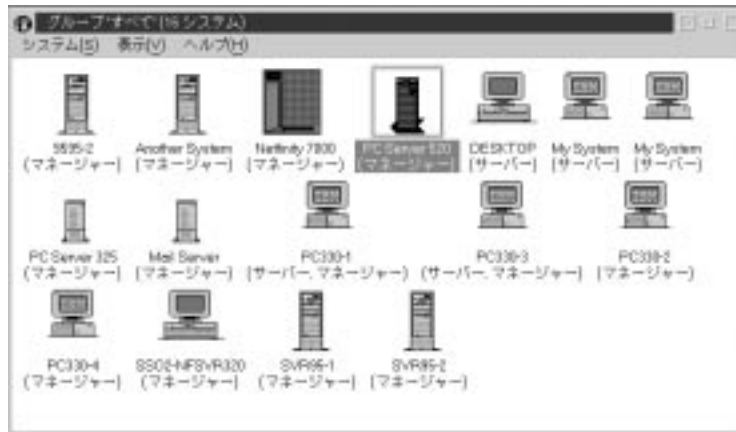


図 71. リモート・システム・マネージャー - 「グループ」ウィンドウ、アイコン表示

アイコン表示を選択するには、次のようにします。

1. システム・グループをオープンします。  
個々のシステムの追加先となるシステム・グループをダブルクリックします。
2. 「表示」プルダウン・メニューから「アイコン表示」を選択します。

## 詳細表示

詳細表示ではグループ内のシステムは表形式で表示され、それぞれのシステムに関する詳しい情報がテーブルの各行に示されます。詳細表示では、システム・グループ内の各システムに関して、次の情報が示されます。

- システム名
- ネットワーク・タイプ (このシステムとの通信に使用されている通信プロトコル)
- ネットワーク・アドレス
- システム・モデル (使用可能なのは、Netfinity クライアント・サービスまたは Netfinity マネージャーを使用し、しかもシステムを明確に識別するための適切な重要プロダクト・データ (VPD) を備えている IBM システムの場合だけ)
- オペレーティング・システム (使用可能なのは、Netfinity クライアント・サービスまたは Netfinity マネージャーを使用している IBM システムの場合だけ)
- 存在検査インターバル (詳細については、260ページの『存在検査』を参照)
- オンライン / オフライン通知重大度 (詳細については、261ページの『システム通知』を参照)
- システム固有 ID (使用可能なのは、Netfinity マネージャー または Netfinity クライアント・サービス バージョン 5.0 かそれ以上のリリースを使用しているシステムの場合だけ)



図 72. リモート・システム・マネージャ - 「グループ」ウィンドウ、アイコン表示

リモート・システムがサーバー・ソフトウェア (Novell NetWare や IBM OS/2 LAN サーバーなど) を実行している場合は、システム名の下に(サーバー)と表示されます。リモート・システムでNetfinity マネージャが稼働している場合は、システム名の下に (マネージャ) と表示されます。すべてのシステムは、システム名でアルファベット順にソートされています。

詳細表示を選択するには、次のようにします。

1. システム・グループをオープンします。  
個々のシステムの追加先となるシステム・グループをダブルクリックします。
2. 「表示」プルダウン・メニューから「詳細表示」を選択します。

## リモート・システムへのアクセス

個々のリモート・システムのオブジェクトをオープンすることによって、そのリモート・システムで使用可能な Netfinity サービスにアクセスすることができます。ユーザーが使用できるサービスは、そのリモート・システムの安全保護構成によって決まります。これについては、281ページの第19章、『安全保護マネージャー』で詳しく説明します。個々のシステム上の Netfinity サービスにアクセスするには、そのシステムのオブジェクトをオープンします。

ユーザーのシステムがリモート・システムにアクセスできる場合 (これは、安全保護マネージャーによって判断される) は、リモート・システムの「サービス・マネージャー」ウィンドウが画面に表示されます。そのサービス・マネージャーのタイトル・バーにリモート・システム名が表示されます。使用可能なサービスのうちのどれかを使用するには、そのサービスのオブジェクトをオープンします。

## 追加機能

「システム・グループ」ウィンドウから実行することのできるアクションには、他にもいくつかあります。これらの各アクションは、システム・グループに存在する個々のリモート・システムに直接影響を与えます。これらのアクションは、個々のシステム・オブジェクトのポップアップ・メニューからアクセスします。システムのポップアップ・メニューをオープンするには、マウス・ボタン 2 を使用して個々のシステム・オブジェクトをクリックします。使用可能なアクションは、次のとおりです。

- システムのオープン
- システムの編集
- システムの削除
- システム再始動
- 存在検査
- システムへのログイン
- システム通知
- ユーザー ID とパスワードの設定
- キーワードとシステム名の設定
- エラー条件
- システムのウェイクアップの試行 (使用可能なのは、Wake on LAN 機能をもつシステムだけ。詳細については、615ページの付録K、『Wake-On-LAN システムのトラブルシューティング』を参照)
- システムの遮断の試行 (使用可能なのは、Windows 3.1、Windows 95、Windows NT 3.51、Windows NT 4.0、または NetWare を実行しているシステムの場合だけ)
- システムのパワーダウンの試行 (使用可能なのは、Windows 95 を実行しているシステムで APM (拡張電源管理機能) が使用可能になっている場合だけ)

注: 個々のシステムが現在、オフラインまたは応答不可能な場合は、これらの選択の一部が利用可能でないことがあります。

これらの各アクションについて、次で説明します。

## システムのオープン

選択したリモート・システムのサービス・マネージャーにアクセスする場合は、「システムのオープン」を選択します。

## システムの編集

リモート・システムの識別情報 (システム名、ネットワーク・アドレス、ネットワーク・タイプ) のどれかを変更するには、「システムの編集」を選択します。

## システムの削除

システム・グループから選択したリモート・システムを削除するには、「システムの削除」を選択します。

## システム再始動

選択したリモート・システムを再始動するには、「システム再始動」を選択します。この機能は、リモート・システムの安全保護マネージャーにアクセスできない場合は、実行することができません。

「システム再始動」機能を使用してシステムを再始動すると、Netfinity はまずターゲット・システム上の Netfinity ディレクトリーを検査して、NFREBOOT.BAT という名前のファイル (システムで OS/2 が稼働している場合は NFREBOOT.CMD、システムで NetWare が稼働している場合は NFREBOOT.NCF) があるかどうか調べます。このファイルが存在している場合は、Netfinity はシステムを再始動する前にこのファイルを処理 (ファイル内のコマンドを実行) します。このファイルが存在しない場合は、Netfinity はただちにシステムを再始動します。システムの再始動になかなか応答しないアプリケーションを実行しているシステムがネットワーク上にある場合は、NFREBOOT.BAT ファイルを使用して、システムの再始動前にこれらのプログラムをシャットダウンするコマンドを実行します。

## 存在検査

リモート・システムがネットワークに存在するかどうかを照会するには、「存在検査」を選択します。あるリモート・システムが操作中にアクティブでなくなった場合は、そのオブジェクトはグレーになり、通信用にオープンできなくなります。そのシステムが再びアクティブになると、ユーザーのローカル・システムはそれがアクティブになったことを認識し、それを反映してオブジェクトの表示を変更します。ただし、リモート・システムが再びアクティブになったことをリモート・システム・マネージャーが認識するまでには、数分かかることがあります。「存在検査」を選択すると、リモート・システム・マネージャーはリモート・システムの状況をただちに検査します。

## システムへのログイン

システムの発信ユーザー ID とパスワードを変更するには、「システムへのログイン」を選択します (発信ユーザー ID とパスワードについては、281ページの第19章、『安全保護マネージャー』で説明)。システムのサービスにアクセスするためのユーザー ID とパスワードの組み合わせが 2 つ以上あるシステムでは、このオプションを使用して、現在の発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを維持したまま別の組み合わせを試すことができます。



## システム通知

特定のリモート・システムがオンラインまたはオフラインになったときに通知を受けたい場合は、「システム通知」を選択します。リモート・システム・マネージャーは、事前に決められた存在検査インターバルに基づいてシステム・グループ内の各システムを自動的に検査し、そのシステムがアクティブになっているかどうかを調べます。

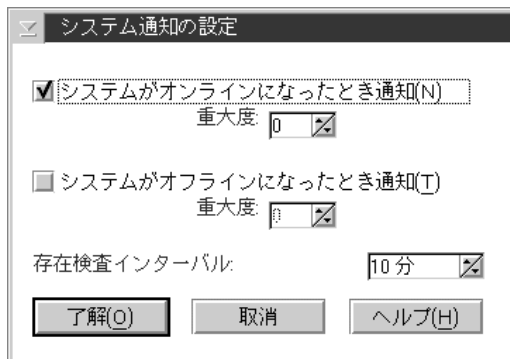


図 73. リモート・システム・マネージャー「システム通知の設定」ウィンドウ

選択したシステムがオンラインまたはオフラインになったときに通知を受けたい場合は、次のようにします。

1. 選択したリモート・システムのポップアップ・メニューから「システム通知」を選択します。
2. 選択したシステムが、アクティブになってアクセス可能になったときに通知を受けたい場合は、「システムがオンラインになったとき通知」チェック・ボックスを選択します。

「システムがオンラインになったとき通知」チェック・ボックスを選択した場合は、そのシステムがオンラインになったときに生成されるアラートの「重大度」値を設定します (アラート重大度の詳細については、18ページの『重大度』を参照)。これによって、選択したリモート・システムがオンラインになりアクセス可能になったときに、リモート・システム・マネージャーがアラートを生成します。生成されるアラートのアプリケーション ID には “NetMgr” が、アプリケーション・アラート・タイプには “10” が、そして重大度値にはチェック・ボックスの下の「重大度」スピン・ボタンでユーザーが選択した値が指定されます。

3. 選択したシステムが非アクティブになるか、またはアクセス不能になったときに通知を受けたい場合には、「システムがオフラインになったとき通知」を選択してください。

「システムがオフラインになったとき通知」チェック・ボックスを選択した場合は、そのシステムがオフラインになったときに生成されるアラートの「重大度」値を設定します。これにより、選択したリモート・システムがオフラインになってアクセス不能になったときに、リモート・システム・マネージャーがアラートを生成します。生成されるアラートのアプリケーション ID には “NetMgr” が、アプリケーション・アラート・タイプには “11” が、そして重大度値にはチェック・ボックスの下の「重大度」スピン・ボタンでユーザーが選択した値が指定されます。

4. 「存在検査インターバル」を設定します。

「存在検査インターバル」フィールドには、リモート・システム・マネージャーが自動的に存在検査を行う時間間隔が示されています。「存在検査インターバル」のデフォルト値は 10 分です。存在検査インターバルの値としては、15 秒、30 秒、45 秒、および 1 分から 120 分までを選択することができます。

注: 多数のシステムで頻繁に存在検査を行うと、ネットワークのデータ転送速度が低下する恐れがあります。頻繁な存在検査を実施するのは、ネットワークのパフォーマンスにとって不可欠なシステムだけにしてください。

5. このシステム通知の構成を保管するために、「了解」を選択します。

アラートの詳細については、17 ページの『アラート・ログ』を参照してください。生成されたアラートに対応するアクションをトリガーするアプリケーション ID、アプリケーション・アラート・タイプ、および重大度の使用方法については、17 ページの『アラート・ログ』を参照してください。

## ユーザー ID とパスワードの設定

このリモート・システムをオープンするときに自動的に使用されるユーザー ID とパスワードの組み合わせを設定するには、「ユーザー ID とパスワードの設定」を選択します。「ユーザー ID とパスワードの設定」を使用すると、安全保護マネージャーで「発信ユーザー ID とパスワードの設定」を使用した場合と同じ結果が得られます。詳細については、286ページの『発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定』を参照してください。

## キーワードおよびシステム名の設定

「キーワードおよびシステム名の設定」を選択すると、選択したシステムのキーワードまたは名前を、表示または変更できます。システムのキーワードとシステム名を変更すると、検索処理を効率的に使用して、システム・グループをより有効に編成することができます。

注:

1. システム・キーワードを表示するには、そのシステムの 1 つまたは複数の Netfinity サービスに対して、少なくともパブリック・アクセスをもっている必要があります。
2. システムのキーワードまたはシステム名を変更するには、システムの安全保護マネージャー・サービスへのアクセス、またはそのシステム用に設定し保管された固有のログイン ID とパスワードが必要です。

ユーザー ID とパスワードの組み合わせについては、281ページの第19章、『安全保護マネージャー』を参照してください。

## エラー条件

システムの「エラー条件」ウィンドウをオープンするには、「エラー条件」を選択します。この選択項目は、「エラー条件」がない場合は選択できません。

エラー条件は、Netfinity アラート・マネージャーが Netfinity アラートに応じて生成します。エラー条件は、ネットワーク内の Netfinity システムの 1 つで重要なイベントが発生したことを、リモート・システム・マネージャーに単に通知するものです。アラート・プロファイルを「エラー条件のセット」アラート・アクションに割り当てる場合は、そのエラー条件の名前を指定する必要があります（『エラー条件』を参照）。アラート・マネージャーは、エラー条件を生成するときに、指定された名前を使用して、そのシステムのエラー条件ログにエラー条件項目を設定します。

システムのエラー条件ログに、現在 1 つまたは複数の項目がある場合に、各システム・オブジェクトは、赤い“円と斜線”記号をもつ汎用システム・アイコンで置換されます。「システム・グループ管理」ウィンドウ内でこのシステムを含むシステム・グループも、すべて変更されます。これは、エラー条件ログの項目を 1 つまたは複数のシステムがシステム・グループに含まれていることをユーザーに警告するのに役立ちます。

エラー条件は、次のどちらかの方法で消去することができます。

1. アラート・マネージャーによって、「エラー条件のクリア」メッセージを生成する。

アラート・マネージャーは、「エラー条件のクリア」メッセージを生成すると、同じ名前のエラー条件を 1 つだけログから消去します（『エラー条件』を参照）。

2. 「エラー条件」ウィンドウで「リセット」を選択する。

これによって、すべてのエラー条件がログから消去されます。

注: この機能が実行できるのは、リモート・システムで Netfinity クライアント・サービスまたは Netfinity マネージャー バージョン 5.0 かそれ以上が稼働している場合だけです。

## システムのウェイクアップ

Wake-on-LAN が使用可能になっているシステムのウェイクアップを試みるには、「システム・ウェイクアップの試行」を選択します。詳細については、615ページの付録K、『Wake-On-LAN システムのトラブルシューティング』を参照してください。

注: この機能が実行できるのは、リモート・システムが Wake-on-LAN ハードウェアを備え、しかも Netfinity クライアント・サービスまたは Netfinity マネージャー バージョン 5.0 かそれ以上が稼働している場合だけです。

## システムの遮断

選択したリモート・システムを遮断するには、「システム遮断の試行」を選択します。この機能は、リモート・システムの安全保護マネージャーにアクセスできない場合は、実行することができません。

注: この機能が実行できるのは、リモート・システムで Windows 3.1、Windows 95、Windows NT 3.51、Windows NT 4.0、または NetWare が稼働し、しかも Netfinity クライアント・サービスまたは Netfinity マネージャー バージョン 5.0 かそれ以上が稼働している場合だけです。

## システムのパワーダウン

選択したリモート・システムのパワーダウンを行うには、「システム・パワーダウンの試行」を選択します。この機能は、リモート・システムの安全保護マネージャーにアクセスできない場合は、実行することができません。

注: この機能が実行できるのは、リモート・システムで Windows 95 が稼働し、APM (拡張電源管理機能) が使用可能になっており、しかも Netfinity クライアント・サービスまたは Netfinity マネージャー バージョン 5.0 かそれ以上が稼働している場合だけです。

## 検索処理の使用

Netfinity リモート・システム・マネージャーの検索処理を使用して、選択したシステム・グループに複数のリモート・システムを迅速かつ容易に追加することができます。検索処理では、Netfinity インストールの際に、すべてのシステムに対して割り当てられたキーワードが使用されます。

あるシステム・グループを作成するときに、システム検索条件とともにシステム・グループ・キーワードを指定することができます。検索処理が開始されると、Netfinity リモート・システム・マネージャーは、使用可能な通信ドライバーを使用して、ネットワークを介して短いメッセージを送信します。このメッセージは、Netfinity が稼動していて、さらにシステム検索条件およびシステム・グループの作成時にユーザーが選択したキーワードと照らし合わせて適切なキーワードをもつリモート・システムに対して、ネットワーク内に存在していることを示す確認応答を送信するように要求します。

すると、該当するキーワードをもつリモート・システムが、検索処理を開始したシステムに対して応答を送信します。この応答には、システム・グループに個々のシステムを追加するために必要なすべての情報（システム名、ネットワーク・アドレス、およびネットワーク・タイプ）が含まれています。その後で、個々のリモート・システムがシステム・グループに自動的に追加されます。それぞれのリモート・システムを表すオブジェクトがアルファベット順にソートされて、「システム・グループ」ウィンドウに表示されます。このプロセス全体の所要時間は、約 45 秒です。

検索処理は、修正しやすい柔軟な処理として設計されているため、大小さまざまなサイズのワーク・グループで使用することができます。

Netfinity システム・グループの編成に使用される処理は、処理を使用する環境によって決まります。たとえば、Peer-to-Peer ワーク・グループ内で Netfinity を使用している場合、個々のシステムは、そのワーク・グループ内のすべてのシステムに完全にアクセスすることができるので、システム・グループは 1 つだけで足り、キーワードの割り当ても非常に簡単です。

しかし、より大きな組織（たとえば、複数の部門で組織された小規模な会社で、各部門が別個のワーク・グループでありながら、すべての部門がそれぞれ別々の Netfinity リモート・システム・マネージャーによって管理される場合など）では、さらに複雑なキーワード割り当てが必要になる可能性があります。ここでは、キーワードの割り当ておよびシステム検索条件の選択の例を示し、これによって検索処理がどのような影響を受けるのかを説明します。

## インストール時のキーワードの割り当て

Netfinity のインストール処理が完了すると、システム固有のキーワードを入力できるようになります。これらのキーワードは、グループ内で個々のシステムを識別するための一連の記述語である必要があります。たとえば、システムは、会社名、部門名、建物の名前、管理者の名前、およびユーザーの名前を識別するキーワードを持つことができます。キーワードの割り当ての主要な目的は、システムを識別するための多様な基準を設けることにあります。

上に例としてあげたシステム・キーワードを使用して、次のことができます。

- 会社内のすべてのシステムを追加する。
- 部門内のすべてのシステムを追加する。
- ある建物に設置されていて、特定の管理者に監督されている従業員によって使用されているすべてのシステムを追加する。
- 設置場所を問わず、特定の 3 人の従業員によって使用されているすべてのシステムを追加する。

これらは、この検索処理によって追加することのできるシステムの可能な組み合わせの一部にすぎません。システム・グループにどのような Netfinity システムが追加されるのかは、個々のシステム・グループの作成時にユーザーが選択したキーワード・リストとシステム検索条件によって決まります。

たとえば、システム・グループに追加することが可能なりモート・システムが 4 つあるとします。これらの 4 つのシステムは、どれも NetBIOS 通信ドライバーを使用して、どのシステムにもシステム固有のキーワードが 3 つだけ割り当てられています。この 3 つのキーワードは会社名、そのシステムが設置されている部門、およびユーザーの名字を表しています。各システムのキーワードは次のとおりです。

システム番号	システム・キーワード
システム 1	IBM, DEVELOPMENT, JONES
システム 2	IBM, DEVELOPMENT, SMITH
システム 3	IBM, MARKETING, O'BRIAN
システム 4	IBM, MANAGEMENT, JEFFERSON

## システム検索条件

システム・グループを作成するときには、検索処理で探すキーワードを決定し、システム検索条件を設定します。あるリモート・システムをシステム・グループに追加するために、そのリモート・システムのキーワードのうちのいくつか、リモート・システム・マネージャーのシステム・グループ・キーワードと一致する必要があるかどうかは、このシステム検索条件によって決まります。システム検索条件として指定することが可能なものは、次の 3 つです。

- すべてのキーワードを持つシステム

このシステム検索条件で検索処理を開始すると、キーワード・リストで指定したすべてのキーワードがリモート・システムのキーワード・リストに含まれている場合に限って、そのリモート・システムがシステム・グループに追加されません。

- いずれかのキーワードを持つシステム

このシステム検索条件で検索処理を開始すると、キーワード・リストで指定したキーワードのうちの少なくとも 1 つがリモート・システムのキーワード・リストに含まれている場合に限って、そのリモート・システムがシステム・グループに追加されます。

- 単一のキーワードを持つシステム

このシステム検索条件で検索処理を開始すると、キーワード・リストで指定したキーワードのうちの 1 つだけがリモート・システムのキーワード・リストに含まれている場合に限って、そのリモート・システムがシステム・グループに追加されます。

次に、4 つのリモート・システムのうちの一部またはすべてをシステム・グループに追加するために、これらの各システム検索条件の使用例を示します。次の例では、ユーザーが「IBM Corporation のネットワーク管理者である」ことを想定しています。



## システム検索条件 1: すべてのキーワードを持つシステム

**IBM** という名前のシステム・グループを作成することにします。このシステム・グループには、IBM Corporation の NetBIOS ネットワーク内のすべての Netfinity システムを含めるものとします。これは、最初のシステム検索条件である「すべてのキーワードを持つシステム」を選択し、「キーワード」フィールドの 1 つに **IBM** というキーワードを入力して行うことができます。「システム・グループの追加」ウィンドウは次のようになります。

システム・グループの追加

グループ名:

システム・キーワード

システム検索条件

すべてのキーワードを持つシステム(L)

いずれかのキーワードを持つシステム(N)

単一のキーワードを持つシステム(O)

キーワード:

自動検索インターバル(時間)

図 74. システム検索条件 1: 例 1

「追加」を選択して、「システム・グループ管理」ウィンドウにこのシステム・グループを追加します。次に、システム・グループを選択して、これをオープンします。まだリモート・システムが 1 つも追加されていないため、このシステム・グループは空になっています。

「システム」プルダウン・メニューから「システムの検索」を選択します。リモート・システム・マネージャーはネットワーク上のすべての Netfinity システムにメッセージを送信し、そのシステムが **IBM** というキーワードをもつ場合は、ネットワーク内に存在していることを示す確認応答を行うように依頼します。例示された 4 つのシステムは、すべてこの基準を満たします。したがって、4 つのシステムすべてが IBM システム・グループ内に表示されます。

2つのキーワードを入力して同じシステム検索条件（「すべてのキーワードを持つシステム」）を選択した場合は、異なる結果になります。キーワードとして **IBM** と **DEVELOPMENT** を入力します。「システム・グループの追加」ウィンドウは次のようになります。

システム・グループの追加

グループ名: IBM

システム・キーワード

システム検索条件

すべてのキーワードを持つシステム(L)

いずれかのキーワードを持つシステム(N)

単一のキーワードを持つシステム(Q)

キーワード: IBM DEVELOPMENT

自動検索インターバル(時間) 使用不可

追加(A) 取消 ヘルプ(H)

図 75. システム検索条件 1: 例 2

今度は、システム 1 および 2 だけがシステム・グループに追加されます。これは、ネットワーク上の 4 つの Netfinity システムのうち、システム・グループが要求する「すべてのキーワードを持つシステム」はこの 2 つだけしかないためです。

## システム検索条件 2: いずれかのキーワードを持つシステム

**IBM : Development and Marketing** という名前のシステム・グループを作成します。このシステム・グループには、IBM Corporation の NetBIOS ネットワーク内にある、開発部門または マーケティング部門に属するすべての Netfinity システムを含めることにします。これは、2 番目のシステム検索条件である「いずれかのキーワードを持つシステム」を選択して、「キーワード」フィールドに **DEVELOPMENT** および **MARKETING** というキーワードを入力することによって行うことができます。「システム・グループの追加」ウィンドウは次のようになります。

システム・グループの追加

グループ名: IBM Development and Marketing

システム・キーワード

システム検索条件

すべてのキーワードを持つシステム(L)

いずれかのキーワードを持つシステム(N)

単一のキーワードを持つシステム(Q)

キーワード: DEVELOPMENT MARKETING

自動検索インターバル(時間) 使用不可

追加(A) 取消 ヘルプ(H)

図 76. システム検索条件 2

「追加」を選択して、「システム・グループ管理」ウィンドウにこのシステム・グループを追加します。次に、システム・グループを選択して、これをオープンします。まだリモート・システムが 1 つも追加されていないため、このシステム・グループは空になっています。

「システム」プルダウン・メニューから「システムの検索」を選択します。 リモート・システム・マネージャーはネットワーク上のすべての Netfinity システムにメッセージを送信し、そのシステムが **DEVELOPMENT** または **MARKETING** というキーワードをもつ場合は、ネットワーク内に存在していることを示す確認応答を行うように依頼します。例示された 4 つのシステムのうち、3 つだけがこの基準を満たします。システム 1、2、および 3 だけが IBM Development and Marketing システム・グループ内に表示されます。

注: システム検索条件として「いずれかのキーワードを持つシステム」を選択した場合は、システム・グループ・キーワード・リストに指定されたキーワードのうちの 2 つ以上をもつシステムも、検索処理によって追加されます。

### システム検索条件 3: 単一のキーワードを持つシステム

**IBM: Non-Development** という名前のシステム・グループを作成します。このシステム・グループには、IBM Corporation の NetBIOS ネットワーク上にある、開発部門に属していないすべての Netfinity システムを含めます。これは、3 番目のシステム検索条件である「単一のキーワードを持つシステム」を選択して、「キーワード」フィールドに **IBM** および **DEVELOPMENT** というキーワードを入力することによって行うことができます。「システム・グループの追加」ウィンドウは次のようになります。

システム・グループの追加

グループ名: IBM Non-Development

システム・キーワード

システム検索条件

すべてのキーワードを持つシステム(L)

いずれかのキーワードを持つシステム(N)

単一のキーワードを持つシステム(Q)

キーワード: IBM DEVELOPMENT

自動検索インターバル(時間) 使用不可

追加(A) 取消 ヘルプ(H)

図 77. システム検索条件 3

「追加」を選択して、「システム・グループ管理」ウィンドウにこのシステム・グループを追加します。次に、システム・グループを選択して、これをオープンします。まだリモート・システムが 1 つも追加されていないため、このシステム・グループは空になっています。

「システム」プルダウン・メニューから「システムの検索」を選択します。リモート・システム・マネージャーはネットワーク上のすべての Netfinity システムにメッセージを送信し、そのシステムが **DEVELOPMENT** または **IBM** のどちらか一方のみのキーワードをもつ場合は、ネットワーク内に存在していることを示す確認応答を行うように依頼します。システム・グループに追加されるシステムは、これらのキーワードのうちの 1 つだけをもっている必要があります。両方のキーワードをもつシステムは、このシステム・グループには追加されません。例示された 4 つのシステムのうち、この基準を満たすものは 2 つしかありません。したがって、IBM: Non-Development システム・グループにはシステム 3 および 4 が表示されません。

注: システム・グループを作成し、キーワードを 1 つも指定しない場合は、どのシステム検索条件を選択したかにかかわらず、システム検索オプションを選択するとネットワーク上のすべての Netfinity システムがシステム・グループに追加されます。

## 第17章 リモート・ワークステーション制御

---

リモート・ワークステーション制御を使用して、リモートの Netfinity システムの画面表示を監視および制御することができます。別の Netfinity システムに対していったんリモート・ワークステーション制御セッションを開始すると、リモート・システムのディスプレイ上で発生しているイベントを監視したり、リモート・システムのデスクトップを制御することができます。リモート・ワークステーション制御を開始すると、ローカル・システム上でのマウスのクリックやキーボード入力のリモート・システムに自動的に渡されます。リモート・ワークステーション制御を使用して、リモートからのプログラムの起動、ウィンドウのオープンまたはクローズ、コマンド入力などをリモートで行うことができます。

注:

1. リモート・ワークステーション制御は、*リモート専用* のサービスです。このサービスは、リモート・システムにアクセスしている場合にだけ使用可能です。リモート・ワークステーション制御オブジェクトは、ローカルのサービス・マネージャーでは表示されません。
2. リモート・ワークステーション制御は、他のリモート・ワークステーション・デスクトップ制御製品と共に使用する設計にはなっていません。リモート・ワークステーション制御を他の類似製品と一緒に実行すると、システムが不安定になる原因となる場合があります。
3. リモート・ワークステーション制御は、シリアル接続を介して使用しないでください。このサービスでは多量のデータを転送する必要があるため、リモート・ワークステーション制御は、高速ネットワークに接続されたシステムだけで使用してください。
4. リモート・システムから転送されるデータ量を減らすために、リモート・ワークステーション制御は、画面の表示情報をすべて 16 色に減らしています。その結果、Netfinity マネージャーの画面に表示されるイメージは、実際のリモート・システムのデスクトップの外観とは異なる場合があります。これによって、リモート・ワークステーション制御の機能が影響を受けることはありません。



図 78. リモート・ワークステーション制御



## リモート・ワークステーション制御のセッション

リモートの Netfinity システムとのリモート・ワークステーション制御セッションを確立すると、リモート・システムの画面を示すウィンドウが表示されます。このウィンドウは、次のいずれかの状態になっています。

- アクティブ

「リモート・ワークステーション制御」ウィンドウが「アクティブ」状態にある場合は、リモート・システムの画面を制御することができます。ユーザーのシステムから入力されたすべてのマウス・クリックおよびキーボード入力が、リモート・システムに渡されます。このウィンドウは、リモート・システムの表示に変化があるたびに自動的に更新されます。

- モニター

「リモート・ワークステーション制御」ウィンドウが「モニター」状態にある場合は、リモート・システムはリモート・システムのユーザーの制御下にありません。このウィンドウは、リモート・システムの画面に変化があるたびに自動的に更新されます。

- 中断

「リモート・ワークステーション制御」ウィンドウが「中断」状態にある場合は、リモート・システムはリモート・システムのユーザーの制御下にありません。ただし、リモート・システムの画面に変化が起ころても、ウィンドウにはまったく反映されません。

リモート・システムに対して初めてリモート・ワークステーション制御セッションを始動した場合は、表示ウィンドウは「アクティブ」状態に設定されます。別の状態に変更するには、「セッション」プルダウン・メニューから状態を選択します。リモート・ワークステーション制御サービスをクローズするには、「セッション」プルダウン・メニューで「終了」を選択します。

リモート・システムのユーザーは、「**Alt+T**」を選択してから新しい状態を選択することによって、リモート・ワークステーション制御セッションの状態を変更することができます。

## リモート・ワークステーション制御のキーストローク

リモート・ワークステーション制御が「アクティブ」状態にあると、ほとんどすべてのキーストロークおよびキーストロークの組み合わせがリモート・システムに渡されます。ただし、オペレーティング・システムによる制約のために、リモート・システムに自動的に渡されないキーストローク ( **Ctrl+Alt+Del** など) もあります。これは、ユーザーのシステム上のオペレーティング・システムが、このようなキーストロークの組み合わせに割り込み、それをローカルに使用するため、リモート・ワークステーション制御がそれをリモート・システムに渡すことができないのが原因です。しかし、リモート・ワークステーション制御を使用すれば、「キーストローク」プルダウン・メニューからキーストロークの組み合わせを選択することによって、選択したキーストロークの組み合わせを送信することができます。次のようなキーストロークの組み合わせを選択できます。

- Alt+Esc の送信
- Alt+Tab の送信
- Ctrl+Esc の送信
- Ctrl+Alt+Del の送信

注: これらのキーストロークの組み合わせがリモート・システムに与える影響は、リモート・システムのオペレーティング・システムによって異なります。

これらのキーストロークの組み合わせを除いて、ローカル・システムのキーボードで入力された、すべてのキーストロークおよびキーストロークの組み合わせがリモート・システムに渡されます。ローカル・システムに対してキーストロークの組み合わせを入力する必要がある場合は、リモート・ワークステーション制御のキーストローク・モードを変更する必要があります。キーストローク・モードを変更するには、次のようにします。

1. 「キーストローク」プルダウン・メニューで「キーストローク・モードの変更」を選択します。
2. 「キーストローク・モードの変更」サブ・メニューで「キーストローク・ローカル」を選択します。

再度リモート・システムにキーストロークを渡すことを再開するには、「キーストローク・モードの変更」サブメニューで「キーストローク・リモート」を選択します。

キーストローク・モードは、**Alt+T** キーを押しても切り替えることができます。

## 第18章 スクリーン・ビュー

スクリーン・ビューを使用して、任意のリモート・システムが現在表示している画面表示の「スナップ・ショット」を見ることができます。リモート・システムのデスクトップ・イメージは、ビットマップ (BMP) ファイルに変換、圧縮され、ネットワーク管理者のシステムに転送されます。次に、転送先のシステムでデータが復号化され、リモート・システムの画面にスケール変更可能なウィンドウが表示されます。これを利用して、リモート・システムの障害追及を行うことができます。

スクリーン・ビューは、次の用途に使用することができます。

- 後で参照するために画面ショットをファイルに保管する。

後で参照するために画面ショット情報のデータ・ファイルを作成する場合は、「オプション」プルダウン・メニューで「画面ショットの保管」を選択します。

- 必要なときに画面ショットを最新表示する。

リモート・システムから新たに画面ショットを収集する場合は、「オプション」プルダウン・メニューで「新規画面の収集」を選択します。



図 79. 「スクリーン・ビュー・サービス」

- すでに保管されている画面ショットをロードする。

すでに保管されている画面ショットをロードする場合は、「オプション」プルダウン・メニューで「画面ショットのロード」を選択します。

- 全画面サイズを上限として、画面ショットを任意のサイズにスケーリングする。

画面ショットをスケーリングするには、ウィンドウが希望どおりのサイズになるまで、「スクリーン・ビュー」ウィンドウの隅をドラッグします。

注: スクリーン・ビューでは、DOS 全画面セッションおよび WIN-OS/2 全画面表示を表示することはできません。

## 第19章 安全保護マネージャー

---

Netfinity 安全保護マネージャーを使用すると、インストールされている Netfinity サービスの一部または全部に対するリモート・アクセスを制限することができます。Netfinity サービスを無責任に、または不用意に使用すると、データの損失やシステムの障害が発生する恐れがあります。これを回避するためには、ネットワーク内の Netfinity システム上のサービスの一部または全部に対するリモート・アクセスを制限する必要があります。

注: 次の Netfinity サービスが不用意に使用されると、重大な障害が発生する危険性があります。

- ファイル転送
- プロセス・マネージャー
- RAID マネージャー
- リモート・セッション
- リモート・システム・マネージャー
- システム区画アクセス

Netfinity 安全保護マネージャーは、ユーザー ID とパスワードの組み合わせを使って、システムの安全保護解除の適否を判定します。着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせによって、ユーザーのシステムにリモートからアクセスしている他のユーザーがどの Netfinity サービスを使用できるのが決定されます。発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを設定することにより、ユーザーが別のシステムにリモート・アクセスする際のデフォルトのユーザー ID とパスワードの組み合わせが決まります。

ターゲット・システムに関する発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせがそのターゲット・システムで構成されている着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせと一致した場合は、そのユーザー ID とパスワードの組み合わせに対応して選択されているサービスへのアクセス権が、自動的にそのユーザーに与えられます。ネットワーク内で作動しているすべての Netfinity システムに関して適切な発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを構成しておく、すべての安全保護検査は受動的に行われ、介入の必要がなくなります。

安全保護マネージャーには、デフォルトの着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせが設定されています。これは < パブリック > 設定と呼ばれ、ユーザーが選択した任意のサービスに対するアクセスを自動的に許可するものです。< パブリック >

着信ユーザー ID とパスワードの詳細については、283ページの『着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定』を参照してください。

ネットワーク内のすべてのシステムに関する着信および発信のユーザー ID とパスワードの組み合わせを設定すると、安全保護は受動的に作動するようになります。あるユーザーが別のシステムにアクセスしようとする、発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせがターゲット・システムの着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせと自動的に照合されます。

ユーザーが安全保護検査に介入する必要があるのは、次の場合だけです。

- あるシステムの安全保護構成が変更された場合
- 新しく追加されたシステムが適切に構成されていない場合
- リモート・システム・マネージャーの「システムへのログイン」アクションを使用して、特定のシステムに関するデフォルトの発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを上書きする場合

「システムへのログイン」アクションを使用すると、ネットワーク内の Netfinity システムについて複数のレベルの安全保護を設定することができます。たとえば、ネットワーク内の Netfinity システムで < パブリック > 着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを構成して、「システム区画アクセス」以外のすべての Netfinity サービスへのアクセスを認めるようにすることができます。

ただし、必要に応じてユーザーが「システム区画アクセス」にアクセスできるようにする必要があります。その場合、ネットワーク内のシステムで「システム区画アクセス」へのアクセスを認める各システムごとに、着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを設定してください。この構成が保管されると、ネットワーク内のすべての Netfinity システムが、他のシステムの Netfinity サービスに対する選定された < パブリック > アクセス権を自動的に得るようになります。

「システム区画アクセス」にアクセスするためには、リモート・システム・マネージャーの「システムへのログイン」アクションを選択して、作成したユーザー ID とパスワードの組み合わせを入力する必要があります。これにより、「システム区画アクセス」も含むすべての Netfinity サービスに対してアクセスできるようになります。

Netfinity 安全保護マネージャーは、ユーザーのシステムにアクセスしたりアクセスを試みたりした人の記録を保管できるようにするために、アラートの生成も行います。安全保護マネージャーによって生成されるアラートの詳細については、290ページの『安全保護アクセス・アラート』を参照してください。

## 着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定

安全保護マネージャーがあらかじめ構成されていない場合は、<パブリック>というユーザー ID が設定されます。これは、汎用安全保護アクセスのデフォルト設定値です。この設定値では、<デフォルト>の発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを使用する他のシステムが、システム上のすべての Netfinity サービスにアクセスすることができます。

あるリモート・システムのユーザーが、他のシステムに対してリモート・システム・マネージャーの「システムへのログイン」アクションの使用を試みたときに、対応する着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせとの一致が得られなかった場合でも、そのユーザーは、<パブリック>構成内に含まれているすべてのサービスにアクセスすることが許されます。

最初は、すべての Netfinity サービスが<パブリック>アクセスで使用できるようになっています。<パブリック>ユーザー ID とパスワードの組み合わせで利用可能なサービスのリストを編集するには、次のようにします。

1. 「着信パスワードの編集 / 表示」をダブルクリックし、「着信パスワード」のウィンドウをオープンします。
2. 「ユーザー ID」選択リストから「<パブリック>」を選択します。
3. パブリック・アクセスとして使用不可にしたいサービスの選択を取り消します。
4. 「安全保護マネージャー・アクセス」のチェック・ボックスの選択を取り消して、安全保護マネージャーに対するパブリック・アクセスを制限します。
5. 構成を保管するために「設定」を選択します。

注: 着信ユーザー ID とパスワードの安全保護構成の一部として<パブリック>がデフォルトとして構成されていない場合、有効な発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせをもつユーザーだけが、システムの Netfinity サービスにアクセスすることができます。

あるユーザーがシステムにアクセスしようとしたときに無効なユーザー ID とパスワードの組み合わせが使用されると、安全保護マネージャーによってアラートが生成されます。ただし、そのシステムがデフォルトとして <パブリック> が設定された状態になっていると、無効な発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせでシステムにアクセスを試みたユーザーには、<パブリック> サービスへのアクセスが自動的に認められます。この場合にもアラートは生成されません。安全保護マネージャーによって生成されるアラートの詳細については、290ページの『安全保護アクセス・アラート』を参照してください。



図 80. 着信ユーザー ID とパスワードの構成

新しく着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを設定して、サービスへのアクセスの可否を決めるには、次のようにします。

1. 安全保護マネージャーを始動します。
2. 「着信パスワードの編集 / 表示」を選択します。
3. 「ユーザー ID」を入力します。

アクセスを許可するユーザー ID を入力します。「ユーザー ID」選択リストから ID を選択することも、新しい ID をフィールドに入力することもできます。

4. 「パスワード」を入力します。

「パスワード」フィールドに、指定されたユーザー ID と組み合わせで使用し、選択された Netfinity サービスへのアクセスを許可するパスワードを入力します。パスワードの長さは、1 から 8 文字以内です。このパスワードは表示されません。



5. パスワードを確認します。

「パスワード」フィールドに入力したものと同じパスワードを「確認のためのパスワード」フィールドに入力します。着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを正しく作成するには、これら 2 つのパスワードが一致する必要があります。

6. アクセス可能なサービスを選択します。

「サービス」選択リストから、1 つまたは複数のサービスを選択します。選択したサービスは、それらのサービスのフィールドに指定したユーザー ID とパスワードを入力したユーザーが使用できます。

7. 安全保護マネージャーへのアクセスの可否を決めます。

安全保護マネージャーへのアクセスを許可するには、「セキュリティーマネージャーのアクセス」チェック・ボックスを選択します。

注： 安全保護マネージャーへのアクセスを許可すると、リモート・システムでユーザーの着信および発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを変更できるようになり、またユーザーのシステムに対してリモート・システム・マネージャーの「システム再始動」アクションを使用することも可能になります。これによって、リモート・ユーザーが必要なときにユーザーのシステムを再始動できるようになります。

8. 着信のセキュリティー構成を保管します。

構成を保管するために「設定」を選択します。

## 着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの削除

すでに設定されているユーザー ID とパスワードの組み合わせを削除するには、次のようにします。

1. 安全保護マネージャーを始動します。
2. 「着信パスワードの編集 / 表示」を選択します。
3. 削除するユーザー ID を選択します。
4. 「削除」を選択します。選択したユーザー ID と、それに対応するパスワードが、着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの構成から削除されます。

## 発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定

安全保護マネージャーが事前に構成されていない場合は、発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせは < デフォルト > に設定されます。ユーザー ID とパスワードの組み合わせを構成していないリモート・システムにアクセスしようとする、この < デフォルト > 発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせが使用されます。 < パブリック > 着信ユーザー ID とパスワードの設定値が構成されているリモート・システムで < デフォルト > の発信設定値を使用すると、リモート・システムは、 < パブリック > 着信ユーザー ID とパスワード設定値で使用可能な任意のサービスへのアクセスを自動的に許可されます。ただし、使用可能な Netfinity サービスは、アクセスされるシステムによって異なる可能性があります。

注： 発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを編集または作成することができるのは、Netfinity リモート・システム・マネージャーを使用しているユーザーだけです。

発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを設定するには、次のようにします。

1. 安全保護マネージャーを始動します。
2. 「発信パスワードの編集 / 表示」を選択します。「発信パスワード」ウィンドウがオープンします (図81 を参照)。

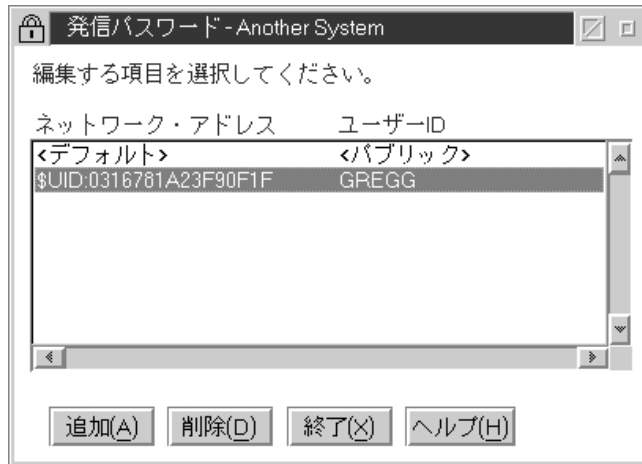


図 81. 「発信パスワード」ウィンドウ

3. 「追加」を選択します。「発信パスワードの編集」ウィンドウがオープンします (図82 を参照)。

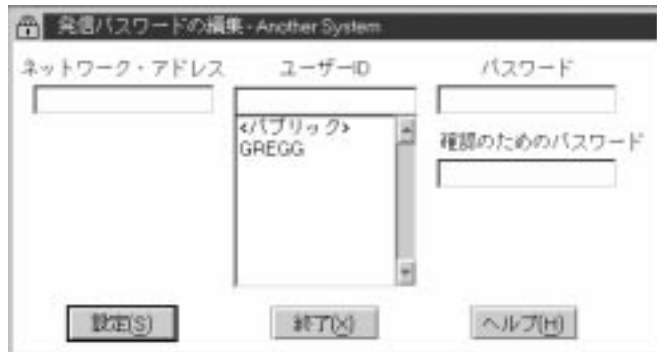


図 82. 「発信パスワードの編集」ウィンドウ

4. 「ネットワーク・アドレス」を入力します。

「ネットワーク・アドレス」入力フィールドに、発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを作成したいシステムのネットワーク・アドレスを入力します。このアドレスは、リモート・システム・マネージャーがリモート・システムを見つけるために使用するネットワーク・アドレスと同じである必要があります。

5. 「ユーザー ID」を入力します。

選択リストから「ユーザー ID」を選択するか、あるいは「ユーザー ID」入力フィールドに新しい ID を入力してください。この ID は、ユーザーがリモート・システムにアクセスしようとするときに (パスワードとともに) 使用されません。

6. 「パスワード」を入力します。

リモート・システムへのアクセス権を得ようとするときに指定したユーザー ID とともに使用するパスワードを「パスワード」フィールドに入力します。パスワードの長さは、1 から 8 文字以内です。パスワードには、すべての標準 ASCII 文字を使用することができます。パスワードは表示されません。

7. パスワードを確認します。

「パスワード」フィールドに入力したものと同一パスワードを「確認のためのパスワード」フィールドに入力します。発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの作成をするには、これら 2 つのパスワードが一致している必要があります。

8. 発信ユーザー ID とパスワードの構成を保管します。

発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを保管するために、「設定」を選択してください。

## 発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの編集

すでに構成されているユーザー ID とパスワードの組み合わせを編集するには、次のようにします。

1. 安全保護マネージャーを始動します。
2. 「発信パスワードの編集 / 表示」を選択します。
3. 編集したいネットワーク・アドレスとユーザー ID を選択します。
4. ユーザー ID またはパスワード、あるいはその両方を変更します。
5. 「設定」を選択して、このネットワーク・アドレスに関する新規の発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせを保管します。

## 発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの削除

すでに設定されているユーザー ID とパスワードの組み合わせを削除するには、次のようにします。

1. 安全保護マネージャーを始動します。
2. 「発信パスワードの編集 / 表示」を選択します。
3. 削除したいネットワーク・アドレスとユーザー ID を選択します。
4. 「削除」を選択します。ネットワーク・アドレス、ユーザー ID、およびそれに対応するパスワードが、発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの構成から削除されます。

## 安全保護アクセス・アラート

安全保護マネージャーは、特定の安全保護アクセス条件に対応して次の 3 つのアラートが生成できます。

- アクセス付与アラート

安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーに対してパブリック以外のアクセスを許可した場合に生成されます。

- パブリック・アクセス付与アラート

安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーに対して、1 つまたは複数のサービスへのパブリック・アクセスを許可した場合に生成されます。

- システム・アクセス拒否アラート

安全保護マネージャーが、リモート・ユーザーに対してシステムへのアクセスを拒否した場合に生成されます。

これらの各アラートについて、次に説明します。

## アクセス付与アラート

説明	アクセスのためにユーザー ID とパスワードの組み合わせを使用してアクセスを試みたリモート・ユーザーに、1 つまたは複数のサービスに対するアクセスが許可されたときに、安全保護マネージャー・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	ユーザー ID ' <b>%P1</b> ' (アドレス ' <b>%P2</b> ': ネットワーク ' <b>%P3</b> ') がシステム・アクセスを付与されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	7
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	20

注: このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列をサポートします。

- %P1** システム・アクセスを要求したユーザー ID。
- %P2** アクセスを要求したシステムのネットワーク・アドレス。
- %P3** アクセスを要求したシステムのネットワーク・タイプ。

アラート・マネージャーのデフォルト構成を変更していない場合、このアラートはアクションをトリガーしません。ただし、この特定アラートに対応する新しいアクション応答を作成することができます。ただし、この特定アラートに対応する新しいアクション応答を作成することができます。

## パブリック・アクセス付与アラート

説明	リモート・ユーザーに対して、1 つまたは複数のサービスへのパブリック・アクセスが許可されたときに、安全保護マネージャー・サービスによって生成されません。
アラート・テキスト	ユーザー ID ' %P1' (アドレス ' %P2': ネットワーク ' %P3') がパブリック・システム・アクセスを付与されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	6
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	21

注: このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列をサポートします。

- %P1** システム・アクセスを要求したユーザー ID。
- %P2** アクセスを要求したシステムのネットワーク・アドレス。
- %P3** アクセスを要求したシステムのネットワーク・タイプ。

アラート・マネージャーのデフォルト構成を変更していない場合、このアラートはアクションを起動しません。ただし、この特定アラートに対応する新しいアクション応答を作成することができます。



## システム・アクセス拒否アラート

説明	リモート・ユーザーに対して、システムへのアクセスが拒否されたときに、安全保護マネージャー・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	ユーザー ID ' %P1' (アドレス ' %P2': ネットワーク ' %P3') によるログオンが拒否されました。
アラート・タイプ	安全保護警告
重大度	5
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	22

注: このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列をサポートします。

- %P1** システム・アクセスを要求したユーザー ID。
- %P2** アクセスを要求したシステムのネットワーク・アドレス。
- %P3** アクセスを要求したシステムのネットワーク・タイプ。

アラート・マネージャーのデフォルト構成を変更していない場合、アラート・マネージャーのログ・ファイルにこのアラートが追加されます。この特定アラートに対応する追加のアクション応答を作成することができます。

## システム再始動アラート

安全保護マネージャーは、システムの再始動の試みに対して次の 2 つのアラートを生成することができます。

- システム再始動開始アラート
- システム再始動要求リジェクト・アラート

これらの各アラートについて、次に説明します。

### システム再始動開始アラート

説明	リモートの Netfinity マネージャー が、リモート・システム・マネージャーの「システム再始動」オプションを使用してシステムを再始動するときに、安全保護マネージャー・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	ユーザー ID ' <b>%P1</b> ' (アドレス ' <b>%P2</b> ': ネットワーク ' <b>%P3</b> ') によってシステム再始動が開始されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	5
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	41

注: このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列をサポートします。

- %P1** システム再始動を要求したユーザー ID。
- %P2** 再始動を要求したシステムのネットワーク・アドレス。
- %P3** 再始動を要求したシステムのネットワーク・タイプ。

アラート・マネージャーのデフォルト構成を変更していない場合、アラート・マネージャーのログ・ファイルに追加されます。この特定アラートに対応する追加のアクション応答を作成することができます。

## システム再始動要求リジェクト・アラート

説明	リモートの Netfinity マネージャーが、必要な安全保護アクセスをもっていないにもかかわらず、リモート・システム・マネージャーの「システムの再始動」オプションを使用してシステムを再始動しようとしたときに、安全保護マネージャー・サービスによって生成されます。
アラート・テキスト	ユーザー ID ' %P1' (アドレス ' %P2' : ネットワーク ' %P3') によるシステム再始動要求は、拒否されました。
アラート・タイプ	安全保護エラー
重大度	3
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	40

注: このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列をサポートします。

- %P1** システム再始動を要求したユーザー ID。
- %P2** 再始動を要求したシステムのネットワーク・アドレス。
- %P3** 再始動を要求したシステムのネットワーク・タイプ。

アラート・マネージャーのデフォルト構成を変更していない場合、このアラートはアラート・マネージャーのログ・ファイルに追加され、さらに、システムの再始動が試みられたことを通知するポップアップ・ウィンドウが生成されます。この特定アラートに対応する追加のアクション応答を作成することができます。



Netfinity のシリアル接続制御を使用すると、システムのもデムを使用して、他の Netfinity システムにリモート・アクセスすることができます。シリアル接続制御を正しく構成すると、モデムだけを使用して接続されている他の Netfinity システムに対して、LAN に接続されたシステムの場合と同様にアクセスおよび管理することができます。Netfinity マネージャー・システムとシリアル接続制御を使用して接続すると、リモート・システムのリモート・システム・マネージャーを使用して、そのシステムにアクセスしたり、そのリモート・システムのネットワーク上にある他の Netfinity システムを管理したりすることができます。

また、システムが LAN に接続されていなくても、Netfinity シリアルの接続制御サービスを使用すると、システム管理者は、各ユーザーのオフィスを訪問したりユーザーの作業を中断させたりせずに、Netfinity のアプリケーションを使用しているシステムを管理することができます。

注： シリアル接続制御を使用するには、少なくとも 9600 bps をサポートするモデムがシステムに正しくインストールされ、構成されている必要があります。

## モデムの構成

シリアル接続制御を使用して、リモート・システムにアクセスできるようにする場合、またはモデムを介してシステムからリモート・アクセスを行えるようにする場合は、モデムが正しく構成されていることを確認する必要があります。

システムのモデムを構成するには、次のようにします。

1. 「Netfinity シリアル接続制御」ウィンドウから「モデム設定」を選択します。  
「Netfinity モデム設定」ウィンドウがオープンします (299ページの図84 を参照)。



図 83. シリアル接続制御サービス

2. モデム用の「構成するCOMポート」を選択します。  
「構成するCOMポート」フィールドのスピン・ボタンを使用して、モデムのCOMポートを選択します。

3. 「モデム名」を選択するか、または新しいモデムの名前を入力します。

「モデム名」フィールドから、システムで使用しているモデムの名前を選択するか、または新しい名前を入力します。Netfinity には、いくつかの一般的なモデムの設定値があらかじめ構成されています。ただし、モデムが「モデム名」フィールドにリストされていない、またはシステムで使用しているモデムの種類が分からない場合は、「Default」を選択します。「Default」設定を使用したときに、モデムが正しく機能しない場合は、306ページの『初期設定ストリングのガイドライン』を参照してください。

注: すでに構成されているモデム名、または「Default」を選択すると、他のモデム構成情報も自動的に表示されます。

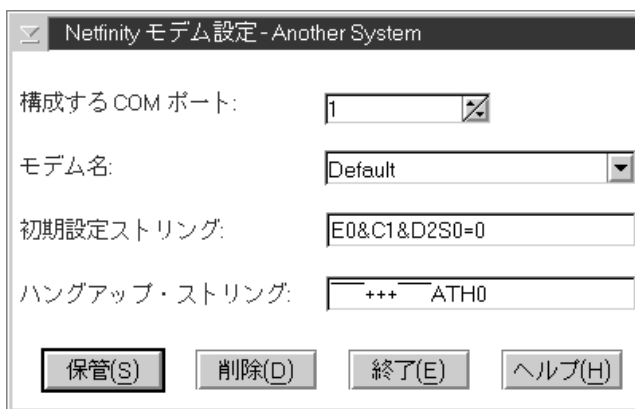


図 84. シリアル接続制御 - 「Netfinity モデム設定」ウィンドウ

4. モデム名を入力した場合は、システムのモデムに適した「初期設定ストリング」を入力します。

すでに構成されているモデム名を選択した場合、このフィールドは設定されています。ただし、使用するモデムの設定値が Netfinity で事前構成されていない場合、このフィールドを編集する必要があります。詳細については、306ページの『初期設定ストリングのガイドライン』を参照してください。

5. システムのモデムに適切な「ハングアップ・ストリング」を入力します。

「ハングアップ・ストリング」フィールドは、電話回線の接続をクローズするよう指示するためにモデムに送信されるコマンドを含んでいます。デフォルトのハングアップ・ストリングは、ほとんどのモデムで正しく機能します。モデムがデフォルトのハングアップ・ストリングに正しく応答しない場合は、モデムの説明書で詳細を確認してください。

6. 「保管」を選択して、これらの設定値を保管し、シリアル接続制御で使用されるこのモデムを使用可能にします。



## リモート・アクセスの使用可能化

シリアル接続制御で使用するためにモデムを構成したら、ネットワーク管理者またはそれ以外の許可ユーザーに対して、システムへのアクセスを許可する必要があります。これによって、許可ユーザーは、シリアル接続制御を使用して、システムにアクセスできるようになります。システムへのアクセスを許可するには、次のようにします。

1. シリアル接続制御サービスを自動応答モードに設定します。
2. 安全保護マネージャーを使用して、システムのログオン時に使用する許可ユーザーのユーザー ID とパスワードの組み合わせを構成します。

ユーザー ID とパスワードの組み合わせを構成して、システムへのリモート・アクセスを使用可能にする方法については、283ページの『着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定』を参照してください。

シリアル接続制御サービスを自動応答モードに設定するには、次のようにします。

1. Netfinity シリアル接続制御サービスを始動します。
2. 「シリアル接続制御」ウィンドウの「名前」フィールドで、「自動応答」を選択します。

「自動応答」を設定すると、シリアル接続制御に、モデムを介した着信電話呼出しに対して自動的に応答させることができます。シリアル接続制御サービスは、電話に回答した後、呼び出し側のシステムとリンクを確立しようとします。

3. ヌル・モデム接続を使用して接続が確立している場合は、「ヌル・モデム」を選択します。

注: リモート・システムがヌル・モデム接続を使用してシステムと通信する場合は、「ヌル・モデム」チェックボックスがチェックされていなければなりません。

4. シリアル接続制御の「ユーザー ID」と「パスワード」を設定します。

リモート・システムから、シリアル接続制御を使用して、システムにアクセスする際に必要なユーザー ID とパスワードを、「ユーザー ID」、および「パスワード」フィールドに入力します。

5. 「開始」を選択します。

「開始」を選択すると、シリアル接続制御サービスは、着信呼び出しの待機を始めます。「Netfinity シリアル接続制御」ウィンドウの状況フィールドに“接続までお待ちください”が表示された後であれば、いつでも「終了」を選択することができるようになります。シリアル接続制御は、バックグラウンドで着信呼出しを待機し続けます。

注: Netfinity の開始時に、シリアル接続制御が自動的に始動して着信呼出し待機を開始するようにしたい場合は、「自動応答」を選択して、「自動開始」チェック・ボックスを選択します。

システムのモデムをシリアル接続制御で使用するよう構成すれば、他の Netfinity システムへのリモート・アクセスを可能にするシリアル接続制御項目を作成することができます。

## シリアル接続制御項目の作成

シリアル接続制御項目は、「Netfinity シリアル接続制御」ウィンドウの適切なフィールドに入力することによって追加されます。新しいシリアル接続制御項目を追加するには、次のようにします。

1. 項目に「名前」を割り当てます。

「名前」フィールドに、各システムについて作成しているシリアル接続制御項目の固有名を入力します。たとえば、シリアル接続アクセス用に構成しているシステムのシステム名は、項目の名前として適切です。ただし、この名前は単に項目の説明を目的としたものにすぎません。

2. リモート・システムの「電話番号」を入力します。

「番号」フィールドに、アクセスするシステムの電話番号を入力します。そのシステムにアクセスするために必要な市外局番とプレフィックス（たとえば、一部の電話システムでは、外線につなぐために 0 をダイヤルすることが必要です）を含めることを忘れないでください。

注： 電話番号には "( )" または "-" を使用しないでください。

3. 「使用する COM ポート」を割り当てます。

リモート・システムへのアクセスに使用するモデムの「使用する **COM** ポート」を選択します。

4. モデムの「ポート・ボー・レート」を指定します。

リモート・システムへのアクセスに使用するモデムの「ポート・ボー・レート」を選択します。

注:

- a. シリアル接続が頻繁に失敗する場合は、ボー・レートを下げてください。ボー・レートが高くなるほど、回線のノイズの影響を受けやすくなります。
- b. パフォーマンスを最大にするためには、モデムの最大速度と同じか、より高いボー・レートを選択します。

5. リモート・システムへのログオンに使用する「ユーザー ID」を入力します。

リモート・システムへアクセスをするのに必要な「ユーザーID」を入力します。この ID は、リモート・システムの自動応答設定のユーザーIDと一致している必要があります。

6. リモート・システムへのログオンに使用する「パスワード」を入力します。

リモート・システムのアクセスをするのに必要な「パスワード」を入力します。これは、リモート・システムの自動応答設定のパスワードと一致している必要があります。

7. ヌル・モデム接続を使用して接続が確立している場合は、「ヌル・モデム」を選択します。

注: ヌル・モデム接続を使用してリモート・システムと通信する場合は、「ヌル・モデム」チェックボックスがチェックされていなければなりません。

8. シリアル接続制御項目を保管します。

「適用」を選択して、この項目を保管します。

## リモート・システムへのアクセス

1 つまたは複数のシリアル接続制御項目を作成すると、リモート・システムにアクセスすることができます。

リモート・システムには、「Netfinity シリアル接続制御」ウィンドウからアクセスします (298ページの図83 を参照)。リモート・システムにアクセスするには、次のようにします。

1. 「名前」フィールドから、アクセスしたいリモート・システムのシリアル接続制御項目を選択します。
2. 「開始」を選択して、シリアル接続プロセスを開始します。

シリアル接続プロセスを開始すると、システムはモデムを初期化し、選択された項目の電話番号をダイヤル呼び出しし、応答を待機してから、ユーザー ID とパスワードの組み合わせを使用してリモート・システムへのアクセスを試みます。接続が成功すると、リモート・システム・マネージャーでリモート・システムを追加 (または検索) することができます。すると、そのリモート・システムがネットワークの一部である場合と同様に、そのシステムに対してリモートからのアクセスと管理を実行できるようになります。

注:

1. リモート・システムは、シリアル接続制御が自動応答モードで実行されている必要があります。リモート・システムが自動応答モードでないと、リモート・システムのモデムは電話呼び出しに応答しません。
2. Netfinity の開始時に、シリアル接続制御サービスが自動的に始動して特定のリモート・システムへのアクセスも行うようにしたい場合は、そのリモート・システムの項目を選択してから、「自動開始」チェック・ボックスを選択してください。自動開始の構成ができる項目は 1 つだけです。

## 初期設定ストリングのガイドライン

ほとんどのモデムは、類似の初期設定ストリング・コードを共有していますが、モデム間で若干の違いがあります。したがって、すべてのモデムに適した初期設定ストリングを提供することは非常に困難です。場合によっては、ユーザーのモデム用に、独自の初期設定ストリングを作成する必要があります。この場合は、モデムの説明書を参照して、適切な初期設定ストリング・コードを確認します。

- 必要な初期設定コード

シリアル接続制御サービスでモデムを正しく作動させるには、初期設定ストリングで次のようにモデムを構成する必要があります。

- コマンド・エコーを「OFF」
- オンライン文字エコーを「OFF」
- 結果コードを使用
- 単語形式結果コードを使用
- BUSY および DT 検出時、結果コードおよび CONNECT メッセージに話中音およびダイヤル音検出を含める
- プロトコル・インディケータ追加 - LAPM/MNP/NONE V42bis/MNP5
- 標準 CD 操作
- DTR ON/OFF でハングアップし、「自動応答を使用不可」にしてコマンド・モードへ
- CTS ハードウェア・フロー制御
- コンピューターに対する受信データの RTS 制御
- キューイングありの非破壊 BREAK 信号、エスケープ状態なし
- 自動応答を「OFF」

例：正しい操作に必要な設定だけを使用する場合、U.S. Robotics 社の Sportster モデム用の初期設定ストリングは、次のようになります。

```
E0F1Q0V1X4&A3&C1&D2&H1&R2&Y3S0=0
```

- 追加の初期設定コード

必須の初期設定コードだけでなく、次の設定を追加してでモデムを構成すれば、Netfinity シリアル接続制御サービスの操作を最適化することができます。

- キャリアが検出されるまでスピーカーを「ON」
- ソフトウェア・フロー制御を「使用不可」
- 自動エラー制御
- データ速度可変

例：必要な設定と追加の設定のすべてを使用する場合、U.S. Robotics 社の Sportster モデムでは、次のように設定します。

```
E0F1M1Q0V1X4&A3&C1&D2&H1&I0&K1&M4&  
N0&R2&Y3S0=0
```





## 第21章 サービス構成マネージャー

---

サービス構成マネージャーを使用すると、選択したシステムの Netfinity サービスの構成を保管することができます。構成は、サービス構成ファイル (SCF) に保管されます。SCF を作成すると、イベント・スケジューラーで構成を同じシステムに復元するために使用したり、選択したシステムにその構成を転送するために(イベント・スケジューラーと共に) 使用することができます。

いったん、さまざまな Netfinity サービス (たとえば、アラート・マネージャーまたはクリティカル・ファイル・モニター) を特定のシステム上で希望する特定の 방법으로構成すると、サービス構成マネージャーを使用して、そのシステム上のサービスの構成を保管することができます。次にイベント・スケジューラーまたはコマンドライン・インターフェースによって、サービス構成マネージャーによって作成されたサービス構成ファイルを使用して次のことを行うことができます。

- 1 つまたは複数のリモート・システム上のサービス構成を置き換えて、複数のマシンに渡るサービスの構成をコピーする。
- サービス構成が失われた場合のために、特定のシステム上のサービス構成をバックアップする。
- 特定のシステムのサービスの構成を素早く変更する。
- 構成上の既存のサービス構成に対して追加または置換を行い、必要に応じた管理機能の標準化または追加を可能にする。

「サービス構成マネージャー」ウィンドウ (310ページの図85 を参照) には、SCF ディレクトリーにあるサービス構成ファイルが表示されます。このウィンドウ内では、次のことを行えます。

- サービス構成ファイル生成プログラムを使用して、新しいサービス構成ファイルを作成する。

詳細については、311ページの『サービス構成ファイルの作成』を参照してください。

- サービス構成ファイル・エディターを使用して、既存のサービス構成ファイルを編集する。

詳細については、313ページの『サービス構成ファイルの編集』を参照してください。

- 既存のサービス構成ファイルを削除します。

詳細については、314ページの『サービス構成ファイルの削除』を参照してください。



図 85. 「サービス構成マネージャー」ウィンドウ

## サービス構成ファイルの作成

新しいサービス構成ファイルを作成するには、次のようにします。

1. 「新規」を選択します。

「サービス構成ファイル生成プログラム」ウィンドウ (図86 を参照) がオープンします。

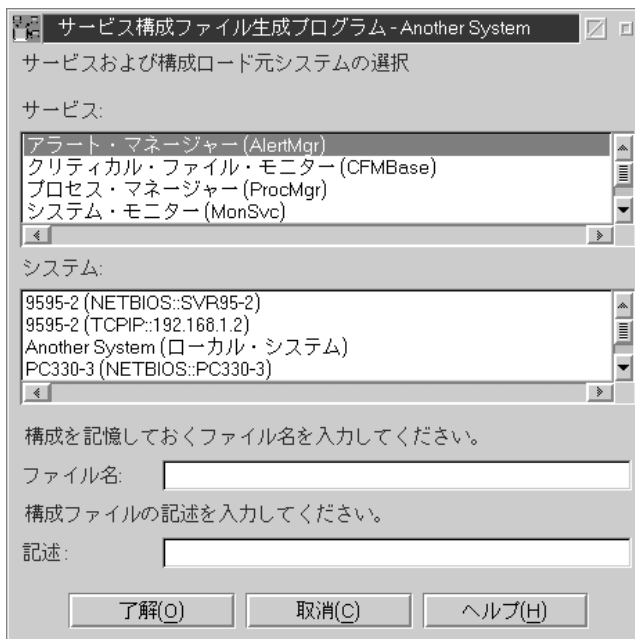


図 86. 「サービス構成ファイル生成プログラム」ウィンドウ

2. 「サービス」選択リストで Netfinity サービスを選択します。

SCF ファイルとして保管したい構成をもつ Netfinity サービスを選択します。

3. 「システム」選択リストで、Netfinity システムを選択します。

イベント・スケジューラーで使用するための SCF ファイルとして保管したいサービス構成を含むシステムを選択します。

4. 「ファイル名」フィールドに、SCF ファイルの名前を入力します。このファイル名は、Netfinity SCF サブディレクトリーに保管する場合に有効なファイル名である必要があります。

5. 「記述」フィールドに、SCF ファイルの説明を入力します。このフィールドへの記入は必須ではありません。

6. 「了解」を選択します。

サービス構成ファイルの作成が失敗する場合があります。この失敗は、多くの場合、ソース・システムがオフラインになっているか、またはソース・サービスが安全保護によって保護されていることが原因です。サービス構成ファイルの作成が失敗した場合は、リモート・システム・マネージャーを使用して、リモート・システムをオンラインにし、サービスに対してアクセスできるようにします。

サービス構成ファイルの作成が成功した場合は、新しい SCF ファイルを表示または編集するかどうかを尋ねられます。「はい」を選択すると、「サービス構成ファイル・エディター」ウィンドウがオープンします。「いいえ」を選択すると、「サービス構成マネージャー」ウィンドウに戻ります。サービス構成ファイルの編集については、313ページの『サービス構成ファイルの編集』を参照してください。

## サービス構成ファイルの編集

サービス構成ファイル・エディターを使用して、サービス構成ファイル (SCF) の詳細を表示したり、サービス構成ファイルから任意の希望する構成レコードを削除することができます。

サービス構成ファイルを編集するには、次のようにします。

1. 「サービス構成マネージャー」ウィンドウで、サービス構成ファイルを選択します。
2. 「編集」を選択します。

「サービス構成ファイル・エディター」ウィンドウがオープンします(図87を参照)。



図 87. 「サービス構成ファイル・エディター」ウィンドウ

ウィンドウの一番上には、次の情報が表示されます。

- ファイルのフルパス名
- 構成が適用される Netfinity サービス
- ファイルの生成元システムの名前
- ファイルが生成された日付および時刻
- ファイルの作成時に指定された記述 (存在する場合)

ウィンドウの他の部分には、1 つまたは複数のレコード選択リストが表示されます。これらのリストには、サービス構成から保管されたすべてのレコードの説明ラベルが表示されます。このウィンドウには、選択した Netfinity サービスの構成ファイルに関連するレコードを含んでいます。たとえば、アラート・マネージャー用に作成された SCF ファイルは、構成されたアラート・アクションおよびアラート・プロファイル用のレコード選択リストを備えています。

これらのレコードをサービス構成ファイルから恒久的に削除するために、選択して削除することができます。元のシステムに含まれる構成の一部分だけを、SCF を使用して構成する他のシステムに復元したい場合に、これを行うことができます。たとえば、アラート・マネージャー用のサービス構成ファイルが、他の Netfinity システムに転送したい 2 つのアラート・プロファイルと、多数の不要な他のレコード (この場合は、追加のアラート・アクションおよびアラート・プロファイル) を含んでいる場合は、必要な 2 つのアラート・プロファイルを除いて、サービス構成ファイルからすべてのレコードを削除することができます。

3. SCF ファイルから削除する、1 つまたは複数のサービス・レコードを選択します。
4. 「削除」を選択して、選択したレコードを SCF ファイルから削除します。

## サービス構成ファイルの削除

サービス構成ファイルを削除するには、「サービス構成マネージャー」ウィンドウでサービス構成ファイルを選択してから「削除」を選択します。

システム管理サービスを使用すると、多数の機能を備えた IBM システム管理サブシステムの構成および監視することができます。システム管理サービスは、次のシステム管理サブシステムとともに作動します。

- システム管理アダプター
- システム管理プロセッサ (Netfinity 5500 に含まれる)

システム管理の使用によって、システム管理イベント (POST タイムアウト、ローダー・タイムアウト、および O/S タイムアウト、限界温度、電圧、およびタンパーのアラートなど) を構成することができます。このようなイベントのいずれかが発生した場合でも、次の 3 つの方法のいずれかの 1 つで、Netfinity アラートを自動的に転送するように、システム管理サービスを構成することができます。

- アラートを別の Netfinity システムに転送する
- アラートを標準数字ページャーに転送する
- アラートを英数字ページャーに転送する

このサービスによって、リモートのシステム管理サブシステムに、アクセス、およびコントロールをダイヤルアウトできます。

さらに、システム管理を使用すると、POST 中にサポートされるシステム管理サブシステムを含むリモート・システムによって生成されたすべてのテキスト・データをリモートで監視、記録、および再生することができます。POST 中にリモート・システムを監視しながら、キーボード上でコマンドを入力することができ、それがリモート・システムに渡されます。



図 88. システム管理のサービス

システム管理サービスを始動する場合は、「Netfinity サービス・マネージャー」ウィンドウの「拡張管理サービス」アイコンをダブルクリックします。「拡張管理サービス」ウィンドウで選択可能な項目のいずれかをダブルクリックすると、必要な機能または構成情報にアクセスすることができます。

- 「構成情報」を選択すると、RAM マイクロコード、ROM マイクロコード、およびデバイス・ドライバー情報も含めて、システム管理サブシステムに関する詳細情報を表示できます。IBM Netfinity 5500 のシステム管理サブシステムを管理している場合は、さらに広範囲にわたるシステム情報にもアクセスすることができます。「構成情報」については、319ページの『構成情報』を参照してください。
- 「構成の設定」を選択すると、システム管理サブシステムの多数の機能を構成できます。機能としては、システム識別データ、ダイヤルイン安全保護設定、システム管理サブシステムのクロックによって報告される時刻および日付、タイムアウトおよび遅延の値、拡張モデム設定などがあります。「構成の設定」については、320ページの『構成の設定』を参照してください。
- 「リモート・アラート設定」を選択すると、システム管理サブシステムの自動ダイヤルアウト機能を構成できます。「リモート・アラート設定」については、334ページの『リモート・アラート設定』を参照してください。



- 「イベント・ログ」を選択すると、システム管理サブシステムのイベント・ログの内容を表示できます。発生したすべてのリモート・アクセスへの試行およびダイヤルアウト・イベントに関する情報は、システム管理サブシステムのイベント・ログに記録されます。「イベント・ログ」については、342ページの『イベント・ログ』を参照してください。
- 「稼働パラメーター」を選択すると、システム管理サブシステムによって監視された、多くのシステム構成要素の現在の値または状況を表示できます。「稼働パラメーター」については、344ページの『稼働パラメーター』を参照してください。
- 「システム電源制御」を選択すると、システム管理サブシステムに対してシステムの電源オフ、システムの再始動、またはシステムの電源オンを指示できます。「システム電源制御」については、346ページの『システム電源制御』を参照してください。
- 「リモート **POST** コンソール」を選択すると、POST 中にサポートされるシステム管理サブシステムを含むリモート・システムによって生成されたすべてのテキスト・データをリモートで監視、記録、および再生することができます。「リモート POST コンソール」の使用については、348ページの『リモート POST コンソール』を参照してください。
- システム管理サブシステムのマイクロコードを更新するには、「オプション」プルダウン・メニューから「マイクロコードの更新」を選択し、「システム管理サブシステム」を選択します。マイクロコードの更新の詳細については、350ページの『システム管理サブシステムのマイクロコードの更新』を参照してください。

## リモート・システム管理サブシステムを管理するためのシリアル接続の使用

システムのモデムを使用して、リモート・システムのシステム管理サブシステムにダイヤルアウトし、アクセスする場合は、「シリアル接続制御」を使ってリモート・システムとの接続を確立してから、「システム管理」サービスを始動します。また、他のシステムとのヌル・モデム接続を確立する場合にも、シリアル接続制御を使用することができます。シリアル接続制御の詳細については、297ページの第20章、『シリアル接続制御』を参照してください。

注:

1. シリアル接続制御の項目を作成する場合は、「Netfinity シリアル接続制御」ウィンドウの「システム管理プロセッサ」のチェック・ボックスを必ずチェックします。このチェック・ボックスがチェックされていないと、リモートのシステム管理サブシステムと接続されません。
2. シリアル接続制御を使用して、システム管理で使用するためのダイヤルアウト項目を構成する場合は、リモート・システム上の Netfinity サービスにアクセスするためのユーザー ID およびパスワードではなく、リモート・システムのシステム管理サブシステムにアクセスするためのログイン ID およびパスワードを必ず入力します。
3. シリアル接続制御の項目を作成して、リモート・システムのシステム管理プロセッサとヌル・モデム接続を確立する場合は、「ポート・ボー・レート」の値 (シリアル接続制御サービスを使用して構成される) が、相手先システムの「ボー・レート」の値 (拡張システム管理制御サービスによって構成される) と一致していることを確認します。「ポート・ボー・レート」と「ボー・レート」の値が一致しない場合、接続が失敗する恐れがあります。

## 構成情報

「構成情報」ウィンドウ (図89 参照) には、RAM マイクロコード、ROM マイクロコード、およびデバイス・ドライバー情報も含めて、システム管理サブシステムに関する詳細情報が入っています。



図 89. 「構成情報」ウィンドウ

## 構成の設定

「構成の設定」ウィンドウ (321ページの図90 を参照) の選択項目を使用して、システム管理サブシステムの多数の機能を構成します。機能としては、システム識別データ、ダイヤルイン安全保護設定、システム管理サブシステムのクロックによって報告される時刻および日付、タイムアウトおよび遅延の値、拡張モデム設定などがあります。

このウィンドウには、次のものが表示されます。

- 「システム識別」グループ
- 「ダイヤルイン設定」グループ
- 「システム管理プロセッサ・クロック」グループ
- 「POST タイムアウト」、「ローダー・タイムアウト」、「O/S タイムアウト」、および「電源オフ遅延」フィールド

また、このウィンドウには「モデム」ボタンもあります。「モデム設定」を選択すると、「モデム設定」ウィンドウがオープンします (329ページの『モデム設定』を参照)。

## 「システム識別」グループ

「システム識別」グループには、システム管理サブシステムが備えているシステムを識別する場合に役立つフィールドが2つあります。

フィールド	説明
名前	システムの名前、システムのユーザーの名前、または連絡先の名前を指定する場合に使用します。
番号	特定の製造番号または識別番号でシステムを識別したり、システムへのダイヤルインに使用する電話番号を記録したり、連絡先の電話番号を指定する場合に使用します。

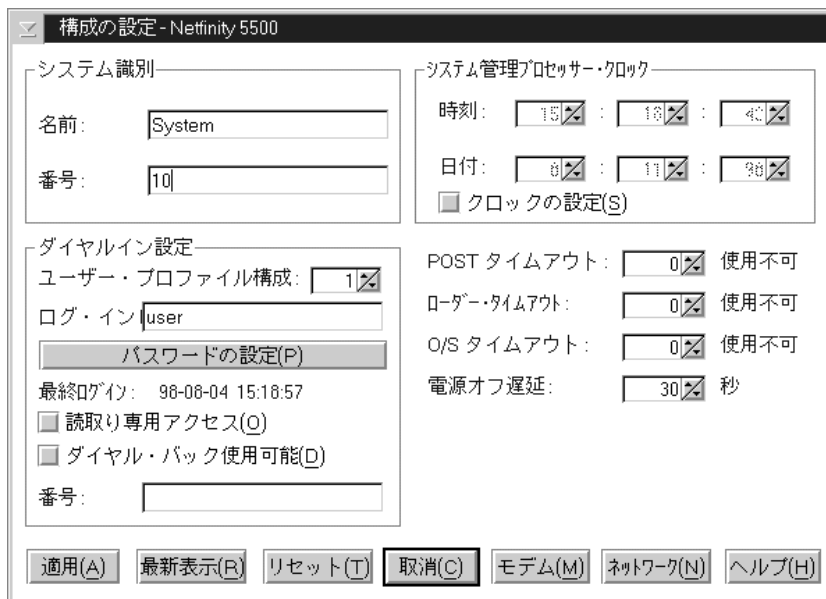


図 90. 「構成の設定」ウィンドウ

情報を変更する場合は、次のようにします。

1. 「名前」または「番号」のフィールドに、記録したいシステム情報を入力します。
2. 「適用」を選択して、この情報を保管します。

## 「ダイヤルイン設定」グループ

「ダイヤルイン設定」グループの選択項目を使用して、ダイヤルイン・サポートを使用可能または使用不可にして、システム管理サブシステムにダイヤルします。「ダイヤルイン設定」グループには、次の項目があります。

項目	説明
ユーザー・プロファイル構成	スピン・ボタンを使用して、構成したいユーザー・プロファイルを選択します。このサービスは、システム管理アダプターを備えたシステムでは最大 6 つまでの個別ユーザー・プロファイルを、IBM Netfinity 5500 システムでは最大 12 までの個別プロファイルをサポートします。
ログイン ID	このフィールドには、リモート・ユーザーが使用するログイン ID を入力します。最大 6 つまでのログイン ID を構成することができます (このフィールドでは大文字小文字を区別します)。  注: システム管理サブシステムにリモート・アクセスする場合は、ログイン ID を指定する必要があります。
パスワードの設定	リモート・ユーザーがシステム管理サブシステムにアクセスするには、ログイン ID とパスワードを指定する必要があります。ログイン ID を指定した後で、「パスワードの設定」をクリックして「パスワードの設定」ウィンドウをオープンします (このフィールドでは大文字と小文字を区別します)。
最終ログイン	リモート・ユーザーが最後に、正常にログインした日時が表示されません。
読み取り専用アクセス	「読み取り専用アクセス」チェックボックスにチェック・マークが付いている場合は、プロファイルが選択されているユーザーは、アクセスを許可されても、システム管理サブシステムのすべての設定値を変更することはできません。ただし、ユーザーは、パスワードを除いて、現在構成されている設定および値を見ることができます。
ダイヤル・バック使用可能	「ダイヤル・バック使用可能」チェック・ボックスにチェック・マークが付いている場合は、プロファイルが選択されているユーザーがログインしてから、システム管理サブシステムはただちに接続を自動的に終了し、「ダイヤルイン設定」グループの「番号」フィールドに入力されている電話番号を使用してダイヤルアウトし、リモート・システムとの接続を試みます。

必要なら、「モデム」を選択して、「モデム設定」ウィンドウにアクセスします (329ページの『モデム設定』を参照)。「モデム設定」ウィンドウでは、モデム設定およびダイヤル設定を指定することができます。

リモート・ユーザーの新規ログイン ID を作成する場合は、次のようにします。

1. リモート・ユーザーが使用する ID を「ログイン ID」フィールドに入力します。ID は、最大 8 文字の長さまで指定することができます。
2. リモート・ユーザーがシステム管理サブシステムにアクセスするためには、ログイン ID とパスワードを指定する必要があります。「パスワードの設定」を選択すると、「パスワードの設定」ウィンドウが オープンします。

「パスワードの設定」ウィンドウで、次のようにします。

- a. 「新規パスワードの入力」にパスワードを入力します。

注: パスワードは長さが 5 ~ 8 文字で、少なくとも 1 文字の英数字以外の文字が含まれている必要があります。

- b. 「新規パスワードの入力」フィールドに入力したパスワードと同じものを「新規パスワードの再入力」フィールドに入力します。
- c. 「適用」をクリックして、このパスワードを保管し、「パスワードの設定」ウィンドウをクローズします。

3. 「適用」をクリックして、新規ユーザー ID を保管します。

現在選択されているログイン ID を削除する場合は、次のようにします。

1. 「ユーザー・プロファイル構成」フィールドのわきにあるスピン・ボタンを使用して、前に構成したユーザー・プロファイルを選択します。
2. 「ログイン ID」フィールドをクリックします。
3. 「Backspace」キーまたは「Delete」キーを使用して、現在表示されているログイン ID を削除します。
4. 「適用」をクリックして、ユーザー ID を除去します。

## 「システム管理プロセッサ・クロック」グループ

「システム管理プロセッサ・クロック」グループの選択項目を使用して、システム管理サブシステムによって報告される時刻および日付を設定します。

現在設定されている時刻または日付を変更する場合は、次のようにします。

1. 「システム管理プロセッサ・クロック」チェック・ボックスにチェック・マークが付いているかどうか確認します。現在保管されている時刻および日付を、システム管理サブシステムが変更できるようにするためには、このチェック・ボックスにチェック・マークが付いている必要があります。
2. 各フィールドのわきにあるスピン・ボタンを使用して、時刻または日付を設定します。
  - 「時刻」フィールドは、左から右に時、分、秒を表します。
  - 「日付」フィールドは、左から右に月、日、年を表します。
3. 「適用」をクリックして、新しい時刻および日付を保管します。



## POST タイムアウト

注: この機能には特殊設計の POST ルーチンが必要であり、この機能が使用できるのは、一部の IBM システムの場合だけです。この機能をサポートするシステムについては、351ページの『サポートされる拡張機能』を参照してください。

「**POST** タイムアウト」フィールドには、システム管理サブシステムが POST タイムアウト・イベントを生成するまでに、システムの電源オン自己診断テスト (POST) の完了を待つ時間が、秒数で表示されます。この完了までにかかる時間が設定値を超え、「**POST** タイムアウト」チェック・ボックス (「リモート・アラート設定」ウィンドウの「アラートを使用可能にする」グループ内にある) にチェック・マークが付いている場合は、システム管理サブシステムは自動的にシステムを一度再起動し、使用可能になっているすべてのダイヤルアウト項目にアラートの転送を試みます。いったん、システムが再始動した後は、**POST** タイムアウトは自動的に使用不可になります。

POST タイムアウトの値を設定する場合は、「**POST** タイムアウト」フィールドのわきにあるスピン・ボタンを使用して、システム管理サブシステムが POST の完了を待つ時間を秒数で設定します。次に、「適用」をクリックして、この値を保管します。

「リモート・アラート設定」ウィンドウについては、334ページの『リモート・アラート設定』を参照してください。

## ローダー・タイムアウト

注: この機能には特殊設計の POST ルーチンが必要であり、この機能が使用できるのは、一部の IBM システムの場合だけです。この機能をサポートするシステムについては、351ページの『サポートされる拡張機能』を参照してください。

「ローダー・タイムアウト」フィールドには、システム管理サブシステムがローダー・タイムアウト・イベントを生成するまでに、システムのロード・プロセスの完了を待つ時間が、秒数で表示されます。ローダー・タイムアウトでは、POST の完了からオペレーティング・システム (OS) の始動までに経過する時間を測定します。この完了までにかかる時間が設定値を超え、「ローダー・タイムアウト」チェック・ボックス (「リモート・アラート設定」ウィンドウの「アラートを使用可能にする」グループ内にある) にチェック・マークが付いている場合は、システム管理サブシステムは自動的にシステムを一度再起動し、使用可能になっているすべてのダイヤルアウト項目にアラートの転送を試みます。いったん、システムが再始動した後は、ローダー・タイムアウトは自動的に使用不可になります。

ローダー・タイムアウト値を設定する場合は、「ローダー・タイムアウト」フィールドのわきにあるスピン・ボタンを使用して、システム管理サブシステムがタイムアウト・イベントを生成するまでに、POST の完了から O/S の始動までの間待つ時間を、秒数で設定します。次に、「適用」をクリックして、この値を保管します。

「リモート・アラート設定」ウィンドウについては、334ページの『リモート・アラート設定』を参照してください。

## O/S タイムアウト

「**O/S** タイムアウト」フィールドには、システム管理サブシステムが O/S タイムアウト・イベントを生成するまでに、システムのオペレーティング・システムが応答を停止するのを待つ時間が、秒数で表示されます。O/S が応答するのにかかる時間が設定値を超え、デバイス・ドライバがインストールされ、正常に稼働している場合で、システム管理サブシステムはシステムの再始動を試み、「**O/S** タイムアウト」チェック・ボックス（「リモート・アラート設定」ウィンドウの「アラートを使用可能にする」グループ内にある）にチェック・マークが付けられている場合は、システム管理サブシステムは自動的にシステムを一度再始動させ、使用可能になっているすべてのダイヤルアウト項目にアラートの転送を試みます。

O/S タイムアウト値を設定する場合は、「**O/S** タイムアウト」フィールドのわきにあるスピン・ボタンを使用して、システム管理サブシステムが O/S タイムアウト・イベントを生成するまでに、システムのオペレーティング・システムが応答を停止するのを待つ時間を秒数で設定します。次に、「適用」をクリックして、この値を保管します。

「リモート・アラート設定」ウィンドウについては、334ページの『リモート・アラート設定』を参照してください。

## 電源オフ遅延

「電源オフ遅延」フィールドには、システム管理サブシステムがシステムの電源をオフにするまでに、システムのオペレーティング・システム・シャットダウン・プロセスが完了するのを待つ時間が、秒数で表示されます。

システム管理サブシステムが電源オフ手順を開始し、「電源オフ」チェック・ボックス(「リモート・アラート設定」ウィンドウの「アラートを使用可能にする」グループ内にある)にチェック・マークが付けられていると、システム管理サブシステムは使用可能になっているすべてのダイヤルアウト項目にアラートの転送を自動的に試みます。このアラートが転送されるのは、システムの電源がオフになり、電源オフ遅延時間が経過した後です。

電源オフ遅延の値を設定する場合は、「電源オフ遅延」フィールドのわきにあるスピン・ボタンを使用して、システム管理サブシステムがシステムの電源をオフするまでに、システムのオペレーティング・システム・シャットダウンが完了するのを待つ時間を秒数で設定します。次に、「適用」をクリックして、この値を保管します。

「リモート・アラート設定」ウィンドウについては、334ページの『リモート・アラート設定』を参照してください。

## その他の構成設定機能

「構成の設定」ウィンドウには、その他にも追加のボタンが3つあります。

ボタン	説明
最新表示	日付、時刻、および直前のログインも含めて、「システム管理サブシステム構成の設定」ウィンドウに表示されるすべてのデータを更新する場合は、「最新表示」を選択します。
リセット	構成設定、ダイヤルアウト設定、および拡張ダイヤルアウト設定も含めて、すべてのシステム管理の設定値をデフォルト値に戻す場合は、「リセット」を選択します。  重要: 以前に構成されていたシステム管理サブシステム設定値は、すべて失われてしまいます。
取消	変更を保管しないでウィンドウをクローズする場合は、「取消」を選択します。

## モデム設定

「モデム設定」ウィンドウを使用して、拡張モデム設定およびダイヤル呼び出し設定を指定します。このウィンドウをオープンするには、「構成の設定」ウィンドウで「モデム」をクリックします (320ページの『構成の設定』を参照)。

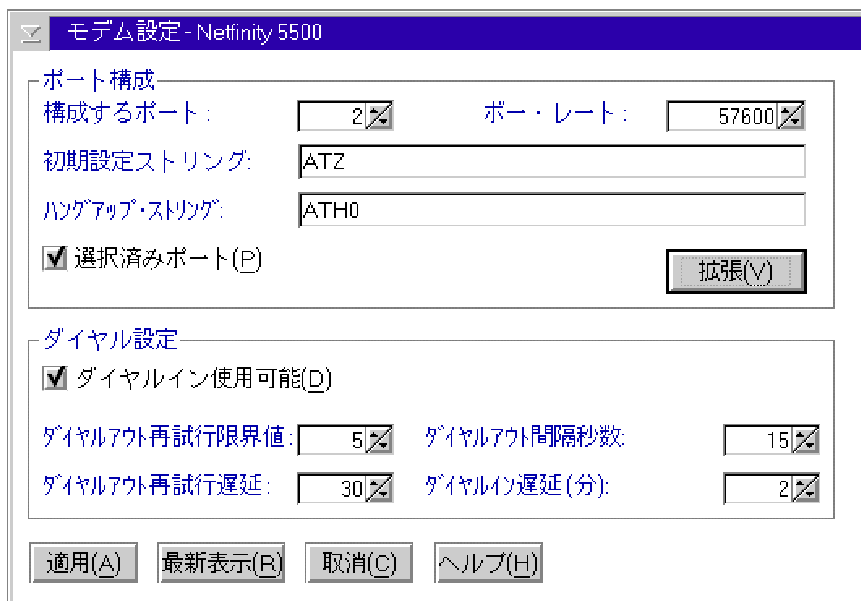


図 91. 「モデム設定」ウィンドウ

## 「ポート構成」グループ

「モデム設定」グループを使用して、システム管理サブシステム・ダイヤルアウト・イベントの発生時のアラートの転送に使用されるモデムの指定および構成を行います。「ポート構成」グループには、次の項目があります。

項目	説明
構成するポート	<p>スピン・ボタンを使用して、モデムが使用するポート番号を選択します。このスピン・ボタンで表示される値は、システム管理サブシステムによって使用される場合だけです。</p> <p>選択したポートは、システム管理サブシステムまたはオペレーティング・システムのいずれかで使用されるモデムの使用可能化に影響しません。選択できるポートは、「ポート A」、「ポート B」、または「ポート C」です。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>「ポート A」を選択すると、システム管理サブシステムが最初にモデムを使用するまで、オペレーティング・システムがモデムを使用できるようになります。システム管理サブシステムがモデムを制御した後は、オペレーティング・システムは、再始動されるまでモデムにアクセスしたり、モデムを使用したりすることはできません。</li><li>「ポート B」を選択すると、モデムは、オペレーティング・システムによってのみ使用されます。システム管理サブシステムは、「ポート B」を使用するよう構成されたモデムにアクセスすることはできません。</li><li>「ポート C」を選択すると、モデムは、システム管理サブシステムによってのみ使用されます。オペレーティング・システムは、「ポート C」を使用するよう構成されたモデムにアクセスすることはできません。</li></ul>
ボー・レート	スピン・ボタンを使用して、モデムのボー・レートを指定します。
初期設定ストリング	指定したモデムに使用される初期化文字列を入力します。デフォルトの文字列が指定されています (ATE0)。ダイヤルアウト機能が適正に働いていない場合を除いて、この文字列を変更することがないようにします。初期化文字列の変更が必要な場合は、333ページの『初期化文字列に関する指針』を参照してください。
呼び出し側 ID ストリング	モデムから呼び出し側 ID 情報を得るために使用する初期化文字列を入力します。
選択済みポート	このチェック・ボックスでは、「構成するポート」に現在表示されているポート番号が、システム管理サブシステムで現在使用するよう指定されているポートであるかどうかを示します。現在、表示されているポート番号を使用するように、システム管理サブシステムを構成したい場合は、このチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。

項目	説明
ヌル・モデム	<p>ヌル・モデム接続を使用して、リモートの Netfinity システムからのアクセスができるようにする場合は、このチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。</p> <p>注: 「ヌル・モデム」チェック・ボックスにチェック・マークが付いている場合は、モデムを使用して、他のシステムにダイヤルアウト・アラートを送信したり、他のシステムからダイヤルアウト・アラートを受信することはできません。</p>
出荷時設定ストリング	<p>モデムを初期化する場合、モデムを出荷時の設定に戻す初期化文字列を入力します。デフォルトは AT&amp;F0 です。</p>
照会ストリング	<p>モデムが接続されているかどうかを見つけるときに使用する初期化文字列を入力します。デフォルトは AT です。</p>
エスケープ・ストリング	<p>現在、他のモデムと交信中 (接続中) のモデムをコマンド・モードに戻すための初期化文字列を入力します。デフォルトは +++ です。</p>
エスケープ保護時間	<p>このフィールドには、エスケープ・ストリングがモデムに出される前と後の時間の長さを入力します。この値は、10 ミリ秒の間隔で測定されます。デフォルトは 1 秒です。</p>
ダイヤル接頭部ストリング	<p>ダイヤルされる番号の前に使用する初期化文字列を入力します。デフォルトは ATDT です。</p>
ダイヤル接尾部ストリング	<p>ダイヤルするのを停止するよう、モデムに伝える番号がダイヤルされた後に使用する初期化文字列を入力します。デフォルトは改行文字または -M です。</p>
自動応答ストリング	<p>電話が鳴ったときに応答するよう、モデムに伝えるために使用する初期化文字列を入力します。デフォルトは 2 回のコール後に応答、または ATSO=2 です。</p>
自動応答停止	<p>電話が鳴ったときの自動応答を停止するよう、モデムに伝えるために使用する初期化文字列を入力します。デフォルトは ATSO=0; です。</p>

## 「ダイヤル設定」グループ

「ダイヤル設定」グループを使用して、モデムに関連する設定を指定し、システム管理サブシステム・ダイヤルアウト・イベントの発生時のアラートの転送に使用されるモデムを構成します。「ダイヤル設定」グループには、次の項目があります。

項目	説明
ダイヤルイン使用可能	リモート・ユーザーがシステム管理サブシステムにダイヤルインおよびアクセスできるようにする場合は、このチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。このチェック・ボックスにチェック・マークが付いていない場合は、リモート・ユーザーがシステム管理サブシステムにリモート・アクセスすることはできません。このチェック・ボックスに対してチェック・マークを付けたり消したりした後は、「適用」をクリックして、新しい設定を保管します。
ダイヤルアウト再試行限界値	スピン・ボタンを使用して、システム管理がアラートの転送を試みる追加回数を選択します。
ダイヤルアウト再試行遅延	スピン・ボタンを使用して、システム管理がダイヤルアウトの試みを再試行する前に待つ秒数を指定します。
始動中の所有ポート	このチェック・ボックスにチェック・マークを付けて、システム管理サブシステム専用のシリアル・ポートを予約します。システム管理サブシステムがシステムにインストールされている場合、このチェック・ボックスにチェック・マークを付けると、システムのシリアル・ポートの1つが予約されます。システム管理サブシステムがアダプターの場合、このチェック・ボックスにチェック・マークを付けると、アダプターの内蔵通信ポートの1つが予約されます。このチェック・ボックスに対してチェック・マークを付けたり消したりした後は、「適用」をクリックして、新しい設定を保管します。
	注: システムをダイヤルイン・アクセスできるよう構成する場合は、このチェック・ボックスにチェック・マークを付ける必要があります。このチェック・ボックスにチェック・マークが付いていない場合は、システム管理サブシステムがダイヤルアウト用としてポートを再利用していない限り、このシステムにダイヤルインすることはできません。システム管理サブシステムを常時ダイヤルイン使用可能に構成したい場合、システムが現在パワーアップされているかどうかに関係なく、このチェック・ボックスにチェック・マークを付ける必要があります。このチェック・ボックスにチェック・マークが付いている場合、指定したポートをシステムで使用するために構成することはできません。
ダイヤルアウト間隔秒数	複数のダイヤルアウト項目を構成して、アラートを転送する場合は、システム管理サブシステムはこれらの項目のそれぞれに順次連絡を試みます。スピン・ボタンを使用して、システム管理サブシステムが別個のダイヤルアウト項目にダイヤルアウトするために待つ時間を秒数で指定します。



項目	説明
ダイヤルイン遅延 (分)	「ダイヤルイン遅延 (分)」フィールドには、間違っただユーザー ID またはパスワードが、システム管理サブシステムに対するダイヤルインの試みで、5 回連続して使用された後、経過する必要がある時間を分数で表示します。5 回連続してログインに失敗した後は、ユーザーが指定した時間 (分数) の間、ダイヤルイン・アクセスは使用不可になり、システム管理サブシステムは、ログインに 5 回連続して失敗したため、ダイヤル・アクセスが中断されたことを示す項目をイベント・ログに追加し、「自動ダイヤルアウトの設定」の「安全保護」チェック・ボックスにチェック・マークが付いている場合は、システム管理サブシステムはアラートの転送を試みます (334 ページの図92 を参照)。

## 初期化文字列に関する指針

新規初期化文字列の指定が必要な場合は、モデムに付属のマニュアルを参照してください。初期化文字列には、次のようにモデムを構成するコマンドが含まれる必要があります。

- コマンド・エコーを「OFF」
- オンライン文字エコーを「OFF」
- 結果コードを使用
- 単語形式結果コードを使用
- BUSY および DT 検出時、結果コードおよび CONNECT メッセージに話中音およびダイヤル音検出を含める
- プロトコル ID 追加 - LAPM/MNP/NONE V42bis/MNP5
- 標準 CD 操作
- DTR ON-OFF でハングアップし、「自動応答を使用不可」にし、コマンド・モードに戻る
- CTS ハードウェア・フロー制御
- コンピューターに対する受信データの RTS 制御
- キューイングありの非破壊 BREAK 信号、エスケープ状態なし

## ダイヤルアウト項目の設定の変更

選択したダイヤルアウト項目に設定を適用するには、次のようにします。

1. モデム設定を指定する。
2. ダイヤル呼び出し設定を指定する。
3. 「適用」をクリックして、これらの設定を保管し、「リモート・アラート設定」ウィンドウに戻る。

## リモート・アラート設定

「リモート・アラート設定」ウィンドウ (図92を参照) を使用して、システム管理サブシステムの自動ダイヤルアウト機能を構成します。ダイヤルアウト項目が構成されていると、「アラートを使用可能にする」グループから選択されたイベントのいずれかが発生した場合、システム管理サブシステムはリモートの Netfinity システム、数字ページャー、または英数字ページャーにアラートの転送を試みます。このアラートには、発生したイベントの種類、イベントが発生した時刻と日付、およびアラートを生成したシステムの名前についての情報が含まれます。

「ダイヤルアウト状況」は、システム管理サブシステムが現在ダイヤルアウト機能を実行中の場合は、ダイヤルアウト・オンとなります。現在活動中のダイヤルアウト機能を停止したい場合は、「ダイヤルアウトの停止」をクリックします。

システム管理サブシステムは、最大 6 つまで別々のダイヤルアウト項目を指定して構成することができます。

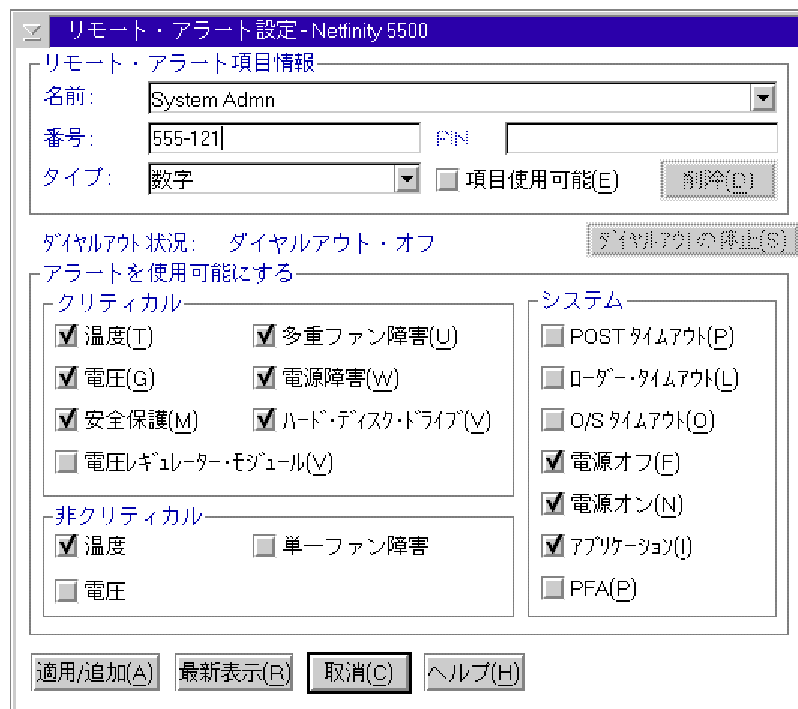


図 92. 「リモート・アラート設定」ウィンドウ

## 「リモート・アラート項目情報」グループ

リモート・アラート項目情報を編集または作成する場合は、次のようにします。

1. 「名前」フィールドに、アラートの転送先とする人またはシステムの名前を入力します。「名前」フィールドの情報は、ダイヤルアウト項目を識別する場合に使用する目的に限定されます。以前に構成したダイヤルアウト項目を編集する場合は、編集したい項目を「名前」選択リストから選択します。
2. 「番号」フィールドに、システムモデムが、デジタル・ページャー・サービスにダイヤル呼び出しする電話番号を入力します。モデムがページャー・サービスに接続されると、ダイヤルアウト・イベントに特有の数値データを送信します。

注: ページャー・サービスによっては、電話番号をダイヤルしてからアラートが数値データを送信する前のこのアラート・アクションの待機時間を増やす必要がある場合があります。数値データの送信前の時間を増やすには、電話番号の終わりに 1 つまたは複数のコンマ (",") を加えます。モデムは、コンマ 1 つにつき 2 秒ずつ待ってから数値データを送信します。

3. 「PIN」フィールドに、英数字ページャー・プロバイダーが必要とする個人識別番号を入力します。このフィールドがアクティブになるのは、「タイプ」フィールドに「英数字」を選択した場合だけです。(日本では、サポートしていません。)
4. 「タイプ」選択リストからシステム管理サブシステムがイベント通知を転送するために試みる接続のタイプを選択します。選択できるのは、数字 (標準ページャーの場合)、英数字 (英数字ページャーの場合)、または Netfinity (リモートの Netfinity システムに接続する場合) です。(日本では、英数字ページャーは使用不可です。)
5. 「項目使用可能」チェック・ボックスにチェック・マークを付けて、このダイヤルアウト項目をアクティブにします。「項目使用可能」チェック・ボックスにチェック・マークが付いていない場合は、この項目に対してダイヤルアウトが行われることはありません。

6. 「アラートを使用可能にする」グループからダイヤルアウト・イベントを選択します。チェック・マークを付けたイベントのいずれかが発生した場合、システム管理サブシステムは、「番号」フィールドに指定されている電話番号にダイヤルアウトし、そのイベントを記述するアラートを、「タイプ」フィールドに選択されている方法を使用して転送します。ダイヤルアウト・イベントについては、337ページの『「アラートを使用可能にする」グループ』を参照してください。
7. 「適用/追加」をクリックして、これらの設定値を保管します。

以前に構成したダイヤルアウト項目を除去する場合は、「名前」選択リストからその項目の名前を選択した上で、「削除」を選択します。

## 「アラートを使用可能にする」グループ

「アラートを使用可能にする」グループの選択項目を使用して、システム管理サブシステムによって連絡される結果になる、現在構成されているすべてのダイヤルアウト項目のシステム管理サブシステム・イベントを指定します。選択された項目がシステム管理サブシステムによって検出された場合は、イベントを記述するアラートが、「タイプ」フィールドに選択されている方法を使用して、ダイヤルアウト項目で指定されている受信側に転送されます。

アラートがページャーに転送される場合は、システム管理が、アラートをトリガーしたイベントに関する情報を含めます。アラートが数値 (または標準) ページャーに転送される場合は、ページが、トリガーしているイベントに対応するコード番号を含めます。アラートが英数字ページャーに転送される場合は、ページが、トリガーしているイベントを記述するコード番号とテキスト文字列を含めます。ページャーに転送される数値コードとテキスト文字列の詳細については、『「アラートを使用可能にする」グループ』を参照してください。

「アラートを使用可能にする」グループは、「クリティカル」グループ、「非クリティカル」グループ、および「システム」グループに分割されています。アラート・ダイヤルアウト可能な「クリティカル」グループには、次の項目があります。

項目	説明 (チェック・マークが付いている場合)	数値コード	テキスト文字列
温度	監視対象温度がしきい値を超えると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトし、その上で自動的にシステム・シャットダウンを開始します。	00	温度
電圧	監視対象給電部のいずれかの電圧が指定された作動範囲外になった場合、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします。	01	電圧
安全保護	リモート・ログインの試行が連続して6回失敗すると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします。	02	安全保護

項目	説明 (チェック・マークが付いている場合)	数値コード	テキスト文字列
多重ファン障害	<p>システムの冷却ファンのうち 2 つ (またはそれ以上) に障害が発生すると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトし、しかも自動的にシステム・シャットダウンを開始します。</p> <p>注: この機能が使用できるのは、一部の IBM システムの場合だけです。この機能をサポートするシステムについては、351 ページの『サポートされる拡張機能』を参照してください。</p>	03	多重ファン障害
電源障害	<p>システムの電源機構に障害が発生すると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします。</p> <p>注: この機能が使用できるのは、一部の IBM システムの場合だけです。この機能をサポートするシステムについては、351 ページの『サポートされる拡張機能』を参照してください。</p>	04	電源障害
ハード・ディスク・ドライブ	<p>システム内のハード・ディスク・ドライブの 1 台またはそれ以上に障害が発生すると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします。</p> <p>注: この機能が使用できるのは、一部の IBM システムの場合だけです。この機能をサポートするシステムについては、351 ページの『サポートされる拡張機能』を参照してください。</p>	05	ハード・ドライブ

項目	説明 (チェック・マークが付いている場合)	数値コード	テキスト文字列
電圧レギュレーター・モジュール障害	<p>電圧レギュレーター・モジュール (VRM) に障害が発生すると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトし、その上で自動的にシステム・シャットダウンを開始します。</p> <p>注: この機能が使用できるのは、一部の IBM システムの場合だけです。この機能をサポートするシステムについては、351ページの『サポートされる拡張機能』を参照してください。</p>	06	VRM 障害

「アラートを使用可能にする」の「非クリティカル」グループには、次の項目があります。

項目	説明 (チェック・マークが付いている場合)	数値コード	テキスト文字列
温度	<p>監視対象温度がしきい値を超えると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします。ただし、「クリティカル」グループの温度イベントの場合とは異なり、このアラート・ダイヤルアウトでシステム・シャットダウンが自動的に開始されることはありません。</p> <p>注: この機能が使用できるのは、一部の IBM システムの場合だけです。この機能をサポートするシステムについては、351ページの『サポートされる拡張機能』を参照してください。</p>	12	非クリティカル温度
単一ファン障害	<p>システムの冷却ファンの 1 つに障害が発生すると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします。</p> <p>注: この機能が使用できるのは、一部の IBM システムの場合だけです。この機能をサポートするシステムについては、351ページの『サポートされる拡張機能』を参照してください。</p>	11	単一ファン障害
電圧	<p>監視対象電圧がしきい値を超えると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします。</p>	13	非クリティカル電圧



「アラートを使用可能にする」の「システム」グループには、次の項目がありません。split=yes.

項目	説明 (チェック・マークが付いている場合)	数値コード	テキスト文字列
<b>POST</b> タイムアウト	「 <b>POST</b> タイムアウト値」(システム管理サブシステムの「構成の設定」ウィンドウで指定されている)を超えると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします。	20	POST ハング
ローダー・タイムアウト	「ローダー・タイムアウト値」(システム管理サブシステムの「構成の設定」ウィンドウで指定されている)を超えると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします。	26	ローダー・ウォッチドッグ障害
<b>O/S</b> タイムアウト	「 <b>O/S</b> タイムアウト値」(システム管理サブシステムの「構成の設定」ウィンドウで指定されている)を超えると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします。	21	OS ハング
電源オフ	システムの電源がオフになると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします。	23	システム電源オフ
電源オン	システムの電源がオンになると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします。	24	システム電源オン
アプリケーション	Netfinity アラートを受信すると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします (Netfinity は、アラート・マネージャーの「システム管理サブシステムにアラートを送信」アクションを使用して、システム管理サブシステムにアラートを直接転送することができます)。	22	アプリケーションのログされたイベント
<b>PFA</b>	システムから PFA アラートを受信すると、システム管理サブシステムはダイヤルアウトします。	27	PFA

## イベント・ログ

イベント・ログを使用して、「システム管理サブシステム・ログ」ウィンドウ (図93を参照) をオープンできます。このウィンドウには、現在、システム管理サブシステムのイベント・ログに保管されているすべての項目が表示されます。発生したすべてのリモート・アクセスへの試みおよびダイヤルアウト・イベントに関する情報は、システム管理サブシステムのイベント・ログに記録されます。

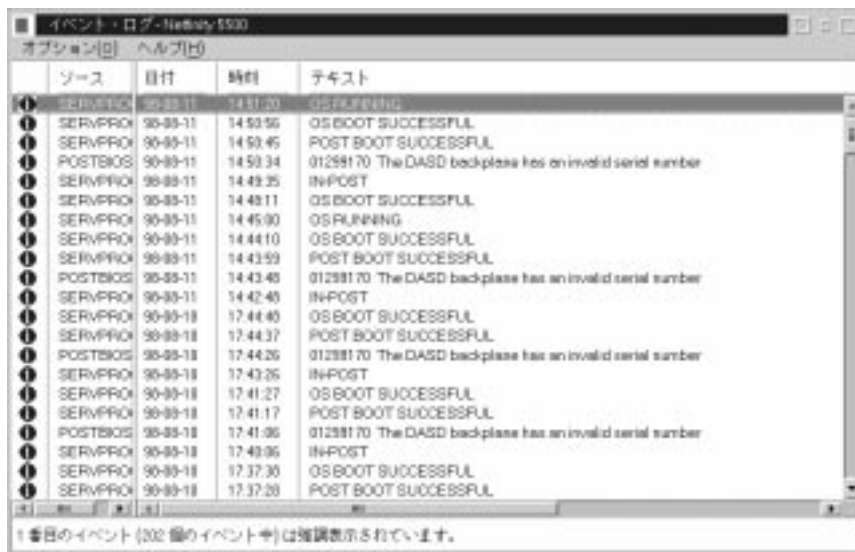


図 93. 「システム管理サブシステム・ログ」ウィンドウ

注:

1. システム管理サブシステムが Netfinity 7000 システムにインストールされている場合、イベント・ログにテキスト “I2C メッセージ。” で始まる項目が含まれている可能性があります。このようなメッセージは正常であり、システムに問題が生じた場合に、IBM サービス技術員が使用するために用意されているものです。
2. システム管理が Netfinity 5500 にインストールされている場合、イベント・ログには、POST エラー・メッセージも含まれています。

次の機能は、「システム管理サブシステム・ログ」ウィンドウの「オプション」プルダウン・メニューで選択できます。

- ロード

「システム管理サブシステム・ログ」ウィンドウの内容を最新表示します。

- ファイルに印刷

「システム管理サブシステム・ログ」ウィンドウの内容を保管します。

- プリンターに印刷

「システム管理サブシステム・ログ」ウィンドウの内容をシステムに接続されているプリンターに送ります。

- ログの消去

イベント・ログの内容が（「システム管理サブシステム・ログ」ウィンドウに現在表示されていない項目があれば、それもすべて含めて）完全に消去されます。

注： 「ログの消去」を使用して、システム管理サブシステムのイベント・ログを消去してしまった場合は、各ログの項目は完全に消去され、検索することはできません。

## 稼働パラメーター

「システム操作パラメーター」ウィンドウ (345ページの図94 を参照) には、システム管理サブシステムによって監視されているシステム構成の現在の値および状況が表示されます。使用可能な値には、次のようなものがあります。

- 供給電圧 (+5 ボルト、+12 ボルト、-3.3 ボルト、-12 ボルトなど。Netfinity 5500 システムには、追加の -5 ボルトおよび電圧レギュレーション・モジュール VRM<sup>™</sup>・モニター機能が搭載されています)
- アダプター・カードの終端、アダプター・カードの中央、マイクロプロセッサ、および DASD のバックプレーンの現在の温度およびしきい値レベル

注: 監視されるシステム構成要素は、システム管理サブシステムによって異なります。

- システム状態 (O/S 開始、O/S 稼働中、POST 開始、POST 停止 (エラー検出)、およびシステム電源オフ / 状態不明を含む)
- システム電源状況 (オンまたはオフ)
- 電源オン時間、システムの電源がオンになっていた合計時間(電源オン時間の累積であり、直前のシステム再始動以降の時間ではありません)

システム操作パラメーター - Netfinity 5500					
温度 (摂氏)					
	値	警告リセット	警告	ソフト遮断	ハード遮断
カードの中央	31.00	39.00	47.00	52.00	57.00
ディスク・バックプレーン	29.00	37.00	42.00	45.00	50.00

電圧			システム状況		
ソース	値	警告リセット			
+5 ボルト	5.10	( 4.90, 5.25)	( 4.7	システム電源	オン
-5 ボルト	-5.14	( -4.90, -5.25)	( -4.50	電源オン時間	165
+3 ボルト	3.37	( 3.26, 3.43)	( 3.10	始動カウント	74
+12 ボルト	12.16	( 11.50, 12.60)	( 11.00	システム状況	O/S 活動が検出されました
-12 ボルト	-11.93	( -10.92, -13.20)	( -10.20	ファン1	87%
				ファン2	66%
				ファン3	65%

図 94. 「システム操作パラメーター」ウィンドウ

注: 温度モニターによっては、一部の IBM システムでしか使用できないものもあります。追加温度モニターをサポートするシステムについては、351ページの『サポートされる拡張機能』を参照してください。

## システム電源制御

「システム電源制御」ウィンドウを使用すると、システム管理サブシステムに対してシステムの電源オフ、システムの再始動、またはシステムの電源オンを指示できます。すべての電源制御オプションを設定する場合、最初に「電源制御使用可能オプション」チェック・ボックスにチェック・マークを付ける必要があります。このチェック・ボックスにチェック・マークが付いていない場合は、「電源制御オプション」フィールドは使用できません。

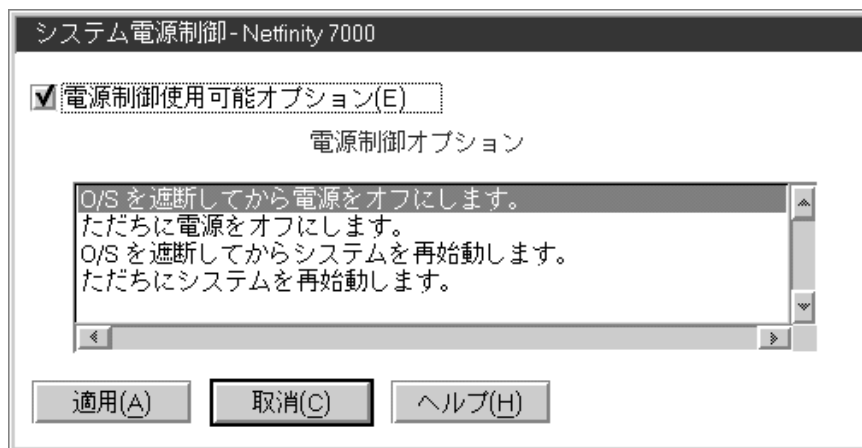


図 95. 「システム電源制御」ウィンドウ

次の電源制御オプションが常時使用可能です。

機能	説明
<b>O/S</b> を遮断してから電源をオフにします。	システムの電源をオフする前に、O/S のシャットダウンを実行します。
ただちに電源をオフにします。	システムの電源を即時にオフにします。
<b>O/S</b> を遮断してからシステムを再始動します。	O/S のシャットダウンを実行し、システムの電源をオフにし、システムの電源をオンにします。
ただちに再始動します。	システムの電源を即時にオフにし、その後、オンにします。

モデムを介してシステム管理サブシステムに接続されている場合は、「ただちに電源をオンにします。」も使用可能です。この機能では、システムの電源をオン実行にし、マイクロプロセッサが POST、ロード、および O/S 始動の手順を実行できるようにします。

電源制御オプションを設定するには、次のようにします。

1. 「電源制御使用可能オプション」チェック・ボックスに チェック・マークを付ける。

注: すべての電源制御オプションを設定する場合、最初に「電源制御使用可能オプション」チェック・ボックスに チェック・マークを付ける必要があります。このチェック・ボックスにチェック・マークが付いていない場合は、「電源制御オプション」フィールドは使用できません。

2. 「電源制御オプション」フィールドから、アクティブにしたい電源制御オプションを選択します。
3. 「適用」をクリックします。

## リモート POST コンソール

システム管理のリモート POST コンソール機能を使用すると、POST 中に生成されたテキスト出力をすべてリモートで監視、記録、および再生することができます。リモート・システム上の POST データの監視および記録は、次のように行います。

1. リモート・システムのシステム管理サブシステムに接続します。
2. 「リモート POST」ウィンドウをオープンします。
3. リモート・システムを (システム管理のシステム電源制御機能を使用して) 再起動します。

リモート・システムが POST を完了すると、POST データはすべて「リモート POST コンソール」ウィンドウに表示および記録されます。リモート・システムで POST の監視中は、ローカル・キーストロークはすべて自動的にリモート・システムに渡される中継されるので、リモート・システムの POST プロセスと対話することができます。

POST の完了後、データを検討する場合は、リモート・システムとの接続を遮断し、再生機能を使用します。

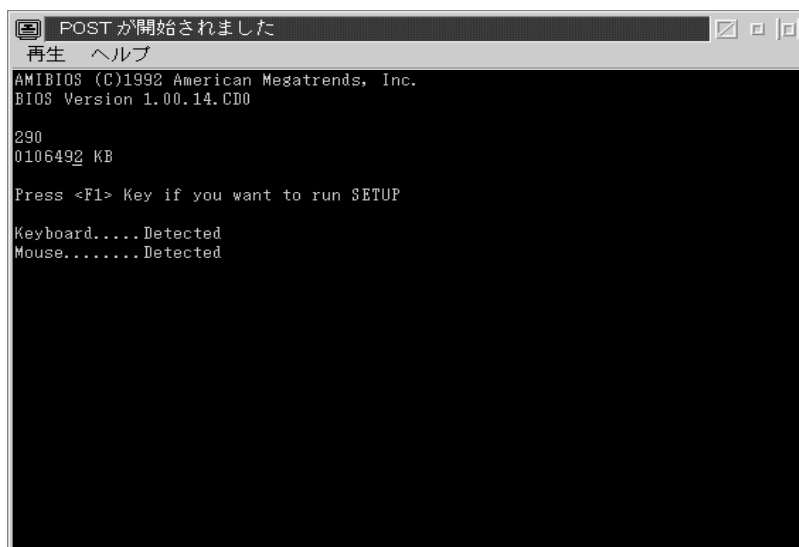


図 96. 「リモート POST コンソール」ウィンドウ



「再生」プルダウン・メニューの選択項目を使用して、リモート POST 操作中に記録されたテキスト出力を再生します。POST 中にリモート・システムで表示されたすべてのテキストは、リモート・システムで表示されていたとおりに表示されます。

- 記録された POST データの再生を開始する場合、または再生を停止した後、記録された POST データの再生を再開する場合は、「最後の **POST** の再生」をクリックします。
- 記録された POST データの再生を停止する場合は、「停止」をクリックします。
- 記録された POST データの表示を再開する場合は、「再始動」をクリックします。
- 「高速」、「中速」、または「低速」を選択して「リモート POST コンソール」ウィンドウで、記録された POST データの表示速度を指定します。

注:

1. リモート POST データが再生できるのは、リモート・システムのシステム管理サブシステムに接続されていない場合だけです。
2. この機能には特殊設計の POST ルーチンが必要であり、この機能が使用できるのは、一部の IBM システムの場合だけです。この機能をサポートするシステムについては、351ページの『サポートされる拡張機能』を参照してください。

## システム管理サブシステムのマイクロコードの更新

システム管理サブシステムのマイクロコードを更新するには、次のようにします。

1. 「オプション」プルダウン・メニューで「マイクロコードの更新」を選択してから、「システム管理」を選択します。  
「ファイル選択」ウィンドウが表示されます。
2. 「ファイル選択」ウィンドウを使用して、ソースのディスク・ドライブ (またはディスクセット・ドライブ) およびシステム管理サブシステムのマイクロコード更新が常駐しているディレクトリーを選択します。
3. 「了解」を選択して、手順を続行します。
4. 手順の続行を確認する警告メッセージが表示されます。続行する場合は「了解」を選択し、マイクロコードの更新処理を停止する場合は「取消」を選択します。
5. システム管理サブシステムのマイクロコードを更新する処理の続行を確認すると、システム管理サービスが、システム管理サブシステムに対してマイクロコードの更新を適用します。

この処理中、一部のシステム管理サブシステムの監視機能の一部 (Netfinity 5550 システム管理プロセッサで使用可能な環境監視など) が使用不可になります。マイクロコードの更新が完了すると、すべてのシステム監視機能が再開します。

## サポートされるサーバー

システム管理は、次に示す IBM サーバーのいずれかにインストールされているシステム管理アダプター (マイクロコード・リビジョン 10 以降付き) とともに機能します。

- PC Server 310 (すべての ISA モデル)
- PC Server 315
- PC Server 320 (すべての EISA モデル)
- PC Server 325
- PC Server 330
- PC Server 520 (すべての EISA モデル)
- PC Server 704、PC サーバー・システム管理ケーブル (94G6970) 付き
- Netfinity 7000

システム管理は、Netfinity 5500 サーバー上でも機能します。これらのサーバーには、システム管理プロセッサと呼ばれる内蔵型のシステム管理サブシステムが搭載されています。

## サポートされる拡張機能

システム管理によっては、特別なマイクロコードまたはハードウェアがサーバー上に存在していることを必要とするものがあります。次の各項で制限事項が示されていない限り、システム管理の機能は、システム管理アダプターがインストールされているすべてのサーバーで使用できます。

注: サポートされるサーバーおよびサポートされる拡張機能に関する最新情報については、<http://www.pc.ibm.com/us/netfinity/> の IBM PC サーバー WWW ホーム・ページを参照してください。

## POST タイムアウト

POST タイムアウトが利用できるのは、次のシステムで使用する場合だけです。

- PC Server 325
- PC Server 330
- Netfinity 7000

## ローダー・タイムアウト

ローダー・タイムアウトが利用できるのは、次のシステムで使用する場合があります。

- PC Server 325
- PC Server 330

## 電源障害時自動ダイヤルアウト設定

電源障害時ダイヤルアウトが利用できるのは、Netfinity 7000 の場合だけです。

## 冷却ファン障害時自動ダイヤルアウト設定

冷却ファン障害時ダイヤルアウトが利用できるのは、次のシステムで使用する場合があります。

- PC Server 325
- PC Server 330
- Netfinity 7000

## ハード・ディスク障害時自動ダイヤルアウト設定

ハード・ディスク障害時ダイヤルアウトが利用できるのは、Netfinity 7000 の場合だけです。

## 非クリティカル温度自動ダイヤルアウト設定

非クリティカル温度ダイヤルアウトが利用できるのは、Netfinity 7000の場合だけです。

## リモート POST コンソール、再生、およびリモート診断

リモート POST コンソール、再生、およびリモート診断が利用できるのは、次のシステムで使用する場合だけです。

- PC Server 325 (リモート診断はモデル PTO、PTW、PBO、および RBO で利用可能)
- PC Server 330 (リモート診断はモデル PTO、PTW、および PBO で利用可能)
- Netfinity 7000 (リモート診断は利用不能)

## 追加温度モニター

システム・ボード、マイクロプロセッサ領域、マイクロプロセッサ 1、およびマイクロプロセッサ 2 用の温度モニターが利用できるのは、次のシステムで使用する場合だけです。

- PC Server 325
- PC Server 330

## Netfinity マネージャーがない状態でのシステム管理サブシステムへのアクセス

何らかの理由で、Netfinity マネージャーを使用してシステム管理サブシステムにアクセスしたり、管理したりできない場合は、端末プログラムとモデムを使用して、システム管理サブシステムに直接接続することができます。このモデムは、管理ポート C に接続されなければなりません (システム管理サブシステムのモデムの構成の詳細については、329ページの『モデム設定』を参照してください)。接続すると、モニター、構成、およびエラー・ログなどさまざまなデータにアクセスできます。また、リモート・システムをオンやオフにしたり、サーバーをシャットダウン、再始動したり、システム管理サブシステム上のリモート・ビデオ・モードを開始することもできます。リモート・ビデオ・モードを使用すると、POST 中に生成されるすべてのテキスト出力をリモートで監視できるようになります。リモート・システムが POST を完了すると、POST データはすべて「端末プログラム」ウィンドウに表示されます。リモート・システムで POST の監視中は、ローカル・キーストロークはすべて自動的にリモート・システムに中継されるので、POST 中にアクセスできる POST ユーティリティー (システム構成、RAID ミニ構成プログラム、診断プログラムなど) を使用することができます。

端末プログラムを使用して、システム管理サブシステムとの接続を確立するには、次のようにします。

1. 端末プログラムを使用して、システム管理サブシステムのモデムとの接続を確立します。

使用するモデムの設定は、次のとおりです。

ボー	57.6 k
データ・ビット	8
パリティ	なし
ストップ・ビット	1
フロー制御	ハードウェア

## 2. システム管理サブシステムにログ・インします。

システム管理サブシステムとの接続が確立すると、ユーザー名とパスワードの入力を求められます。システム管理サブシステムを使用するために以前構成したユーザー名とパスワードの組み合わせを入力しなければなりません。

ユーザー名とパスワードの2種類の組み合わせのうち、どちらかを使用できます。

- デフォルトのユーザー名 (USERID) とパスワード (PASSWORD)

注: デフォルトのユーザー名とパスワードでは、大文字と小文字が区別されます。すべて大文字を使用しなければならず、また、PASSWORDの“0”は数字のゼロです。

- システム管理サービスと Netfinity マネージャーを使用して定義したユーザー名とパスワード

### 重要

安全保護のため、システム管理サービスを使用して、ユーザー名とパスワードを変更してください。詳細については、320ページの『構成の設定』を参照してください。

システム管理サブシステムのマイクロコードを更新すると、デフォルトのユーザー名 (USERID) とパスワード (PASSWORD) はリセットされます。以前にそれらを変更していた場合は、再度変更する必要があります。

システム管理サブシステムにログ・インすると、次のメイン・メニューが表示されません。

- 2 モニター
- 3 エラー・ログ
- 4 サービス・プロセッサ構成
- 5 システム・サービス
- 6 システム電源
- 7 ブート
- B リモート端末の状況
- Y 現在のログオンの切断
- Z リモート・ビデオの開始

メニュー項目にアクセスするには、アクセスしたい情報に対応する番号か文字のキーを押します。メニュー項目の選択後、メイン・メニューで選択した項目に関してさらに詳細な情報を提供するサブメニューが表示されます。

注： 「Y 現在のログオンの切断」を選択すると、現行のセッションを終了します。作業を続行しようとする、新しいユーザー名とパスワードを入力するよう求められます。

メニューの選択項目	表示可能なデータ
モニター	システム・ボードの温度、CPU の温度、電源装置の温度、電圧の数値、電圧レギュレーター・モジュールの数値、ファンの状況、冗長電源装置の状況
エラー・ログ	システム・エラー・ログの内容
サービス・プロセッサ構成	システム管理サブシステムのモデム構成、ダイヤルアウト項目、ダイヤルアウト・アラート、ダイヤルイン・ログイン、システム状況、しきい値、システム統計、VPD 情報、およびシステム状態
システム・サービス	システム管理サブシステムのウォッチドッグ・タイマーの状況およびホスト・システムに送信されたイベント・アラート
システム電源	現在のシステム電源状況、電源オフ構成、および電源オフ遅延値 注： 「システム電源」メニューで選択可能な項目を使用して、システムの電源をオンにしたり、オフにしたりすることができます。詳細については、357ページの『「システム電源」メニューの選択項目』を参照してください。
ブート	「ブート」メニューで選択可能な項目を使用して、システムのシャットダウンや再始動を行ったり、システム管理サブシステムを再始動したりすることができます。詳細については、359ページの『「ブート」メニューの選択項目』を参照してください。
リモート端末状況	現在のリモート端末の状況
リモート・ビデオの開始	「リモート・ビデオの開始」を使用すると、POST 中にリモートでサーバーを監視し管理できるように端末プログラムを構成することができます。詳細については、361ページの『POST の管理とアクセスのためのリモート・ビデオ・モニターの使用』を参照してください。

端末プログラムを使ったシステム管理サブシステムへのアクセスが終了したら、メイン・メニューの「現在のログオンの切断」を選択し、端末プログラムを使用してシステム管理サブシステムとの接続をクローズします。



## 「システム電源」メニューの選択項目

「システム電源」メニューで選択可能な項目を使用して、次のことが行えます。

- サーバーの現在の電源状況に関するデータの表示
- サーバーの電源構成に関するデータの表示
- サーバーの電源オフ
- サーバーの電源オン

これらの機能にアクセスするには、次のようにします。

1. 端末プログラムを使用して、システム管理サブシステムのモデムとの接続を確立します。
2. システム管理サブシステムにログ・インします。

システム管理サブシステムとの接続が確立すると、ユーザー名とパスワードの入力を求められます。システム管理サブシステムを使用するために以前構成したユーザー名とパスワードの組み合わせを入力しなければなりません。ユーザー名とパスワードの2種類の組み合わせのうち、どちらかを使用できます。

- デフォルトのユーザー名 (USERID) とパスワード (PASSWORD)

注: デフォルトのユーザー名とパスワードでは、大文字と小文字が区別されません。すべて大文字を使用しなければならず、また、PASSWORDの“0”は数字のゼロです。

- システム管理サービスと Netfinity マネージャーを使用して定義したユーザー名とパスワード

### 重要

安全保護のため、システム管理サービスを使用して、ユーザー名とパスワードを変更してください。詳細については、320ページの『構成の設定』を参照してください。

システム管理サブシステムのマイクロコードを更新すると、デフォルトのユーザー名 (USERID) とパスワード (PASSWORD) はリセットされます。以前にそれらを変更していた場合は、再度変更する必要があります。

システム管理サブシステムにログ・インすると、次のメイン・メニューが表示されます。

- 2 モニター
- 3 エラー・ログ
- 4 サービス・プロセッサ構成
- 5 システム・サービス
- 6 システム電源
- 7 ブート
- B リモート端末の状況
- Y 現在のログオンの切断
- Z リモート・ビデオの開始

3. 「6 システム電源」を選択します。

次の「システム電源」メニューが表示されます。

- 1 現在の電源状況
- 2 電源構成
- 3 電源オン
- 4 電源オフ

4. 「システム電源」メニューの項目を選択します。

- サーバーの現在の電源状況に関する情報を表示するには、「1 現在の電源状況」を選択します。
- サーバーの電源構成に関する情報を表示するには、「2 電源構成」を選択します。
- 現在、電源がオフになっているサーバーの電源をオンにするには、「3 電源オン」を選択します。
- 現在、電源がオンになっているサーバーの電源をオフにするには、「4 電源オフ」を選択します。

## 「ブート」メニューの選択項目

「ブート」メニューで選択可能な項目を使用して、次のことが行えます。

- サーバーのオペレーティング・システムのシャットダウンと、その後のサーバーの再始動
- オペレーティング・システムのシャットダウンを実行しないサーバーの再始動
- システム管理サブシステムの再始動

これらの機能にアクセスするには、次のようにします。

1. 端末プログラムを使用して、システム管理サブシステムのモデムとの接続を確立します。
2. システム管理サブシステムにログ・インします。

システム管理サブシステムとの接続が確立すると、ユーザー名とパスワードの入力を求められます。システム管理サブシステムを使用するために以前構成したユーザー名とパスワードの組み合わせを入力しなければなりません。ユーザー名とパスワードの2種類の組み合わせのうち、どちらかを使用できます。

- デフォルトのユーザー名 (USERID) とパスワード (PASSWORD)

注: デフォルトのユーザー名とパスワードでは、大文字と小文字が区別されます。すべて大文字を使用しなければならず、また、PASSWORDの“0”は数字のゼロです。

- システム管理サービスと Netfinity マネージャーを使用して定義したユーザー名とパスワード

### 重要

安全保護のため、システム管理サービスを使用して、ユーザー名とパスワードを変更してください。詳細については、320ページの『構成の設定』を参照してください。

システム管理サブシステムのマイクロコードを更新すると、デフォルトのユーザー名 (USERID) とパスワード (PASSWORD) はリセットされます。以前にそれらを変更していた場合は、再度変更する必要があります。

システム管理サブシステムにログ・インすると、次のメイン・メニューが表示されます。

- 2 モニター
- 3 エラー・ログ
- 4 サービス・プロセッサ構成
- 5 システム・サービス
- 6 システム電源
- 7 ブート
- B リモート端末の状況
- Y 現在のログオンの切断
- Z リモート・ビデオの開始

3. 「7 ブート」を選択します。

次の「ブート」メニューが表示されます。

- 1 OS をシャットダウンしてリブート
- 2 直ちにリブート
- 3 SP の再始動

4. 「ブート」メニューの項目を選択します。

- サーバーのオペレーティング・システムをシャットダウンしてから、サーバーを再始動するには、「1 OS をシャットダウンしてリブート」を選択します。
- オペレーティング・システムをシャットダウンせずに、ただちにサーバーを再始動するには、「2 直ちにリブート」を選択します。
- システム管理サブシステムを再始動するには、「3 SP の再始動」を選択します。

## POST の管理とアクセスのためのリモート・ビデオ・モニターの使用

リモート・ビデオ・モードを使用すると、POST 中に生成されるすべてのテキスト出力をリモートで監視できるようになります。リモート・システムが POST を完了すると、POST データはすべて「端末プログラム」ウィンドウに表示されます。リモート・システムで POST の監視中は、ローカル・キーストロークはすべて自動的にリモート・システムに中継されるので、POST 中にアクセスできる POST ユーティリティ (システム構成、RAID ミニ構成プログラム、診断プログラムなど) を使用することができます。

サーバーの POST を監視し、アクセスするためにリモート・ビデオ・モードを使用するには、次のようにします。

1. 端末プログラムを使用して、システム管理サブシステムのモデムとの接続を確立します。
2. システム管理サブシステムにログ・インします。

システム管理サブシステムとの接続が確立すると、ユーザー名とパスワードの入力を求められます。システム管理サブシステムを使用するために以前構成したユーザー名とパスワードの組み合わせを入力しなければなりません。ユーザー名とパスワードの 2 種類の組み合わせのうち、どちらかを使用できます。

- デフォルトのユーザー名 (USERID) とパスワード (PASSWORD)

注: デフォルトのユーザー名とパスワードでは、大文字と小文字が区別されます。すべて大文字を使用しなければならず、また、PASSWORD の“0”は数字のゼロです。

- システム管理サービスと Netfinity マネージャーを使用して定義したユーザー名とパスワード

### 重要

安全保護のため、システム管理サービスを使用して、ユーザー名とパスワードを変更してください。詳細については、320ページの『構成の設定』を参照してください。

システム管理サブシステムのマイクロコードを更新すると、デフォルトのユーザー名 (USERID) とパスワード (PASSWORD) はリセットされます。以前にそれらを変更していた場合は、再度変更する必要があります。

システム管理サブシステムにログ・インすると、次のメイン・メニューが表示されます。

- 2 モニター
- 3 エラー・ログ
- 4 サービス・プロセッサ構成
- 5 システム・サービス
- 6 システム電源
- 7 ブート
- B リモート端末の状況
- Y 現在のログオンの切断
- Z リモート・ビデオの開始

3. サーバーを始動 (または再始動) します。

- 現在、リモート・サーバーの電源がオフの場合は、次のようにします。
  - a. メイン・メニューの「6 システム電源」を選択します。
  - b. 「システム電源」メニューから「3 電源オン」を選択します。
- 現在、サーバーの電源がオンになっている場合は、サーバーを再始動する必要があります。「システム電源」メニューや「ブート」メニューの選択項目を使用してサーバーを再始動する方法として、次のものがあります。

「システム電源」メニューの選択項目を使用してサーバーを再始動するには、次のようにします。

- a. メイン・メニューの「6 システム電源」を選択します。
- b. 「システム電源」メニューから「4 電源オフ」を選択します。
- c. サーバーの電源をいったんオフにしてから、「3 電源オン」を選択して、サーバーに電源を再供給します。

「ブート」メニューの選択項目を使用してサーバーを再始動するには、次のようにします。

- a. メイン・メニューの「7 ブート」を選択します。
- b. 「1 OS をシャットダウンしてリブート」か「2 直ちにリブート」のいずれかを選択して、サーバーを再始動します。

注: 「システム電源」メニューおよび「ブート」メニューの詳細については、それぞれ、357ページの『「システム電源」メニューの選択項目』と359ページの『「ブート」メニューの選択項目』を参照してください。

4. サーバーの再始動後、メイン・メニューに戻り、「Z リモート・ビデオの開始」を選択します。

リモート・ビデオ・モードがシステム管理サブシステムで開始すると、POST 中に生成されるすべてのテキスト出力が端末のウィンドウに送られます。端末は、完全にアクティブなリモート・セッションとして動作するため、リモート・サーバーに送れるキーボード・コマンドを入力することができます。このようにして、システム・セットアップ、RAID ミニ構成プログラムなどの POST 操作やユーティリティーにアクセスするためのキー・コマンドやキーの組み合わせを入力できるようになります。

リモート・ビデオ・モードの使用が終了したら、「**Ctrl+R**」キーを押し、次に「**Ctrl+E**」キーを押し、さらに「**Ctrl+T**」キーを押します。これらのキー操作でリモート・ビデオ・モードを終了し、メイン・メニューに戻ることができます。





## 第23章 ソフトウェア・インベントリー

---

ソフトウェア・インベントリーを使用すると、Netfinity システムにインストールされているソフトウェア製品の存在を迅速かつ容易に検索することができます。この柔軟な検索方法によって、特定の製品や製品のタイプ (たとえば、ワード・プロセッサ、グラフィック・ビューアーなど) を検索する、またはシステム上で認識されるすべてのソフトウェアのレコードを編集したりすることができます。報告書は、ファイルへの印刷、プリンターへの出力、または Netfinity データベースへのエクスポートを行うことができます。

ソフトウェア・インベントリーは、定義済みのソフトウェア製品プロファイル (製品定義と呼ばれる) を含む辞書ファイルをもっており、ネットワーク上のシステムにインストールされたソフトウェアの検索をただちに開始することができます。

ソフトウェア・インベントリーは、シンプルなグラフィカル・インターフェースで設計されており、これを使用して、製品定義を迅速かつ容易に、追加または編集することができます。製品は、指定されたファイル名 (特定サイズのファイルまたは特定の日付に作成されたファイルも含めて、特定のバージョンのソフトウェアだけを検索することができます) の存在、または SYSLEVEL ファイルの存在によって定義、識別することができます。

ソフトウェア・インベントリーは、ほかの IBM または他社のシステム管理ソフトウェア・アプリケーションと共に作動するよう設計されています。ソフトウェア・インベントリーには、NetView DM エージェント・ソフトウェアがワークステーション上にインストールされている場合に、ワークステーションの既存のソフトウェアのインベントリー情報を NetView DM /6000 または NetView DM (NetWare 版) ソフトウェア配布データベースに統合するための機構が備わっています。これは、NetView DM FNDSWINV ソフトウェアの変更活動記録インポート・ファイルの作成によって実行されます。このファイルは、ソフトウェア・インベントリー・サービスによってそのワークステーション上で発見された NVDM 変更オブジェクトの名前のリストを含んでいます。

ソフトウェア・インベントリーには、既存の QSoft 辞書ファイル (IBM の Network Door/2 製品で使用)、NetView DM インベントリー・リスト・ファイル (INVSCAN ユーティリティで使用する)、SPAudit 辞書 (公開されている辞書であり、Software Publishers Association の SPAudit ツールで使用できます。この辞書は、インターネット WWW の <http://www.spa.org> で入手可能)、および他のソフトウェア・インベントリー辞書に対するソフトウェア辞書インポート機能も備わ

っています (これによって、複数のソフトウェア・インベントリ辞書を簡単に組み合わせることが可能です)。

ソフトウェア・インベントリは、リモート・システム・マネージャーと共に使用することもできます。ソフトウェア・インベントリを用いて、キーワードを特定のアプリケーションに割り当てることができます。アプリケーション・キーワードが定義されているアプリケーションが辞書検索中に検出された場合は、現在このシステムに対して定義されている他のキーワードのリストにアプリケーション・キーワードを追加することができます。アプリケーション・キーワードがシステム・キーワードのリストに追加されると、Netfinity マネージャー はリモート・システム・マネージャーの検索機能を使用して、指定されたキーワードをもつシステムだけをシステム・グループに追加することができます。たとえば、アプリケーション・キーワードを使用すると、Netfinity マネージャーは、アップグレードを必要とする特定のワード・プロセッサ・プログラムをもつシステムだけのグループを作成することができます。キーワードの割り当ておよび検索処理の詳細については、266ページの『検索処理の使用』を参照してください。



製品名	ベンダー名	バージョン	シボシオン	位置
IBM DS2	IBM Corp.	1.01	WPU00L	D:\OS2\INSTAL
IBM DS2 2048 Graphics Engine	IBM Corp.	1.01	WPU00L	D:\OS2\INSTAL
IBM DS2 Post Printer Support Tech	IBM Corp.	1.00	WPU00L	D:\OS2
IBM DS2 LAN Adapter and Protocol	IBM Corp.	5.00	WPU00L	D:\IBMCOM
IBM DS2 LAN Requester	IBM Corp.	5.00	WPU00L	D:\IBMLAN
IBM DS2 LAN Server	IBM Corp.	5.00	WPU00L	D:\IBMLAN
IBM DS2 User Profile Management	IBM Corp.	5.00	WPU00L	D:\IBMULB
IBM DS2 User Profile Management	IBM Corp.	5.00	WPU00L	D:\IBMULB
Media Player	Microsoft			D:\OS2\WINDOWS

図 97. ソフトウェア・インベントリ・サービス

## ソフトウェア・インベントリーの辞書ファイル

ソフトウェア・インベントリーは、ソフトウェア製品データのファイル(辞書ファイルと呼ばれる)を使用して、システム上のソフトウェア製品の存在を判別します。辞書ファイルは、多数のソフトウェア製品の名前と突合せ属性を含んでいます。突合せ属性とは、指定された属性の検出時に、ソフトウェア製品をソフトウェア・インベントリーが識別するために使用するものです。ソフトウェア・インベントリーは、次の2種類の突合せ属性を使用します。

- ファイル名(ファイル・サイズとファイル作成日付を含めることが可能)
- SYSLEVEL ファイル(SysID と構成要素 ID を含めることが可能)

ソフトウェア・インベントリーは、ハード・ディスク・ドライブを検索して、指定のファイルまたはSYSLEVEL ファイルがないかを調べます。SYSLEVEL ファイル、またはロードされた辞書ファイル内に突合せ属性として定義されている他のファイルが見つかったら、その製品がシステムにインストールされているものとして報告します。

### 辞書ファイルのロード

ソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルをロードするには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「辞書」プルダウン・メニューで「オープン」を選択します。  
「既存辞書のオープン」ウィンドウがオープンします。
2. 「オープンするファイル名」フィールドに、オープンしたい辞書ファイルの完全修飾パスとファイル名を入力するか、またはその辞書ファイルを含むドライブとディレクトリーを該当するフィールドから選択して、辞書ファイル名を選択します。
3. 「了解」を選択します。

## 新規の辞書ファイルの作成

新規辞書ファイルを作成するには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「辞書」プルダウン・メニューから、「新規」を選択します。  
「新規辞書」ウィンドウがオープンします。
2. 「保管ファイル名」フィールドに新規の辞書ファイルの名前を入力します。
3. 「ドライブ」と「ディレクトリー」の各フィールドから、新規の辞書ファイルを作成したいドライブとディレクトリーを選択します。
4. 「了解」を選択します。

## 辞書ファイルの編集

現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルを編集する場合は、「辞書」プルダウン・メニューから「編集」を選択します。「辞書の編集」ウィンドウ (図98 を参照) がオープンします。このウィンドウで次のことができます。

- 辞書記述の変更

辞書ファイルの説明は、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの一番下に表示され、現在ロードされている辞書ファイルの内容を識別する上で役立ちます。この説明は単にユーザーの使用を目的としたものに過ぎません。

辞書ファイルの説明を変更するには、「記述」フィールドに新しい辞書ファイルの説明を入力し、「終了」を選択します。



図 98. 「辞書の編集」ウィンドウ

- 製品定義の追加

製品定義を追加する方法については、371ページの『製品定義の追加』を参照してください。

- 製品定義の編集

製品定義を編集する方法については、381ページの『製品定義の編集』を参照してください。

- 製品定義の削除

辞書ファイルから製品定義を削除するには、「製品定義」選択リストから製品定義を選択し、「削除」を選択します。

## 製品定義の追加

現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに、新しい製品を追加するには、「追加」を選択します。「新規製品定義タイプ」ウィンドウがオープンします (図99 を参照)。製品定義は、次のどちらかの基準に基づいて追加することができます。

- 1 つまたは複数の要求ファイルによって定義される製品

選択した 1 つまたは複数のファイルをチェックすることによって、システムに製品がインストールされているかどうかを判別するソフトウェア・インベントリーの製品定義を構成するには、「1 つ以上の要求ファイルによって定義された製品」を選択します。ソフトウェア・インベントリーが検索するファイルの名前だけでなく、最小 (または最大) ファイル・サイズ、およびファイルの正確な日付または日付範囲を指定することができます。

1 つまたは複数の要求ファイルの定義によって、製品定義を追加する方法については、372ページの『ファイル・リスト製品定義』を参照してください。

- SYSLEVEL ファイルによって定義される製品

指定された SYSLEVEL ファイルをチェックすることによって、製品がシステムにインストールされているかどうかを判別するソフトウェア・インベントリーの製品定義を構成するには、「SYSLEVEL ファイルによって定義された製品」を選択します。SYSLEVELファイルの名前だけでなく、SysID 値 や構成要素 ID を指定することもできます。

指定された SYSLEVEL ファイルの存在によって製品定義を追加する方法については、377ページの『SYSLEVEL ファイル製品定義』を参照してください。

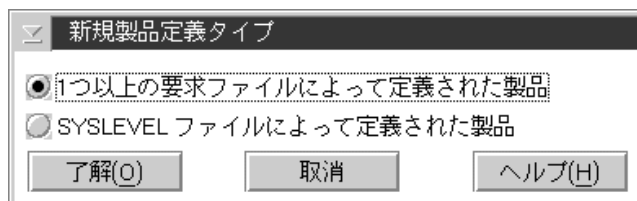


図 99. 「新規製品定義タイプ」ウィンドウ

## ファイル・リスト製品定義

ファイル・リスト製品定義を使用すると、ソフトウェア・インベントリーは、特定の製品に含まれる特定のファイルをシステムのドライブで検索することができます。このファイルが見つかると、ソフトウェア・インベントリーは、そのファイルを含むソフトウェア・パッケージがシステム上にインストールされていることを報告します。

ファイル・リスト製品定義を、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに追加するには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「辞書」プルダウン・メニューから「編集」を選択します。
2. 「辞書の編集」ウィンドウから「追加」を選択します。
3. 「新規製品定義タイプ」ウィンドウで「1 つ以上の要求ファイルによって定義された製品」を選択してから「了解」を選択し、「ファイル・リスト製品定義の追加」ウィンドウをオープンします (図100 を参照)。

製品名:

ベンダー名:

記述:

製品タイプ: デフォルト

バージョン:  リビジョン:

NVDM 変更オブジェクト:

NVDM 位置トークン:

アプリケーション・キーワード:

突合せ属性:

追加(A) 編集(E) 削除(D)

作成(C) 取消 ファイルの使用(F) ヘルプ(H)

図 100. 「ファイル・リスト製品定義の追加」ウィンドウ



#### 4. 製品データのフィールドに入力して、「製品タイプ」を選択します。

この情報は「ソフトウェア・インベントリ」ウィンドウと、検索中に製品が見つかったときにソフトウェア・インベントリが生成するすべての報告書に表示されます。「製品タイプ」は、製品タイプ別検索が実行されるときに、ソフトウェア・インベントリが使用します。製品タイプによる検索については、384ページの『製品タイプによる検索』を参照してください。

製品データのフィールドには、次のものがあります。

- 製品名

ソフトウェア製品の名前です。

- ベンダー名

ソフトウェア製品の製造元の名前です。

- 記述

ソフトウェア製品の要旨です。

- 製品タイプ

ソフトウェア製品が実行する機能の要旨です。選択可能な項目は、次のとおりです。

- デフォルト
- ネットワーク
- 通信
- ワープロ
- デスクトップ・パブリッシング
- データベース
- メール
- サーバー
- 表計算
- 財務
- エンターテイメント
- マルチメディア
- グラフィックス・ビューアー / エディター
- 教育
- オペレーティング・システム
- ソフトウェア開発
- プレゼンテーション
- システム・マネージメント

- ドキュメンテーション
- CAD/CAM
- バージョン  
ソフトウェア製品のバージョン番号です。
- リビジョン  
ソフトウェア製品の改訂番号です。
- NVDM 変更オブジェクト (NetView DM ユーザーの場合のみ )  
ワークステーションのインストール活動記録に追加される NetView DM の変更オブジェクトです。NetView DM サーバーのデータベース内にある既存の変更オブジェクトと一致する必要はありませんが、変更オブジェクトに関する命名規則には従う必要があります。ワークステーション上のソフトウェア・インベントリーの呼び出した後、この変更オブジェクト名が、まだ存在していなければ、NetView DM カタログに追加されます。  
  
注: このデータは、「**NetView DM** インベントリーの更新」機能だけで使用されます。NetView DM 変更オブジェクトの詳細については、387ページの『NetView 配布管理機能インベントリーの更新』、または NetView DM の説明書を参照してください。
- NVDM 位置トークン (NetView DM ユーザーの場合のみ)  
NetView DM の位置トークン文字列のことをいい、定義中のソフトウェア製品に使用されます。通常、ワークステーション上でのアプリケーションのインストール場所を表すために使用されます。たとえば、Netfinity の製品定義を作成する場合は、NETFINDIR という位置トークンを入力します。位置トークンの最大長は 11 文字です。このフィールドは任意選択です。  
  
注: このデータは、「**NetView DM** インベントリーの更新」機能だけで使用されます。NetView DM 変更オブジェクトについては、387ページの『NetView 配布管理機能インベントリーの更新』、または NetView DM の説明書を参照してください。
- アプリケーション・キーワード  
アプリケーション・キーワードをリモート・システム・マネージャーと合わせて使用すると、Netfinity マネージャーは、特定のアプリケーションがインストールされているシステムだけを検索することができます。アプリケーション・キーワードの使用については、390ページの『アプリケーション・キーワードの使用』を参照してください。

すべてのフィールドに入力する必要はありませんが、ソフトウェア・インベントリーによって製品が検出されたときに使用できる情報を最大にするために、できるだけ多くのフィールドに記入するようにしてください。

#### 5. 突合せ属性を指定します。

突合せ属性とは、定義されているソフトウェア製品がシステムにインストールされているかどうかを検出するために、ソフトウェア・インベントリーのサービス・プログラムが使用するデータ項目のことをいいます。ファイル・リスト製品定義を作成する場合、突合せ属性は、1つ(または複数)の指定ファイルです。ファイルの追加、編集、または削除は、「突合せ属性」フィールドで行うことができます。

ファイルを追加するには、次のようにします。

- 定義する製品がシステムにある場合

- a. 「ファイルの使用」を選択します。

- b. ソフトウェア・インベントリーで、検索するファイルが存在する「ドライブ」と「ディレクトリー」を選択します。次に、「ファイル」を選択し、「了解」を選択します。

選択されたファイルが「突合せ属性」フィールドに追加された後、「突合せファイルの使用」ウィンドウを再オープンするため、このディレクトリーの他のファイルをこのウィンドウに追加することができます。ファイルの追加が完了したら、「取消」を選択します。

- c. 任意選択：各製品のリリースまたはバージョンを区別するために、特定のファイルが特定の日付より後に作成されたことを指定したり、あるいはそのファイルが特定のサイズまたは一定の範囲内のサイズであることを指定することが必要な場合もあります。ソフトウェア・インベントリーに、指定のサイズまたはある範囲内のサイズであるファイルあるいは、ある特定の日かまたは特定の期間内に作成されたファイルを検索したい場合は、「突合せ属性」フィールドからそのファイルを選択した後、「編集」を選択して、「突合せファイルの編集」ウィンドウ(376ページの図101を参照)をオープンします。「ファイル・サイズ(任意指定)」と「ファイル日付(任意指定)」の各情報を指定してから、「保管」を選択して作業を続けます。



図 101. 「重複ファイルの編集」ウィンドウ

- d. 「作成」を選択して、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに製品定義を保管します。
- 定義したい製品がシステムにない場合
    - a. 「追加」を選択し、「重複ファイルの追加」ウィンドウをオープンします。
    - b. 「ファイル名」、「ファイル・サイズ (任意指定)」、「ファイル日付 (任意指定)」を入力します。

各製品のリリースまたはバージョンを区別するために、特定ファイルがある日付、またはその日付より後に作成されたと指定したり、あるいはサイズまたは一定の範囲内のサイズであることを指定することが必要な場合もあります。ソフトウェア・インベントリーに、指定のサイズまたはある範囲内のサイズであるファイル、あるいはある特定の日付かまたは特定の期間内に作成されたファイルを検索したい場合は、「ファイル・サイズ (任意指定)」および「ファイル日付 (任意指定)」情報を指定します。
    - c. 「保管」を選択して、このファイルを「重複属性」リストに追加します。

必要な数の重複属性を追加し終わるまで、この手順を繰り返します。
    - d. 「作成」を選択して、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに製品定義を保管します。

## SYSLEVEL ファイル製品定義

SYSLEVEL ファイル製品定義を使用すると、ソフトウェア・インベントリーは、特定の製品に含まれている特定のSYSLEVEL ファイルをシステムのドライブで検索することができます。SYSLEVEL ファイルが見つかったと、ソフトウェア・インベントリーは、その SYSLEVEL ファイルを含むソフトウェア・パッケージがシステム上にインストールされていることを報告します。

SYSLEVEL ファイル製品定義を、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに追加するには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「辞書」プルダウン・メニューから「編集」を選択します。
2. 「辞書の編集」ウィンドウから「追加」を選択します。
3. 「新規製品定義タイプ」ウィンドウで「**SYSLEVEL** ファイルによって定義された製品」を選択し「了解」を選択し、「SYSLEVEL製品定義の追加」ウィンドウをオープンします (図102 を参照)。

製品名:

ベンダー名:

記述:

製品タイプ:

NVDM 変更オブジェクト:

NVDM 位置トークン:

アプリケーション・キーワード:

突合せ属性:

ファイル名:

SysID 値: 0000-FFFF (\*=なし):

構成要素ID: (\*=なし):

作成(C) 取消 ファイルの使用(F) ヘルプ(H)

図 102. 「SYSLEVEL 製品定義の追加」ウィンドウ

#### 4. 製品データのフィールドに入力して、「製品タイプ」を選択します。

この情報は「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウと、検索中に製品が見つかったときにソフトウェア・インベントリーが生成するすべての報告書に表示されます。「製品タイプ」は、製品タイプ別検索が実行されるときに、ソフトウェア・インベントリーが使用します。製品タイプによる検索については、384ページの『製品タイプによる検索』を参照してください。

製品データのフィールドには、次のものがあります。

- 製品名

ソフトウェア製品の名前です。

- ベンダー名

ソフトウェア製品の製造元の名前です。

- 記述

ソフトウェア製品の要旨です。

- 製品タイプ

ソフトウェア製品が実行する機能の要旨です。選択可能な項目は、次のとおりです。

- デフォルト
- ネットワーク
- 通信
- ワープロ
- デスクトップ・パブリッシング
- データベース
- メール
- サーバー
- 表計算
- 財務
- エンターテイメント
- マルチメディア
- グラフィックス・ビューアー / エディター
- 教育
- オペレーティング・システム
- ソフトウェア開発
- プレゼンテーション
- システム・マネージメント

- ドキュメンテーション
- CAD/CAM
- NVDM 変更オブジェクト (NetView DM ユーザーの場合のみ)

ワークステーションのインストール活動記録に追加される NetView DM 変更オブジェクトです。NetView DM サーバーのデータベース内にある既存の変更オブジェクトと一致する必要はありませんが、変更オブジェクトに関する命名規則には従う必要があります。ワークステーション上のソフトウェア・インベントリーの呼び出した後、この変更オブジェクト名が、まだ存在していなければ、NetView DM カタログに追加されます。

注: このデータは、「**NetView DM インベントリーの更新**」機能だけで使用されます。NetView DM 変更オブジェクトの詳細については、387ページの『NetView 配布管理機能インベントリーの更新』、または NetView DM の説明書を参照してください。

- NVDM 位置トークン (NetView DM ユーザーの場合のみ)

NetView DM の位置トークン文字列のことをいい、定義中のソフトウェア製品に使用されます。通常、ワークステーション上でのアプリケーションのインストール場所を表すために使用されます。たとえば、Netfinity の製品定義を作成する場合は、NETFINDIR という位置トークンを入力します。位置トークンの最大長は 11 文字です。このフィールドは任意選択です。

注: このデータは、「**NetView DM インベントリーの更新**」機能だけで使用されます。NetView DM 変更オブジェクトの詳細については、387ページの『NetView 配布管理機能インベントリーの更新』、または NetView DM の説明書を参照してください。

- アプリケーション・キーワード

アプリケーション・キーワードをリモート・システム・マネージャーと合わせて使用すると、Netfinity マネージャーは、特定のアプリケーションがインストールされているシステムだけを検索することができます。アプリケーション・キーワードの使用については、390ページの『アプリケーション・キーワードの使用』を参照してください。

すべてのフィールドに入力する必要はありませんが、ソフトウェア・インベントリーによって製品が検出されたときに使用できる情報を最大にするために、できるだけ多くのフィールドに記入するようにしてください。

## 5. 突合せ属性を指定します。

突合せ属性とは、定義されているソフトウェア製品がシステムにインストールされているかどうかを検出するために、ソフトウェア・インベントリーが使用するデータ項目のことをいいます。SYSLEVEL製品定義を作成する場合、突合せ属性はSYSLEVEL ファイル名、SysID 値、および構成要素 ID になります。

SYSLEVEL ファイルに突合せ属性を追加するには、次のようにします。

- 定義する製品の SYSLEVEL ファイルがシステムにある場合
  - a. 「ファイルの使用」を選択します。
  - b. SYSLEVELファイルが存在する「ドライブ」と「ディレクトリー」を選択し、「ファイル」を選択してから「了解」を選択します。
  - c. 「作成」を選択して、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに製品定義を保管します。
- 定義しようとする製品の SYSLEVEL ファイルがシステムにない場合
  - a. 製品のSYSLEVELファイルの3文字からなるファイル名拡張子を「ファイル名」フィールドに入力します。
  - b. 可能なら「**SysID 値**」と「**構成要素 ID**」を入力します。

注: これらの値は SYSLEVEL ファイルに保管されているため、SYSLEVEL ファイルそのものがないと入手は困難な可能性があります。
  - c. 「作成」を選択して、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに製品定義を保管します。



## 製品定義の編集

ソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルの製品定義は、追加を行う場合と同様に編集することができます。製品定義を編集するには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「辞書」プルダウン・メニューから「編集」を選択します。
2. 定義を編集したい製品の名前を「製品定義」フィールドから選択し、「編集」を選択します。
  - 選択した製品定義がファイル・リスト製品定義である場合は、「ファイル・リスト製品定義の編集」ウィンドウがオープンします。
  - 選択した製品定義が SYSLEVEL ファイル製品定義である場合は、「SYSLEVEL 製品定義の編集」ウィンドウがオープンします。
3. 必要に応じて、製品情報と突合せ属性を編集します。

製品情報と突合せ属性を編集する手順は、新規製品定義を追加する際に使用した手順と同じです。詳細については、372ページの『ファイル・リスト製品定義』と377ページの『SYSLEVEL ファイル製品定義』を参照してください。

4. 「保管」を選択して、製品定義の変更を保管します。

## 検索の実行

ソフトウェア・インベントリーは、4つのタイプのソフトウェア検索をシステムに対して実行することができます。4種類の検索とは次のとおりです。

- 全辞書の検索
- ドライブによる検索
- 選択された製品の検索
- 製品タイプによる検索

## 全辞書の検索

ソフトウェア・インベントリーの全辞書の検索を使用すると、現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに定義されているソフトウェア製品のすべてを検索することができます。システムの数、システム上のファイル数、システムにインストールされている製品、および現在ロードされているソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルに定義されている製品数によって、全辞書の検索には数秒から数分を要します。検索が終了すると、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウに結果が表示されます。

全辞書の検索を実行するには、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「インベントリー」プルダウン・メニューから「全辞書の検索」を選択します。

報告書の生成または情報をデータベースにエクスポートする方法については、385ページの『報告書の生成とデータのエクスポート』を参照してください。

## ドライブによる検索

ソフトウェア・インベントリーを使用すると、指定したハード・ディスク・ドライブに対して全辞書検索を実行できます。検索したいのがシステム上の1つのディスク・ドライブだけにある製品を検索したい場合は「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「インベントリー」プルダウン・メニューから「ドライブによる検索」を選択し、検索したいディスク・ドライブ名を選択します。ソフトウェア・インベントリーは、現在ロードされているソフトウェア・インベントリー辞書内に定義されており、指定したディスク・ドライブだけにあるすべての製品を検索します。

検索が終了すると、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウにその結果が表示されます。報告書の生成または情報をデータベースにエクスポートする方法については、385ページの『報告書の生成とデータのエクスポート』を参照してください。

## 選択された製品の検索

ネットワーク上のシステムで、特定のソフトウェア製品を検索する必要がある場合もあります。1 つまたは複数の特定の製品を検索するには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリ」ウィンドウの「インベントリ」プルダウン・メニューから「選択された製品の検索」を選択します。

「選択インベントリ」ウィンドウがオープンします（図103 を参照）。



図 103. 「選択インベントリ」ウィンドウ

2. 「使用可能な製品定義」リストから、検索したいすべての製品名を選択します。
3. 「了解」を選択し、選択した製品の検索を開始します。

検索が終了すると、「ソフトウェア・インベントリ」ウィンドウに結果が表示されます。報告書の生成または情報をデータベースにエクスポートする方法については、385ページの『報告書の生成とデータのエクスポート』を参照してください。

## 製品タイプによる検索

ソフトウェア・インベントリーの辞書ファイルで製品を定義する場合、製品タイプを指定することができます。これは、製品の主要機能の要旨です。たとえば、Netfinity の製品タイプはシステム・マネージメントです。ソフトウェア・インベントリーを使用すると、ネットワーク上のシステムで同じ製品タイプのすべての製品を検索できます。

指定した製品タイプだけを検索するには、次のようにします。

1. 「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「インベントリー」プルダウン・メニューから「製品タイプによる検索」を選択します。  
「製品タイプによる検索」ウィンドウがオープンします。

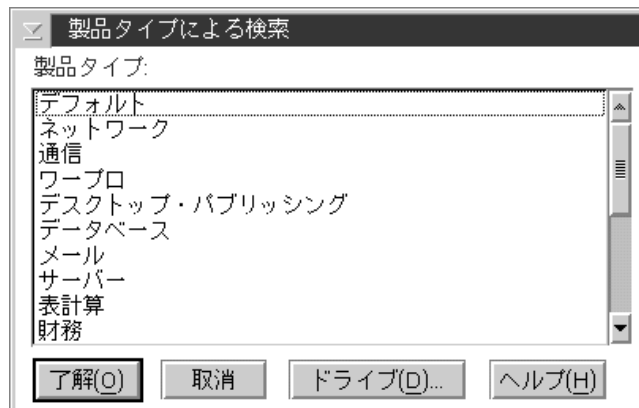


図 104. 「製品タイプによる検索」ウィンドウ

2. 「製品タイプ」リストから、1 つまたは複数の製品タイプを選択します。
3. 「了解」を選択し、検索を開始します。

検索が終了すると、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウに結果が表示されます。報告書の生成または情報をデータベースにエクスポートする方法については、385ページの『報告書の生成とデータのエクスポート』を参照してください。

## 報告書の生成とデータのエクスポート

ソフトウェア・インベントリーが収集した情報に対して、次のことを行うことができます。

- ファイルに印刷 (保管 )
- プリンターに印刷
- Netfinity データベースにエクスポート

### ファイルに印刷

ソフトウェア・インベントリーが収集した情報をファイルに印刷 (保管) するには、次のようにします。

1. ソフトウェア・インベントリーによる検索を開始します。
2. 検索が完了したら、「インベントリー」プルダウン・メニューから「ファイルに印刷」を選択します。
3. ファイル名を指定し、ファイルを保管するドライブとディレクトリーを選択し、「了解」を選択します。

### プリンターに印刷

ソフトウェア・インベントリーが収集した情報を、システムに接続されたプリンターで印刷するには、次のようにします。

1. ソフトウェア・インベントリーによる検索を開始します。
2. 検索が完了したら、「インベントリー」プルダウン・メニューから「プリンターに印刷」を選択します。

情報は、システムに接続されたデフォルトのプリンターに送信されます。

## データベースにエクスポート

ソフトウェア・インベントリーが収集した情報を Netfinity データベースにエクスポートする、またはサポートされているデータベース形式のファイルにデータを保管する場合は、次のようにします。

1. ソフトウェア・インベントリーによる検索を開始します。
2. 検索が完了したら、「インベントリー」プルダウン・メニューから「データベースにエクスポート」を選択します。
3. 実行したいデータベース・エクスポートのタイプを選択します (接続されているデータベースへのデータのエクスポート、またはデータベース・ファイルへのデータの保管)。
4. 「了解」を選択し、データをエクスポートまたは保管します。

## NetView 配布管理機能インベントリーの更新

ソフトウェア・インベントリーを使用すると、NetView 配布管理機能 ( NetView DM と略記します ) のソフトウェア・インベントリー用のインポート・ファイルを作成することができます。システムで NetView DM エージェント・ソフトウェアが稼働している場合は、「インベントリー」プルダウン・メニューから「**NetView DM** インベントリーの更新」を選択します。ソフトウェア・マネージャーは、現在ロードされている辞書ファイルをスキャンして、NVDM 変更オブジェクトを含む製品定義を検索し、それらを NetView DM ソフトウェア・インベントリーのインポート・ファイル (FNDSWINV) に追加します。位置トークン情報は、NetView DM エージェント・ソフトウェア・ベース・パス上の FNDTKINV と呼ばれるファイルに書き込まれます。

これによって、ユーザー作成の exit ルーチンは、適切な NVDM INV コマンドと NVDM UPDTG コマンドを呼び出し、インポート・ファイル内のデータを、ワークステーションの NetView DM ソフトウェア変更活動記録データベースに移動することができます。

注: この選択項目は、NetView DM エージェント・ソフトウェアがシステムにインストールされ、実行されている場合にだけ使用することができます。

## ソフトウェア辞書のインポート

ソフトウェア・インベントリーには、既存の QSoft 辞書ファイル(IBM の Network Door/2 製品で使用)、NetView DM インベントリー・リスト・ファイル (INVSCAN ユーティリティで使用する)、SPAudit辞書 (公開されている辞書であり、Software Publishers Association の SPAudit ツールで使用できます。この辞書は、インターネット WWW の <http://www.spa.org> で入手可能)、および他のソフトウェア・インベントリー辞書に対するソフトウェア辞書インポート機能も備わっています (これによって、複数のソフトウェア・インベントリー辞書を簡単に組み合わせることが可能です)。

ソフトウェア辞書ファイルをインポートするには、次のようにします。

1. インポートされる新しいデータを受け入れるソフトウェア・インベントリー辞書ファイルをオープンします。

ソフトウェア・インベントリー辞書ファイルをオープンするには、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「辞書」プルダウン・メニューから「オープン」を選択し辞書ファイルを選択してから、「了解」を選択します。

2. 「辞書」プルダウン・メニューからインポート機能を選択します。

次のソフトウェア辞書のインポート機能が使用可能です。

- ソフトウェア・インベントリー辞書からのインポート

別のソフトウェア・インベントリー辞書ファイルからすべてのデータを現在ロードされているソフトウェア・インベントリー辞書ファイルにインポートするには、「ソフトウェア・インベントリー辞書からのインポート」を選択します。

- SPAudit 辞書からのインポート

SPAudit 辞書ファイルからすべてのデータを現在ロードされているソフトウェア・インベントリー辞書ファイルにインポートする場合は、「SPAudit 辞書からのインポート」を選択します。

- QSoft 辞書からのインポート

QSoft 辞書ファイルからすべてのデータを現在ロードされているソフトウェア・インベントリー辞書ファイルにインポートする場合は、「QSoft 辞書からのインポート」を選択します。



- NetView DM インベントリー・リストからのインポート

NetView DM インベントリー・リストからすべてのデータを現在ロードされているソフトウェア・インベントリー辞書ファイルにインポートする場合は、「**NetView DM** インベントリー・リストからのインポート」を選択します。

注:

1. システムの速度とインポートする辞書ファイルのサイズによって、インポート機能を完了するまでにはかなりの時間がかかる場合があります。
2. インポート機能では、ロードされているソフトウェア・インベントリー辞書ファイルにすでに存在する可能性のある項目を含む、選択したファイル内のすべてのデータがインポートします。同一の製品定義をインポートすると、製品に対する複数の同一の項目がユーザーの辞書ファイルにできる結果となり、単一の製品が複数回検索されることにもなります。同一の項目をソフトウェア・インベントリー辞書ファイルから削除するには、ソフトウェア・インベントリー辞書編集機能を使用して辞書ファイルを編集します (詳細については、369ページの『辞書ファイルの編集』を参照してください)。

## アプリケーション・キーワードの使用

ソフトウェア・インベントリでは、特定のソフトウェア・アプリケーションにアプリケーション・キーワードを追加することができます。アプリケーション・キーワードが定義されると、リモート・システム・マネージャーはそれらのキーワードを使ってアプリケーションをグループ分けし、インストールされているアプリケーションごとに、幾つかのシステム・グループを作ります。いったん、このようなキーワードを定義すれば、特定のアプリケーションがインストールされているシステムだけを含むシステム・グループを作成するために、リモート・システム・マネージャーで使用することができます。

アプリケーション・キーワードをソフトウェア・インベントリ辞書ファイルの定義に追加するには、次のようにします。

1. ソフトウェア・インベントリ辞書ファイルをロードします。

辞書ファイルをロードするには、「ソフトウェア・インベントリ」ウィンドウの「辞書」プルダウン・メニューから「オープン」を選択し、ロードしたい辞書ファイルを選択して、「了解」を選択します。

2. ソフトウェア・インベントリ辞書ファイルを編集します。

「辞書」プルダウン・メニューから「編集」を選択し、現在ロードされている辞書ファイルを編集します。

3. 製品定義を編集します。

アプリケーション・キーワードを割り当てる製品を「製品定義」フィールドから選択し、「編集」を選択します。

4. アプリケーション・キーワードを割り当てます。

「アプリケーション・キーワード」フィールドに、この製品を識別するために使用するキーワードを入力します。アプリケーション・キーワードは、12文字以内です。

5. 「保管」を選択して、情報を辞書ファイルに保管します。

辞書検索についてシステム上で検索された、アプリケーション・キーワードを持つシステムについては、辞書検索の後で「ソフトウェア・インベントリー」に他のソフトウェア製品情報と共にアプリケーション・キーワードが表示されます。アプリケーション・キーワードが定義されている製品がシステム上で検出されると、アプリケーション・キーワードをシステムのキーワード・リストに追加することができます。検索されて、定義された製品のアプリケーション・キーワードによって、システムのキーワード・リストを更新するには、「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウの「インベントリー」プルダウン・メニューから「アプリケーション・キーワードの更新」を選択します。

注:

1. アプリケーション・キーワードを、他のシステム・キーワードと区別するために、アプリケーション・キーワードの先頭には APP: という文字が追加されます。アプリケーション・キーワードをグループのシステム検索基準の一部として使用する「リモート・システム・マネージャー」システム・グループでは、システムの検索が成功するためには、「アプリケーション・キーワード」フィールドに入力したテキストの他に、APP: を含める必要があります。

たとえば、製品定義でアプリケーション・キーワード SOFTWARE を使用する場合、アプリケーション・キーワードを使用して定義された製品を使用するシステムを検索するために、リモート・システム・マネージャーが使用する必要のあるキーワードは、APP:SOFTWARE となります。

2. 「アプリケーション・キーワードの更新」機能は、現在「ソフトウェア・インベントリー」ウィンドウに表示されているアプリケーション・キーワードだけを、システムのキーワード・リストに追加します。アプリケーション・キーワードをシステムにインストールされているアプリケーションの製品定義に追加する場合は、辞書検索を再び実行してから「アプリケーション・キーワードの更新」を選択するまで、アプリケーション・キーワードはキーワード・リストに追加されません。



## 第24章 システム診断マネージャー

---

システム診断マネージャーを使用すると、ROM ベースの診断をサポートしているシステムに対して、各種の診断タスクを実行するよう指示することができます。以前に実行したすべての診断セッションの結果がシステムに保存されているので、システム診断マネージャーを使用してこれを調べることができ、システムの問題の診断および解決に役立ちます。

システム診断マネージャーは、次の構成要素を診断することができます。

- システム・ボード
- メモリー
- キーボード
- ビデオ
- ディスケット
- 代替 (第 2) CPU
- パラレル・ポート
- シリアル・ポート
- イーサネット
- SCSI
- RAID コントローラー
- マウス

「システム診断マネージャー」ウィンドウには、診断ルーチンのそれぞれについて、7つのデータ欄があります。データ欄としては、次のものがあります。

- 診断テスト
- 結果
- 障害時刻
- エラー・コード
- 障害の説明
- 障害アドレス
- 障害データ



診断テスト	結果	障害時刻	エラー・コード
システム・ボード	完了しました		
メモリー	完了しました		
キーボード	障害が起きました	1995-01-31 22:28:02	0201
ビデオ	完了しました		
ディスク	完了しました		
代替[第2]CPU	完了しました		
パラレル	完了しました		
シリアル	完了しました		
イーサネット	完了しました		
プリンター	完了しました		
マウス	障害が起きました	1995-01-31 22:27:54	0603

図 105. 「システム診断マネージャー」ウィンドウ

## サポートされるシステム

システム診断マネージャーが機能するのは、次のシステムです。

- IBM PC Server 325 (モデル PB0、RB0、1RY、2RY)
- IBM PC Server 330 (モデル PB0、PM0、11Y、21Y)

## システム診断マネージャーの使用

「システム診断マネージャー」ウィンドウには、現在ロードされている診断セッションの結果が表示されます。「システム診断マネージャー」ウィンドウのオプション・プルダウン・メニューで選択できる選択項目を使用して、次のことを行います。

- 診断の実行

システムに対する診断の実行方法については、396ページの『診断の実行』を参照してください。

- ウィンドウの内容の最新表示

ウィンドウの内容を最新表示する方法については、397ページの『表示データの最新表示』を参照してください。

- 直前の診断セッションの結果の表示

診断セッションの直前の結果の表示方法については、398ページの『以前収集された結果の表示』を参照してください。

## 診断の実行

システムに対して診断を実行する場合は、「オプション」プルダウン・メニューの「診断の実行」を選択します。「診断の実行」ウィンドウがオープンします (図106を参照)。

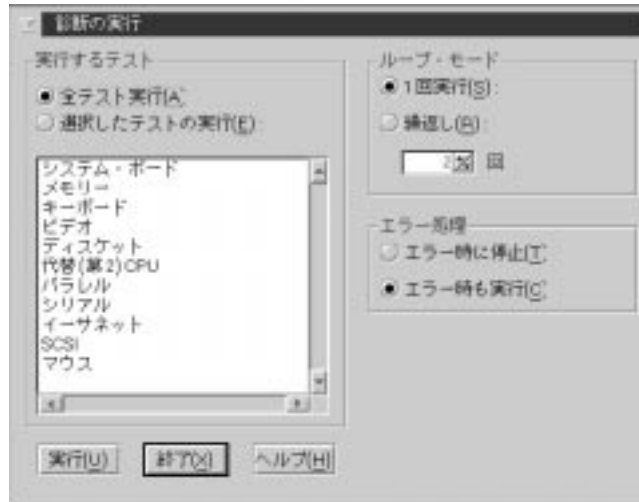


図 106. 「診断の実行」ウィンドウ

「診断の実行」ウィンドウを使用して、実行する診断テストを選択し、テストをループ・モードで実行する、この診断セッションで使用するシステム診断マネージャーのエラー処理設定などを指定します。

「システム診断マネージャー」セッションの構成は、次のようにして行います。

1. 「実行するテスト」グループ内の項目を選択して、実行するテストを選択します。

すべての診断ルーチンを実行する場合は、「全テスト実行」を選択します。特定のサブシステムのみをテストしたい場合は、「選択したテストの実行」を選択してから、「実行するテスト」選択リストから 1 つまたは複数のテストを選択します。



2. 「エラー処理」グループ内の項目を選択して、エラー処理モードを選択します。  
診断ルーチンを 1 回しか実行しない場合は、「1 回実行」を選択します。 診断ルーチンを 2 回以上実行する場合は、「繰返し」を選択し、「回」フィールドの横にあるスピン・ボタンを使用して、実行する回数を指定します。
3. 「エラー処理」グループ内の項目を選択して、エラー処理モードを選択します。  
エラー検出時に診断ルーチンを停止する場合は、「エラー時に停止」を選択します。エラーを記録し、指定した診断ルーチンを続行する場合は、「エラー時も実行」を選択します。
4. 診断セッションを開始します。  
「実行」を選択して、構成した診断セッションを開始します。

「終了」を選択すれば、診断セッションを開始しないで、いつでも「診断の実行」ウィンドウがクローズできます。

## 表示データの最新表示

「システム診断マネージャー」ウィンドウに現在表示されているデータを最新表示する場合は、「オプション」プルダウン・メニューの「結果の最新表示」を選択します。

## 以前収集された結果の表示

直前の診断セッションの結果を表示する場合は、「セッション」プルダウン・メニューから「選択」を選択します。「セッションの選択」ウィンドウがオープンします(図107を参照)。



図 107. 「セッションの選択」ウィンドウ

「セッションの選択」ウィンドウを使用すると、以前実行した診断セッションの結果の収集と表示ができます。このウィンドウには、以前実行され、現在システムに保管されている診断セッションがすべて表示されます。このようなセッション中の 1 つの結果を表示する場合は、「セッションの選択」フィールドから該当のセッションを選択し、「了解」を選択します。「了解」を選択すると、「セッションの選択」ウィンドウがクローズし、選択した診断セッションの結果が「システム診断マネージャー」ウィンドウに表示されます。

システム情報ツールは、ローカル・システムまたはリモートのシステムあるいはワークステーションのハードウェアおよびソフトウェアの構成に関して、広範囲にわたる情報を収集および表示するために設計されたものです。システム情報ツールは、主として IBM システムで使用するよう設計されていますが、多くの機能は他社製のシステムでも使用することができます。

### システム情報ツールの機能

システム情報ツールは、ハードウェアおよびソフトウェアの構成情報を収集します。この情報は、オンラインで表示することも、ファイルまたはプリンターで印刷することもできます。また、収集した情報を Netfinity データベースにエクスポートすることもできます。Netfinity のデータベースの説明については、559ページの付録 I、『Netfinityリレーショナル・データベース・テーブル』、および*Netfinity マネージャー クイック・ガイド*の“Netfinity データベース・サポート”を参照してください。

システムのハードウェア、ソフトウェア、またはオペレーティング・システムの構成によって、システム情報ツールは次のシステム機能の一部またはすべてに関する情報を提供しています。

- Pentium プロセッサ情報 (欠陥のある Pentium プロセッサの自動検出を含む)
- マイクロ・チャンネル、EISA、および PCI アダプターの ID、および多くの一般的なアダプターで使用可能な構成情報
- ドライブ情報 (ファイル・システムの種類、ディスク・ドライブの使用可能スペース、ディスク・ドライブ・サイズ、および区画レイアウトを含む)
- エラー・ログの表示および解釈
- キーボード情報
- メモリー構成 (物理メモリーの合計、インストールされている SIMM (Single Inline Memory Module) の識別、およびサポートされている増設メモリーを含む)
- マウスの種類および設定値

- オペレーティング・システム情報 (バージョン、DOS サポート、セッション・リミット、現行 タスク・リスト、および CONFIG.SYS 情報を含む)。
- モデルおよびマイクロプロセッサ情報 (モデル名、プロセッサのタイプと速度、BIOS 日付などを含む)
- パラレル・ポートとシリアル・ポートの構成
- ビデオ・システム情報 (アダプターの種類、画面解像度、およびビデオ・ディスプレイ識別子を含む)
- プリンター構成 (インストールされているプリンター・ドライバーに関するデータを含む)
- SCSI、ESDI、IDE/ST506、またはその他のディスク・アダプター情報 (接続されている装置、装置サイズ、およびアダプター・データを含む)
- システムの安全保護機能 (パワー・オン・パスワード、および 2 次安全保護機能を含む)
- RAID サブシステム
- VPD データ
- PCMCIA 装置
- プラグ・アンド・プレイ構成
- ネットワーク (NDIS) 装置およびデータ (OS/2 の場合のみ)



図 108. システム情報ツール

## システム情報ツールの使用

システム情報ツールによって収集された情報を表示させるには、「システム情報ツール」ウィンドウからその構成要素のオブジェクトまたは名前を選択します。このアクションによって、選択した構成要素の特定情報を含むウィンドウがオープンされます。

使用可能な情報が他にもある場合には、新規のウィンドウ内で1つまたは複数の語句またはオブジェクトが強調表示されます。その場合、さらにオブジェクトまたはトピックを選択して、装置固有の情報が示されたウィンドウをオープンすることができます。使用可能な情報がそれ以上ない場合、ウィンドウ内の項目は強調表示されません。

システム情報ツールでは、収集および表示されたデータの出力に関して、3つのオプションのどれかから選択することができます。これらのオプションにアクセスするには、「システム情報ツール」ウィンドウ上部の「ファイル」プルダウン・メニューを選択してから、次のことを行います。

- システム情報ツールによって収集されたすべてのシステム構成データのテキスト報告書を生成して、ユーザーが選択したファイルにその報告書を保管するには、「システム・データをファイルに印刷」を選択します。標準の「ファイルに印刷」ウィンドウが表示され、ファイル名を選択できるようになります。
- システム情報ツールによって収集されたすべてのシステム構成データのテキスト報告書を生成して、デフォルトのプリンターにその報告書を印刷するには、「システム・データをプリンターに印刷」を選択します。
- プログラムによって表示されたすべての情報および現在の日付と時刻を含むバイナリー・ファイルを作成するには、「履歴ファイルの生成」を選択します。後でコマンドラインからシステム情報ツールを始動するときに、**/F** コマンドライン・パラメーターを使用すると、履歴ファイルを表示することができます。システム情報ツールのコマンドライン機能については、546ページの『システム情報ツールのコマンドライン操作』を参照してください。
- 収集した情報を Netfinity データベースにエクスポートするには、「データベース」を選択します。詳細については、402ページの『データベース機能』を参照してください。

## データベース機能

システム情報ツールのデータをエクスポートするには、次のようにします。

1. 「ファイル」プルダウン・メニューから「データベース」を選択します。
2. 「データベース選択」フィールドからデータベース・エクスポート機能を選択します。

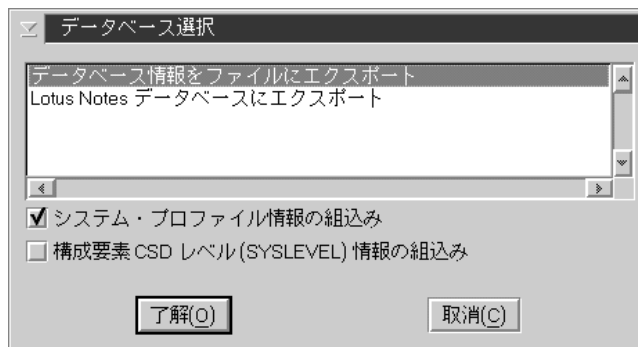


図 109. 「データベースの選択」ウィンドウ

データは、ファイル、またはサポートされているデータベース形式にエクスポートすることができます。

- システム情報をファイルにエクスポートする場合は、「データベース情報をファイルにエクスポート」を選択します。
- システム情報をサポートされているデータベースにエクスポートする場合は、管理用システムが接続されているデータベース・サーバーのエクスポート機能を選択します。管理用システムに複数のデータベース・サーバーが接続されている場合、「データベース選択」フィールドには各タイプについてのエントリーが表示されます。たとえば、Lotus Notes データベース・サーバーと DB2 データベース・サーバーの両方を使用するように構成されている場合は、「データベース選択」フィールドには「**Lotus Notes** データベースにエクスポート」および「**DB2** データベースにエクスポート」という 2 つのデータベースへのエクスポート選択項目が含まれます。

注: 管理用システムがデータベース・システムにアクセスできない場合、またはデータベース・システムを使用するように構成されていない場合は、このオプションは表示されません。詳細については、*Netfinity マネージャー クイックガイド* の“Netfinity データベース・サポート”を参照してください。

システム情報ツールで「システム・プロファイル」ノートブックから情報を収集し、その情報をデータ・セットに含めたい場合は、「システム・プロファイル情報の組み込み」チェック・ボックスを選択します。

3. 「了解」を選択して、この情報を保管します。

- 「データベース情報をファイルにエクスポート」オプションを選択した場合は、「ファイルにエクスポート」ウィンドウが表示されます (図110 を参照)。



図 110. 「ファイルにエクスポート」ウィンドウ



すべてのファイル固有情報を入力し、「了解」を選択します。

- 「システム情報をデータベースにエクスポート」オプションを選択した場合は、「サーバー選択」ウィンドウが表示されます。

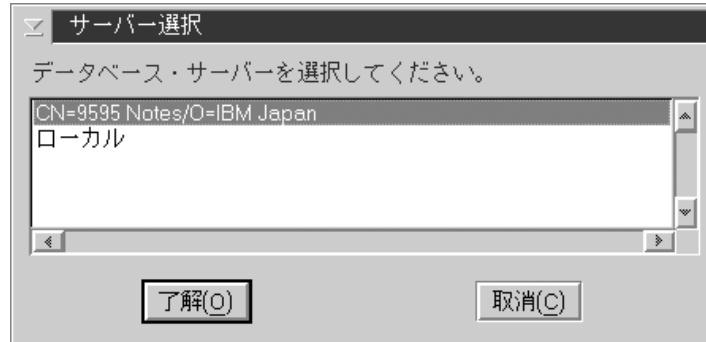


図 111. 「サーバー選択」ウィンドウ

データのエクスポート先のデータベースを「サーバー選択」フィールドから選択し、「了解」を選択します。

これによって、収集されたすべてのデータが既存のデータベースに追加されるようになります。Netfinity のデータベースについては、559ページの付録、『Netfinityリレーショナル・データベース・テーブル』、および *Netfinity* マネージャー クイックガイドの“Netfinity のデータベース・サポート”を参照してください。

## 機密システム・データの保護

システム情報ツールでは、広範囲にわたるハードウェア構成情報に加えて、詳細なオペレーティング・システム情報も収集します。収集の対象となるデータはオペレーティング・システムによって異なりますが、一般的には、システムの CONFIG.SYS ファイルや AUTOEXEC.BAT ファイルの内容も含まれます。システムの構成によって異なるとはいえ、これらのファイルには機密情報が含まれている場合があります。たとえば、CONFIG.SYS ファイルには、ネットワークでアクセス可能なディスク・ドライブにログオンする場合に使用する、次のようなコマンドが入っている可能性があります。

```
LOGON MY_USER_ID /D:MY_DRIVE /P:MY_PASSWORD
```

重要な、または機密のシステム・データを自動的に保護するためには、Netfinity ディレクトリーに SIKEYWD.INI という名前の ASCII ファイルを作成します。このファイルには、1 つまたは複数の英数字ストリングが入る必要があります。このファイルが表示される場合は、システム情報ツールは、SIKEYWD.INI ファイルに指定されているキーワードの 1 つが入っている行上の英数字 (キーワード自体以外) をすべてアスタリスクで置換されます。

たとえば、SIKEYWD.INI ファイルにキーワード LOGON が含まれている場合は、上記の CONFIG.SYS 情報は次のように表示されます。

```
LOGON*****
```

注:

1. SIKEYWD.INI ファイルには、必要な数のキーワードを入れることができます。キーワードは、相互間をスペースで区切る必要があります。
2. SIKEYWD.INI ストリング項目は、大文字小文字を区別します。SIKEYWD.INI 項目に正確に一致するストリングだけが、システム情報ツール・データ内で置換されます。
3. SIKEYWD.INI ファイルにキーワードを追加すると、追加処理が必要なので、システム情報ツールのパフォーマンスが低下する可能性があります。したがって、SIKEYWD.INI ファイルへのキーワードの追加は、注意が必要です。

システム・モニターを使用すると、システム内の複数の構成要素の活動を簡単に図式化して監視することができます。標準的な機能には、次のものがあります。

- 次の項目を含む、システムの連続的な監視。
  - ロック・メモリーの使用率
  - 仮想メモリーの使用率
  - マイクロプロセッサの使用率
  - 使用可能な DASD スペースと残量スペース
  - DASD の使用率
  - TCP/IP プロトコル機能
  - 実行中のプロセス
  - 実行中のスレッド
  - Pentium プロセッサの計算
  - RAID 装置属性
  - リード / ライト・エラー (Netfinity マネージャーのみ)
- システム・モニター・データを Netfinity データベースにエクスポートする機能
- 非表示化、サイズ変更、およびユーザーによる構成が可能な監視機能
- しきい値を超えたときに Netfinity アラートが生成される、ユーザー定義可能なしきい値
- システム活動に関する折れ線グラフ、テキスト、およびリアルタイムのグラフィック表示の選択。

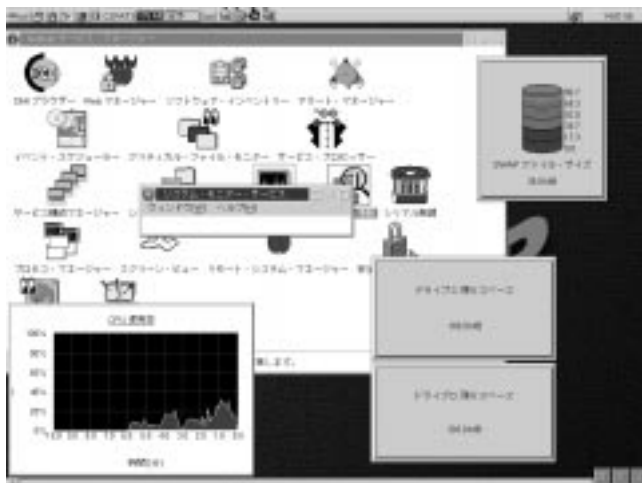


図 112. システム・モニター・サービス

注: システム・モニターで使用しているデータ処理技法は、長期のシステム活動プロフィールと短期の高精度なシステム活動の監視の両方に利用することができます。

システム活動のサンプルが採られると、それらのサンプルが記録および表示されます。ただし、複数のサンプルが採られた後では、個々の値に重みが付けられ、並行して採られた複数のサンプルの平均値が算出されて、単一の長期値として記録されます。

これは、主としてシステム・モニターのデータ・ファイルがシステム内で大量のスペースを占有しないようにするためです。また、このデータ処理技法により、短期の監視能力を犠牲にすることなく、長期にわたるシステム負荷の平均値を適切に測定することもできます。システム・モニターが始動したときに折れ線グラフで初期“スパイク”が見られるのは、このデータ処理技法によるものです。

モニターのそれまでの活動の記録が必要でない場合、または記録保持のためにディスク・ドライブ・スペースを使用したくない場合には、システム・モニターの「データの記録」オプションを選択して、記録を保持しないようにすることができます。

## 「システム・モニター・サービス」ウィンドウ

システム・モニター・サービスが開始されると、現在表示可能に設定されているすべてのモニターが、「システム・モニター・サービス」ウィンドウと共に表示されます。

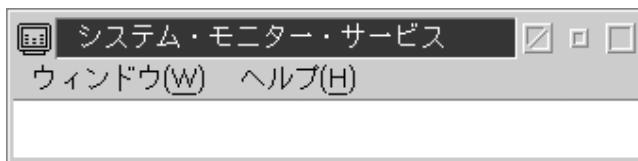


図 113. 「システム・モニター・サービス」ウィンドウ

「システム・モニター・サービス」ウィンドウは、サービス全体を制御します。「システム・モニター・サービス」ウィンドウをクローズすると、すべてのモニターも、それに伴ってクローズされます。

「システム・モニター・サービス」ウィンドウの「ウィンドウ」プルダウン・メニューに表示される選択項目を使用して、次のことを行うことができます。

- 利用可能なモニターを表示します。

「モニターの表示」を選択して、「表示モニターの選択」ウィンドウをオープンします。このウィンドウを使用して、デスクトップで表示したいシステム・モニターを選択します。



図 114. 「表示モニターの選択」ウィンドウ

デスクトップに表示するモニターを選択するには、次のようにします。

1. デスクトップに表示したいモニターを選択します。

使用可能なすべてのモニターを選択する場合は、「すべて選択」をクリックします。現在、全モニターが選択されていて、それらの選択をすべて取り消す場合は、「すべての選択を解除」をクリックします。

1 度にアクティブにできるモニター台数に、制限はありません。ただし、システムの制限により、1 度に表示できるモニターの最大数は、デフォルトで 50 に設定されています。表示可能なモニター台数を変更する場合は、システム環境変数を、次のように設定します。

```
SET NF_MAX_MON_DISP=n
```

$n$  は、0 より大きい整数です。この環境変数を設定する方法は、オペレーティング・システムによって異なります。

- この環境変数を、OS/2 システムまたは Windows 95 システムに設定するには、この変数を CONFIG.SYS ファイルに追加してから、システムを再始動します。

- NT システムの場合は、次のようにします。
  - a. Windows NT の「コントロール パネル」をオープンしてから、「システム」をダブルクリックします。
  - b. 「環境」タブをクリックします。
  - c. 「システム環境変数」フィールドの任意の場所をクリックします。
  - d. 「変数」フィールドに次を入力します。  
NF\_MAX\_MON\_DISP
  - e. 「値」フィールドに、「*n*」値 (0 より大きい整数) を入力します。
  - f. 「設定」を選択します。
  - g. 「適用」を選択します。
  - h. 「了解」を選択します。
  - i. Netfintiy サポート・プログラムを遮断してから、再始動します。

注: 1 度に表示するモニター台数を増やした場合、システムのリソースが不足する場合があります。この問題を回避するため、必要とするモニターのみを表示させるようにしてください。

2. デスクトップに表示したくないモニターが選択されている場合は、その選択を解除します。
  3. 「選択」を選択すると、指定どおりにモニターが表示されたり、隠されたりします。
- 特定のモニターを前面に移動します。

前面に移動したいモニターの名前を選択します。現在隠されていないモニターについては、そのモニターの名前を選択して前面に移すことができます。モニターが隠れている場合は、その名前はグレーになっています。隠れているモニターは、前面に移すことはできません。

- 複数のモニターからデータを Netfinity データベースにエクスポートします。

選択された任意のモニターの現在の時刻、日付、および報告値を Netfinity データベースにエクスポートすることができます。1 つ以上の構成要素モニターからモニター・データをエクスポートするには、次のようにします。

1. 「システム・モニター・サービス」ウィンドウの「ウィンドウ」プルダウン・メニューから、「データベースにエクスポート」を選択します。
2. 「モニター」フィールドから、データのエクスポート元となるモニターの名前を選択します。

使用可能なすべてのモニターを選択する場合は、「すべて選択」をクリックします。現在、全モニターが選択されていて、それらの選択をすべて取り消す場合は、「すべての選択を解除」をクリックします。

3. 「了解」を選択します。
4. モニター・データのエクスポート先となる Netfinity データベースを選択します。
5. 「了解」を選択して、データをエクスポートします。

各モニターには、いくつかのモニター固有オプションがあり、そのモニターのポップアップ・メニューからアクセスすることができます。マウス・ボタン 2 を使用して、モニターをクリックします。モニターのポップアップ・メニューがオープンします。



## モニター・ポップアップ・メニュー

各モニターには、固有のポップアップ・メニューが備わっています。ポップアップ・メニューをオープンするには、マウス・ボタン 2 を使用してそのモニターをクリックします。各モニターのポップアップ・メニューから項目を選択すると、次のことができます。

- システム・モニターの設定を変更する。

「オープン」を選択して、「設定」を選択すると、各モニターのノートブックの「設定」ページがオープンします。詳細については、421ページの『モニターの設定』を参照してください。
- システム・モニターのしきい値を設定する。

「オープン」を選択して、「しきい値」を選択すると、各モニターのノートブックの「しきい値」ページがオープンします。詳細については、417ページの『しきい値の設定』を参照してください。
- 表示されたシステム・モニターを変更します。

「表示」を選択して、表示されたモニターの外観を選択します。選択可能なモニター・タイプは次のとおりです。

  - 折れ線グラフ
  - リアルタイム
  - テキスト表示

使用可能なモニター・タイプについては、422ページの『モニター表示の変更』を参照してください。
- 「メイン・メニュー」を前面に移動します。

「メイン・メニュー」を選択すると、「システム・モニター・サービス」ウィンドウが前面に移動します。
- データの記録を利用可能または利用不可にします。

「データの記録」を選択すると、システム・モニターはこのモニターの以前の活動の記録を維持できるようになります。このオプションを選択しないと、モニターのデータは保管されず、折れ線グラフ・モニターは利用できなくなります。使用頻度の低いモニター、または長期データが不要なモニターでこのオプションを使用不可にすると、ディスク・ドライブのスペースを節約することができます。

- オンライン・ヘルプにアクセスします。

「ヘルプ」を選択すると、システム・モニターのオンライン・ヘルプ機能にアクセスすることができます。
- モニターを移動します。

「移動」を選択すると、選択されたモニターをデスクトップ上で移動させることができます。選択したモニターを新しい位置に移動してから、再びそのモニターをクリックしてドロップします。また、モニターの移動は、新しい位置にモニターをドラッグして行うこともできます。
- モニターのサイズを変更します。

「サイズ」を選択すると、選択したモニターのサイズを変更することができます。「サイズ」を選択した後で、選択したモニターが目的のサイズになるまで、マウスを使用してウィンドウの輪郭を動かします。次に、もう一度クリックしてモニターのサイズを変更します。また、モニター・ウィンドウの枠線または隅をドラッグして、モニターのサイズを変更することもできます。

注: モニターを小さくしすぎてモニターのテキストが完全に収まらなくなった場合、そのテキストは表示されなくなります。ただし、これによってそのモニターの機能が影響を受けることはありません。
- モニターを隠します。

「隠す」を選択すると、選択されたモニターが表示されなくなります。このモニターは引き続き機能し、データを収集しますが、デスクトップには表示されません。すでに隠されているモニターを再び表示させるには、「システム・モニター・サービス」ウィンドウをオープンしてから、「モニターの表示」を選択し、「表示モニターの選択」ウィンドウをオープンします。「表示モニターの選択」ウィンドウについては、409ページの『「システム・モニター・サービス」ウィンドウ』を参照してください。

- データベースへのエクスポート

システム・モニターのデータは、Netfinity データベースにエクスポートすることができます。エクスポートされるデータは、ユーザー指定の時刻範囲、時刻、および日付に対してモニターが報告する値です。各モニターからデータをエクスポートするには、次のようにします。

1. 「データベースにエクスポート」を選択します。
2. モニター・データのエクスポート先となる Netfinity データベースを選択します。
3. 「了解」を選択して、データをエクスポートします。

複数のモニターから同時にデータをエクスポートする方法については、409ページの『「システム・モニター・サービス」ウィンドウ』を参照してください。

## 「システム・モニター」ノートブック

各モニターの「システム・モニター」ノートブックを使用すると、次のことができます。

- アラートが生成されるしきい値を設定します。  
しきい値設定の詳細については、417ページの『しきい値の設定』を参照してください。
- モニター固有の設定値を構成します。モニター設定値の構成については、421ページの『モニターの設定』を参照してください。

「システム・モニター」ノートブックをオープンするには、次のようにします。

1. モニターのコンテキスト・メニューをオープンします (マウス・ボタン 2 でモニターをクリック)。
2. 「オープン」を選択します。
3. オープンしたいノートブックのページを選択します。
  - 「しきい値」を選択すると、ノートブックの「しきい値」ページがオープンします。
  - 「設定」を選択すると、ノートブックの「設定」ページがオープンします。

## しきい値の設定

「システム・モニター」ノートブックの「しきい値」ページを使用すると、そのモニターで監視されるシステム構成要素のしきい値を設定することができます。このシステム構成要素を監視した値が、構成されたしきい値の範囲外になっている場合、システム・モニターは Netfinity アラートを生成します。

システム・モニターは、システムに存在する RAID (Redundant Arrays of Independent Disks) についても、自動的に監視します。RAID サブシステムと他の属性ベースの装置は、システム・モニターの属性モニターによって監視することができます。属性モニターについては、425ページの『属性モニター』を参照してください。

システム・モニターは、RAID システムの変化を検出すると、アラートを自動的に生成します。RAID アラートの詳細については、539ページの付録F、『RAID アラート』を参照してください。



図 115. 「システム・モニター」ノートブックの「しきい値」ページ

システム構成要素のしきい値を設定 (または編集) するには、次のようにします。

1. 「システム・モニター」ノートブックの「しきい値」ページをオープンします。  
マウス・ボタン 2 を使用して、しきい値を作成したいモニターを選択します。  
モニターのポップアップ・メニューから、「オープン」を選択して、「しきい値」を選択します。
2. しきい値に名前を付けます (または、編集する「しきい値名」を選択します)。  
しきい値の名前を「しきい値名」フィールドに入力します。既存のしきい値を編集する場合は、「しきい値名」選択リストからしきい値を選択します。
3. しきい値の期間を設定します。  
数値を入力し、測定単位 (たとえば、“秒”) を選択して、期間値を作成します。  
これによって、モニターのしきい値を超過した状態がその期間続くと、アラートが生成されるようになります。
4. 「再送遅延」を設定します。  
数値を入力し、測定単位 (たとえば、“秒”) を選択して、再送遅延値を作成します。これにより、アラート送信後にしきい値を超過した状態がこの期間続くと、システム・モニターが同じアラートを再び送信するようになります。
5. 「レベル」値を設定します。  
このモニターに関する 1 つまたは複数のしきい値を入力します。4 つまでの異なるしきい値を設定して、それぞれに異なる Netfinity アラートを生成させるようにすることができます。

- 以上をエラーとする

「以上をエラーとする」フィールドに入力されたしきい値は、アラートがトリガーされる最小値です。監視されているパラメーターがこの値以上になると、システム・モニターは、“エラー”のアラートを生成します。このしきい値は、システム構成要素の最大値 (たとえば、CPU 使用率の場合は 100.0、214 MB の論理ドライブの場合は 214.0) 以下で、「以上を警告とする」、「以下を警告とする」、および「以下をエラーとする」に値が割り当てられている場合は、その値以上である必要があります。入力された値がこれらの要件に適合しない場合、システム・モニターは“ピープ音”を出して入力した値を拒絶します。

- 以上を警告とする

「以上を警告とする」フィールドに入力されたしきい値は、アラートがトリガーされる最小値です。監視されているパラメーターがこの値に等しくなるか、またはそれを超えると、システム・モニターは、“警告”のアラートを生成します。このしきい値は、システム構成要素の最大値 (たとえば、CPU モニターの場合は 100.0) 以下で、「以上をエラーとする」に値が割り当てられている場合はその値以下、また、「以下を警告とする」および「以下をエラーとする」値が割り当てられている場合はその値以上である必要があります。入力された値がこれらの要件に適合しない場合、システム・モニターは“ピープ音”を出して入力した値を拒絶します。

- 以下を警告とする

「以下を警告とする」フィールドに入力されたしきい値は、アラートがトリガーされる最大値です。監視されているパラメーターがこの値以下になると、システム・モニターは、“警告”のアラートを生成します。このしきい値は、システム構成要素の最大値 (たとえば、CPU モニターの場合には 100.0) 以下で、「以上をエラーとする」および「以上を警告とする」に値が割り当てられている場合はその値以下、また、「以下をエラーとする」に値が割り当てられている場合はその値以上である必要があります。入力された値がこれらの要件に適合しない場合、システム・モニターは“ピープ音”を出して入力した値を拒絶します。

- 以下をエラーとする

「以下をエラーとする」フィールドに入力するしきい値は、アラートがトリガーされる最大値です。監視されているパラメーターがこの値に等しくなるか、この値よりも小さくなると、システム・モニターは、“エラー”のアラートを生成します。このしきい値は、システム構成要素の最大値 (たとえば、CPU 使用率の場合は 100.0) 以下で、「以上をエラーとする」、「以上を警告とする」、および「以下を警告とする」に値が割り当てられている場合は、その値以下である必要があります。入力された値がこれらの要件に適合しない場合、システム・モニターは“ピープ音”を出して入力した値を拒絶します。

## 6. しきい値の「重大度」を設定します。

それぞれのしきい値ごとにデフォルトの重大度が設定されています。これらの値は、フィールドの右にあるスピン・ボタンを選択して調整することができます。

7. 「通知」または「ローカル通知」を選択します (任意選択)。

しきい値違反が発生したときに通知を出すようにモニターに指示したい場合は、「通知」を選択します。「通知」を選択しない場合は、しきい値は保管されて活動状態にはなりますが、ユーザーのシステムでアラートが生成されることはありません。ただし、Netfinity マネージャーがユーザーのシステムにリモート・アクセスして「通知」を選択する可能性があります。この場合、しきい値違反が発生するとそのマネージャーには通知されますが、ユーザーに対しては通知されません。

リモート・システムのシステム・モニターしきい値を構成するためにリモート・システム・アクセスを使用している場合は、これとは別の（「ローカル通知」という）チェック・ボックスが利用可能です。「ローカル通知」を選択した場合、しきい値が超過されると、システム・モニターは、しきい値が構成されたローカル・システムでアラートを生成します。1 つまたは複数の「通知」チェック・ボックスを選択した場合は、しきい値の超過が発生したときに、ユーザーのシステムおよびリモート・ユーザーのシステムでアラートが生成されます。

注: システム・モニターをローカルで使用している場合、「しきい値」ページには「ローカル通知」チェック・ボックスが現れません。

8. 「しきい値」を保管します。

新規のしきい値を構成した場合は、「作成」を選択してそのしきい値を保管します。すでに構成されているしきい値を編集した場合は、「変更」を選択して新しいしきい値を保管します。



## モニターの設定

「システム・モニター」ノートブックの「設定」ページを使用すると、このモニターのタイトル・バーを使用可能または使用不可にしたり、表示されるモニターのタイプを選択したり、このモニターの折れ線グラフ設定値を構成したりすることができます。

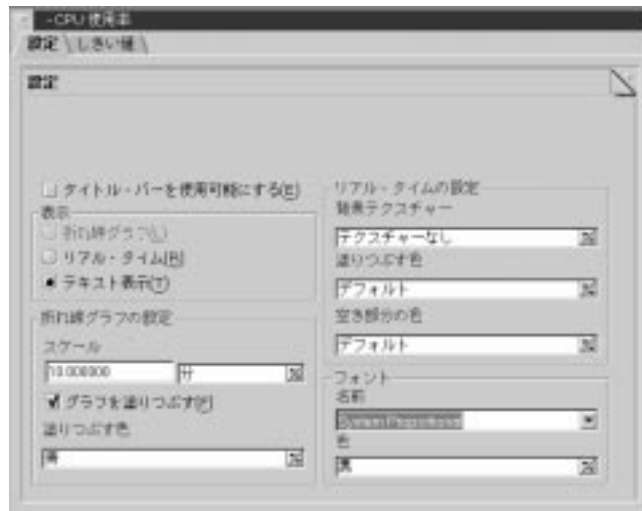


図 116. 「システム・モニター」ノートブック「設定」ページ

### タイトル・バーを使用可能または使用不可にする (OS/2 のみ)

このモニターのタイトル・バーをアクティブにしたい場合は、「タイトル・バーを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。このタイトル・バーには、システム・モニターが実行されるシステムのシステム名(サービスがリモート・システムで実行されている場合だけ表示)と、そのモニターの名前(たとえば、「CPU 使用率」モニター)が表示されます。タイトル・バーが不要の場合は、「タイトル・バーを使用可能にする」チェック・ボックスの選択を解除します。

新規の設定値を保管するには、左上隅をダブルクリックしてノートブックをクローズします。

注: この機能は、OS/2 システムだけで使用可能です。

## モニター表示の変更

表示するモニターのタイプを「表示」ボタン・グループから選択します。選択可能なモニター・タイプは次のとおりです。

- 折れ線グラフ

「折れ線グラフ」を選択すると、ユーザー指定の折れ線グラフ設定値によって折れ線グラフの長さや測定単位が決定され、システム構成要素の活動に関する“心電図スタイル”の図が表示されます。折れ線グラフ・モニターについては、423ページの『折れ線グラフの設定値の構成』を参照してください。

注: 「データの記録」オプション (モニターのポップアップ・メニューにある) を使用不可にしてある場合、折れ線グラフ・モニターは使用できません。

- リアルタイム

「リアルタイム」を選択すると、システムの構成要素の現在の状況がグラフィック表示されます。表示されるリアルタイム・モニターは、監視対象となるシステム構成要素によって異なります。たとえば、CPU モニターでは、CPU 使用率が速度計スタイルのリアルタイム・モニターによって示され、ハード・ディスク・ドライブの使用スペース・モニターでは、そのディスク・ドライブの使用スペースがどの程度の割合になっているのかが円柱によって示されます。

- テキスト表示

「テキスト表示」を選択すると、システム構成要素の現在の活動が、グラフィック表示のない文字だけで表示されます。

新規の設定値を保管するには、左上隅をダブルクリックしてノートブックをクローズします。

## 折れ線グラフの設定値の構成

「折れ線グラフの設定」フィールド・グループで選択可能な項目を使用して、この構成要素の折れ線グラフ・モニターを構成します。このフィールド・グループを使用して、次のことができます。

- 折れ線グラフの「スケール」を設定します。

「スケール」フィールドを使用して、このモニターの折れ線グラフを表示する際にグラフで扱う時間の長さを指定します。左の「スケール」フィールドに数値を入力して、右の「スケール」フィールドの右にあるスピン・ボタンを使用して、構成要素の活動をグラフ化する際に折れ線グラフで採用する時間単位を選択します。選択可能な時間単位は、次のとおりです。

- 秒
- 分
- 時
- 日
- 週

- 折れ線グラフの塗りつぶしを使用可能または使用不能にします。

このモニターの折れ線グラフを特定の色で塗りつぶしたい場合は、「グラフを塗りつぶす」を選択します。「グラフを塗りつぶす」を選択しないと、折れ線グラフは黒の背景に白の線で示されます。「グラフを塗りつぶす」を選択した場合は、その線を塗りつぶすために使用する色を「塗りつぶす色」フィールドから選択することができます。

- 折れ線グラフを塗りつぶす色を選択します。

「塗りつぶす色」フィールドの右にあるスピン・ボタンを使用して折れ線 グラフを塗りつぶすための色を選択します。

新規の設定値を保管するには、左上隅をダブルクリックしてノートブックをクローズします。

## リアルタイム設定の構成

「リアルタイムの設定」フィールド・グループで選択可能な項目を使用して、構成要素のリアルタイム・モニターを構成します。このフィールド・グループを使用して、次のことができます。

- 「背景テキストチャター」の選択 (OS/2 のみ)  
「背景テキストチャター」フィールドの右側にあるスピン・ボタンを使用して、このモニターで背景テキストチャターとして使用するビットマップを選択します。
- 「塗りつぶす色」の選択  
「塗りつぶす色」フィールドの右側にあるスピン・ボタンを使用して、リアルタイム・モニターの前景部分に使用される色を選択します。
- 「空き部分の色」の選択  
「空き部分の色」フィールドの右側にあるスピン・ボタンを使用して、リアルタイム・モニターの“空き”部分に使用する色を選択します。

新規の設定値を保管するには、左上隅をダブルクリックしてノートブックをクローズします。

## フォント設定の構成

「フォント」フィールド・グループで選択可能な項目を使用して、このモニターすべての表示のすべてのテキストに使用するフォントとフォントの色を選択します。このフィールド・グループを使用して、次のことができます。

- フォントの選択  
「名前」フィールドの右側にあるスピン・ボタンを使用して、この構成要素の表示で使用するフォントを選択します。
- フォントの色の選択 (OS/2 のみ)  
「色」フィールドの右側にあるスピン・ボタンを使用して、この構成要素の各表示で使用するテキストのフォントの色を選択します。

新規の設定値を保管するには、左上隅をダブルクリックしてノートブックをクローズします。

## 属性モニター

属性モニターは、数値が無意味な場合に使用されます。たとえば、RAID デバイスの現在の状況は、数値ではなく、オンライン、オフライン、または作動不能などの記述で表現されます。属性モニターを使用すると、このような装置の現在状況を表示し、また状態の変化に基づいたしきい値を割り当てることができます。属性モニターには、さまざまな設定値を割り当てることができます。

注： 属性モニターは、539ページの付録F、『RAID アラート』に説明されている RAID アラートに似てはいますが、同じものではありません。RAID アラートは、RAID デバイスがその状態を変更すると、Netfinity によって自動的に生成されますが、ユーザーが RAID デバイスの現在の状態を簡単に画面で確認できるような方法はありません。属性モニターの場合、ユーザーは、RAID デバイスの現在の状態を画面で確認でき、さらに、必要に応じて、それらのデバイスに対し、追加のしきい値を作成することができます。

### 属性モニターのしきい値

属性モニターのしきい値は、「属性モニター」ノートブックの「しきい値」ページで設定されます。このノートブックをオープンするには、マウス・ボタン 2を使用して、しきい値を設定したいモニターをクリックし、そのモニターのコンテキスト・メニューをオープンします。そのモニターのコンテキスト・メニューで「オープン」を選択して、「しきい値」を選択します。

属性モニターのしきい値を設定するには、次のようにします。

1. 監視したい属性を選択します。

各属性モニターには、監視可能な属性を 1 つまたは複数含んでいます。これらの属性の名前は、デバイスのタイプによって決まります。「モニターする属性」フィールドから、監視する属性の名前を選択します。

2. しきい値に名前を付けます。

「しきい値名」フィールドにこのしきい値の名前を入力して、「Enter」キーを押します。

3. しきい値の期間を設定します。

数値を入力し、測定単位 (たとえば、「秒」) を選択して、期間値を作成します。この値によって、監視している属性の状態が変化してからアラートが生成されるまでの時間が設定されます。

4. 「再送遅延」を設定します。

数値を入力し、測定単位 (たとえば、“秒”) を選択して、再送遅延値を作成します。この値によって、アラートを送信した後も属性の状態が変わらない場合に、システム・モニターが同じアラートを再送するまでの時間を指定されます。

5. アラートの状態を選択します。

「状態」フィールドから、監視対象の属性によって報告を受けるとアラートを生成する状態の名前を選択します。

6. 重大度値を選択します。

指定の状態が報告されたときに生成されるアラートの「重大度」を選択します。

7. 「アプリケーション・アラート・タイプ」値を指定します。

「アプリケーション・アラート・タイプ」は、生成されたアラートに割り当てられる最大 4 桁の数値です。これは、アラート・マネージャーがアラート・アクション応答の際にこのアラートを他のアラートと区別するために使用します。

「アプリケーション・アラート・タイプ」フィールドに、このモニターのアラートが生成されるときに使用する最大 4 桁の数値を入力します。

8. 「アラート・タイプ」を選択します。

「アラート・タイプ」は、生成されるアラートに割り当てられる記述語です。これは、アラート・マネージャーがアラート・アクション応答の際にこのアラートを他のアラートを区別するために使用し、また、アラートを生成する原因となった問題の性質を記述する上で役立ちます。「アラート・タイプ」リストから、このモニターのアラートが生成されたときに使用する「アラート・タイプ」を選択します。

9. 「通知」または「ローカル通知」を選択します (任意選択)。

アラート状態になったときに、このシステムにポップアップ・ウィンドウを表示したい場合は、「通知」を選択します。「通知」を選択しなくても、しきい値は保管されてアクティブになりますが、アラート状態になったことを知らせるポップアップ・ウィンドウは自動的に表示されません。

10. 「作成」を選択して、これらのしきい値を保管します。すでに構成されているしきい値を編集した場合は、「変更」を選択して新しいしきい値を保管します。

## 属性モニターの設定

属性モニターの設定値は、「属性モニター」ノートブックの「設定」ページから設定されます。このノートブックをオープンするには、マウス・ボタン 2を使用して、しきい値を設定したいモニターをクリックし、そのモニターのコンテキスト・メニューをオープンします。次に、「オープン」を選択してから、「設定」を選択します。

属性モニターの「設定」ノートブックを使用して、次のことができます。

- タイトル・バーを使用可能または使用不可にする (OS/2 のみ)

このモニターのタイトル・バーをアクティブにしたい場合は、「タイトル・バーを使用可能にする」チェック・ボックスを選択します。このタイトル・バーでは、システム・モニターが実行されるシステムのシステム名(これは、そのサービスがリモート・システムで実行されている場合だけ表示)と、そのモニター自体の名前が表示されます。タイトル・バーが不要の場合は、「タイトル・バーを使用可能にする」チェック・ボックスの選択を解除します。

- ビットマップを使用可能または使用不可にする (OS/2 のみ)

「ビットマップを使用可能にする」チェック・ボックスを選択すると、監視対象の各属性の前に小さなアイコンが表示されます。このアイコンは、属性の現在の状態を示します。

- モニターの表示を変更します。

属性モニターでは、次の表示を選択できます。

- 属性履歴

「属性履歴」の表示には、指定された期間内に属性モニターによって報告された状態だけが表示されます。

- リアルタイム

「リアルタイム」の表示には、監視対象の装置の現在の状態だけが表示されます。

- モニターのフォントを変更します。

「フォント」フィールド・グループで選択可能な項目を使用して、このモニターのすべての表示のすべてのテキストに使用するフォントとフォントの色を選択します。このフィールド・グループを使用して、次のことができます。

- フォントの選択

「名前」フィールドの右側にあるスピン・ボタンを使用して、この構成要素の各表示で使用するテキストのフォント名を選択します。

- フォントの色の選択 (OS/2 のみ)

「色」フィールドの右側にあるスピン・ボタンを使用して、この構成要素の各表示で使用するテキストのフォントの色を選択します。

新規設定値を保管するには、左上隅をダブルクリックしてノートブックをクローズします。

## IBM PC Server 720 のモニター

Netfinity には、IBM PC Server 720 で使用するために特別に設計された追加モニターが含まれています。Netfinity が IBM PC Server 720 にインストールされている場合、次の追跡を可能にする追加モニターを使用することができます。

- 電源の温度 (摂氏または華氏)
- システムの温度 (摂氏または華氏)
- プレーナーの温度 (摂氏または華氏)
- 電源の電圧 (+5V、+12V、-12V、および +3.3V)



## 第27章 システム区画アクセス

---

Netfinity システム区画アクセスを使用すると、IBM PC コンピューターのシステム区画ファイルの処理を大幅に簡素化することができます。このサービスには、次の機能が備わっています。

- 拡張ファイル・レベル操作
- 初期マシン・ロード (IML) イメージの更新
- アダプター記述プログラム (ADP)、アダプター記述ファイル (ADF)、および診断 (DGS) の更新
- 構成プログラム更新の設定
- システム区画の不用意な削除を避けるためのユーザー確認による安全保護

システム区画は、システムの電源投入時自己診断 (POST)、基本入出力システム (BIOS)、およびいくつかのシステム・ユーティリティー・プログラムを含む IBM システムのハード・ディスク・ドライブの一部分です。システム区画がインストールされている IBM PC を使用していない場合は、このサービスにアクセスすることはできず、またこのサービスを使用する必要もありません。

注： システム区画アクセスでは、ESDI (*Enhanced Small Device Interface*) システム上のシステム区画にはアクセスできず、管理することもできません。

Netfinity システム区画アクセスは、システム区画のさまざまなファイル操作アクションを提供します。使用可能なアクションは、次のとおりです。

- 区画からコピー
- 区画へコピー
- ディレクトリーの削除
- ディレクトリー名の変更
- ファイルの削除
- ファイル名の変更
- 区画のバックアップ
- 区画の復元
- 区画の削除
- ディレクトリーの作成
- 終了

使用可能な各アクションについては、次に説明します。



図 117. システム区画アクセス・サービス

## 区画からコピー

「区画からコピー」オプションを使用すると、ローカル・ドライブの選択されたディレクトリーにシステム区画上の指定したファイルのコピーをすることができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドから選択します。
2. システム区画の「ディレクトリー」フィールドから該当するディレクトリーを選択して、ファイルのコピー元となるシステム区画ディレクトリーを選択します。ディレクトリーを選択すると、そのディレクトリーに含まれるすべてのファイルが、システム区画の「ファイル名」フィールドに表示されます。
3. システム区画の「ファイル名」フィールドからコピーしたいファイルを選択します。
4. そのファイルのコピー先ドライブを選択します。「論理ドライブ」フィールドの右側の矢印を選択して、使用可能なすべてのドライブのリストを表示します。その中から、コピー先となるドライブを選択します。
5. そのファイルの宛先ディレクトリーを選択します。選択された論理ドライブに存在するすべてのディレクトリーが論理ドライブの「ディレクトリー」フィールドに表示されます。これらのディレクトリーのうちの1つを選択します。これによって、このディレクトリーにあるすべてのファイルが、論理ドライブの「ファイル名」フィールドに表示されます。
6. 「区画からコピー」を選択して、選択したシステム区画ファイルを選択した宛先にコピーします。

## 区画へコピー

「区画へコピー」オプションを使用すると、ローカル・ドライブにある特定のファイルをユーザーのシステム区画にコピーすることができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドから選択します。
2. システム区画の「ディレクトリー」フィールドから適切なディレクトリーを選択することによって、ファイルのコピー先となるシステム区画ディレクトリーを選択します。ディレクトリーを選択すると、そのディレクトリーに含まれるすべてのファイルがシステム区画の「ファイル名」フィールドに表示されます。
3. そのファイルのコピー元ドライブを選択します。「論理ドライブ」フィールドの右側の矢印を選択して、使用可能なすべてのドライブのリストを表示します。その中から、ファイルのコピー元となるドライブを選択します。
4. そのファイルのコピー元ディレクトリーを選択します。選択された論理ドライブに存在するすべてのディレクトリーが論理ドライブの「ディレクトリー」フィールドに表示されます。これらのディレクトリーのうちの1つを選択します。これによって、このディレクトリーにあるすべてのファイルが、論理ドライブの「ファイル名」フィールドに表示されます。
5. 論理ドライブの「ファイル」フィールドから、コピーしたいファイルを選択します。
6. 「区画へコピー」を選択して、選択したファイルをシステム区画にコピーします。

## ディレクトリーの削除

「ディレクトリーの削除」オプションを使用すると、システム区画からディレクトリーを削除することができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドから選択します。
2. システム区画の「ディレクトリー」フィールドから、削除したいシステム区画ディレクトリーを選択します。ディレクトリー名をダブルクリックして、ディレクトリーをオープンします。
3. 選択したディレクトリーをユーザーのシステムから削除するには、「ディレクトリーの削除」を選択します。ディレクトリーが不用意に削除されるのを回避するために、よく確認して選択してください。

注: Netfinity システム区画アクセスによって ディレクトリーを削除できるようにするには、そのディレクトリーを空にしておく必要があります。システム区画ファイルの削除については、434ページの『ファイルの削除』を参照してください。

## ディレクトリー名の変更

「ディレクトリー名の変更」オプションを使用すると、システム区画内のディレクトリーに新しい名前を付けることができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドから選択します。
2. 名前を変更したいシステム区画ディレクトリーを選択します。ディレクトリー名をダブルクリックして、ディレクトリーをオープンします。
3. 「ディレクトリーの名前変更」を選択します。システム区画アクセスが選択したディレクトリーの新しい名前を入力するよう要求されます。
4. 新しいディレクトリー名を入力して、**Enter** キーを押します。システム区画アクセスは、ディレクトリー名を変更します。

## ファイルの削除

「ファイルの削除」オプションを使用すると、システム区画から個々のファイルを削除することができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドから選択します。
2. システム区画の「ディレクトリー」フィールドから削除したいファイルを含むシステム区画ディレクトリーを選択します。ディレクトリーを選択すると、そのディレクトリーが含まれるすべてのファイルが、システム区画の「ファイル名」フィールドに表示されます。
3. システム区画の「ファイル名」フィールドから、削除したいファイルを選択します。
4. 「ファイルの削除」を選択します。システム区画アクセスは、選択されたファイルを削除します。

## ファイル名の変更

「ファイル名の変更」オプションを使用すると、システム区画内のファイル名を変更することができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドから選択します。
2. システム区画の「ディレクトリー」フィールドから名前を変更したいファイルが入っているシステム区画ディレクトリーを選択します。ディレクトリーを選択すると、そのディレクトリーに含まれるすべてのファイルが、システム区画の「ファイル名」フィールドに表示されます。
3. システム区画の「ファイル名」フィールドから名前を変更したいファイルを選択します。
4. 「ファイル名の変更」を選択します。システム区画アクセスは、そのファイルをどのような名前に変更したいのかを尋ねてきます。ファイルの新しい名前を入力して、**Enter** キーを押します。これで、ファイルの名前が変更されます。

## 区画の削除

### 重要：

システム区画を必要とするシステムからシステム区画を削除すると、システムが作動不能になる恐れがあります。システム区画の削除後、システムが正しく動作するかどうか不明な場合は、「区画の削除」オプションを使用しないでください。

「区画の削除」オプションを使用すると、選択した論理ドライブから選択したシステム区画（「システム区画」フィールドに表示されている）を除去することができます。このオプションを選択すると、システム区画アクセスが、その区画を削除してよいか確認してきます。続行する場合は「了解」を選択します。選択したシステム区画（およびその区画内のすべてのディレクトリーとファイル）が削除されます。

## 区画のバックアップ

「区画のバックアップ」オプションを使用すると、システムのシステム区画を任意の論理ドライブ内のファイルにコピーすることができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画が複数ある場合は、アクセスしたい区画を「システム区画」フィールドから選択します。
2. システム区画のバックアップ・ファイルを書き込むための宛先ドライブを選択します。「論理ドライブ」フィールドの右側にある矢印を選択すると、使用可能なすべての論理ドライブが表示されるので、適切なドライブを選択します。
3. 宛先ディレクトリーを選択します。選択された論理ドライブに存在するディレクトリーが論理ドライブの「ディレクトリー」フィールドに表示されます。
4. 「区画のバックアップ」を選択して、選択したシステム区画のファイルを指定の宛先に書き込みます。

## 区画の復元

「区画の復元」オプションを使用すると、「区画のバックアップ」機能で作成したバックアップ・ディスク、またはファイルを使用して、システム区画を復元することができます。この機能を使用するには、次のようにします。

1. システム区画のバックアップ・ファイルが入っているコピー元ドライブを選択します。「論理ドライブ」フィールドの右側にある矢印を選択すると、使用可能なすべての論理ドライブが表示されるので、適切なドライブを選択します。
2. バックアップ・ファイルが入っているコピー元ディレクトリーを選択します。選択された論理ドライブに存在するすべてのディレクトリーが論理ドライブの「ディレクトリー」フィールドに表示されます。これらのディレクトリーのうちの1つを選択します。これによって、このディレクトリーにあるすべてのファイルが、論理ドライブの「ファイル名」フィールドに表示されます。使用したいバックアップ・ファイルを論理ドライブの「ファイル名」フィールドから選択します。
3. 「区画の復元」を選択して、バックアップ・ファイルをシステム区画にコピーします。

## ディレクトリーの作成

「ディレクトリーの作成」オプションを使用して、選択したシステム区画（「システム区画」フィールドに表示されている）に、ディレクトリーを追加することができます。このオプションを選択すると、システム区画アクセスが、新しいディレクトリーの名前を指定するよう要求してきます。

## 終了

システム区画アクセスを終了するには、「終了」を選択します。



## 第28章 システム・プロファイル

システム・プロファイルを使用すると、他の方法では容易に入手しにくいシステム、またはユーザー固有のさまざまな情報のリポジトリを簡単に編成することができます。「システム・プロファイル」サービスには、データの編成と入力を簡単に行うことができるようにするための、定義済みフィールドが数多く用意されています。また、「システム・プロファイル」サービスには、各ユーザーの必要に合わせてシステム・プロファイルをカスタマイズするのに役立つユーザー定義可能フィールドも含まれています。

システム・プロファイルのデータは、テキスト・ファイルに保管することができます。システム情報ツールで提供される優れたハードウェア情報収集機能と、システム・プロファイルで提供されるシステムおよびユーザーに固有のデータ・フィールドの拡張選択機能を組み合わせることにより、きわめて柔軟性のある、便利なシステム・インベントリ機能およびシステム情報機能が得られます。

注: システム・プロファイルは、収集したデータの Netfinity データベースへのエクスポートをサポートしています。ただし、データベースへのエクスポートは、Netfinity マネージャーだけが実行できます。データベース・エクスポート機能は、Netfinity クライアント・サービスが稼動しているシステム上で、ローカルに使用することはできません。



図 118. 「システム・プロファイル・サービス」のウィンドウ

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウは 5 つのセクションから構成されています。各セクションは、2 ページ以上からなり、特定タイプのシステム、またはユーザー固有の情報だけのために使用されます。各セクションは、それぞれのタブで識別されます。これらのセクションは次のとおりです。

- システム

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウの「システム」セクションは、ユーザーのシステム、ディスプレイ、プリンター、モデムに固有の情報を編成するための定義済みフィールドを含んでいます。

- ユーザー

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウの「ユーザー」セクションは、システム・ユーザーに固有の名前、電話番号、自宅住所、緊急連絡先などの情報を編成するための、定義済みフィールドを含んでいます。

- 位置

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウの「位置」セクションは、システムの物理的な位置を示す部屋番号、建物番号、サイト名、市町村名、および国名などの情報を編成するための、定義済みフィールドが含まれています。

- 連絡先

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウの「連絡先」セクションは、システム・ユーザーに連絡するための情報（電話番号、ファックス番号、E メール・アドレスなど）を編成し、そのユーザーに関連のある他の人についての情報（たとえば上司、秘書など）を編成するための、定義済みフィールドが含まれています。

- その他

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウの「その他」セクションは、ニックネームや誕生日などの追加情報を保管するために使用できる、未定義のフィールドを含んでいます。

「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウにデータを入力し、保管するには、次のようにします。

1. 保管したいデータを、該当するフィールドに入力します。

フィールドを選択して、該当のデータを入力します。 ページを変更するには、ページの右下隅の小さな矢印を選択します（右方向の矢印を選択すると 1 ページ進み、左方向の矢印を選択すると 1 ページ戻ります）。セクションを変更するには、ノートブックの右側にあるセクションのタブを選択します。利用可能フィールドのすべてに入力する必要はありません。

## 2. 「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウをクローズします。

情報の入力が終わったら、「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウの左上隅をダブルクリックし、情報を保管して「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウをクローズします。

現行ページのフィールドを、最後に保管された値にリセットしたい場合は、「やり直し」を選択します。「やり直し」を選択しても、サービス・ウィンドウのほかのページには影響を与えません。

変更内容を保管しないでサービス・ウィンドウをクローズしたい場合は、「オプション」プルダウン・メニューから「保管せずにクローズ」を選択します。

「オプション」プルダウン・メニューから選択できるアクションは、ほかに次のものがあります。

- 最新表示

「システム・プロファイル」サービス・ウィンドウで表示される情報を更新するには、「最新表示」を選択します。サービス・ウィンドウを表示しているときに、その内容が他のユーザーによって変更されている可能性があります。「最新表示」を選択すると、「システム・プロファイル・サービス」ウィンドウのフィールドに表示されているデータが更新されます。

- ファイルに印刷

「ファイルに印刷」を選択すると、「システム・プロファイル・サービス」に入っているすべての情報がテキスト・ファイルに保管されます。



## 第29章 Update Connector マネージャー

Update Connector マネージャーを使用すると、クライアント・システムで使用可能なさまざまな更新情報を、迅速かつ簡単に収集することができます。使用可能な更新事項が見つかったら、Update Connector マネージャーを使用して、リモートでその更新事項を適用することができます。更新事項は、Netfinity マネージャーから、個々のデータに適用することもできれば、複数の更新事項を複数のシステムに適用することもできます。また、Update Connector マネージャーを使用して、適用済みの更新事項を除去することもできます。Update Connector マネージャーには、更新事項を自動的、定期的に検索、適用、除去するためのスケジューラーも含まれています。



図 119. 「Update Connector マネージャー」ウィンドウ

## ハードウェアおよびソフトウェアの要件

Update Connector マネージャーを使用するには、以下が必要です。

- Windows NT 4.0 またはそれ以降が稼動し、Pentium 100 MHz 以上のプロセッサと 64 MB 以上のRAM を搭載したシステム
- システムにインストールされてた Web ブラウザー
- Update Connector マネージャー・インターフェースを使用するためのマウスまたは他のポインティング・デバイス
- インターネットへの接続

注:

1. Update Connector マネージャー・インターフェースは、Windows NT が稼動しているシステムでのみ使用できます。ただし、Netfinity クライアント・サービスが稼動している Pentium 100 MHz 以上および 32 MB 以上のRAM を搭載している Windows 95 または Windows NT 4.0 以降を含みリモート・システムであれば、そこからデータを収集したり、そこに更新項目を適用することはできません。
2. Update Connector マネージャーが使用する更新パッケージは、Update Connector マネージャーまたはNetfinity マネージャーの開発チームによって提供されたり、保守されることはありません。

# Update Connector マネージャー・インターフェース

Update Connector マネージャー・インターフェースは、次の部分で構成されています。

## メニュー・バー

ウィンドウの上にある一連のプルダウン・メニューで、「Update Connector マネージャー」のタイトル・バーの真下にあります。プルダウン・メニューには、「Update Connector」、「アクション」および「ヘルプ」の3つがあります。Update Connector マネージャーのすべての機能には、これらのプルダウン・メニューの項目を選択してアクセスされます。

## ツールバー

「メニュー・バー」の真下にある一列のボタンです。これらのボタンを使用すると、Update Connector マネージャーの機能のうち、最も頻繁に使用する機能に素早くアクセスすることができます。各ボタンには、ボタンの機能を簡単に識別するためのヒントも表示されます。ヒントを見るには、マウスのポインターをボタンの上に合わせます。ただし、ボタンはクリックしないでください。数秒後、ボタンの機能を説明する小さなウィンドウが表示されます。

## クライアント表示ツリー

Update Connector マネージャーを使用して更新したり、保守したりできるシステム（およびシステム・グループ）の絵です。「クライアント表示」ツリーは、「クライアント表示」タブが選択されたときのみ、表示されます。

注： 「Update Connector マネージャー」グループは、システムが「クライアント表示」ツリーに追加される以前に追加されていなければなりません。はじめてUpdate Connector マネージャーを実行する場合、「クライアント表示」ツリーから選択できるグループはありません。

更新表示ツリー	システムで使用できるすべての更新項目 (および更新プール) の絵です。「更新表示」ツリーは、「更新表示」タブが選択されたときのみ、表示されます。
コンテキスト・メニュー	「クライアント表示」または「更新表示」ツリー内でマウス・ボタン 2 をクリックすると、常に表示されるポップアップ・メニューです。コンテキスト・メニューを使用すると、選択したツリーの構成要素に使用できる Update Connector マネージャーの機能を素早く選択できます。
ステータス・バー	「Update Connector マネージャー」ウィンドウの下にある小さなボックスで、Update Connector マネージャーの現在の状況に関する情報が表示されています。
表示タブ	ウィンドウの下に水平方向に表示されている一連のタブで、ステータス・エリアの上にあります。これらのタブ (「クライアント表示」、「更新表示」、「状況」、「および「ガイド付きツアー」) は、「Update Connector マネージャー」ウィンドウの外観、「Update Connector マネージャー」ウィンドウの表示方法、および Update Connector マネージャーの機能のどれを使用可能にするか、を制御します。
機能タブ	<p>ウィンドウの右側に沿って垂直方向に表示される一連のタブです。これらのタブの名称は、どの「表示タブ」が選択されたかで変化します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 「クライアント表示」が選択されると、次の「機能タブ」が使用できます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>– 適用</li> <li>– 除去</li> <li>– ログ</li> <li>– スケジューラー</li> </ul> </li> </ul> <p>「クライアント表示」の詳細については、446 ページの『Update Connector マネージャー・クライアント表示』を参照してください。</p>



- 「更新表示」が選択されると、次の「機能タブ」が使用できます。
  - 適用
  - 除去
  - ログ

「更新表示」の詳細については、448ページの『Update Connector マネージャー更新表示』を参照してください。

- 「状況」または「ガイド付きツアー」の表示タブが選択されていると、どの「機能タブ」も使用できません。「状況」の詳細については、450ページの『「Update Connector マネージャー状況表示」』を参照してください。「ガイド付きツアー」タブをクリックすると、基本的なUpdate Connectorマネージャーの機能について、簡単なオンラインの説明が表示されます。

## Update Connector マネージャー・クライアント表示

「クライアント表示」は、クライアント・システムの視点から見たUpdate Connector マネージャーの情報を表示するものです。「クライアント表示」ツリーは、現在定義されているすべてのグループとシステムから構成されています。「クライアント表示」ツリーからシステムまたはグループを選択すると、「Update Connector マネージャー」ウィンドウは、選択したシステムまたはグループに使用できる更新項目に関する情報が更新されて表示されるか(「適用」機能タブが選択された場合)、すでに適用され、除去することでの更新項目が表示されます(「除去」機能タブが選択された場合)。また、「ログ」(すでに完了したUpdate Connector マネージャーのタスク情報の表示)や「スケジューラー」(スケジュールしたUpdate Connector マネージャーのタスクの作成)を選択することもできます。

「Update Connector マネージャー・クライアント表示」は、441ページの図119を参照してください。

「適用」または「除去」の機能タブが選択されると、システムに対して変更可能な更新項目のリストが、ウィンドウのメイン画面に表示されます。「適用」機能タブが選択された場合は、リスト中のまだ適用されていないすべての更新項目の横にチェック・ボックスが表示されます。現在選択されているシステム(または選択されたグループの一部のシステム)に対してすでに適用されている更新項目には、チェック・ボックスが表示されません。これは、更新が適用済みであることを意味します。チェック・ボックスの横には、情報ボタンがあります。この情報ボタンを選択すると、Web ブラウザーに更新内容に関する簡単な説明が表示されます。

更新リストには、次の情報が含まれています。

名前	更新の名前。
<b>#Applic</b>	当該更新を適用するために現在選択されているシステム(または現在選択されているグループ内のシステム)の数。更新が適用されるシステム名のリストを表示するには、「#Applic」欄の更新名の右側にある番号を選択します。
適用	更新がすでに適用されている選択されたシステム(または現在選択されているグループ内のシステム)の数。更新がすでに適用されているシステム名のリストを表示するには、「適用」欄の更新名の右側にある番号を選択します。
選択	選択した更新が適用されるシステムの数。

更新リストの下には、リストされた更新すべてを素早く選択したり、選択を解除したりできるボタンもあります。

## Update Connector マネージャー更新表示

「更新表示」は、更新および更新プールの視点から見たUpdate Connector マネージャーの情報を表示するものです。「更新表示」ツリーは、現在使用できるすべての更新と定義済みの更新プールから構成されています。「更新表示」ツリーから更新項目または更新プールを選択すると、「Update Connector マネージャー」ウィンドウには、選択した更新や更新プールが使用できるシステムの情報が更新され、表示されます。「適用」機能タブが選択されると、選択した 1 つの更新（「更新表示」ツリーから更新プールが選択された場合は、複数の更新）が適用できるシステムの情報が表示されます。「除去」機能タブが選択されると、選択した 1 つの更新（「更新表示」ツリーから更新プールが選択された場合は、複数の更新）がすでに適用されているシステムの情報が表示されます。また、「ログ」を選択すると、すでに完了した Update Connector マネージャーのタスク情報が表示されます。



図 120. 「Update Connector マネージャー更新表示」

「適用」または「除去」の機能タブが選択されると、定義したシステムに対して変更可能な更新項目のリストが、ウィンドウのメイン画面に表示されます。「適用」機能タブが選択された場合は、リスト中の、まだシステムの一部またはすべてに適用されていないすべての更新項目の横にチェック・ボックスが表示されます。定義されたシステムすべてに対してすでに適用されている更新項目には、チェック・ボックスが表示されません。これは、更新が適用済みであることを意味します。チェック・ボックスの横には、情報ボタンがあります。この情報ボタンを選択すると、Web ブラウザーに更新内容に関する簡単な説明が表示されます。

更新リストには、次の情報が含まれています。

名前	更新の名前。
<b>#Applic</b>	当該更新が適用されるシステム (または現在選択されているグループ内のシステム) の数。更新が適用されるシステム名のリストを表示するには、「#Applic」欄の更新名の右側にある番号を選択します。
適用	更新がすでに適用されているシステム(または現在選択されているグループ内のシステム) の数。更新がすでに適用されているシステム名のリストを表示するには、「適用」欄の更新名の右側にある番号を選択します。
選択	選択した更新が適用されるシステムの数。

更新リストの下には、リストされた更新すべてを素早く選択したり、選択を解除したりできるボタンもあります。

## 「Update Connector マネージャー状況表示」

更新が完了するには、数分 (またはそれ以上) かかる場合があります。更新の適用処理が行われている間であれば、いつでも「状況」表示タブをクリックして、更新処理の状況を検索することができます。



図 121. 「Update Connector マネージャー状況表示」

このビューには、現在のUpdate Connector マネージャーのタスクがすべて表示され、また、各タスクに関するさまざまな情報が表示されるのが状況リストです。「状況」リストに表示される情報には、次のものがあります。

タスク #	インターフェースが始動した後、Update Connector マネージャーによって開始または完了されたタスクの総数を 100 から表示します。
状況	タスクの状況 (スケジュール済み、完了、実行中、延期、または停止) です。
説明	Update Connector マネージャーが実行を完了した、または実行中のタスクです (たとえば、「更新の検索」や「更新の適用」など)。
完了パーセント	タスクが現在完了されている率 (%) です。
オブジェクト	タスクの主要な焦点となるシステム、グループ、または更新プールです。たとえば、「マイ・グループ」という名前のグループで更新検索を実行した場合、「オブジェクト」が「マイ・グループ」となります。ただし、「マイ・プール」という名前の更新プールを作成した場合、「オブジェクト」は「マイ・プール」となります。

「状況」リストの下には、一連の 8 つのボタンがあります。各ボタンには、ボタンの機能を簡単に識別するためのヒントが表示されます。マウスのポインターをボタンの上に数秒間合わせると (ただし、ボタンはクリックしないでください)、対象ボタンの機能を説明する小さなウィンドウが表示されます。

最初のグループにある 4 つのボタンは、ウィンドウの内容が表示される方法 (大きなアイコン、小さなアイコン、リスト、および詳細ビューが表示可能。デフォルトは、詳細ビューです) を制御します。

2 番目のグループにある 4 つのボタンは、アクション・ボタンです。これらを使用すると、Update Connector マネージャーが現在実行しているタスクを延期、再開、または停止することができます。また、状況リストの内容を削除することもできます。

現在アクティブなタスクを延期、再開、または停止するには、次のようにします。

1. アクティブになっているタスクの「状況」リストをクリックします。
2. 選択したタスクで、実行したいアクションに対応するアクション・ボタン（「延期」、「再開」、または「停止」）をクリックします。

「状況」リストの内容を削除するには、「リストの削除」アクション・ボタンをクリックします。

注： 状況リストには、Update Connector マネージャー・インターフェースを始動したためだけで発生したタスクの項目が含まれています。Update Connector マネージャーをクローズすると、状況リスト内の項目はすべて自動的に削除されます。



## Update Connector マネージャーのグループ機能

Update Connector マネージャーを使用して、クライアント・システムから更新項目を検索、適用、除去する前に、まず、グループを作成する必要があります。

Update Connector マネージャーを使用して作成したグループは、「リモート・システム・マネージャー システム・グループ管理」ウィンドウでも表示されます。

注: Update Connector マネージャー・グループが作成された後であれば、リモート・システム・マネージャーの検索機能を使用して、Update Connector マネージャーのクライアントが、稼働中の複数のシステムを検索したり、システムをグループに追加したりできます。Update Connector マネージャー機能付きのリモート・システム・マネージャーの使用については、483ページの『Update Connector マネージャー付きのリモート・システム・マネージャーの使用』を参照してください。

次に、Update Connector マネージャー・グループを作成、編集、および除去する方法について説明します。

## グループの作成

グループを作成するには、次のようにします。

1. 「クライアント表示」タブを選択します。
2. 「適用」機能タブを選択します。
3. 「Update Connector」プルダウン・メニューから「グループの作成」を選択します。

「グループの作成」ウィンドウが表示されます。

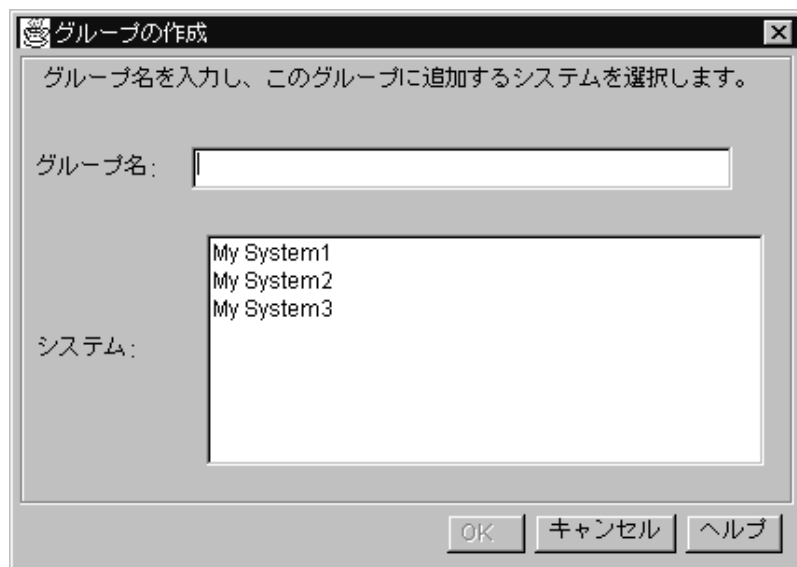


図 122. 「グループの作成」ウィンドウ

4. 「グループ名」フィールドに、新規グループの名前を入力します。グループ名は32文字以内です。
5. 以前にシステムを作成し、それを他のグループに追加していた場合、システムは、「システム」選択リストにリストされます。1つまたは複数のシステムを新規グループに追加する場合は、「システム」選択リストで、追加したいシステムの名前をクリックします。  
  
注: まだ、システムを他のUpdate Connector マネージャー・グループに追加したことがない場合、このリストには何も表示されません。
6. 「グループ名」フィールドにグループの名前を入力し、「システム」選択リストからグループに含めたいシステムを選択したら、「OK」を選択して、新規グループの作成を終了します。

グループは、「Update Connector マネージャー・クライアント表示」ツリー、および新規のリモート・システム・マネージャー・グループに追加されます。

## グループの編集

グループの編集機能を使用すると、グループの名前を変更し、グループに含めるシステムを選択することができます。

グループを編集するには、次のようにします。

1. 「クライアント表示」タブを選択します。
2. 「適用」機能タブを選択します。
3. 「クライアント表示」ツリーからグループを選択します。
4. 「Update Connector」プルダウン・メニューから「グループの編集」を選択します。

「グループの編集」ウィンドウが表示されます。



図 123. 「グループの編集」ウィンドウ

このウィンドウには、グループの現在の名前、および現在グループに含まれているすべてのシステムのリスト（「組込み」選択リスト）と現在このグループには含まれていないシステムのリスト（「除外」選択リスト）が表示されます。

#### 5. グループを編集します。

- グループの名前を変更するには、「グループ名の編集」フィールドにグループの新しい名前を入力します。グループ名は 32 文字以内です。
- グループにシステムを追加するか、グループからシステムを除去します。

現在、グループに含まれていないシステムを追加するには、「除外」選択リストで 1 つまたは複数のシステム名をクリックして、< ボタンをクリックします。選択したシステム名が「除外」選択リストから除去され、「組込み」選択リストに追加されます。

現在グループに含まれているシステムを除去するには、「組込み」選択リストで 1 つまたは複数のシステム名をクリックして、> ボタンをクリックします。選択したシステム名が「組込み」選択リストから除去され、「除外」選択リストに追加されます。

リスト間のシステムすべてで移動するには、<< ボタンおよび >> ボタンを使用します。

- #### 6. グループ名やグループに含める（またはグループから除外する）システムのリストの編集が完了したら、「OK」を選択して、グループの編集を終了します。グループは、「Update Connector マネージャー・クライアント表示」ツリー、およびリモート・システム・マネージャー・グループで更新されます。

## グループの除去

グループを除去するには、次のようにします。

1. 「クライアント表示」タブを選択します。
2. 「適用」機能タブを選択します。
3. 「クライアント表示」ツリーから除去したいグループを選択します。
4. 「Update Connector」プルダウン・メニューから「グループの除去」を選択します。

「グループの除去」ウィンドウが表示されます。このウィンドウの「グループ」選択リストには、「クライアント表示」ツリーから選択したグループ名が、強調表示されています。



図 124. 「グループの除去」ウィンドウ

5. 同時に複数のグループを除去するには、「グループ」選択リストからさらにグループを選択します。
6. 「グループ」選択リストから除去したいグループをすべて選択し終わったら、「**OK**」を選択して、選択したグループをすべて除去します。選択したグループは、すべて「Update Connector マネージャー・クライアント表示」ツリー、およびリモート・システム・マネージャーから除去されます。

## Update Connector マネージャーのシステム機能

Update Connector マネージャーのシステム機能を使用すると、Update Connector マネージャー・グループに対するクライアント・システムの追加や除去が行えます。

注: リモート・システム・マネージャーの検索機能を使用すると、Update Connector マネージャー・クライアントが稼動している複数のシステムを検索したり、システムをUpdate Connector マネージャー・グループに追加したりできます。Update Connector マネージャー機能付きのリモート・システム・マネージャーの使用については、483ページの『Update Connector マネージャー付きのリモート・システム・マネージャーの使用』を参照してください。



## システムの追加

システムをグループに追加するには、次のようにします。

1. 「クライアント表示」ツリーから、グループ (または追加済みのシステム) を選択します。
2. 「Update Connector」プルダウン・メニューから「システムの追加」を選択します。

「システムの追加」ウィンドウがオープンします。



図 125. 「システムの追加」ウィンドウ

3. 「システム名」フィールドに、追加するシステムの名前を入力します。この名前は単にユーザーの使用を目的としたものに過ぎず、また 32 文字以内です。
4. 「ネットワーク アドレス」フィールドに、追加するシステムのネットワークアドレスを入力します。このアドレスは 64 文字以内です。  
  
注: アドレスが入力されない場合、「システム名」フィールドでタイプした名前が自動的に入力されます。
5. 「ネットワーク タイプ」ドロップ・ボックスから、追加するシステムとの通信に使用する通信プロトコルを選択します。  
  
注: 使用できる通信プロトコルは、Update Connector マネージャー・インターフェースが稼動しているシステムで使用できる通信プロトコルのみです。
6. 「グループ」選択リストから、新たに作成したシステムが追加される 1 つまたは複数のグループを選択します。
7. 「OK」を選択して、システムをグループに追加する作業を終了します。

このシステムは、「Update Connector マネージャー・クライアント表示」ツリーの選択されたグループ、およびリモート・システム・マネージャー・グループに追加されます。

## システムの除去

システムを除去するには、次のようにします。

1. 「クライアント表示」タブを選択します。
2. 「適用」機能タブを選択します。
3. 「クライアント表示」ツリーから除去したいシステムを選択します。
4. 「Update Connector」プルダウン・メニューから「システムの除去」を選択します。

「システムの除去」ウィンドウが表示されます。このウィンドウの「システム」選択リストには、「クライアント表示」ツリーから選択したシステム名が、強調表示されています。



図 126. 「システムの除去」ウィンドウ

5. 同時に複数のシステムを除去するには、「システム」選択リストからさらにシステムを選択します。
6. 「システム」選択リストから除去したいシステムをすべて選択し終わったら、「**OK**」を選択して、選択したシステムをすべて除去します。

選択したすべてのシステムは、それまで入っていた「Update Connector マネージャー・クライアント表示」ツリーのグループ、およびリモート・システム・マネージャーから除去されます。

## Update Connector マネージャーの更新機能

少なくとも 1 つの Update Connector マネージャー・グループを作成し、そのグループに少なくとも 1 つのクライアント・システムを追加すると、Update Connector マネージャーを使用して次のことが行えます。

- 選択したクライアント・システムに対する更新の検索
- クライアント・システムへの更新の適用
- クライアント・システムに適用済みの更新の除去

更新が検索されると、それらは更新プールに組み込まれます。複数の更新がプールにグループ化されると、選択したプール内のすべての更新をクライアント・システムに同時に適用することができます。

現在使用できないシステムでタスクの実行を試みると、Update Connector マネージャーは、現在のタスクの残りの部分を終了します。以前は使用できなかったシステムがオンライン状態に回復すると、Update Connector マネージャーは、再度タスクの実行を試みます。

## 更新の検索

使用できる更新を検索するには、次のようにします。

1. 「クライアント表示」タブを選択します。
2. 「適用」機能タブを選択します。
3. 「クライアント表示」ツリーから、更新を検索したいシステムまたはグループを選択します。
4. すぐに更新を検索する場合は、「アクション」プルダウン・メニューから「更新の検索」を選択します。

注: Update Connector マネージャーのスケジューラーを使用して、選択したグループまたはシステムに対するイベントのスケジュールを作成することができます。この機能を使用すると、検索処理を延期することができ、また、毎時、毎日、毎週、毎月、または毎年の周期で繰り返し実行されるようにスケジュール化されたタスクを作成することもできます。詳細については、477ページの『スケジュール・タスクの作成』を参照してください。

「Update Connector マネージャー」ウィンドウの下にある状況バーが、更新検索の開始を示します。更新検索の処理中は、「クライアント表示」ツリーから選択したシステム (または「クライアント表示」ツリーからグループを選択した場合は、グループ内のすべてのシステム) に関するシステム情報が収集され、更新データベースを照会するために使用されます。

更新検索が完了すると、システムに適用している更新は、識別され、「Update Connector マネージャー」ウィンドウに表示されます。「Update Connector マネージャー・ログ」には、更新検索に関する追加情報が含まれています。

## 更新の適用

更新を適用するには、次のようにします。

1. 「クライアント表示」タブを選択します。
2. 「クライアント表示」ツリーから、更新を適用したいシステムまたはグループを選択します。
3. 「適用」機能タブを選択します。

「Update Connector マネージャー」ウィンドウは、選択したシステムまたはグループに対して使用できるすべての更新のリストを更新して表示します。



図 127. 更新可能リスト

4. 適用したい任意の更新を選択します。更新を選択するには、更新の横に表示されているチェック・ボックスにチェック・マークを付けます。
5. すぐに更新を適用する場合は、「アクション」プルダウン・メニューから「更新の適用」を選択します。

注: Update Connector マネージャーのスケジューラーを使用して、選択したグループまたはシステムに対するイベントのスケジュールを作成することができます。この機能を使用すると、更新適用処理を延期することができます。また、毎時、毎日、毎週、毎月、または毎年の周期で繰り返し実行されるようにスケジュール化されたタスクを作成することもできます。詳細

については、477ページの『スケジュール・タスクの作成』を参照してください。

「Update Connector マネージャー」ウィンドウの下にあるステータス・バーが、更新適用の開始を示します。次に、Update Connector マネージャーは、「クライアント表示」ツリーから選択したシステム (または「クライアント表示」ツリーからグループを選択した場合は、グループ内のすべてのシステム) に対して選択されたすべての更新の適用を試みます。

更新の適用処理が行われている間であれば、いつでも「状況」表示タブをクリックして、更新の適用処理の状況を検索することができます。

更新の適用処理が完了したら、「クライアント表示」タブ、「ログ」機能タブの順に選択して、処理結果を確認することができます。



## 更新の除去

適用済みの更新を除去するには、次のようにします。

1. 「クライアント表示」タブを選択します。
2. 「クライアント表示」ツリーから、適用済みの更新を除去したいシステムまたはグループを選択します。
3. 「除去」機能タブを選択します。

「Update Connector マネージャー」ウィンドウは、選択したシステム (または選択したグループ内のすべてのシステム) に対して適用されていたすべての更新のリストを更新して表示します。



図 128. 以前に適用されていた更新のリスト

4. 適用済みの更新から、任意の除去したい更新を選択します。更新を選択するには、更新の横にあるチェック・ボックスからチェック・マークを除去します。
5. すぐに更新を除去する場合は、「アクション」プルダウン・メニューから「更新の除去」を選択します。

注: Update Connector マネージャーのスケジューラーを使用して、選択したグループまたはシステムに対するイベントのスケジュールを作成することができます。この機能を使用すると、更新除去処理を延期することができます。また、毎時、毎日、毎週、毎月、または毎年の周期で繰り返し実行されるようにスケジュール化されたタスクを作成することもできます。詳細については、477ページの『スケジュール・タスクの作成』を参照してください。

「Update Connector マネージャー」ウィンドウの下にあるステータス・バーが、更新除去の開始を示します。次に、Update Connector マネージャーは、「クライアント表示」ツリーから選択したシステム (または「クライアント表示」ツリーからグループを選択した場合は、グループ内のすべてのシステム) に対して選択されたすべての更新の除去を試みます。

更新の除去処理が行われている間であれば、いつでも「状況」表示タブをクリックして、更新の除去処理の状況を検索することができます。

更新の除去処理が完了したら、「クライアント表示」タブ、「ログ」機能タブの順に選択して、処理結果を確認することができます。

## 更新プールの作成

いったん更新を検索したら、更新プールを作成することができます。更新プールを使用すると、更新をグループに簡単に組織化したり、複数の更新を同時に適用させたりできるようになります。個々の更新は、複数のプールの一部です。

更新プールを作成するには、次のようにします。

1. 「更新表示」タブを選択します。
2. 「適用」機能タブを選択します。
3. 「Update Connector」プルダウン・メニューから「プールの作成」を選択します。

「プールの作成」ウィンドウがオープンします。

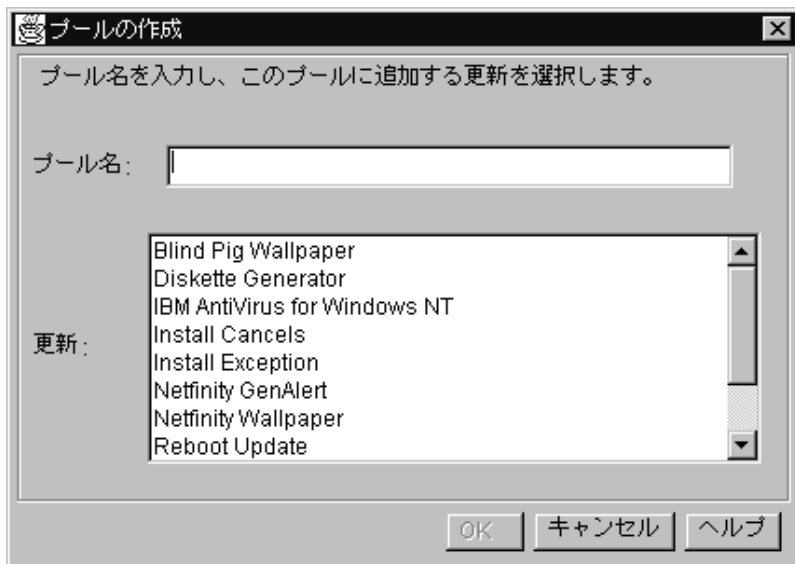


図 129. 「プールの作成」ウィンドウ

4. 「プール名」フィールドに、この更新プールの名前を入力します。更新プール名は 32 文字以内です。
5. 現在検索され、使用可能なすべての更新が、「更新」選択リストにリストされます。このプールに更新を追加するには、1 つまたは複数の更新名をクリックします。
6. 更新プールの名前を入力し、このグループに対する更新の包含と排除の選択が完了したら、「OK」を選択して、更新プールの作成を終了します。すると、更新プールは、「Update Connector マネージャー更新表示」に追加されます。

## 更新プールの編集

作成済みの更新プールを編集するには、次のようにします。

1. 「更新表示」タブを選択します。
  2. 「適用」機能タブを選択します。
  3. 「更新表示」ツリーから更新プールを選択します。
  4. 「Update Connector」プルダウン・メニューから「プールの編集」を選択します。
- 「プールの編集」ウィンドウがオープンします。



図 130. 「プールの編集」ウィンドウ

5. 「プール名の編集」フィールドに、この更新プールに対する新規の名前を入力します。新規の更新プール名は 32 文字以内です。
6. 現在この更新プールに含まれているすべての更新は、「組込み」選択リストにリストされます。使用できる更新のうち、この更新プールに含まれていないものは、「除外」選択リストにリストされます。
  - このプールに更新を追加するには、「除外」選択リストで 1 つまたは複数の更新名をクリックして、< ボタンをクリックします。選択した更新が「除外」選択リストから除去され、「組込み」選択リストに追加されます。
  - 「組込み」選択リストから更新を除去するには、「組込み」選択リストで 1 つまたは複数の更新名をクリックして、> ボタンをクリックします。選択した更新が「組込み」選択リストから除去され、「除外」選択リストに追加されます。
  - リスト間の更新すべてで移動するには、<< ボタンおよび >> ボタンを使用します。
7. 更新プールの新しい名前を入力し、このグループに対する更新の包含と排除の選択が完了したら、「OK」を選択して、更新プールの編集を終了します。更新プールは、「Update Connector マネージャー更新表示」ツリーで更新されています。

## 更新プールの除去

更新プールを除去するには、次のようにします。

1. 「更新表示」タブを選択します。
2. 「適用」機能タブを選択します。
3. 「更新表示」ツリーから除去したいプールを選択します。
4. 「Update Connector」プルダウン・メニューから「プールの除去」を選択します。

「プールの除去」ウィンドウが表示されます。このウィンドウの「プール」選択リストには、「クライアント表示」ツリーから選択したプール名が、強調表示されています。



図 131. 「プールの除去」ウィンドウ

5. 同時に複数のプールを除去するには、「プール」選択リストからさらにプールを選択します。

6. 「プール」選択リストから除去したいプールをすべて選択し終わったら、「OK」を選択して、選択したプールをすべて除去します。選択したすべてのプールは、「Update Connector マネージャー更新表示」ツリーから除去されています。



## スケジュール・タスクの作成

Update Connector マネージャーを使用すると、更新の検索、更新の適用、更新処理の除去などをスケジュールして、後で実行されるように設定することができます。これらの自動化された実行タスクは、1 回だけ実行するようにスケジュールすることもできれば、毎時、毎日、毎週、毎月、または毎年の周期で繰り返し実行するようにスケジュールすることもできます。

現在使用できないシステムでタスクの実行を試みると、Update Connector マネージャーは、現在のタスクの残りの部分を終了します。以前は使用できなかったシステムがオンライン状態に回復すると、Update Connector マネージャーは、再度タスクの実行を試みます。

スケジュールされた Update Connector マネージャーのタスクを作成するには、次のようにします。

1. システムまたはグループを選択して、任意のタスク固有情報を構成します。

タスクを構成する前に、実行されるタスクを構成する必要があります。

- 更新適用処理をスケジュールするには、「クライアント表示」ツリーからシステムまたはグループを選択して、「適用」タブを選択した後、適用したい任意の更新を選択します。
- 更新除去処理をスケジュールするには、「クライアント表示」ツリーからシステムまたはグループを選択して、「除去」タブを選択した後、除去したい任意の更新を選択します。
- 更新検索をスケジュールするには、「クライアント表示」ツリーからシステムまたはグループを選択します。

2. 「スケジューラー」タブを選択します。

「Update Connector マネージャー」ウィンドウが、選択したグループに適用しているスケジュール済みのタスクを、更新して表示します。現在スケジュールされているタスク項目は、タスク固有情報の複数の欄を持つ詳細ビューに表示されます。



図 132. スケジュールされたタスクのリスト

各タスク用に表示される情報には、次のものがあります。

名前	スケジュールされているタスクの名前
タスク	実行されるスケジュールされたタスクの種類 (適用、除去、または検索)
宛先	スケジュールされたタスクが実行されるグループまたはシステムの名前
時刻	スケジュールされたタスクが実行される次の時刻
頻度	タスクが実行される頻度 (1 回だけ、毎時、毎日、毎週、毎月、または毎年)

スケジュールされたイベントの下に、一連の 7 つのボタンが表示されます。最初のグループにある 3 つのボタンは、スケジューラー・アクション・ボタンで、新規のスケジュール・イベントの作成、スケジュール作成済みイベントの除去、スケジュール作成済みイベントの編集などに使用されます。2 番目のグループにある 4 つのボタンは、ウィンドウの内容が表示される方法 (大きなアイコン、小さなアイコン、リスト、および詳細ビューが表示可能。デフォルトは、詳細ビューです) を制御します。

各ボタンには、ボタンの機能を簡単に識別するためのヒントが表示されます。マウスのポインターをボタンの上に数秒間合わせると (ただし、ボタンはクリック

しないでください)、対象ボタンの機能を説明する小さなウィンドウが表示されます。

3. 「イベントの作成」ボタン (左から右に向かって見た場合、ウィンドウの下の最初のボタン) を選択します。「スケジューラー」ウィンドウがオープンします。スケジュールするイベントは、「アクション」プルダウン・メニューから「スケジュールの検索」、「スケジュールの適用」、または「スケジュールの除去」を選択しても作成することができます。



図 133. 「スケジューラー」ウィンドウ

「スケジューラー」ウィンドウを使用して、実行するタスク、タスクを実行する時刻、および (必要に応じて) タスクが繰り返される頻度を定義するための情報をすべて指定します。

次のフィールドが「スケジューラー」ウィンドウの上半分に表示され、タスクの名前、タスクが実行される「Update Connector マネージャー」グループ、実行されるタスク、およびタスクの実行頻度を定義します。

名前	このフィールドには、スケジュールされたタスクの名前を入力します。
宛先	このフィールドには、「クライアント表示」ツリーから選択されたシステムまたはグループの名前が表示されます。
タスク	この選択リストから、作成したいスケジュールするタスクを選択します。選択できるタスクは、「更新の検索」、「更新の適用」、または「更新の除去」です。スケジュールするイベントは、「アクション」プルダウン・メニューから「スケジュールの検索」、「スケジュールの適用」、または

「スケジュールの除去」を選択しても作成することができます。

**頻度** この頻度リストから、スケジュールされたタスクが実行される頻度を選択します。「1回だけ」、「毎時」、「毎日」、「毎週」、「毎月」、または「毎年」の中から選択します。

次のフィールドが「スケジューラー」ウィンドウの下半分に表示され、スケジュールされたタスクが実行される時刻を定義します。

注: フィールドは、タスクの構成に必要な場合にのみアクセスできます。たとえば、「頻度」選択リストから「毎日」を選択した場合、「日付」、「月」、「年」および「週日」の各フィールドは使用できません。スケジュールされたタスクの構成を完了するのに、これらのフィールドに値を入力する必要がないからです。

**日付** この選択リストから、スケジュールしたタスクが実行される月の日付を選択します。

**曜日** この選択リストから、スケジュールしたタスクが実行される週の曜日を選択します。

**月** この選択リストから、スケジュールしたタスクが実行される年の月を選択します。

**時** この選択リストから、スケジュールしたタスクが実行される時を選択します。

**年** この選択リストから、スケジュールしたタスクが実行される年を選択します。

**分** この選択リストから、スケジュールしたタスクが実行される時間の分を選択します。

4. スケジュール情報のすべての構成が完了したら、「スケジューラー」を選択して、スケジュールされたタスクの構成を終了します。タスクは、「スケジューラー」ウィンドウで指定された時刻に実行されます。「スケジューラー」ウィンドウの「頻度」フィールドで「1回だけ」以外の頻度を選択した場合、タスクは、周期的に繰り返して実行されます。

## サーバー管理

サーバー管理を使用すると、Update Connector マネージャーのネットワーク通信の設定を変更することができます。

注: サーバー管理の設定が正しく構成されていないと、Update Connector マネージャーが正常に動作しないことがあります。

サーバー管理を使用するには、次のようにします。

1. 「Update Connector」プルダウン・メニューから「サーバー管理」を選択します。

「サーバー管理」ウィンドウがオープンします。



図 134. 「サーバー管理」ウィンドウ

## 2. サーバーの設定を構成します。

次に示すサーバー管理の設定の任意の値を変更することができます。

### セレクション・サーバーの更新

Update Connector マネージャーが選択サーバーと通信するために使用する IP アドレスとポート番号です。選択サーバーには、許可された使用可能な更新がすべて格納されています。

注: この値は、事前構成されています。保守サポート担当員に指示されない限り、この値を変更しないでください。この設定が誤っていると、Update Connector マネージャーは、更新を検索し、適用することができません。この値またはその他のサーバー構成値を誤って変更してしまった場合は、「復元」を選択して、すべての値を事前構成の状態に戻すことができます。

### ネットワーク・プロキシ

Update Connector マネージャーが、インターネット上のシステムと通信するには SOCKS サーバーの使用を必要とする環境にインストールされている場合は、「SOCKS」フィールドに SOCKS サーバーの TCP/IP アドレスを入力します。SOCKS サーバーのアドレスを入力する必要があるかどうか不確かな場合は、ネットワーク管理者に尋ねてください。

## 3. 「保管」を選択して、これらの値の変更を保管します。

「復元」を選択すると、すべての値をいつでも事前構成の状態に戻すことができます。

# Update Connector マネージャー付きのリモート・システム・マネージャーの使用

リモート・システム・マネージャーを使用すると、迅速かつ簡単にシステムを Update Connector マネージャー・グループに追加することができます。Update Connector マネージャーを使用してグループを作成すると、特殊な Update Connector マネージャー・グループがリモート・システム・マネージャーに追加されます。これらの特殊なリモート・システム・マネージャー・グループは、Update Connector マネージャーの更新記号に似たグループ・イメージから簡単に識別できます。

Update Connector マネージャー・グループがリモート・システム・マネージャーに追加された後であれば、リモート・システム・マネージャーの検索機能を使用して、複数システムをグループに簡単に追加できます。

リモート・システム・マネージャーを使用して、複数のシステムを Update Connector マネージャー・グループに追加するには、次のようにします。

1. Update Connector マネージャーを使用して、グループを作成します。
2. Update Connector マネージャーをクローズします。
3. リモート・システム・マネージャーを始動します。
4. 「システム・グループ管理」ウィンドウに表示される「Update Connector マネージャー」グループをオープンします。
5. 「システム」プルダウン・メニューから「システムの検索」を選択します。

リモート・システム・マネージャーは、Update Connector マネージャーのクライアントが稼動しているすべてのリモート・システムを、自動的にこのグループに追加します。

6. リモート・システム・マネージャーがシステムの追加を完了したら、「Update Connector マネージャー・グループ」ウィンドウをクローズします。
7. リモート・システム・マネージャーをクローズします。
8. Update Connector マネージャーを始動します。

リモート・システム・マネージャーを使用して検索されたすべてのシステムは、「クライアント表示」ツリーの「Update Connector マネージャー」グループに追加されるようになります。





## 第30章 Web マネージャーの構成

Netfinity マネージャーには、Netfinity マネージャー (Web 用) のサポートも含まれています。Netfinity マネージャー (Web 用) は、Netfinity サービスで作動するように設計された特殊な目的をもつ Web サーバーです。Netfinity マネージャー (Web 用) を使用すると、インターネットや World Wide Web (WWW) ブラウザーを介して、ネットワーク上のシステムを世界中のどこからでもリモートでアクセスおよび管理することができます。Netfinity マネージャー (Web 用) については、491ページの第31章、『Netfinity マネージャー (Web 用)』を参照してください。

Web マネージャーの構成サービスを使用すると、次のことを行えます。

- Netfinity マネージャー (Web 用) を使用可能または使用不可にする。
- Netfinity マネージャー (Web 用) の Web サーバーが使用する TCP/IP ソケット (ポート) 番号を指定する。
- 許可されていないユーザーがインターネットを介して Netfinity サービスにアクセスすることを阻止する。
- ログへの記録を使用可能および使用不可にする。

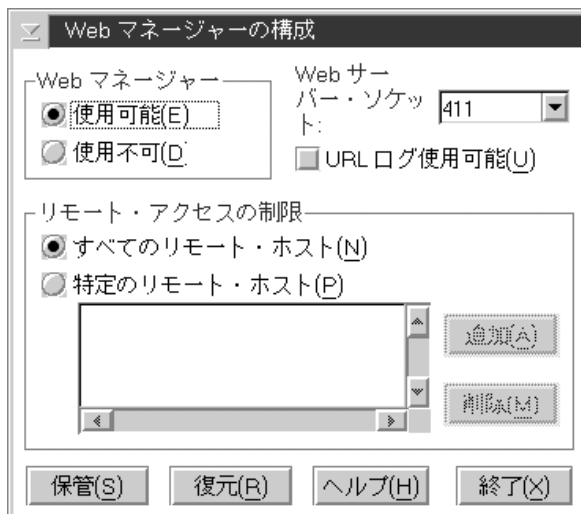


図 135. 「Web マネージャーの構成」サービス・ウィンドウ

## Netfinity マネージャー (Web 用) の使用可能と使用不可

Netfinity マネージャー (Web 用) を使用可能または使用不能にするには、「Web マネージャーの構成」ウィンドウで「使用可能」または「使用不可」ラジオ・ボタンを選択し、次に「保管」を選択します。

## TCP/IP ソケット (ポート) 番号の指定

デフォルトでは、Netfinity マネージャー (Web 用) は TCP/IP ポート番号 411 を使用します。しかし、Netfinity マネージャー (Web 用) を構成して、任意の有効な TCP/IP ポート番号で作動するようにもできます。

TCP/IP ポート番号を指定するには、「**Web** サーバー・ソケット」フィールドにソケット (ポート) 番号を入力するか、フィールドの右側にある矢印を選択し、リストからソケット (ポート) 番号を選択した後、「保管」を選択します。

## URL ログの使用可能

このチェック・ボックスを選択すると、Web サーバーに出された要求をすべてログすることができます。すべての URL のログ情報は、Netfinity ディレクトリーの WEBFIN.LOG というファイルに格納されています。情報は、通常のテキスト URL 形式で記録されています。また、要求元マシンの Intel バイト順序による IP アドレスおよび要求が出された時刻スタンプと日付スタンプもログされています。

多数のパラメーターが URL を通じて送信されるため、機密を要するデータ (パスワードなど) がログされている可能性があります。ユーザーは、マシンが不用意に使用されることのないよう、安全保護には十分な注意を払う必要があります。

注: 安全保護サービスを介してログに入力されたパスワードを削除するログ・アクションには注意が必要です。ただし、このことは、ユーザーがパスワードを入力し、他のサービスからログされることを妨げることはありません (アラートをデータベースにエクスポートするアラート・アクションの設定など)。

## Netfinity マネージャー (Web 用) へのアクセスの制限

Netfinity マネージャー (Web 用) を使用すると、Web ブラウザーを使用してインターネット (または TCP/IP を使用し、ユーザーのネットワークと通信できるあらゆるシステム) に接続している人なら誰もが、Netfinity マネージャー・システムおよびネットワーク内の他のすべての Netfinity システム上にある Netfinity サービスにリモート・アクセスすることができます。Netfinity マネージャーがインターネットを介してアクセスされると、安全保護マネージャーは、ユーザーのネットワーク上の他の Netfinity マネージャーのアクセスを制限するのと同じ方法で個々のサービスへのアクセスを制限します。ただし、インターネットには極めてオープンで制限を受けないという性質があるため、自分のマネージャー・システムへのアクセスをよりしっかりと制限する必要があります。

Web マネージャーを構成すると、Netfinity マネージャーの安全保護のレイヤーがもう 1 つ追加されます。Web マネージャーの構成を使用すると、Netfinity マネージャー (Web 用) へのアクセスを、指定された TCP/IP ホストおよび一定範囲の TCP/IP ホスト・アドレスだけに許可して、無許可のインターネット・ユーザーが Netfinity マネージャーにアクセスすることを完全に阻止することができます。

- すべてのリモート・ホストに Netfinity マネージャー (Web 用) へのアクセスを許可する場合は、「すべてのリモート・ホスト」を選択し、「保管」を選択しします。
- 指定したリモート・ホスト・アドレスおよび一定範囲のホスト・アドレスだけに Netfinity マネージャー (Web 用) へのアクセスを許可する場合は、「特定のリモート・ホスト」を選択し、「保管」を選択しします。「特定のリモート・ホスト」フィールドに表示されているホスト・アドレスおよびアドレス範囲だけが、Netfinity マネージャー (Web 用) へのアクセスを許可されます。

注: リモート・ユーザーが SOCKS サーバーを使用してインターネットにアクセスする場合は、リモート・システムへのすべてのアクセスの試みは、実際にはリモート・システムの SOCKS サーバーによって行われます。アクセスが許可されると、SOCKS サーバーは、要求された情報を検索して、要求元のシステムにそれを中継して戻します。この場合、アクセスの試みはリモート・ユーザーのシステムの TCP/IP アドレスからではなく、SOCKS サーバーの TCP/IP アドレスから発信されたように見えます。Web 構成サービスを使用して、特定の TCP/IP アドレスまたはアドレス範囲へのアクセスを制限する場合に、SOCKS サーバーの TCP/IP アドレスがアドレスのリストまたはアドレス範囲に含まれていない場合は、その SOCKS サーバーを使用して Web にアクセスするように構成されたユーザーは、Netfinity マネージャー (Web 用) にアクセスすることはできません。

特定の TCP/IP ホスト・アドレスを「特定のリモート・ホスト」フィールドに追加するには、次のようにします。

1. 「特定のリモート・ホスト」を選択します。
2. 「追加」を選択します。  
「許可ホストの追加」ウィンドウが表示されます (図136 を参照)。
3. 「特定のホストの許可」を選択します。
4. 「ホスト名またはアドレス」フィールドに、Netfinity マネージャー (Web 用) へのアクセスを許可する TCP/IP のホスト・システムの名前またはアドレスを入力します。
5. 「了解」を選択して、「許可ホストの追加」ウィンドウをクローズし、このアドレスを「Web マネージャーの構成」ウィンドウの「特定のリモート・ホスト」フィールドに追加します。
6. 「Web マネージャーの構成」ウィンドウで「保管」を選択し、これらの設定を保管します。

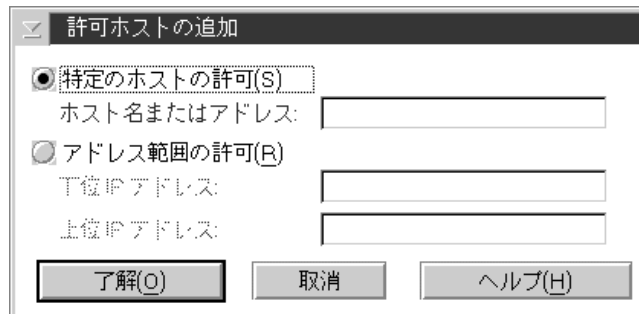


図 136. 「許可ホストの追加」ウィンドウ

TCP/IP ホスト・アドレスの範囲を「特定のリモート・ホスト」フィールドに追加するには、次のようにします。

1. 「特定のリモート・ホスト」を選択します。
2. 「追加」を選択します。  
「許可ホストの追加」ウィンドウが表示されます。
3. 「アドレス範囲の許可」を選択します。
4. 「下位 IP アドレス」フィールドに、Netfinity マネージャー (Web 用) へのアクセスを許可する、ホスト・アドレス範囲の始まりを定義する TCP/IP アドレスを入力します。
5. 「上位 IP アドレス」フィールドに、Netfinity マネージャー (Web 用) へのアクセスを許可する、ホスト・アドレス範囲の終わりを定義する TCP/IP アドレスを入力します。
6. 「了解」を選択して「許可ホストの追加」ウィンドウをクローズし、このアドレス範囲を「Web マネージャーの構成」ウィンドウの「特定のリモート・ホスト」フィールドに追加します。
7. 「Web マネージャーの構成」ウィンドウで「保管」を選択し、これらの設定を保管します。

特定のホスト・アドレスまたはホスト・アドレスの範囲を「特定のリモート・ホスト」フィールドから削除するには、次のようにします。

1. 削除する項目を選択します。
2. 「削除」を選択します。
3. 「保管」を選択してこれらの設定値を保管します。



## 第31章 Netfinity マネージャー (Web 用)

---

Netfinity マネージャー (Web 用)では、Netscape Navigator などのWorld Wide Web (WWW) ブラウザーを使用して、Netfinity マネージャー (Web 用) がインストールされている任意の Netfinity マネージャーにインターネットを介してリモートでアクセスおよび管理することができます。

Web 拡張機能付き Netfinity マネージャーのインストール構成を選択すると、Netfinity マネージャー (Web 用) は、自動的にインストールされます ( *Netfinity マネージャー クイックガイド* の中の “Netfinity マネージャー・プログラムのインストール” を参照)。Netfinity マネージャー (Web 用) は、Netfinity Web サーバーをインストールします。このサーバーは、Netfinity サービスと対話するために設計された Web サーバーであり、機能が制限されています。

Netfinity Web サーバーがインストールされて作動すると、Web ブラウザーを使用して、マネージャー・システムの TCP/IP ネットワークにアクセスできるインターネット上の任意の場所から、Netfinity マネージャーにリモート・アクセスして管理することができます。マネージャーにアクセスした後は、リモート・システム・マネージャー・サービスを使用して、そのマネージャーのネットワーク上にある他の Netfinity システムにアクセスしてこれを制御することができます。

Netfinity マネージャー (Web 用) があれば、ネットワーク上のすべての Netfinity システムを、世界中のどこからでも監視および管理することができます。必要なものは、インターネットへの接続、Web ブラウザー、および Netfinity マネージャー (Web 用) を実行しているインターネットからアクセスできるネットワーク上のシステムだけです。

## システム要件

Netfinity マネージャー (Web 用) のための追加のシステム要件はありません。

Netfinity サービスをリモートで使用するための要件となるオペレーティング・システムは特にありません。ただし、システムでは、HTML (Hypertext Markup Language) 2.0 以上をサポートする Web ブラウザーを実行している必要があります。

注:

1. Netfinity リモート・セッションは、Java プログラミング言語をサポートするブラウザ (Netscape Navigator 2.02 以上など) でだけ使用可能です。
2. Netfinity マネージャー (Web 用) の Guru 機能には、Javascript およびフレームのサポートが必要です。
3. Netfinity Web ヘルプには、フレームに対するサポートが必要です。

## World Wide Web を介した Netfinity へのアクセス

Web ブラウザーを使用して Netfinity マネージャー (Web 用) にアクセスするには、Netfinity マネージャーの *ユニバーサル・リソース・ロケーター* (URL) をロードする必要があります。Netfinity マネージャー (Web 用) が稼働しているシステムの URL は、Netfinity マネージャーとの間に確立を試みているネットワーク接続に、保護機能があるか保護機能がないかによって異なります。

- Netfinity マネージャーとの間に保護機能のない接続を確立する場合は、次のような URL を使用します。

```
http://TCPIAddress:socket
```

*TCPIAddress* は、Netfinity マネージャー (Web 用) の TCP/IP アドレスであり、*socket* は、Netfinity マネージャー (Web 用) が作動するように構成されている TCP/IP ソケット (ポート) 番号 (デフォルトのソケットポート番号値は 411) です。詳細については、485ページの第30章、『Web マネージャーの構成』を参照してください。たとえば次のようになります。

```
http://manager.my.domain.net:411
```

これで「Netfinity へようこそ」のページがオープンします。ここから、アクセスしたい Netfinity マネージャーのアドレスを選択することができます。



- Netfinity マネージャーとの間に保護機能のある接続を確立する場合は、次のような URL を使用します。

`https://TCPIPAddress:socket`

`TCPIPAddress` は、Netfinity マネージャー (Web 用) の TCP/IP アドレスであり、`socket` は、Netfinity マネージャー (Web 用) が作動するように構成されている TCP/IP ソケット (ポート) 番号 (デフォルトのソケットポート番号値は 411) です。詳細については、485ページの第30章、『Web マネージャーの構成』を参照してください。たとえば次のようになります。

`https://manager.my.domain.net:411`

これで「Netfinity へようこそ」のページがオープンします。ここから、アクセスしたい Netfinity マネージャーのアドレスを選択することができます。

保護機能のある Web 接続では、デジタル証明およびデータ暗号化を使用して、Web ブラウザーと Web サーバーの間で交換されるデータを保護します。初めて、Netscape Navigator または Microsoft Internet Explorer バージョン 4.0 で、マネージャーに対して保護機能のある接続がなされた時点で、証明のインストールが自動的に行われます。最初の SSL 接続が行われると、ブラウザーは一連のウィンドウを用いて、証明がブラウザー内にインストールされるよう、プロンプトによって指示してきます。

Microsoft Internet Explorer のバージョン 4.0 より前にリリースされたバージョンを使用している場合は、デジタル証明を手動でインストールし、Internet Explorer を再始動してからでないと、Netfinity マネージャー (Web 用) との間に保護機能のある接続を確立することはできません。古いバージョンの Internet Explorer が稼働しているシステムに証明をインストールする場合は、次のようにします。

1. 「Netfinity へようこそ」のページへの接続を オープンします。
2. Netfinity マネージャー (Web 用) のヘルプをオープンします。
3. 「**SSL** 設定のヘルプ」リンクを選択します。
4. デジタル証明のダウンロードおよび受領方法に関する指示に従います。

注: Web ブラウザーには、保護機能のある接続がさまざまな方法で示されます。たとえば、Netscape Navigator では、ブラウザー・ウィンドウの左下の破線キー・イメージを実線キー・イメージに切り替えることによって、保護機能のある接続が アクティブなことを示します。Microsoft Internet Explorer では、ブラウザー・ウィンドウの左下隅の開いた錠前のイメージをロックされて輝やいている錠前のイメージに切り替えること

によって、保護機能のある接続がアクティブなことを示します。ブラウザで保護機能のある接続を示す方法の詳細については、ご使用のブラウザの資料を参照してください。

「Netfinity へようこそ」のページでアドレスを選択すると、Web ブラウザー・バージョンの Netfinity サービス・マネージャーが表示されます (図137 を参照)。



図 137. Web ブラウザーを使用した「Netfinity サービス・マネージャー」へのアクセス

Netfinity サービスを使用するには、サービスの名前またはサービスのアイコンを選択します。安全保護マネージャーによってアクセスが制限されていると、一部のサービスにはアクセスすることができません。現在ログインしているユーザー ID は、Netfinity サービスのマネージャー・ページの上部に表示されます。ユーザーが使用可能なアイコンだけを表示する Netfinity サービス・マネージャーとは異なり、Netfinity マネージャー (Web 用) では、アクセス先のシステムがサポートしている Netfinity サービスのアイコンがすべて表示されます。システムのユーザーが安全保護マネージャーによってアクセスを制限しているために使用できないすべてのサービスは、サービスのアイコンの隣にかぎのアイコンが小さく表示されます。

保護されたサービスにアクセスするには、サービスを選択し、Web ブラウザーのプロンプトに従ってユーザー ID とパスワードの組み合わせを入力します。このユーザー ID とパスワードの組み合わせは、Netfinity マネージャー・システムの一部または全部のサービスへのアクセスが可能のように構成された、着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせと一致している必要があります。詳細については、283ページの『着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定』を参照してください。

注:

1. Web ページの制限により、Web ブラウザーでアクセスされたときには一部の Netfinity サービス・インターフェースが大幅に異なります。詳細については、496ページの『Netfinity サービスの Web インターフェース』を参照してください。
2. 一部の Web ブラウザーは、キャッシュ・メモリー内に Web ページを記憶しています。これは、一部の Netfinity Web ページが不正確あるいは古いデータを表示する原因となります。表示されているデータが最新で正確なものであることを確認するには、Netfinity の Web ページを定期的に再ロードまたは最新表示するか、またはキャッシュを無効にする必要があります。

# Netfinity サービスの Web インターフェース

次の Netfinity サービスは、Netfinity マネージャー (Web 用) にアクセスするときには使用できません。

- DMI ブラウザー
- システム区画アクセス

注: システム区画アクセス・サービスは使用できませんが、イベント・スケジューラー・サービスのシステム区画アクセス・タスクを Netfinity マネージャー (Web 用) で使用することはできます。

- リモート・ワークステーション制御
- Web 構成マネージャー
- クラスタ・マネージャー
- キャパシティー管理
- システム診断マネージャー

Web ブラウザーでは、OS/2、Windows、Windows 95、または Windows NT の基本インターフェース機能の多く (コンテキスト・メニューおよびネストしたウィンドウなど) はサポートしません。そのため、Netfinity の Web インターフェースの一部には、標準の Netfinity ユーザー・インターフェースとは著しく異なるものがあります。

代わりに、通常はオブジェクトのコンテキスト・メニューから選択されるすべての Netfinity サービス機能は、オブジェクトの隣にあるラジオ・ボタン (1 つのオブジェクトのみ選択可能) またはチェック・ボックス (複数の選択が可能) を選択し、その後 Web ページのアクション・ボタンを選択すると使用できます。

アラート・マネージャー、イベント・スケジューラー、ソフトウェア・インベントリ、システム情報ツール、システム・モニター、およびシステム・プロファイルにおけるすべてのデータベース・エクスポート機能は、Netfinity マネージャー (Web 用) でシステムにアクセスしているときには使用できません。

サービスに固有のユーザー・インターフェースについては、次に示す各サービスのセクションで詳細に説明します。

## アラート・マネージャー

アラート・マネージャーのすべての機能は、Netfinity マネージャー (Web 用) を使用しているときにも利用できます。ただし、ユーザー・インターフェースは大幅に異なります。アラート・マネージャーの Web インターフェースでは、次の選択項目が使用できます (図138 を参照)。

- アラート・ログ

アラート・ログの内容表示とアラート・ログ・フィルターの構成を行うには、「アラート・ログ」を選択します。

- アラート・ログのヒストグラム

アラート・ログをヒストグラム形式で表示するには、「アラート・ログのヒストグラム」を選択します。アラート・ログの内容は、重大度、アラート・タイプ、アプリケーション ID、およびアラートを生成したシステムの名前などのアラート固有の情報に基づいて、グループに分類されます。

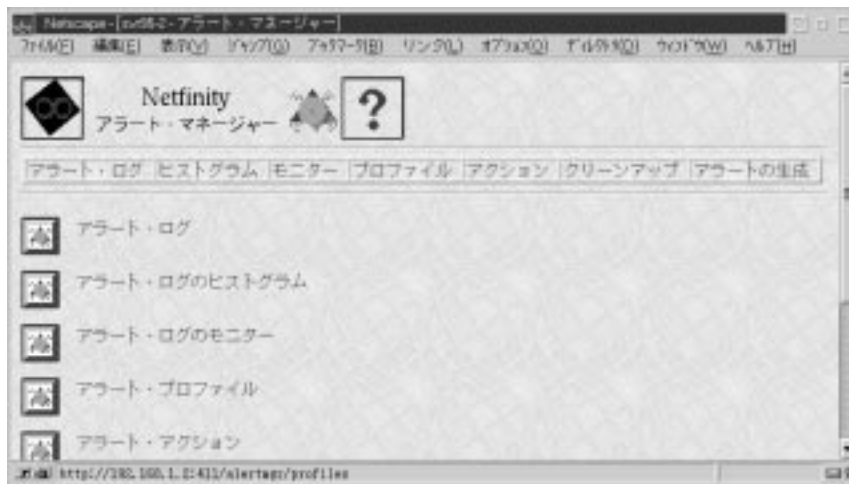


図 138. Web ブラウザーを使用した「アラート・マネージャー」へのアクセス

- アラート・ログのモニター

システムのアラート・ログへの追加のモニターを開始するには、「アラート・ログのモニター」を選択します。Web ブラウザーが自動ページ更新 (サーバー・プッシュ) をサポートしている場合は、ブラウザーにこのページが表示されている限り、アラート・ログに加えられた変更が自動的に報告されます。Web ブラウザーがサーバー・プッシュをサポートしていない場合は、このページは自動的に更新されずに、「最新表示」を選択したときにだけ変更が表示されます。

- アラート・プロファイル

アラート・プロファイルを編集、定義、または削除するには、「アラート・プロファイル」を選択します。

- アラート・アクション

アラート・アクションを編集、定義、または削除するには、「アラート・アクション」を選択します。

- クリーンアップ

アラートが受信されるにつれて、「アプリケーション ID」、「アプリケーション・アラート・タイプ」、および「送信側 ID」選択リストから選択できる項目の数が多くなり過ぎて、管理が容易にはできなくなります。「クリーンアップ」を選択して、これらの選択リストから選択した項目を除去します。

- アラートの生成

システム上でアラートを構成および生成するには、「アラートの生成」を選択します。

## クリティカル・ファイル・モニター

クリティカル・ファイル・モニターのすべての機能は、Netfinity マネージャー (Web 用) を使用しているときにも利用できます。また、クリティカル・ファイル・モニターの Web インターフェースは、クリティカル・ファイル・モニター・サービスのインターフェースと機能的に同等です。



図 139. Web ブラウザーを使用した「クリティカル・ファイル・モニター」へのアクセス





## ファイル転送

次のファイル転送機能は、ファイル転送 Web サービスを使用しているときには利用できません。

- ファイルの送信 (ブラウザがサポートする場合にだけ使用可能)
- ディレクトリーの送信

また、Netfinity マネージャー (Web 用) を使用してファイルを受信している場合、ファイルは Netfinity マネージャー (Web 用) を実行しているシステムではなく、Web ブラウザーを実行しているシステムで受信されます。

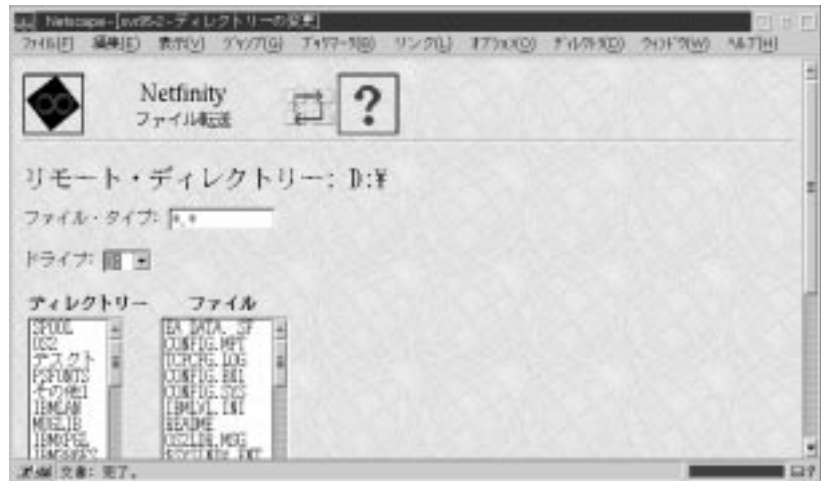


図 141. Web ブラウザーを使用した「ファイル転送」へのアクセス

## 電源オン・エラー検出

Web ブラウザーは階層構造を持つウィンドウをサポートしていないため、エラー・ログ内の各項目に含まれるすべての情報は、項目が選択されたときに 1 つの Web ページ上に一緒に表示されます。それ以外については、電源オン・エラー検出の Web インターフェースは電源オン・エラー検出サービスのインターフェースと機能的に同等です。

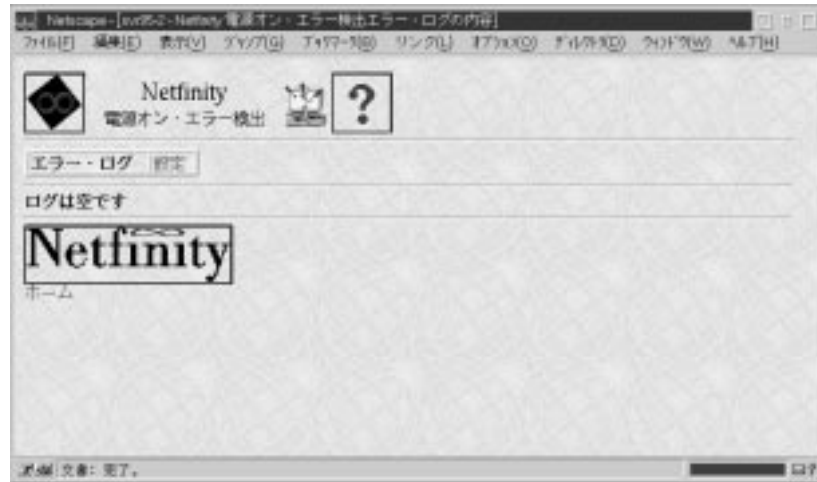



図 142. Web ブラウザーを使用した「電源オン・エラー検出」へのアクセス

## 事前障害分析

事前障害分析のすべての機能は、Netfinity マネージャー (Web 用) を使用しているときにも利用できます。また、事前障害分析の Web インターフェースは、事前障害分析サービスのインターフェースと機能的に同等です。

## プロセス・マネージャー

プロセス・マネージャーのすべての機能は、Netfinity マネージャー (Web 用) を使用しているときにも利用できます。また、プロセス・マネージャーの Web インターフェースは、プロセス・マネージャー・サービスのインターフェースと機能的に同等です。



タイプ	プログラム名	プロセス ID	親プロセス ID	セッション ID	スレッド数
<input type="checkbox"/>	D:\EBCOM\LANDEX.DE	0000h	0000h	0000h	3
<input type="checkbox"/>	D:\EBCOM\PROTOCOL\LANCL.DE	0010h	0000h	0000h	1
<input type="checkbox"/>	D:\EBCOM\METPROG\W3DHEM.DE	0010h	0000h	0000h	1
<input type="checkbox"/>	D:\EBCOM\METPROG\W3METC.DE	0020h	0010h	0015h	4
<input type="checkbox"/>	D:\EBCOM\SERVICE\W3CV.DE	0005h	0000h	0011h	2

図 143. Web ブラウザーを使用した「プロセス・マネージャー」へのアクセス

## RAID マネージャー

RAID マネージャー Web サービスは、RAID 装置とディスク・サブシステムの情報だけを提供します。RAID 装置構成機能は、Netfinity マネージャー (Web 用) を使用して RAID マネージャー・サービスにアクセスしているときには利用できません。

## リモート・セッション

リモート・セッション Web サービスは、Java が使用可能な Web ブラウザーでだけ利用できます。また、コマンド・セッションを開始する場合は、リモート・セッションの Web インターフェースから「**Start**」を選択する必要があります。それ以外については、リモート・セッションの Web インターフェースは、リモート・セッション・サービスのインターフェースと機能的に同等です。

## リモート・システム・マネージャー

リモート・システム・マネージャーのすべての機能は、Netfinity マネージャー (Web 用) を使用しているときにも利用できます。リモート・システム・マネージャーの Web サービス・インターフェースでは、以下の点が異なります。

- リモート・システム・マネージャーを使用しているときに、マウス・ボタン 2 でシステムまたはシステム・グループのアイコンを選択することによってアクセスしていたすべての機能は、代わりにアイコンの横のラジオ・ボタンを選択した後に、Web ページ上の実行したい機能に対応するボタンを選択することによってアクセスすることができます。すべての機能のボタンが、Web ページの下部に表示されます。ただし、これらの機能のすべてが、すべてのシステム上で使用可能になるわけではありません。
- システム・グループ内のシステムのアイコンはすべて同じです。システム状況は、次のように表されます。
  - オンラインのシステムは、緑色の背景となります。
  - オフラインのシステムは、赤い背景となります。
  - マネージャー・システムは、システム・イメージの隅に地球を表示します。
  - エラー状況が報告されているシステムのシステム・イメージの隣には、感嘆符 (!) が表示されます。

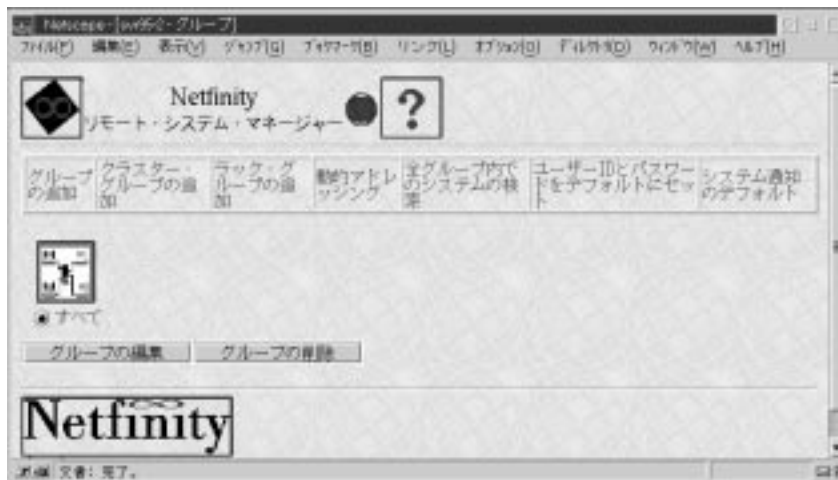


図 144. Web ブラウザーを使用した「リモート・システム・マネージャー」へのアクセス

## スクリーン・ビュー

スクリーン・ビューのすべての機能は、Netfinity マネージャー (Web 用) を使用しているときにも利用できます。スクリーン・ビューのアイコンを選択すると、リモート・システム画面の JPEG スナップショットがユーザーの Web ブラウザーに送信されます。

## 安全保護マネージャー

安全保護マネージャーのすべての機能は、Netfinity マネージャー (Web 用) を使用しているときにも利用できます。また、安全保護マネージャーの Web インターフェースは、安全保護マネージャー・サービスのインターフェースと機能的に同等です。

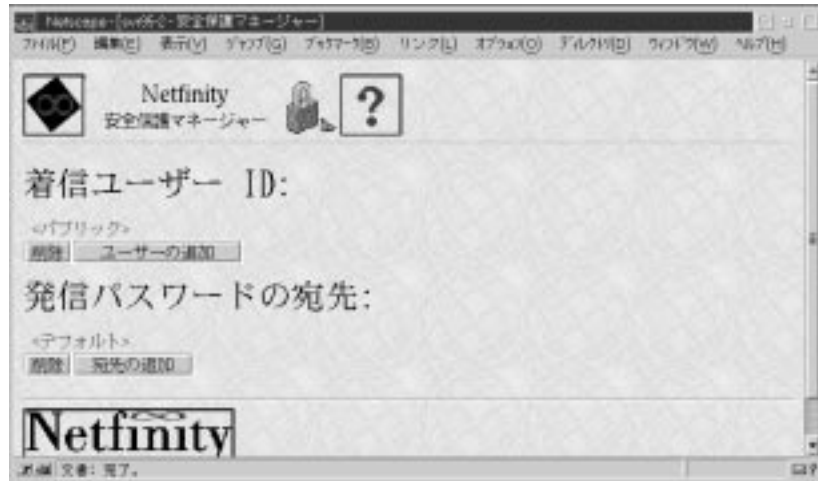


図 145. Web ブラウザーを使用した「安全保護マネージャー」へのアクセス

## シリアル接続制御

シリアル接続制御のすべての機能は、Netfinity マネージャー (Web 用) を使用しているときにも利用できます。また、シリアル接続制御の Web インターフェースは、シリアル接続制御のインターフェースと機能的に同等です。



図 146. Web ブラウザーを使用した「シリアル接続制御」へのアクセス

## ソフトウェア・インベントリー

Netfinity マネージャー (Web 用) でソフトウェア・インベントリーを使用しているときには、全辞書の検索機能だけを実行できます。ソフトウェア・インベントリー・サービスに最初にアクセスしたときには、リモート・システムのデフォルトのソフトウェア・インベントリー辞書を使用して、全辞書検索が実行されます。インベントリー処理で検出されたすべてのソフトウェアは、Web ページ上のテーブルに表示されます。他の使用可能な辞書は (使用可能な場合)、Web ページの下部に表示されます。その他の辞書の 1 つを使用して辞書検索を実行するには、辞書名を選択します。



The screenshot shows a web browser window displaying the 'Netfinity Dictionary' page. The page title is 'Netfinity Dictionary' and it features a table with the following columns: '製品名' (Product Name), 'ベンダー名' (Vendor Name), 'バージョン' (Version), 'リビジョン' (Revision), '位置' (Location), 'アプリケーション・キーワード' (Application Keyword), and '記述' (Description). The table lists several entries for 'Backup' and 'Calculator' software, all from 'Microsoft'. The '位置' column shows paths like 'E:\WINNT35\SYSTEM32' and 'D:\WIN32'. The '記述' column includes 'Archive Files to Disk or Tape' and 'Windows Calculator'.

製品名	ベンダー名	バージョン	リビジョン	位置	アプリケーション・キーワード	記述
Backup	Microsoft			E:\WINNT35\SYSTEM32		Archive Files to Disk or Tape
Backup	Microsoft			D:\WIN32		Archive Files to Disk or Tape
Calculator	Microsoft			D:\WIN32\COMMON\TOOLS		Windows Calculator
Calculator	Microsoft			D:\WIN32\COMMON\TOOLS		Windows Calculator
Calculator	Microsoft			E:\WINNT35\SYSTEM32		Windows Calculator

図 147. Web ブラウザーを使用した「ソフトウェア・インベントリー」へのアクセス



## システム情報ツール

システム情報ツールのすべての機能は、Netfinity マネージャー (Web 用) を使用しているときにも利用できます。ただし、システム情報ツールによって収集されたすべての情報が、1 つの Web ページに表示されます。

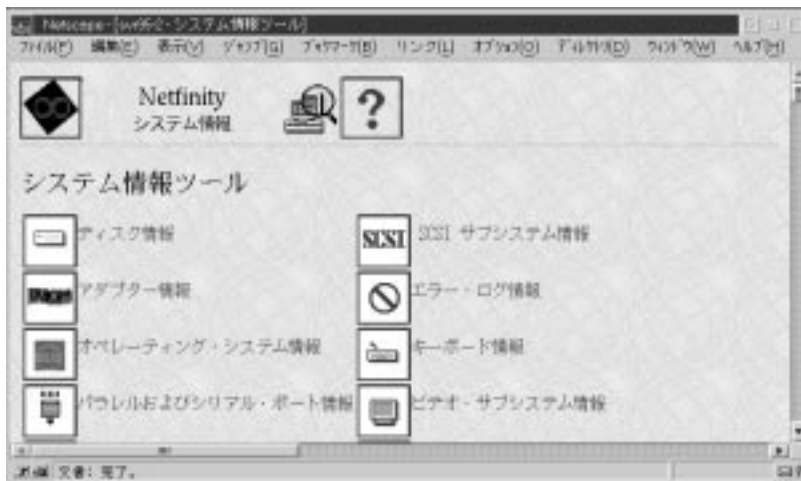


図 148. Web ブラウザーを使用した「システム情報ツール」へのアクセス

## システム・モニター

Netfinity マネージャー (Web 用) を使用してシステム・モニターにアクセスするときには、リモート・システムがサポートしているすべてのモニターによって報告された現在の値が、1 つの Web ページに表示されます。折れ線グラフとリアルタイム・モニターの表示は利用できません。それ以外については、システム・モニター・サービスがサポートしている機能はシステム・モニターの Web サービスを使用しているときでも利用できます。



図 149. Web ブラウザーを使用した「システム・モニター」へのアクセス

## システム・プロファイル

システム・プロファイルのすべての機能は、Netfinity マネージャー (Web 用) を使用しているときにも利用できます。また、システム・プロファイルの Web インターフェースは、システム・プロファイル・サービスのインターフェースと機能的に同等です。

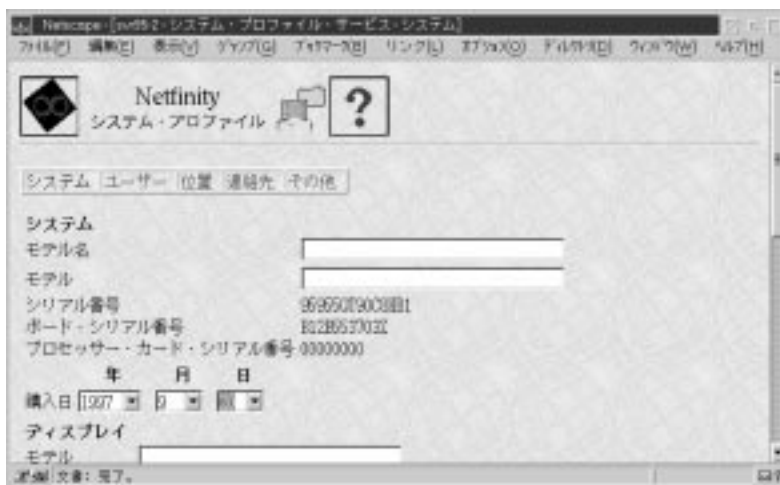


図 150. Web ブラウザーを使用した「システム・プロファイル」へのアクセス



## 付録A. 下位レベル Netfinity システムのアラート・マネージャー

---

Netfinity システムまたは SystemView LAN for OS/2 V1.1 システムをリモート管理しているときには、Netfinity アラート・マネージャーのすべての機能を利用できるわけではありません。これらのサービスは類似していますが、Netfinity アラート・マネージャーと SystemView LAN for OS/2 V1.1 アラート・マネージャーは、アラート・プロファイルや アラート・プロファイルの割り当てはサポートしません。その代わりに、各アラート・アクションを個別に構成して、作成したい個々のアラート・アクションのアラート条件を指定する必要があります。

Netfinity システムまたは SystemView LAN for OS/2 V1.1 システム上のアクションをリモートで構成する場合は、2 段階で行います。最初に、アラート・マネージャーが検索するアラート条件を設定する必要があります。次に、アクション定義を設定して、受信したアラートに対応してアラート・マネージャーが実行するアクションを定義する必要があります。

Netfinity システムまたは SystemView LAN for OS/2 V1.1 システムでアラート・アクションを構成するには、次のようにします。

### 1. アラート条件を設定します。

アクションを定義するときには、まず最初に、アラート・マネージャーが定義されたアクションを実行するために満たさなければならないアラート条件を指定します。アラートが受信されると、アラート・マネージャーはこれらの条件を調べて、定義されたアクションの指定内容に一致するかどうかを検査します。すべてのアラート条件が満たされると、定義されたアクションが実行されます。

アラート・マネージャーは、5 つのアラート条件を使用して適切なアクション応答を判断します。アラートがアクションをトリガーするには、そのアラートが、対応するアラート条件をすべて満たす必要があります。5 つのアラート条件は、次のとおりです。

- アラート・タイプ
- 重大度
- アプリケーション ID
- アプリケーション・アラート・タイプ
- 送信元 ID



図 151. アラート・マネージャー - 「アクション・エディター」ウィンドウ

「アラート条件」を指定するには、次のようにします。

- a. 「アラート・タイプ」を選択します。

アラート・タイプは、生成されたアラートの要旨を示します。これは、アラートの種類 (不明、障害、エラー、警告、通知) を記述し、またアラートの送信元 (システム、ディスク、ネットワーク、オペレーティング・システム、アプリケーション、装置、安全保護) を含むこともあります。

着信アラートが特定のアラート・タイプであるかどうか検査するには、選択リストから 1 つまたは複数のアラート・タイプを選択します。 特定のアラート・タイプを検査する必要がない場合は、選択リストの上の「すべて」チェック・ボックスを選択します。

b. 「重大度」を選択します。

重大度は 0 から 7 までの数値で、生成されたアラートの重大度を示します。重大度 0 は極めて重大なアラートを示し、重大度 7 は比較的軽度のアラートを示します。

着信アラートが特定の重大度であるか検査するには、選択リストから 1 つまたは複数の重大度値を選択します。特定の重大度値を検査する必要がない場合は、選択リストの上の「すべて」チェック・ボックスを選択します。

c. 「アプリケーション ID」を選択します。

アプリケーション ID は、アラートを生成したアプリケーションを表す英数字の識別子です。

着信アラートが特定のアプリケーション ID であるかどうかを検査するには、「アプリケーション ID」選択リストから 1 つまたは複数の ID を選択します。希望するアプリケーション ID がリストに含まれていない場合は、選択リストの上の入力フィールドにその ID を入力して **Enter** キーを押すと、アプリケーション ID をリストに追加することができます。特定のアプリケーション ID を検査する必要がない場合は、選択リストの上の「すべて」チェック・ボックスを選択します。

d. 「アプリケーション・アラート・タイプ」を選択します。

アプリケーション・アラート・タイプは、アラートを生成したアプリケーションによって個々のアラートに割り当てられた数値です。この値は、多くの場合、そのアプリケーション自体で使われます。

着信アラートが特定のアプリケーション・アラート・タイプであるかどうかを検査するには、アプリケーション・アラート・タイプ選択リストから 1 つまたは複数のタイプを選択します。希望するアプリケーション・アラート・タイプがリストに含まれていない場合は、選択リストの上の入力フィールドにそのアラート・タイプを入力して **Enter** キーを押せば、アプリケーション・アラート・タイプをリストに追加することができます。特定のアプリケーション・アラート・タイプを検査する必要がない場合、選択リストの上の「すべて」チェック・ボックスを選択します。

e. 「送信元 ID」を選択します。

送信元 ID は、アラートを生成したシステムのネットワーク・アドレスです。

特定の送信元 ID によって着信アラートを選別する場合は、「送信元 ID」選択リストから 1 つまたは複数の ID を選択します。希望する送信元 ID がリストに含まれていない場合は、選択リストの上の入力フィールドにその ID を入力して **Enter** キーを押せば、送信元 ID をリストに追加することができます。特定の送信元 ID を検査する必要がない場合は、選択リストの上の「すべて」チェック・ボックスを選択します。

2. 「アクション定義」を設定します。

特定のアラート・アクション定義を選択し、そのアクションを実行するのに必要な情報を入力する必要があります。

a. アクションを選択します。

アクションとは、指定したアラート条件を満たすアラートに対応して実行する操作のことをいいます。

使用可能なアクションを表示するには、「アクション」フィールドの右にあるスピン・ボタンを使用します。

b. 必要に応じて、追加情報を入力します。

追加情報が必要な場合は、「アクション」フィールドに <P#> の形式でパラメーターが表示されます。# はパラメーターの番号です。「アクション定義」パラメーター・フィールドには、必要な各パラメーターが、必要な情報の要旨と共に表示されます。各フィールドに適切な情報を入力します。

3. 定義したアクションを保管します。

すべてのアラート条件およびアクション定義情報を入力した後で「保管」を選択し、構成したアクションを保管します。このアクションは、「アラート・アクション」ウィンドウの「利用可能なアクション」フィールドに表示されるようになります。「完了」を選択すると、「アラート」ウィンドウは自動的にクローズされます。



## 付録B. プラットフォーム間統合

---

Netfinity は、分散デスクトップ、ノートブック、およびサーバー・システムの容易で効率的な管理を行う上で役立ちます。しかし、多くのネットワークは本来異機種混合であり、多くのシステム管理者は、色々な組み合わせを選択して、コストの抑制、およびすべてのネットワークのさまざまな構成要素を効果的に管理する必要があります。

Netfinity は、他のシステム管理プラットフォームと統合しても、Netfinity が持っている効率よく、また容易にシステム管理できる特徴を失うことがないように設計されています。Netfinity には、Netfinity の強力なシステム管理能力を活用して、他のシステム管理プラットフォームの機能を拡張することができる機能 (カスタム・インベントリー拡張機能、Netfinity アラート、および Netfinity マネージャー・ランチ・サポートなど) が数多く組み込まれています。

### Microsoft SMS との統合

Netfinity を Microsoft Systems Management Server と併用すると、インベントリー能力の拡張、アラート機能の拡張、および SMS コンソールとの統合ができます。

Netfinity には、カスタム・ハードウェア・インベントリー処理能力があるので、これによって SMS 管理者が使用できる情報が拡張されます。この情報としては、RAID 情報、PCI/EISA/MCA 装置情報、IBM システムの製造番号、およびシステムの構成要素の重要な製品データなどがあります。このカスタム・インベントリーは、SMS 管理者コンソールから照会および監視できるデータベースの属性が一層豊富になります。

また、Netfinity では、SMS 管理者コンソールと Netfinity アラートを共有することもできます。Netfinity では、アラート・アクション (Netfinity アラート・マネージャーを使用して構成する) を使用して、モニター・イベントに対する応答として、ユーザーが必要とするアクションを定義できます。モニター・イベントが生じるのは、しきい値に達した場合です。しきい値は、ユーザーが Netfinity モニター・サービスから監視したいと考える項目を選択して設定します。また、監視対象にすることができる追加属性についても、他の Netfinity サービスから使用することができます。Netfinity には、SMS 管理者にとって特に有用な 3 つのアラート・アクション、つまり「**NT** イベント・ログ」、「**SNMP** トラップへのアラートのマップ」、および

「SNMP トラップの送信」があります。アラート・アクションおよびアラート・マネージャー・サービスについては、13ページの第2章、『アラート・マネージャー』を参照してください。

また、Netfinity のアラート管理アーキテクチャーによって、問題が検出された時点での、SMS 管理への通知能力も拡張されます。SMS のアラート・アクションでは、重要な問題が管理者に通知されるのは、現在ネットワーク上の管理者コンソールで稼働している場合だけです。しかし、Netfinity アラート・マネージャー・サービスを使用すると、ページャーおよび E-Mail などの代替方式を使用して、問題の発生時に問題を通知するアラート・アクションを構成することができるので、アラートが生成されると、必ず即時に管理者に通知されます。

また、Netfinity には、Netfinity サービス・マネージャー・ランチ・サポートもあります。この機能を使用すると、SMS システム管理者が SMS 管理者コンソールと共に Netfinity マネージャー をインストールしている場合は、SMS 環境から Netfinity 管理機能にアクセスすることができます。

## システム要件

Microsoft Systems Management Server と Netfinity との統合に必要なシステム要件は、次のとおりです。

- Netfinity マネージャー 5.0 またはそれ以降
- 統合ソリューションの一環としてシステムを管理するすべての SMS 管理者コンソールに、Netfinity マネージャー 5.0 またはそれ以降がインストールされている
- Microsoft Systems Management Server バージョン 1.2、サービス・パック 2 または以降付き
- 統合ソリューションの一環として管理されるすべての SMS クライアントに、Netfinity クライアント サービス 5.0 またはそれ以降がインストールされている

## Netfinity MIF ジェネレーター

Netfinity マネージメント・インフォメーション・フォーマット (MIF) ジェネレーターは、システム構成に関するデータが入る MIF を生成することができるユーティリティです。MIF は、DMTF (Desktop Management Task Force) が、その DMI (Desktop Management Interface) 内で構成要素の記述に使用するために定義している構文です。SMS システムでは、この形式のデータを使用して、SMS データベース内の項目の追加および保守を行っています。Netfinity 5.0 の MIF ジェネレーターを使用すると、SMS ネットワーク上のマシンのパーソナル・コンピューター・プロパティにカスタム・インベントリー・データを追加することができます。

Netfinity MIF ジェネレーターを SMS に統合する方法はいくつかあります。ユーザーがログオンするたびにログイン・スクリプトを使用して実行するように、定期的に Windows NT AT コマンドを使用するか、SMS ジョブとして、スケジュールすることができます。これらの機能を実行するために SMS を構成する方法については、Microsoft Systems Management Server に付属の説明書を参照してください。

このユーティリティのパラメーターは、次のとおりです。

```
SIMIFMAK SMS.MFT SISTRATIC.MIF ffoptional“ /SMS
```

テンプレート・ファイル SMS.MFT には、SMS 用の Netfinity カスタム MIF 拡張機能が用意されています。SMS.MFT テンプレート・ファイルを使用するときは、/SMS パラメーターは 2 番目のパラメーターであることが必要であり、出力ファイルはデフォルトの SISTRATIC.MIF になります。SISTRATIC.MIF は、MS\SMS\NOIDMIFS サブディレクトリーに作成され、SMS 用の Netfinity 拡張機能は、SMS が実行する次のインベントリー・サイクル中に取り上げられます。

## Netfinity アラート・アクション

SMS 環境で使用される Netfinity アラート・アクションは、「NT イベント・ログ」、「SNMP トラップへのアラートのマップ」、および「SNMP トラップの送信」アクションです。アラート・アクションがトリガーされるのは、Netfinity モニターのしきい値に達したとき、または Netfinity 属性モニターが特定の状態に設定されている場合です。

SMS バージョン 1.2 には、イベントからトラップへの変換機能、および SNMP トラップ受信機能があります。イベントからトラップへの変換機能は、Netfinity をイベント・ソースと見なす構成が必要です。Netfinity からのすべての NT イベント・ログ項目は、SMS 用の SNMP トラップに変換します。SMS SNMP トラップ受信機能は、SNMP トラップを処理し、SNMP トラップ・アーキテクチャーを使用して、情報を SQL データベースに挿入します。そして、SNMP トラップ・アーキテクチャーからのパラメーターを使用して、QUERY が実行されます。

SMS のイベントからトラップへの変換機能の構成は、次のように行います。

1. 「サイト プロパティ」ウィンドウをオープンします。
2. 「SNMP トラップ」スクリーンを選択します。
3. 「NT イベント ソース」フィールドに、次のように入力します。

Netfinity

4. 「機器グループ」ウィンドウで、構成したいマシンを選択し、それをダブルクリックして、「Personal Computer プロパティ」ウィンドウをオープンします。
5. 「Windows NT Administrative Tools」が表示されるまでスクロールダウンし、「イベントからトラップへのトランスレーター」を選択します。
6. 「編集」を選択し、「イベント ソース -> Application->Netfinity」を探します。  
これで、画面の右側に、すべての生じうるイベントを並べたリストが表示されます。
7. 「すべてのイベント」を選択します。
8. 「追加」を選択します。
9. 「設定」を選択してから、「停止条件を無効にする」を選択します。

SNMP トラップ受信機能の構成は、次のように行います。

1. 「サイト プロパティ」ウィンドウをオープンします。
2. 「SNMP トラップ」スクリーンを選択します。
3. 「企業の **OID**」フィールドに、1.3.6.1.4.1.2.6.71 と入力します。

これは、Netfinity 製品を表す SNMP OID です。

## SMS QUERY の作成

SMS が構成され、いったん SQL データベースに SNMP トラップ項目が作成されると、SMS 管理者は、「QUERY」ウィンドウを使用してカスタム QUERY を作成すると、これらの項目を検索することができますようになります。

Netfinity イベント・ログ項目から変換された SNMP トラップのリストを表示する場合は、Netfinity が NT イベント・ソースである SNMP トラップ・アーキテクチャーを使用して、QUERY を作成します。Netfinity から直接受信した SNMP トラップのリストを表示する場合は、Enterprise OID が 1.3.6.1.4.1.2.6.71 である SNMP トラップ・アーキテクチャーを使用して、QUERY を作成します。

## Netfinity マネージャー のランチ・サポート

Netfinity マネージャー のインストール時に、システム上に SMS が検出された場合は、SMS 管理者コンソールの「ツール」メニューに Netfinity サービス・マネージャーが自動的に追加されます。これで、SMS 管理者は、ネットワーク内にあるすべての Netfinity 利用可能 SMSマシンに対して、Netfinity サービス・マネージャーを始動させることができます。

# Intel LANDesk サーバー・マネージャーまたはクライアント・マネージャーとの統合

Netfinity マネージャーは、3 つの重要なエリアでのLANDesk サーバー・マネージャーとの拡張統合を提供します。

- DMI インターフェースを使用して、すべてのLANDesk クライアントに拡張イベントリートを追加する。

この拡張機能を使用して、RAID 情報、PCI/EISA/MCA 装置情報、システムにある構成要素である IBM システムやその他の重要製品データのシリアル番号を、LANDesk DMI ブラウザーを介して表示する。

- Netfinity アラートを LANDesk 管理コンソールと共有する。

Netfinity は、アラート・マネージャーを介して構成されたアラート・アクションを使用し、イベントに対してどのアクションを実行するかを定義します。管理者は、Netfinity 統合を使用して、Netfinity が生成したアラートを表示し、LANDesk アラート・アクションをアラートに対応させることができます。

- Netfinity マネージャーのランチ・サポート

Netfinity マネージャーのランチ・サポートを使用すると、LANDesk 環境内の LANDesk 管理機能を補う Netfinity 管理機能を高めることができます。たとえば、LANDesk サーバー・マネージャーのアラート・アクションの数は、Netfinity での数よりも制限されています。その他の補足機能には、RAID 管理、事前障害分析、および American Power Conversion 社、Vinca Corp. 社、Lexmark 社などの提携会社から提供されるさまざまな Netfinity の拡張機能が含まれます。この統合機能により、システム管理者は、2 つの非常に強力な管理ソリューションをフルに活用することができます。

また、Netfinity は、LANDesk デスク・クライアント・マネージャー (LDCM) が稼働しているシステムの管理能力を拡張する場合にも使用されます。Netfinity マネージャーまたは Netfinity クライアント・サービスを LDCM がインストール済みのシステムにインストールすると、Netfinity は、自動的に次の追加機能を LDCM に提供します。

- DMI インターフェースを使用するすべての LANDesk クライアントへの拡張イベントリート機能の追加
- Netfinity ランチ・サポート

## システム要件

LANDesk サーバー・マネージャーと Netfinity との統合に必要なシステム要件は、次のとおりです。

この統合に要するシステム要件は、LANDesk と Netfinity に関するものです。

- Netfintiy マネージャーまたは Netfintiy クライアント・サービス 5.1 またはそれ以降
- LANDesk サービス・マネージャー (LDSM) 2.52 またはそれ以降
- Netfinity または Netfinity クライアント・サービスが、LDSM と Netfinity を使用して管理するすべてのLANDesk サーバー・マネージャーのクライアントにインストールされている
- Netfinity マネージャーが、ランチ・サポートおよび管理機能共有用のすべてのLDSM 管理コンソールにインストールされている

## 構成のセットアップ

システムを構成するには、次のようにします。

### 1. インベントリーの統合

インベントリー・データの統合は、Netfinity マネージャーの LANDesk 管理コンソールへのインストール中に自動的に実行されます。データは、選択したシステムに対し、LDSM コンソールの DMI ブラウザー・カテゴリーを介してアクセスされます。選択したシステムにログ・インした後、次のようにします。

- a. 「**DMI**」をクリックします。
- b. 「ブラウザー」をクリックします。
- c. Netfinity マネージャーか Netfinity クライアント・サービスのどちらかをクリックします。

DMI 構成要素のリストが表示されます。任意の構成要素の属性を表示させるには、その構成要素をクリックします。

### 2. アラートの統合

LDSM 環境と互換性のある Netfinity アラート・アクションには、次のものがあります。

- イベントをイベント・ログに追加



- アラートを SNMP トラップにマップ
- SNMP アラートの送信

LANDesk で「イベントをイベント・ログに追加」アクションを使用できるように Netfinity アラートを構成するには、管理者は、LANDesk SNMP イベント・フォワーダーをクライアント・マシンに、また、TCP/IP および SNMP をクライアント・マシンとマネージャー・マシンの両方にインストールする必要があります。SNMP イベント・フォワーダーは、NT イベント・ログ項目を SNMP トラップに変換し、イベント・フォワーダーとともにインストールされる SNMP イベント・ビューアーにそれらを表示します。

「SNMP アラートの送信」または「SNMP トラップにアラートをマップ」アクションが LANDesk に対して実行できるように Netfinity を構成するには、管理者は、TCP/IP と SNMP をエージェントおよびマネージャー両方のコンソール・マシンにインストールし、Windows NT の SNMP サービス構成ダイアログを使用して、SNMP トラップがマネージャー・マシンに送信されるよう、エージェントの SNMP サービスを構成する必要があります。すると、管理者が「SNMP トラップ・レシーバー」のリストから IBM を選択すると、エージェント・マシン上の Netfinity から受信されたトラップは、「LANDesk SNMP トラップ」ログに表示されるようになります。

### 3. イベント・フォワーダーの構成

イベント・フォワーダー・アプリケーションは、変換機能を使用可能にするために、マシンにインストールされる必要があります。

- a. 「LANDesk サーバー・マネージャー」グループにある「LANDesk イベント・フォワーダー」構成ユーティリティをオープンします。
- b. NT イベント・ログが、どこからトラップを受信するか (すなわち、アプリケーション、システム、または安全保護など) を選択します。
- c. ソースのリストから Netfinity を選択します。
- d. SNMP トラップに変換されるリストに含めるイベントを選択します。
- e. 「了解」を選択します。

転送されたイベントを、LANDesk SNMP イベント・ビューアーで表示させます。

### 4. Windows NT SNMP サービスの構成

この手順を実行するには、システムに、ネットワーク・プロトコルとして TCP/IP がインストールされ、サービスとして SNMP がインストールされている必要があります。

- a. Windows の「コントロール パネル」をオープンし、「ネットワーク」アイコンをダブルクリックします。
- b. 「サービス」タブをクリックします。
- c. 「SNMP サービス」を選択します。
- d. 「プロパティ」をクリックし、「トラップ」タブをクリックします。
- e. 「コミュニティ名」フィールドに次を入力します。

public

「トラップの宛先」フィールドに、SNMP トラップの送信先のシステムのアドレスまたはホスト名を入力します。

注: このシステムは、LDSN 管理コンソールでなければなりません。

- f. システムを再始動するか、「コントロール パネル」の「サービス」アプリケーションを使用して SNMP サービスを停止してから再始動します。

## 5. SNMP トラップ・レシーバーの構成

Netfinity は、Netfinity マネージャーの LDSN 管理コンソールへのインストール中に、LDSM トラップ・レシーバーに対する SNMP トラップ・ソースとして追加されます。したがって、「IBM エンタープライズ」アイコンが「SNMP トラップ・レシーバー」のリストから選択されると、「SNMP アラートの送信」アクションまたは「SNMP トラップへのマップ・アラート」アクションが構成されている Netfinity アラートは、「SNMP トラップ・ログ」に表示されます。

## 6. LANDesk アラート・アクションを Netfinity アラート用に構成

LANDesk アラート・アクションを、Netfinity から受信された SNMP トラップ用に構成するには、次のようにします。

- a. 「SNMP トラップ・レシーバー」のリストから「IBM エンタープライズ」アイコンを選択します。
- b. マウス・ボタン 2 を使用して、パラメーター選択区画から「変換された **Netfinity** アラート」を選択し、次に「アラート・アクションの構成」を選択します。
- c. アラート・リストから「**IBM**:変換された **Netfinity** アラート」を選択し、次に「構成」を選択します。

特殊なアラート・アクションを構成する場合は、LANDesk のマニュアルを参照してください。

## 7. ランチ・サポートの統合

LDSM 管理コンソール上の特殊な LDSM クライアント・システムのカテゴリとして、Netfinity サービス・マネージャーを追加することができます。これによって、LANDesk 管理者は、Netfinity が使用できるネットワーク内のすべての LDSM クライアント・マシンに対して、Netfinity サービス・マネージャーをランチすることができるようになります。Netfinity マネージャーのランチ統合サポートは、LDSM 管理コンソールとして構成済みのマシンに Netfinity マネージャーをインストールするときに、自動的に追加されます。すると、Netfinity サービス・マネージャーは、Netfinity が使用できる任意のクライアント・マシンのカテゴリとして表示されるようになり、これを選択することで、そのマシンに対して Netfinity マネージャーをランチできるようになります。Netfinity リモート・システム・マネージャー・サービスからのアクセスと同様、管理者には、マシンに対する Netfinity ユーザー ID とパスワードが必要です。



## 付録C. 電源オン・エラー検出を使用可能にする方法

---

ここでは、電源オン・エラー検出ドライバーをシステムにインストールする方法を説明します。

### システム要件

電源オン・エラー検出ドライバー (POED ドライバー) をサポートするためには、システムは次のものを備えた、LAN に接続されたマイクロチャネル・システムである必要があります。

- システム区画
- サポートされるネットワーク・アダプター (532ページの『サポートされるネットワーク・アダプター』を参照)
- NetBIOS 通信プロトコル

注: 電源オン・エラー検出ドライバーをサポートするために、システムに Netfinity マネージャーまたは Netfinity クライアント・サービスがインストールされている必要はありません。ただし、Netfinity マネージャーの電源オン・エラー検出サービスを使用した場合の方が、Netfinity を実行して電源オン・エラー検出メッセージを生成したシステムの識別が容易になります。

## 電源オン・エラー検出ドライバーのインストール

LAN 接続システムに電源オン・エラー検出ドライバー (POED ドライバー) をインストールするには、次のようにします。

1. 電源オン・エラー検出インストール・ディスクレットをドライブ A に挿入します。
2. システムを再始動します。
3. インストール・オプションを選択します。

このディスクレットでは、電源オン・エラー検出ドライバーをインストールすることも、アンインストールすることもできます。次のように入力して、

1

と入力して、**Enter** キーを押します。しばらくすると、システムのディスプレイに次のメッセージが表示されます。

インストール完了。

A ドライブからディスクレットを取り除いてください。

どれかキーを押してリブートしてください。

ディスクレットを抜き取って、どれかキーを押します。これでインストールは完了しました。

## 電源オン・エラー検出ドライバーのアンインストール

システムから電源オン・エラー検出ドライバー (POED ドライバー) をアンインストールする場合は、次のようにします。

1. 電源オン・エラー検出インストール・ディスクレットをドライブ A に挿入します。
2. システムを再始動します。
3. インストール・オプションを選択します。

このディスクレットでは、電源オン・エラー検出ドライバーをインストールすることも、アンインストールすることもできます。次のように入力して、

2

と入力して、**Enter** キーを押します。しばらくすると、システムのディスプレイに次のメッセージが表示されます。

アンインストール完了。

A ドライブからディスクレットを取り除いてください。

どれかキーを押してリブートしてください。

ディスクレットを抜き取って、どれかキーを押します。システムが通常どおりに再始動するはずですが、これですべての POED ドライバーがシステムから除去されました。

## サポートされるネットワーク・アダプター

テストの結果、電源オン・エラー検出ドライバーは、次のネットワーク・アダプターで使用した場合に正常に作動することが確認されています。

- IBM トークンリング・アダプター
- IBM イーサネット・アダプター
- 3Com EtherLink/MC アダプター
- SMC Ethernet Elite Plus/A アダプター
- Madge Smart 16/4 Ringnode アダプター
- Ether Streamer アダプター



## 電源オン・エラー検出のインストール・ディスクットの作成

電源オン・エラー検出インストール・ディスクットを使用すると、POED ドライバーをシステムのリファレンス区画にインストールすることができます。これらのドライバーがインストールされると、システムは電源入力自己診断テスト (POST) 中にエラーを検出した場合、SOS スタイルのメッセージを LAN 上に伝送します。

Netfinity には、電源オン・エラー検出インストール・ディスクットが付属しています。電源オン・エラーを使用可能にする追加のディスクットを作成する必要がある場合には、次のようにします。

1. リファレンス・ディスクットのバックアップ・コピーを作成します。

**重要：**

この処理にはオリジナルのリファレンス・ディスクットを使用しないでください。この処理を実行すると、リファレンス・ディスクットの内容は変更されてしまいます。

2. 新しく作成したリファレンス・ディスクットのバックアップ・コピーを、ディスクット・ドライブ A に挿入します。
3. Netfinity CD-ROM を CD-ROM ドライブに入れます。
4. OS/2 または DOS のコマンドライン・セッションをオープンします。
5. CD-ROM ドライブを現行ドライブとします。たとえば、CD-ROM に割り当てられているドライブが E の場合は、コマンドラインで

E:

と入力して、**Enter** キーを押します。

6. 次のように入力して、

```
CD POED¥SERVICES
```

**Enter** キーを押します。

7. 次のように入力して、

```
POWRINST
```

**Enter** キーを押します。

これによって、電源オン・エラー検出インストール・ディスクットを作成するバッチ・プログラムが開始します。



## 付録D. サポートされる PFA ハード・ディスク

---

事前障害分析は、次の PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブをサポートします。事前障害分析サービスで監視および管理できるハード・ディスク・ドライブは、次に示すものだけです。

- IBM 0664 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM 0663 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM 0662 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM DPES-31080 型ハード・ディスク・ドライブ (製品改訂版 531Q のみ)
- IBM DFHS 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM DFMS 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM XP31 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM XP32 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM XP34 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM DORS-3216DW 型ハード・ディスク・ドライブ
- IBM FIREBALL12805 型ハード・ディスク・ドライブ (製品改訂版 630N またはそれ以降)

これらのハード・ディスク・ドライブの他に、Netfinity マネージャー (OS/2 および Windows NT 版) および Netfinity クライアント・サービス (OS/2 および Windows NT 版) は、SMART (Self-Monitoring Analysis and Reporting Technology) 標準に準拠している PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブをサポートします。SMART 準拠のハード・ディスク・ドライブが使用できるのは、OS/2 版または Windows NT 版の Netfinity マネージャー または Netfinity クライアント・サービスが稼働しているシステムの場合だけです。



## 付録E. サポートされる RAID アダプター

---

次の RAID アダプターがサポートされています。

- IBM RAIDアダプター
- IBM SCSI-2 Fast/Wide-Streaming RAID アダプター /A
- IBM SCSI-2 Fast PCI-Bus RAID アダプター
- IBM PC ServeRAID アダプター
- IBM PC ServeRAID PCI アダプター
- IBM PC ServeRAID PCI II アダプター



RAID (*Redundant Array of Independent Disks*) アダプターは、複数の物理ディスク・ドライブに接続し、こうして接続されたディスク・ドライブは、最大 8 個のシステム・ドライブ (または、論理ドライブ) として扱うことができます。システム・モニター・サービスは、RAID システムが存在しているかどうかを監視するモニターを表示しませんが、RAID アダプターに接続しているすべてのディスク・ドライブの状況を監視し、各ドライブがオンラインで正常に作動していることを確認します。

物理ドライブまたはシステム・ドライブが、アクティブまたは非アクティブになると RAID アダプターはそれを検出します。これを、ドライブの *状況* と呼びます。

システム・ドライブは、次の 3 つのいずれかの状況を報告します。

- オンライン
- クリティカル (限界)
- オフライン

注: クリティカルな状況は、RAID レベル 1、2、3、または 4 のシステム・ディスク・ドライブによってだけ報告します。RAID レベル 0 のシステム・ディスク・ドライブでは、クリティカル状況を報告することはできません。RAID レベル 0 のディスク・ドライブでは、すべてオンラインまたはオフラインのどちらかになります。RAID レベルの詳細については、RAID アダプターの資料を参照してください。

物理ドライブについては、次の 3 つのいずれかが報告されます。

- オンライン
- スタンバイ
- 無効

RAID アラートは、RAID ディスク・ドライブの状況が変更されたときにだけ生成されます。状況が未変更のままである場合は、追加のアラートが生成されることはありません。

システム・モニターによって生成されるすべての RAID アラートのテキストは、すべて次の形式に従います。

アラート '*RAID デバイス状況*' : 属性 '*タイプとロケーション*' ('*サブシステム*' の) は '*状況*' に設定されています。

*状況* とは、ドライブによって報告された状況のことで、*タイプとロケーション* は、RAID ディスク・ドライブのタイプ (物理またはシステム) と、その指定位置 (システム・ドライブ番号または物理ベイ番号)、*サブシステム* とは、この状況の変更を報告している RAID サブシステムの名前のことをいいます。

各 RAID アラートに固有の情報は、次のとおりです。

## RAID 物理ディスク・ドライブ状況がオンラインです

説明	物理ドライブの状況がスタンバイまたは停止からオンラインに変更されたときに生成されます。
アラート・タイプ	通知
重大度	3
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	130

## RAID 物理ディスク・ドライブ状況がスタンバイです

説明	物理ドライブの状況がオンラインまたは停止からスタンバイに変更されたときに生成されます。
アラート・タイプ	エラー
重大度	2
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	130



## RAID 物理ディスク・ドライブ状況が無効です

説明	物理ドライブの状況がオンラインまたはスタンバイから無効に変更されたときに生成されます。
アラート・タイプ	障害
重大度	0
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	130

## RAID システム・ディスク・ドライブ状況がオンラインです

説明	システム・ドライブの状況がクリティカルまたはオフラインからオンラインに変更されたときに生成されます。
アラート・タイプ	通知
重大度	3
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	131

## RAID システム・ディスク・ドライブ状況がクリティカルです

説明	システム・ドライブの状況がオンラインまたはオフラインからクリティカルに変更されたときに生成されます。
アラート・タイプ	警告
重大度	2
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	131

## RAID システム・ディスク・ドライブ状況がオフラインです

説明	システム・ドライブの状況がクリティカルまたはオンラインからオフラインに変更されたときに生成されます。
アラート・タイプ	障害
重大度	0
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	131

注: RAID 物理ディスク・ドライブがアラート・メッセージを生成すると、ユーザーは一般に、その物理ディスク・ドライブに関連するすべてのシステム・ドライブからアラート・メッセージを受け取るようになります。

## 付録G. Netfinity のコマンドライン操作

Netfinity の一部のサービスには、システムのコマンドラインからアクセスすることができます。ここでは、コマンドラインからサービスにアクセスする方法、およびそれらの使用に関連するさまざまなパラメーターについて説明します。

### アラート・マネージャーのコマンドライン操作

アラート・マネージャー・サービスには、コマンドライン操作がありません。ただし、ユーザーのシステムでアラートを生成するためのプログラムとして GENALERT.EXE があります。このアラートは、次に説明するいくつかのユーザー指定パラメーターを指定することができます。

注: GENALERT で生成したアラートを、「APPC (拡張プログラム間通信) を介してアラートをホストに転送」アラート・アクションを使用してホスト・システムに転送する場合は、545ページの『NMVT.INIファイルへの GENALERT のアラートの記述の追加』を参照してください。

GENALERT.EXE のコマンドのコマンドライン形式は、次のとおりです。

```
GENALERT /T:"text" /APP:id_name  
/SEV:0..7 /TYPE:sssttt /ATYPE:hexnum
```

各項目の内容は次のとおりです。

- |                      |   |
|----------------------|---|
| <b>/T:"テキスト"</b>     | アラートを記述するテキスト・メッセージを定義します。引用符が必要です。                   |
| <b>/APP:id_name</b>  | アラートのアプリケーション ID を定義します (1 ~ 8 文字)。                   |
| <b>/SEV:0...7</b>    | アラートの優先順位、または重大度を定義します (0 = 最も優先順位が高い、7 = 最も優先順位が低い)。 |
| <b>/ATYPE:sssttt</b> | アラートの標準タイプを定義します。                                     |

sssフィールドには、次のようなアラートの ID を記述します。

- UNK - 不明
- SYS - システム
- DSK - ディスクまたは DASD
- NET - ネットワーク
- OS\_ - オペレーティング・システム

APP - アプリケーション  
DEV - 装置  
SEC - 安全保護

*###* フィールドには、次のようなアラートのクラスを記述します。

UNK - 不明  
FLT - 故障または障害  
ERR - エラー  
WRN - 警告  
INF - 通知

**/ATYPE:hexnum** アプリケーション固有のアラート・タイプを16進数で定義します。値は 0000 ~ FFFF の範囲です。

## NMVT.INIファイルへの GENALERT のアラートの記述の追加

Netfinity ディレクトリーにある NMVT.INI ファイルは、標準的な Netfinity アラートを NMVT 形式のアラートにマップするアラート記述を含んでおり、この記述は、拡張プログラム間通信機能 (APPC) および“APPC を介してアラートをホストに送信”アラート・アクションを使用することによってホスト・システムに正しく渡されます。しかし、GENALERT コマンドを使用して生成されるアラートはユーザーによって、構成および定義されるため、これらのアラートはこのファイルには含まれません。その結果、NMVT.INI ファイルに GENALERT アラートの項目を追加しない場合は、“APPC を介してホストにアラートを送信”アラート・アクションは、NMVT の作成に必要なデータ (アラート記述、障害の原因、推奨される処置など) をもたないため、この情報をホストに渡すことができません。

GENALERT によって作成されたアラート情報を、システムがホストに渡せるようにするためには、アラートを生成するシステムの Netfinity ディレクトリーにある NMVT.INI ファイルに項目を追加する必要があります。NMVT.INI ファイル内の他の項目と同様に、この項目は、Netfinity アラートに関する情報 (アプリケーション名、アラート・タイプ、アラートの重大度など) と、それに続くホストに送信される NMVT 用の構成データで構成されている必要があります。

たとえば、次の GENALERT コマンドを使用してアラートを生成します。

```
GENALERT /T:"Virus Detected" /APP:ANTVIR /SEV:0  
/TYPE:SECWRN /ATYPE:000C
```

このアラートがホストに正しく転送されるには、NMVT.INI ファイルを編集し、Netfinity アラート情報を NMVT 固有の情報に変換するために特別に作成された項目を含める必要があります。たとえば次のようになります。

```
APP:ANTVIR TYPE:SECWRN SEV:0 ATYPE:000C GTYPE:01  
DESC:C007 CAUSE:6700 USER:7199:1026 FAIL:0501:18003103
```

この項目を NMVT.INI ファイルに追加すると、アラート・マネージャーは、「APPC を介してアラートをホストに送信」アラート・アクションを使用して、このアラートを NMVT に変換し、ホスト・システムに転送することができるようになります。

## システム情報ツールのコマンドライン操作

システム情報ツールはコマンドラインから始動することができ、5つのコマンドライン・パラメーターをサポートします。システム情報ツールのコマンドライン形式は、次のとおりです。

```
SINFG30 /P:filename /H:filename  
/F:history filename /NOLOGO /B
```

コマンドライン・パラメーターは、次のとおりです。

- /P: filename** このパラメーターは、プログラムによって収集されたすべての情報に関する報告書を生成するために使用されます。ファイル名の代わりに LPT1 のような論理プリンター名を指定すると、報告書がプリンターに送られます。情報が収集されている間はプログラムのロゴ画面が表示され、報告書が生成されるとプログラムは終了します。
- /H: filename** このパラメーターは、プログラムによって検出されたすべての情報、および報告書が生成された日時を含む、バイナリー履歴ファイルを生成するために使用されます。作成したファイルは、**/F**コマンドライン・パラメーターを使用し、入力ソースとして使用することができます。情報が収集されている間はプログラムのロゴ画面が表示され、ファイルが生成されるとプログラムは終了します。
- /F: history filename**  
このパラメーターを使用すると、プログラムが実行されている物理システムではなく、以前に生成された履歴ファイルが、情報収集のソースとして使用されます。このオプションを使用することによって、別のシステムから得られた履歴ファイルを見ることができます。
- /NOLOGO** このパラメーターを使用すると、プログラム・ロゴが表示されなくなります。このパラメーターは、他のパラメーターと組み合わせて使用できます。
- /B** このパラメーターを使用すると、プログラムが始動されている間は、すべての警告および通知メッセージがバイパスされます。これは、無人システムの始動の場合に使用することができます。このパラメーターは、他のパラメーターと組み合わせて使用できます。

## ECC メモリー・セットアップのコマンドライン操作

ECC メモリー・セットアップのすべての機能は、OS/2 のコマンドラインから ECCMEM.EXE を使用してアクセスすることができます。

注: ECCMEM.EXE が使用できるのは、OS/2 が稼働しているシステムで使用する場合だけです。

ECCMEM.EXE のコマンドライン形式は、次のとおりです。

```
ECCMEM /INIT /SCRUB:ON or OFF /THRESH:ON or OFF  
/COUNT:ON or OFF /QUIET /COUNTVAL:number  
/THRESHVAL:number
```

コマンドライン・パラメーターは、次のとおりです。

- |  |  |
|--|--|
| <b>/INIT</b>                           | ECC メモリーを、保管されている設定値に初期設定します。                  |
| <b>/SCRUBON または OFF</b> <sup>1</sup>   | シングル・ビット・エラー修正を使用可能または使用不能にします。                |
| <b>/THRESH:ON または OFF</b> <sup>1</sup> | シングル・ビット・エラーしきい値マスク不能割込み(NMI)を使用可能または使用不能にします。 |
| <b>/COUNT:ON または OFF</b> <sup>1</sup>  | シングル・ビット・エラー・カウントを使用可能または使用不能にします。             |
| <b>/QUIET</b>                          | ECCMEM.EXE は、テキスト出力を生成しなくなります。                 |
| <b>/COUNTVAL:number</b>                | シングル・ビット・エラー・カウントを指定の値に設定します。                  |
| <b>/THRESHVAL: number</b> <sup>1</sup> | シングル・ビット・エラーしきい値を指定の値に設定します。                   |

<sup>1</sup> これらのオプションは、保管されている設定値を指定した値に更新します。システムを再始動すると、保管された設定値でECC メモリーを構成します。

## サービス基本プログラムをリモートから開始および停止させる方法

Netfinity の STRTBASE.EXE および STOPBASE.EXE コマンドライン・プログラムを使用して、ほとんどの Netfinity サービス基本プログラムをリモートから開始または停止させることができます。

注: STRTBASE.EXE と STOPBASE.EXE は各 Netfinity サービスの基本プログラムだけを開始したり停止したりすることができます。これらのプログラムは、Netfinity ネットワーク・インターフェース、Netfinity サポート・プログラム、または Netfinity ネットワーク・インターフェースや Netfinity サポート・プログラムによって開始される基本プログラム (アラート・マネージャー、電源オン・エラー検出、システム・モニター、およびシリアル接続制御の基本プログラムが含まれる) を、リモートから開始または停止させるためには使用できません。STRTBASE.EXE または STOPBASE.EXE が正しく機能するには、これらのプログラムがリモート・システム上で実行されている必要があります。



## リモートからのサービス基本プログラムの開始

STRTBASE.EXE は、リモート・システム上の Netfinity サービスの基本プログラムをローカルのシステムから開始させる場合に使用します。STRTBASE.EXE のコマンドライン形式は、次のとおりです。

```
STRTBASE \N:networktype::networkaddress  
\BASE:servicebase [\BATCH] [\?]
```

変数	定義
<i>networktype</i>	メッセージの送信に使用されるプロトコルの名前です (たとえば、"TCP/IP"など)。
<i>networkaddress</i>	基本プログラムが開始されるリモート・システムのプロトコル固有アドレスです (たとえば、"user.network.com"など)。
<i>servicebase</i>	リモート・システム上で開始される基本プログラム・ベースのサービス結合名です。このコマンドで使用するサービス結合名のリストについては、551ページの『サービスの結合名』を参照してください。
<b>BATCH</b>	プログラムを出力なしで実行します。 STRTBASE.EXE が BATCH モードで実行されると、リモート・システムの名前を含む SYSNAME.OUT という名前のファイルが、STRTBASE.EXE と同じディレクトリーに作成されます。
<b>?</b>	コマンドラインについてのヘルプを表示します。

## リモートからのサービス基本プログラムの停止

STOPBASE.EXE は、リモート・システム上の Netfinity サービスの基本プログラムを、ローカルのシステムから停止する場合に使用します。STOPBASE.EXE のコマンドライン形式は、次のとおりです。

```
STOPBASE \N:networktype::networkaddress  
\BASE:servicebase [\BATCH] [/?]
```

変数	定義
<i>networktype</i>	メッセージの送信に使用されるプロトコルの名前です (たとえば、"TCPIP"など)。
<i>networkaddress</i>	基本プログラムが停止されるリモート・システムのプロトコル固有アドレスです (たとえば、"user.network.com" など)。
<i>servicebase</i>	リモート・システム上で停止される基本プログラム・ベースのサービス結合名です。このコマンドで使用するサービス結合名のリストについては、551ページの『サービスの結合名』を参照してください。
<b>BATCH</b>	プログラムを出力なしで実行します。 STOPBASE.EXE が BATCH モードで実行されると、リモート・システムの名前を含む SYSNAME.OUT という名前のファイルが、STOPBASE.EXE と同じディレクトリーに作成されます。
?	コマンドラインについてのヘルプを表示します。

## サービスの結合名

STRTBASE.EXE および STOPBASE.EXE の各プログラムで使用するサービス結合名のリストは、次のとおりです。

サービスの結合名	サービス名
<b>CFMBase</b>	クリティカル・ファイル・モニター
<b>ProcMgr</b>	プロセス・マネージャー
<b>ECCMemory</b>	ECC メモリー・セットアップ
<b>Gatherer3.0</b>	システム情報ツール(バージョン3.0またはそれ以上)
<b>Gatherer</b>	システム情報ツール (他のすべてのバージョン)
<b>PFAServiceBase</b>	事前障害分析
<b>ScreenID</b>	スクリーン・ビュー
<b>DMIBrowserBase</b>	DMI ブラウザー
<b>RAID_BASE</b>	RAID マネージャー
<b>RCSHD</b>	リモート・セッション
<b>SoftInvB</b>	ソフトウェア・インベントリー
<b>FileBase</b>	ファイル転送
<b>PartionBase</b>	システム区画アクセス
<b>SCH_BASE_NODE</b>	イベント・スケジューラー
<b>ProfileBase</b>	システム・プロファイル
<b>CAPMGT</b>	キャパシティー管理
<b>RWCService</b>	リモート・ワークステーション制御
<b>DiagMgr</b>	システム診断マネージャー
<b>SCFMgr</b>	サービス構成マネージャー
<b>ServiceProcessorBase</b>	システム管理

**UpdateConnector**

Update Connector マネージャー (インターフェイス)

**UpdateConnectorClient**

Update Connector マネージャー (インターフェイスまたはクライアント)

ここでは、Netfinity の自動インストールを実行する方法、およびカスタマイズされた Netfinity インストール・システムを作成する方法を説明します。

### 自動インストール

CID (CID とは、「構成、インストール、および配布」を意味します) が使用可能なソフトウェア配布管理ユーティリティ (IBM ネットワーク・トランスポート・サービス /2 に同梱されている LAN CID ユーティリティなど) がある場合は、Netfinity インストール・プログラムのコマンドライン・パラメーターと応答ファイルを使用することによって、ネットワーク内の複数のシステムに Netfinity をインストールすることができます。まず、インストールに使用するインストール元ディレクトリを作成する必要があります。

Netfinity クライアント・サービスをインストールするためのインストール元ディレクトリの作成は、次のようにします。

1. プログラム・ファイル用のインストール元ディレクトリを作成します。
2. そのディレクトリに、Netfinity CD-ROM 上の該当する *Netfinity サービス・プログラム* サブディレクトリからファイルをコピーします。

たとえば、Netfinity クライアント・サービス (OS/2 版) を配布するためのインストール元ディレクトリを作成している場合は、Netfinity CD-ROM 上の OS2\SERVICES サブディレクトリからすべてのファイルをインストール元ディレクトリにコピーします。

Netfinity マネージャーをインストールするためのインストール元ディレクトリの作成は、次のようにします。

1. プログラム・ファイル用のインストール元ディレクトリを作成します。
2. そのディレクトリに、Netfinity CD-ROM 上の該当する *Netfinity マネージャー* サブディレクトリからファイルをコピーします。

たとえば、Netfinity マネージャー (OS/2 版) を配布するために、インストール元ディレクトリを作成している場合は、Netfinity CD-ROM 上の OS2\MANAGER サブディレクトリからすべてのファイルをインストール元ディレクトリにコピーします。

インストール元ディレクトリーを作成後で、応答ファイルおよび Netfinity インストール・プログラムのコマンドライン・パラメーターを使用します。Netfinity インストール・プログラムでは、次のコマンドライン・パラメーターがサポートされます。

***/R:*** *drive+path+filename*

応答ファイルのドライブ、パス、およびファイル名を指定します。組み込まれるパラメーターに注釈が付けられた応答ファイルの例として、NETFBASE.RSP ファイル (Netfinity がインストールされているディレクトリーにある) を参照してください。

***/S:*** *drive+path*

インストール元のドライブとパスを指定します。これは、Netfinity CD-ROM からプログラム・ファイルをコピーした先のディレクトリーです。

***/T:*** *drive*

インストール先のドライブを指定します。デフォルトは現行の始動ドライブです。

***/TU:*** *drive+path*

更新する CONFIG.SYS ファイルのドライブおよびパスを指定します。デフォルトでは、/T パラメーターによって指定されたドライブ (または始動ドライブ) のルート・ディレクトリーにある CONFIG.SYS が変更されるようになっています。応答ファイルの *ChangeConfig* パラメーターが FALSE である場合は、このパラメーターは無視されます。

例えば次の行では、

```
NETFINST /R:NETFBASE.RSP /S:Y:¥NETFIN  
/T:C /TU:D:¥
```

NETFBASE.RSP 応答ファイルのオプションを使用する Netfinity が、ディレクトリー Y:¥NETFIN のプログラム・ファイルを使用して、ドライブ C: (ファイルのインストール先ディレクトリーは、応答ファイルから取られます) にインストールされ、D:¥ ディレクトリーにある CONFIG.SYS ファイルを修正することになります。

注: CID が使用可能なソフトウェア配布マネージャーの使い方については、個々の CID 使用可能製品に添付されている説明書を参照してください。

## カスタマイズしたインストール

安全保護のために、すべてのユーザーが、すべてのサービスにはアクセスできないようにすることができます。 カスタマイズしたインストールを行って一部のサービスをインストールしないようにして、ユーザー・アクセスを制限することができます。

カスタマイズしたインストールを行うには、INSTALL.INI ファイルを編集する必要があります。 たとえば、カスタマイズしたNetfinity マネージャー (Windows 95 版または Windows NT 版) をインストールをするときに、Netfinity マネージャーのディレクトリーにある INSTALL.INI ファイルを編集します。

INSTALL.INI ファイルは、次の行によって 3 つのセクションに分けられています。

[==]

最初のセクションには、インストール中に選択することのできるインストール構成が含まれています。 選択項目は最大で 8 つです。 各選択項目は、2 行からなります。 最初の行は、インストール構成ラジオ・ボタンの隣に表示されるテキストです。 2 行目は、その選択項目がインストールするように選択されたときにインストールされる 3 番目のセクションのオプションのリストです。

たとえば次のようになります。

```

;IBM SysMgt Install Script, Version 2 (Do not remove this comment line)
Netfinity Manager Installation [Manager 16900]
    Advanced System Management Support [ServProc 450]
    Capacity Manager Enhancement [CapMgt 5600]
    Remote Workstation Control [RWC 2000]
    World Wide Web Enhancement (TCPIP Required) [WebManager 3000] IsTcip
[==]
Netfinity Manager CD for Windows 95/NT
[==]
NetFinity Admin
NULL Manager
    CL 0 1 NETFBASE.EXE
    CCL 0 1 NETDOM.INI
    CCL 0 1 NETNODES.INI
    CCL 0 1 INSTALL.BAT
    CCL 0 1 NETFINST.EXE
    CCL 0 1 INSTALL.INI
    CCL 0 1 WININST.HLP
    CL 0 1 APCKINST.DLL
;Screen Capture GUI
;NULL Manager
;    CL 0 1 SAVEG.EXE
;    CL 0 1 SAVEG.HLP

```

この INSTALL.INI は、システム管理、キャパシティー・マネージャー、リモート・ワークステーション制御、および Netfinity World Wide Web 拡張機能もインストールする Netfinity マネージャーのインストール構成を作成します。

2 番目のセクションには、このインストール・スクリプトで使用する CD の名前が入っています。

3 番目のセクションには、インストール可能なオプションのリストが含まれています。これらのオプションは、最初のセクションの選択項目によって選択されるものです。これらのオプションには、1 から始まる連続的な番号が付いています。したがって、何らかのオプションを挿入すると、それ以降のすべてのオプションの番号が変更されます。各オプションは次の形式になっています。



## オプション名

Dll エントリーポイント

オプション・ファイル

オプション・ファイル

...

インストール・コマンド

インストール・コマンド

...

**オプション名** インストール・プログラムによって書き込まれる識別用注釈です。すべてのオプションのオプション名は、異なっている必要があります。これは、識別のためだけに使用されます。

**Dll エントリー・ポイント** あるオプションがインストール先のコンピューターで有効かどうかを判別するために使用されます。多くの場合、これは予約文字列“NULL”となります。

インストールをカスタマイズする最も簡単な方法は、インストールから除去したいサービスの前にセミコロン (“;”) を付けることです。

特定のセクションにライン項目を追加する場合は、次の例に示す形式で、必要な項目の情報をすべて追加します。

カスタマイズ前:

```
Screen Capture GUI
NULL Manager
  CL 0 1 SAVEG.EXE
  CL 0 1 SAVEG.HLP
```

カスタマイズ後:

```
Screen Capture GUI
NULL Manager
  CL 0 1 SAVEG.EXE
  CL 0 1 SAVEG.HLP
  CL 0 1 CUSTOM.INI
```



# 付録I. Netfinityリレーショナル・データベース・テーブル

注:

1. *date* または *time* データ・タイプをサポートしていないデータベース管理システムは、これに SQL タイプのタイム・スタンプ (たとえば、*datetime*) を割り当てます。
2. Microsoft SQL Server データベース (およびその他) 上の **varchar** データ・タイプの最大文字数は 255 文字です。この値は、DB2 データベース上では 256 文字以内となります。

## Netfinity システム情報テーブル

次のデータベース構成テーブルには、システム情報ツールで収集およびエクスポートされた情報に関するデータベース項目の名前、タイプ、および説明が記載されています。

### BASE テーブル

表 1 (1/2). BASE 構成テーブル. 基本システム構成情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
MANAGING_ID	char(32)	グループの Netfinity システム・マネージャー
GROUP_NAME	char(32)	Netfinity 論理グループ名
OPERATING_SYSTEM	char(32)	オペレーティング・システム
VERSION	char(8)	オペレーティング・システムのバージョン
MEMORY_OPERATING	dec(10,2)	オペレーティング・システムによって検出された合計メモリー (MB)
MEMORY_BASE	dec(10,2)	基本メモリー (MB)
MEMORY_USABLE	dec(10,2)	使用可能メモリー (MB)
MEMORY_BOARD	dec(10,2)	メモリー・ボード・メモリー (KB)
MEMORY_ADAPTER	dec(10,2)	アダプター・カード・メモリー (MB)

表 1 (2/2). BASE 構成テーブル. 基本システム構成情報

名前	タイプ	説明
MEMORY_CACHEABLE	dec(10,2)	キャッシュ可能メモリー (MB)
REFERENCE_DISK	smallint	リファレンス・ディスク・タイプ
NVRAM	smallint	NVRAM サイズ
DEDICATED_IRQ	char(38)	占有 IRQ レベル
SHARED_IRQ	char(38)	共有 IRQ レベル
PARALLEL_PORTS	smallint	パラレル・ポートの数
SERIAL_PORTS	smallint	シリアル・ポートの数
SYSTEM_SERIAL	char(20)	システムのシリアル番号
PLANAR_ID	char(4)	システム・ボードの ID
PLANAR_SERIAL	char(20)	システム・ボードのシリアル番号
PROCESSOR_CARD_SER	char(20)	プロセッサ・カードのシリアル番号
BASE_DATE	date(非 null)	更新日
BASE_TIME	time(非 null)	更新日

注: 一次キーは SYSTEM\_ID で SYSTEM\_ID 上では固有な索引です。

## DISKETTE テーブル

表 2. DISKETTE テーブル. ディスケット・ドライブごとに 1 項目のディスク情報。

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
LOGICAL_DRIVE	char(2)	論理ドライブを識別するたとえば、A:
DEVICE_TYPE	char(40)	デバイスのタイプたとえば直接アクセス装置

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。

## DISPLAY テーブル

表 3. DISPLAY テーブル. ディスプレイごとに 1 項目のディスプレイ情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
DISPLAY_ADAPTER	char(40)	使用しているアダプターのタイプ
DISPLAY_TYPE	char(40)	使用しているディスプレイのタイプ
VIDEO_MEMORY	dec(10,2)	メモリー容量 (KB)
COLORS	int	表示される色の数
HORIZONTAL_RES	smallint	画面の水平解像度
VERTICAL_RES	smallint	画面の垂直解像度
HORIZONTAL_SIZE	smallint	画面の水平サイズ (mm)
VERTICAL_SIZE	smallint	画面の垂直サイズ (mm)
VIDEO_SUBSYSTEM	smallint	ビデオ・サブシステム0 = 1 次
SLOT_LOCATION	smallint	ビデオ・アダプター・スロットの位置番号

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。

## EXPANSION\_SLOT テーブル

表 4. EXPANSION\_SLOT テーブル. スロットごとに 1 項目のディスプレイ情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
SLOT	smallint	スロット番号を識別する
BUS_TYPE	char(16)	使用されているバスのタイプ
BUS_NUMBER	smallint	バス番号
ADAPTER_ID	char(10)	アダプターの ID 番号
ADAPTER_TYPE	char(70)	アダプター・カードのタイプ

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。

## FIXED\_DISK テーブル

表 5. FIXED\_DISK テーブル。物理装置ごとに 1 項目のハード・ディスク情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
DISK_CAPACITY	dec(10,2)	容量 (MB)
DISK_CYLINDERS	int	シリンダー数
SECTORS_PER_CYL	int	セクター数 / シリンダー
DISK_HEADS	int	ヘッド数
DISK_TOTAL_SECTORS	int	セクターの合計数
PHYSICAL_DRIVE	char(8)	物理ドライブ ID たとえば、1:

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。

## LOGICAL\_DRIVE テーブル

表 6. LOGICAL\_DRIVE テーブル. 論理装置ごとに 1 項目の論理ドライブ情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
LOGICAL_NAME	char(32)	LAN によって接続されたりリモート・ディスク たとえば、G:
VOLUME_NAME	char(16)	ボリューム名
FILE_SYSTEM	char(8)	ファイル・システム名
FILE_ATTACH	char(32)	ファイル・システム接続名
DRIVE_TYPE	char(1)	ローカル (L) またはリモート (R) ドライブ
SECTORS_CLUSTER	smallint	セクター数 / クラスタ
SECTORS_BYTES	smallint	バイト数 / セクター
DEVICE_CAPACITY	dec(10,2)	容量 (MB)
AVAILABLE_SPACE	dec(10,2)	使用可能なスペース (MB)
PHYSICAL_DRIVE	char(8)	物理ドライブ ID たとえば、1:

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。

## KEYBOARD テーブル

表 7. KEYBOARD テーブル. システムごとに 1 項目のキーボード情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
KEYBOARD_TYPE	char(30)	キーボードのタイプ
COUNTRY_CODE	char(3)	国別コードを識別するたとえば、US
SUBCOUNTRY_CODE	char(3)	副国別コードを識別する。たとえば、103
CODE_PAGE	smallint	コード・ページ、たとえば、437

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。



## MODEL テーブル

表 8. MODEL 構成テーブル. システムごとに 1 項目のモデル依存情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
MODEL_NAME	char(30)	システムのモデル名
EXPANSION_BUS	char(30)	拡張バス・タイプ
MODEL_NUMBER	char(2)	モデル番号
SUBMODEL_NUMBER	char(2)	サブモデル番号
BIOS_REVISION	char(2)	BIOS 改訂レベル
BIOS_DATE	date	BIOS ROM 日付

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。

## MOUSE テーブル

表 9. MOUSE テーブル. システムごとに 1 項目のマウス情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
MOUSE_TYPE	char(30)	マウスのタイプ
MOUSE_BUTTONS	smallint	マウスのボタンの数

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。

## PRINTER テーブル

表 10. PRINTER テーブル. インストールされているプリンターごとに 1 項目のプリンター情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
PRINTER_PORT	char(4)	論理プリンター・ポートの名前
PRINT_QUEUE	char(8)	印刷待ち行列の名前
PRINTER_DRIVER	char(16)	プリンター・ドライバの名前
PRINTER_MODEL	char(32)	プリンター・モデルの名前

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。

## PROCESSOR テーブル

表 11. PROCESSOR 構成テーブル. プロセッサごとに 1 項目のプロセッサ情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
PROCESSOR	char(16)	プロセッサ・タイプ
CO_PROCESSOR	char(16)	補助プロセッサ・タイプ
PROCESSOR_SPEED	int	インストール済みプロセッサの速度 (MHz)
INTERNAL_CACHE	char(1)	内部プロセッサ・キャッシュが使用可能 (E)、使用不能 (D)、未インストール (N)
EXTERNAL_CACHE	char(1)	外部プロセッサ・キャッシュが使用可能 (E)、使用不可 (D)、未インストール (N)、非サポート (U)
PLANAR_SPEED	int	プレーナーの速度 (MHz)
PROCESSOR_NUMBER	smallint	プロセッサ番号マルチプロセッサのみ使用

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。

## SYSLEVEL テーブル

表 12. SYSLEVEL テーブル. インストールされている製品ごとに 1 項目の SYSLEVEL 情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
PRODUCT_NAME	char(80)	ソフトウェア・プロダクトの名前
PRODUCT_VERSION	char(5)	ソフトウェア・プロダクトのバージョン
COMPONENT_ID	char(9)	インストール済み構成要素の ID 番号
CURRENT_CSD	char(8)	現在のインストール CSD レベル
PREVIOUS_CSD	char(8)	以前のインストール CSD レベル

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。

## MEMORY テーブル

表 13. MEMORY テーブル. コネクタごとに 1 項目のメモリー情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
CONNECTOR_ID	char(8)	インストール済みコネクタの ID 番号
MEMORY_SIZE	dec(10,2)	メモリー・サイズ (MB)
MEMORY_SPEED	dec(10,2)	メモリー速度 (ナノ秒)
MEMORY_TYPE	char(10)	メモリー・タイプたとえば、パリティ、ECC

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。

## DASD\_ADAPTER テーブル

表 14. DASD\_ADAPTER テーブル. アダプターごとに 1 項目の DASD アダプター情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
PHYSICAL_UNIT	smallint	物理装置番号
LOGICAL_UNIT	smallint	論理装置番号
DASD_BUS_TYPE	char(10)	使用されるバスのタイプたとえば、SCSI
DASD_SLOT	smallint	アダプター・スロットの位置
BUS_ATTRIBUTES	char(20)	バス属性
IO_ACCESS	char(20)	I/O アクセスの媒体たとえば、バス・マスター
HOST_BUS	char(20)	ホスト・バス
HOST_BUS_WIDTH	smallint	ホスト・バス幅
MAX_SCATTER	smallint	最大分散 / 集合リスト
MAX_CDB	smallint	CDB の最大長
ADD_MAJOR	smallint	ADD メジャー・レベル
ADD_MINOR	smallint	ADD マイナー・レベル
DASD_DEVICES	smallint	DASD アダプター上のデバイス数

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。

## DASD\_DEVICE テーブル

表 15. DASD\_DEVICE テーブル. アダプター・カードのデバイスごとに 1 項目の DASD\_DEVICE 情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
DASD_SIZE	dec(10,2)	DASDデバイス容量 (MB)
DASD_TYPE	char(40)	DASD 装置タイプ
UNIT_PUN	smallint	装置ユニット PUN
UNIT_LUN	smallint	装置ユニット LUN
ANSI_LEVEL	char(20)	サポートされている ANSI レベル
UNIT_STATUS	char(1)	ユニット状況、A = アクティブD = 使用不可、 U = 不明
VENDOR_ID	char(8)	ベンダー ID
PRODUCT_ID	char(16)	プロダクト ID 番号
PRODUCT_REVISION	char(4)	プロダクト改訂レベル

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は BASE を参照します。

# Netfinityシステム・プロファイル・テーブル

次のデータベース構成テーブルには、システム情報ツールでシステム・プロファイルから収集およびエクスポートされた情報に関するデータベース項目の名前、タイプ、および説明が記載されています。

## SYSTEM\_PROFILE テーブル

表 16. SYSTEM\_PROFILE テーブル. system\_id ごとに 1 項目のシステム・プロファイル情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
MODEL_NAME	char(32)	システムのモデル名
MODEL_NUMBER	char(32)	システムのモデル番号
SYSTEM_SERIAL	char(32)	システムのシリアル番号
SYSTEM_BOARD_SER	char(32)	システム・ボード・シリアル番号
PROCESSOR_CARD_SER	char(32)	システム・プロセッサ・カード・シリアル番号
SYSTEM_PURCHASED	date	システムの購入日付
DISPLAY_MODEL	char(32)	ディスプレイ・モデル名
DISPLAY_SERIAL	char(32)	ディスプレイ・シリアル番号
DISPLAY_PURCHASED	date	ディスプレイの購入日付
PRINTER_MODEL	char(32)	プリンター・モデル名
PRINTER_SERIAL	char(32)	プリンター・シリアル番号
PRINTER_PURCHASED	date	プリンターの購入日付
MODEM_MODEL	char(32)	モデム・モデル名
MODEM_SERIAL	char(32)	モデム・シリアル番号
MODEM_PURCHASED	date	モデムの購入日付

注: 一次キーは SYSTEM\_ID で SYSTEM\_ID 上では固有な索引です。

## SYSTEM\_USER テーブル

表 17 (1/2). SYSTEM\_USER テーブル. system\_id ごとに 1 項目のシステム・プロフィール・ユーザー情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
FIRST_NAME	char(32)	名
MIDDLE_NAME	char(32)	ミドル・ネーム
LAST_NAME	char(32)	姓
EMPLOYEE_ID	char(32)	社員番号
TITLE	char(32)	役職
DEPT_NAME	char(32)	部門名
DEPT_NUMBER	char(32)	部門番号
DIVISION	char(32)	課
START_DATE	date	開始日
SHIFT	char(32)	シフト
SCHEDULED_START	time	開始予定時刻
SCHEDULED_END	time	終了予定時刻
HOME_PHONE	char(32)	電話番号
HOME_STREET1	char(32)	番地 - 1 行目
HOME_STREET2	char(32)	番地 - 2 行目
HOME_CITY	char(32)	市町村
HOME_STATE	char(32)	都道府県
HOME_ZIP	char(32)	郵便番号
HOME_COUNTRY	char(32)	国名
EMERGENCY_NAME	char(32)	緊急連絡先の名前
EMERGENCY_PHONE	char(32)	緊急連絡先の電話番号

表 17 (2/2). SYSTEM\_USER テーブル. system\_id ごとに 1 項目のシステム・プロファイル・ユーザー情報

名前	タイプ	説明
注: 一部のデータベース管理システム (Microsoft SQL Server など) では、SYSTEM_USER 予約キーワードです。これらのシステムでは、このテーブルの名前は SYSTEM_USER1 です。		

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は SYSTEM\_PROFILE を参照します。

## SYSTEM\_LOCATION テーブル

表 18. SYSTEM\_LOCATION テーブル. system\_id ごとに 1 項目のシステム・プロファイル位置情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
COMPANY_NAME	char(32)	会社名
ADDRESS	char(32)	番地
CITY	char(32)	市町村
STATE	char(32)	都道府県
ZIP_CODE	char(32)	郵便番号
COUNTRY	char(32)	国名
SITE_NAME	char(32)	サイト名
OFFICE_NUMBER	char(32)	部屋番号
BUILDING	char(32)	建物
FLOOR	char(32)	階

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は SYSTEM\_PROFILE を参照します。



## SYSTEM\_CONTACTS テーブル

表 19. SYSTEM\_CONTACTS テーブル. system\_id ごとに 1 項目のシステム・プロフィール連絡先情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
INTERNAL_PHONE	char(32)	内線電話番号
EXTERNAL_PHONE	char(32)	外線電話番号
CELLULAR_PHONE	char(32)	携帯電話の番号
PAGER_NUMBER	char(32)	ページャー番号
FAX_NUMBER	char(32)	FAX 番号
EMAIL_ADDRESS	char(32)	E-Mail アドレス
BACKUP_NAME	char(32)	代理の名前
BACKUP_PHONE	char(32)	代理の電話番号
TECHNICAL_NAME	char(32)	技術要項連絡先の名前
TECHNICAL_PHONE	char(32)	技術要項連絡先の電話番号
マネージャー_NAME	char(32)	管理者の名前
マネージャー_PHONE	char(32)	管理者の電話番号
SECRETARY_NAME	char(32)	秘書の名前
SECRETARY_PHONE	char(32)	秘書の電話番号

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は SYSTEM\_PROFILE を参照します。

## SYSTEM\_MISC テーブル

表 20. MISC テーブル. 各スロット収容情報ごとに 1 項目のシステム・プロファイル各種情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
ENTRY_SLOT <i>x</i>	smallint	項目のスロット番号
MISC_INFO	char(32)	各種項目データ

注: 外部キー (SYSTEM\_ID) は SYSTEM\_PROFILE を参照します。

# Netfinityシステム・モニター・テーブル

## MONITOR\_STATE テーブル

表 21. MONITOR\_STATE テーブル. 状態情報を含むモニター

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
MONITOR_NAME	varchar(128) (非 null)	モニターの名前
MONITOR_STATE	varchar(64) (非 null)	モニターにより報告された状態
MONITOR_DATETIME	timestamp (非 null)	日付 / 時刻スタンプ

注: 1 次キーは SYSTEM\_ID、MONITOR\_NAME、MONITOR\_DATETIME で、固有です。重複は認められません。

## MONITOR\_VALUE テーブル

表 22. MONITOR\_VALUE テーブル. 数量的データ・ポイントを含むモニター

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
MONITOR_NAME	(非 null) char(128)	モニターの名前
MONITOR_DATA	(非 null) float	モニターから送られたデータ・ポイント
MONITOR_INTERVAL	(非 null) int	データ・ポイントの時間間隔 (秒)
MONITOR_DATETIME	timestamp (非 null)	日付 / 時刻スタンプ

注: 1 次キーは SYSTEM\_ID、MONITOR\_NAME、MONITOR\_DATETIME で、固有です。重複は認められません。

# Netfinityソフトウェア・インベントリー・テーブル

## SOFTWARE\_INVENTORY テーブル

表 23. SOFTWARE\_INVENTORY テーブル. ソフトウェア・インベントリー情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
MANAGING_ID	char(32)	グループの Netfinity システム・マネージャー
GROUP_NAME	char(32)	Netfinity 論理グループ名
PROGRAM_TITLE	varchar(64)	プログラムのテキスト・タイトル
VERSION_ID	char(16)	固有なバージョンを識別する
RELEASE_LEVEL	char(12)	プロダクトのリリース・レベルを識別する
VENDOR_NAME	char(32)	ソフトウェア・ベンダー名
LOCATION	varchar(256)	インストール済みプロダクト
SOFT_INV_DATETIME	timestamp	日付 / 時刻スタンプ

# Netfinity アラート・テーブル

## ALERT\_LOG テーブル

表 24. ALERT\_LOG テーブル. アラートごとに 1 項目のアラート・ログ情報

名前	タイプ	説明
SYSTEM_ID	(非 null) char(32)	固有なシステム ID を識別する
ALERT_TEXT	varchar(128)	アラートのテキスト
ALERT_ID	char(32)	アラートの ID (アラートのタイプ)
ALERT_CLASS	char(32)	アラートのクラス (アラートのタイプ)
SEVERITY	smallint	アラートの重大度
APPLICATION_ID	char(8)	アプリケーション ID
APPL_ALERT_TYPE	char(4)	アプリケーション・アラート・タイプ
RECEIVED_FROM	varchar(256)	送信元 (パス)
SYSTEM_NAME	varchar(64)	アラートを生成するシステム
ALERT_DATETIME	timestamp	アラートの日付 / 時刻

## DB2 データベースにおける行の削除

データベースは、データ保全性を維持するために参照保全を使用して設定されています。 DB2 データベース管理システムの BASE テーブル内の行を削除すると、システム情報グループ内の同じ SYSTEM\_ID を使用するすべてのテーブルが削除されます。ただし、他のテーブルの行を削除した場合は、その行だけが削除されます。

- BASE テーブル
  - DISKETTE テーブル
  - DISPLAY テーブル
  - EXPANSION\_SLOT テーブル
  - FIXED\_DISK テーブル

- LOGICAL\_DRIVE テーブル
- KEYBOARD テーブル
- MODEL テーブル
- MOUSE テーブル
- PRINTER テーブル
- PROCESSOR テーブル
- SYSLEVEL テーブル
- MEMORY テーブル
- DASD\_ADAPTER テーブル
- DASD\_DEVICE テーブル

データベースは、データ保全性を維持するために参照保全を使用して設定されています。DB2 データベース管理システムの SYSTEM\_PROFILE テーブル内の行を削除すると、システム・プロファイル・グループ内のすべてのテーブルでも同じことが起こります。ただし、他のテーブルの行を削除した場合は、その行だけが削除されません。

- SYSTEM\_PROFILE テーブル
  - SYSTEM\_USER テーブル
  - SYSTEM\_LOCATION テーブル
  - SYSTEM\_CONTACTS テーブル
  - SYSTEM\_MISC

## 一般的なデータベース照会情報および例

Netfinity データベースから情報を検索するには、リレーショナル・データベース・テーブルにアクセスすることのできる任意の照会ツールを使用します。ここでは、初歩的な概要を説明するため、各テーブルの簡単な照会方法を示します。これらの照会は、*Netfinity マネージャー (OS/2 版) ディスケット 1* に入っている、QUERY.SQL ファイルに入っています。最も興味のあるテーブルまたは列のビューを作成してください。NULL は、その列に対応する値が存在しないことを表します。NULL 値は、該当するシステムの情報が無いという意味になります。

- BASE テーブル

- BASE テーブルから、すべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.BASE  
ORDER BY SYSTEM_ID
```

- BASE テーブルから、30 日以上経過したすべての行を削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.BASE  
WHERE BASE_DATE < CURRENT DATE - 30 DAYS
```

- DISKETTE テーブル

- DISKETTE テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.DISKETTE  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX  
ORDER BY LOGICAL_DRIVE
```

- DISKETTE テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.DISKETTE  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- DISPLAY テーブル

- DISPLAY テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.DISPLAY  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX  
ORDER BY VIDEO_SUBSYSTEM
```

- DISPLAY テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.DISPLAY  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- EXPANSION\_SLOT テーブル

- EXPANSION\_SLOT テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.EXPANSION_SLOT  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX  
ORDER BY SLOT
```

- EXPANSION\_SLOT テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.EXPANSION_SLOT  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- FIXED\_DISK テーブル

- FIXED\_DISK テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.FIXED_DISK  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX  
ORDER BY PHYSICAL_DRIVE
```

- FIXED\_DISK テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.FIXED_DISK  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- LOGICAL\_DRIVE テーブル

- LOGICAL\_DRIVE テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.LOGICAL_DRIVE  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX  
ORDER BY LOGICAL_NAME
```

- LOGICAL\_DRIVE テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.LOGICAL_DRIVE  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- KEYBOARD テーブル

- KEYBOARD テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.KEYBOARD  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX
```

- KEYBOARD テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.KEYBOARD  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- MODEL テーブル

- MODEL テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.MODEL  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX
```

- MODEL テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.MODEL  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```



- MOUSE テーブル

- MOUSE テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.MOUSE  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX
```

- MOUSE テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.MOUSE  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- PRINTER テーブル

- PRINTER テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.PRINTER  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX
```

- PRINTER テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.PRINTER  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- PROCESSOR テーブル

- PROCESSOR テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.PROCESSOR  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX
```

- PROCESSOR テーブルで、最高速プロセッサを検索する。

```
SELECT * FROM NETFIN.PROCESSOR  
WHERE PROCESSOR_SPEED =  
  (SELECT MAX(PROCESSOR_SPEED)  
   FROM NETFIN.PROCESSOR)
```

- PROCESSOR テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.PROCESSOR  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- SYSLEVEL テーブル

- SYSLEVEL テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.SYSLEVEL  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX  
ORDER BY PRODUCT_ID
```

- SYSLEVEL テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.SYSLEVEL  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- MEMORY テーブル

- MEMORY テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.MEMORY  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX  
ORDER BY CONNECTOR_ID
```

- MEMORY テーブルから、すべてのマシンの合計メモリーおよびタイプを取得する。

```
SELECT SYSTEM_ID SUM(MEMORY_SIZE) MEMORY_TYPE  
FROM NETFIN.MEMORY GROUP BY SYSTEM_ID,  
MEMORY_TYPE
```

- MEMORY テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.MEMORY  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- DASD\_ADAPTER テーブル

- DASD\_ADAPTER テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.DASD_ADAPTER  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX  
ORDER BY PHYSICAL_UNIT
```

- DASD\_ADAPTER テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.DASD_ADAPTER  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- DASD\_DEVICE テーブル

- DASD\_DEVICE テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.DASD_DEVICE  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX  
ORDER BY PHYSICAL_UNIT
```

- DASD\_DEVICE テーブルから、1 行削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.DASD_DEVICE  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- SYSTEM\_PROFILE テーブル

- SYSTEM\_PROFILE テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.SYSTEM_PROFILE
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX
ORDER BY SYSTEM_ID
```

- SYSTEM\_PROFILE テーブルから、すべての行を削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.SYSTEM_PROFILE
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- SYSTEM\_USER テーブル

- SYSTEM\_USER テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.SYSTEM_USER
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX
ORDER BY SYSTEM_ID
```

- SYSTEM\_USER テーブルから、すべての行を削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.SYSTEM_USER
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- SYSTEM\_LOCATION テーブル

- SYSTEM\_LOCATION テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.SYSTEM_LOCATION
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX
ORDER BY SYSTEM_ID
```

- SYSTEM\_LOCATION テーブルから、すべての行を削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.SYSTEM_LOCATION
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- SYSTEM\_CONTACTS テーブル

- SYSTEM\_CONTACTS テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.SYSTEM_CONTACTS
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX
ORDER BY SYSTEM_ID
```

- SYSTEM\_CONTACTS テーブルから、すべての行を削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.SYSTEM_CONTACTS  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- SYSTEM\_MISC テーブル

- SYSTEM\_MISC テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.SYSTEM_MISC  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX  
ORDER BY SYSTEM_ID
```

- SYSTEM\_MISC テーブルから、すべての行を削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.SYSTEM_MISC  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- ALERT\_LOG テーブル

- ALERT\_LOG テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.ALERT_LOG  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX  
ORDER BY SYSTEM_ID
```

- ALERT\_LOG テーブルから、すべての行を削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.ALERT_LOG  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- MONITOR\_STATE テーブル

- MONITOR\_STATE テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.MONITOR_STATE  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX  
ORDER BY SYSTEM_ID
```

- MONITOR\_STATE テーブルから、すべての行を削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.MONITOR_STATE  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```

- MONITOR\_VALUE テーブル

- MONITOR\_VALUE テーブルから、システムのすべての列を選択する。

```
SELECT * FROM NETFIN.MONITOR_VALUE  
WHERE SYSTEM_ID = XXXXXX  
ORDER BY SYSTEM_ID
```

- MONITOR\_VALUE テーブルから、すべての行を削除する。

```
DELETE FROM NETFIN.MONITOR_VALUE  
WHERE SYSTEM_ID = 'XXXXXX'
```



すべての Netfinity アラートは、アラートが生成された時刻と日付を含んでいます。その他の情報は、アラートを生成したサービスと、アラートを生成する原因となった状況によって異なります。

アラートの中には、ユーザーに割り当てられる値を持つものもあります。通常、重大度値がこれに該当します (ただし、例外はあります)。この場合、アラート情報は変数で示され、必要な説明はアラート・データの下に注に記述されます。

マクロãパラメーター文字列をサポートするアラートもあります。これらの文字列 (%P1 ~ %P9) は、他のプログラムに渡して、そこで使用することができます。

各アラートとそのアラート固有の情報は、アラートを生成するサービスの見出しの下に示してあります。

### 電源オン・エラー検出アラート

説明	リモート・システムで電源オン・エラーが検出されると、電源オン・エラー検出サービスによってアラートが生成されます。電源オン・エラー検出サービスは、「エラー時のアラート」オプションが使用可能な場合だけ、このアラートを生成します。
アラート・テキスト	電源オン・エラー検出アラート
アラート・タイプ	障害
重大度	4
アプリケーション ID	POED
アプリケーション・アラート・タイプ	0201

このアラートには、追加のパラメーター文字列は使えません。

## 事前障害分析 (PFA) アラート

説明	24 時間以内にドライブの障害が発生するという通知を PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブから受け取ると、事前障害分析サービスによって、アラートが生成されます。事前障害分析サービスは、「アラートの生成」オプションが使用可能な場合だけ、このアラートを生成します。
アラート・テキスト	事前障害分析によって、PUN <i>w</i> 、LUN <i>x</i> ハード・ディスクで緊急障害が検出されました。物理ドライブ <i>y</i> のバックアップを取り、サービス提供者に交換を依頼してください。
アラート・タイプ	ディスク障害
重大度	<i>z</i>
アプリケーション ID	PFA
アプリケーション・アラート・タイプ	0000

このアラートには、追加のパラメーター文字列は使いません。

### 注:

1. アラート・テキスト中の *w*、*x*、および *y* は、事前障害分析サービスによって判別され、障害のある PFA 利用可能ハード・ディスク・ドライブに割り当てられている PUN、LUN、およびドライブ名をそれぞれ示します。
2. このアラートには、テキストを追加することができます。詳細については、203 ページの『「ドライブの PFA オプション」ウィンドウ』を参照してください。
3. 重大度 *z* を指定することができます。詳細については、203 ページの『「ドライブの PFA オプション」ウィンドウ』を参照してください。



# クリティカル・ファイル・モニター

クリティカル・ファイル・モニターによって生成されるアラートは、次のとおりです。

## ファイル変更アラート

説明	監視対象のファイルのサイズ、日付または時刻が変更されると、クリティカル・ファイル・モニターによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	次のファイルが変更されました：' <i>filename</i> '
アラート・タイプ	アプリケーションの警告
重大度	x
アプリケーション ID	MonCritF
アプリケーション・アラート・タイプ	0

このアラートには、追加のパラメーター文字列は使えません。

注:

1. アラート・テキスト中の *filename* は、変更があったファイルの名前です。
2. 重大度値 **x** を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 3 です。

## ファイル削除アラート

説明	監視対象のファイルが削除されると、クリティカル・ファイル・モニターによってアラートが生成されません。
アラート・テキスト	次のファイルが削除されました : ' <i>filename</i> '
アラート・タイプ	警告
重大度	x
アプリケーション ID	MonCritF
アプリケーション・アラート・タイプ	1

このアラートには、追加のパラメーター文字列は使いません。

注:

1. アラート・テキスト中の *filename* は、削除されたファイルの名前です。
2. 重大度値 **x** を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 3 です。

## ファイル作成アラート

説明	監視対象のファイルが作成されると、クリティカル・ファイル・モニターによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	次のファイルが作成されました：' <i>filename</i> '
アラート・タイプ	警告
重大度	x
アプリケーション ID	MonCritF
アプリケーション・アラート・タイプ	2

このアラートには、追加のパラメーター文字列は使えません。

### 注:

1. アラート・テキスト中の *filename* は、作成されたファイルの名前です。
2. 重大度値 **x** を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 3 です。

## プロセス・マネージャー

プロセス・マネージャーによって生成されるアラートは、次のとおりです。

### プロセス終了アラート

説明	監視対象のプロセスが停止すると、プロセス・マネージャーによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	プロセス '%P1' が停止しました。
アラート・タイプ	アプリケーション通知
重大度	x
アプリケーション ID	ProcMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	0901

#### 注:

1. このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。  
**%P1**      終了したプロセスの名前。
2. 重大度値 **x** を設定できます。

## プロセス開始アラート

説明	監視対象のプロセスが開始すると、プロセス・マネージャーによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	プロセス '%P1' が開始されました。
アラート・タイプ	アプリケーション通知
重大度	x
アプリケーション ID	ProcMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	0900

### 注:

- このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。  
**%P1** 開始したプロセスの名前。
- 重大度値 **x** を設定できます。

## プロセス開始の失敗アラート

説明	監視対象のプロセスが、システム始動から指定時間内に開始できないと、プロセス・マネージャーによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	プロセス ' %P1 ' の開始に失敗しました。
アラート・タイプ	アプリケーション通知
重大度	x
アプリケーション ID	ProcMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	0902

### 注:

1. このアラートでは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。  
**%P1**      開始に失敗したプロセスの名前。
2. 重大度値 **x** を設定できます。

## リモート・システム・マネージャー

リモート・システム・マネージャーによって生成されるアラートは、次のとおりです。

### システム・オンライン・アラート

説明	リモート・システム・マネージャーが、システムがオンラインでアクセス可能という通知をリモート・システムから受け取ると、アラートが生成されます。リモート・システム・マネージャー・サービスは、「システム・オンライン通知」オプションが、システム・グループ内のシステムに対して使用可能になっている場合だけ、このアラートを生成します。
アラート・テキスト	システム ' <b>%P1</b> ' (アドレス ' <b>%P2</b> : ネットワーク ' <b>%P3</b> ') はアクティブで、オンラインになっています。
アラート・タイプ	システム通知
重大度	x
アプリケーション ID	NetMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	000A

#### 注:

1. このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

**%P1**      アクティブ・システムのシステム名。オンラインになったシステムを示すために設定されます。

**%P2**      アクティブ・システムのネットワーク・アドレス。オンラインになったシステムを示すために設定されます。

**%P3**      アクティブ・システムのネットワーク・タイプ。

2. 重大度値 **x** を設定できます。

## システム・オフライン・アラート

説明	リモート・システム・マネージャーがリモート・システムに到達できないときアラートが生成されます。リモート・システム・マネージャー・サービスは、サービスの「システム・オフライン通知」オプションが、システム・グループ内のシステムに対して使用可能になっている場合にだけ、このアラートを生成します。
アラート・テキスト	システム ' <b>%P1</b> ' (アドレス ' <b>%P2</b> : ネットワーク ' <b>%P3</b> ') がオフラインまたはアクセス不能です。
アラート・タイプ	システム通知
重大度	x
アプリケーション ID	NetMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	000B

### 注:

- このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。
  - %P1** 非アクティブ・システムのシステム名。オフラインになったシステムを示すために設定されます。
  - %P2** 非アクティブ・システムのネットワーク・アドレス。オフラインになったシステムを示すために設定されます。
  - %P3** 非アクティブ・システムのネットワーク・タイプ。
- 重大度値 **x** を設定できます。



# 安全保護マネージャー

## アクセス付与アラート

説明	ユーザー ID とパスワードの組み合わせを使用してアクセスを獲得したリモート・ユーザーに対して、1 つまたは複数のサービスへのアクセスが許可されると、安全保護マネージャー・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	ユーザー ID ' %P1' (アドレス ' %P2': ネットワーク ' %P3') がシステム・アクセスを付与されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	7
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	14

注: このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム・アクセスを要求したユーザー ID。
- %P2** アクセスを要求したシステムのネットワーク・アドレス。
- %P3** アクセスを要求したシステムのネットワーク・タイプ。

## パブリック・アクセス付与アラート

説明	リモート・ユーザーに対して、1 つまたは複数のサービスへのパブリック・アクセスが許可されると、安全保護マネージャー・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	ユーザー ID ' %P1' (アドレス ' %P2: ネットワーク ' %P3) がパブリック・システム・アクセスを付与されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	6
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	15

注: このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム・アクセスを要求したユーザー ID。
- %P2** アクセスを要求したシステムのネットワーク・アドレス。
- %P3** アクセスを要求したシステムのネットワーク・タイプ。

## システム・アクセス拒否アラート

説明	リモート・ユーザーに対して、システムへのアクセスが拒否されると、安全保護マネージャー・サービスがアラートを生成します。
アラート・テキスト	ユーザー ID ' %P1' (アドレス ' %P2: ネットワーク ' %P3) によるログオンが拒否されました。
アラート・タイプ	安全保護警告
重大度	5
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	16

注: このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム・アクセスを要求したユーザー ID。
- %P2** アクセスを要求したシステムのネットワーク・アドレス。
- %P3** アクセスを要求したシステムのネットワーク・タイプ。

## システム再始動開始アラート

説明	リモートの Netfinity マネージャー が、リモート・システム・マネージャーの「システム再始動」オプションを使用してシステムを再始動すると、安全保護マネージャー・サービスがアラートを生成します。
アラート・テキスト	ユーザー ID ' <b>%P1</b> ' (アドレス ' <b>%P2</b> ': ネットワーク ' <b>%P3</b> ') によってシステム再始動が開始されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	5
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	41

注: このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム再始動を要求したユーザー ID。
- %P2** 再始動を要求したシステムのネットワーク・アドレス。
- %P3** 再始動を要求したシステムのネットワーク・タイプ。

## システム再始動要求リジェクト・アラート

説明	リモートの Netfinity マネージャーが、リモート・システム・マネージャーの「システム再始動」オプションを使用して再始動しようとするが、そのために必要な安全保護アクセスをもってないと、安全保護マネージャー・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	ユーザー ID ' %P1 ' (アドレス ' %P2 ': ネットワーク ' %P3 ') によるシステム再始動要求は拒否されました。
アラート・タイプ	安全保護エラー
重大度	3
アプリケーション ID	SecMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	40

注: このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** システム再始動を要求したユーザー ID。
- %P2** 再始動を要求したシステムのネットワーク・アドレス。
- %P3** 再始動を要求したシステムのネットワーク・タイプ。

# Netfinity サービス・マネージャー

サービス・マネージャーによって生成されるアラートは、次のとおりです。

## サービス開始要求アラート

説明	リモートの Netfinity マネージャー が、Netfinity サービス・プログラムのうちのどれか 1 つを使用すると、Netfinity サービス・マネージャーによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	ユーザー ID ' %P1' (アドレス ' %P2': ネットワーク ' %P3') による ' %P4' サービスの開始が要求されました。
アラート・タイプ	安全保護通知
重大度	7
アプリケーション ID	SvcMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	0900

注: このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** サービス開始を要求したユーザー ID。
- %P2** サービス開始を要求したシステムのネットワーク・アドレス。
- %P3** サービス開始を要求したシステムのネットワーク・タイプ。
- %P4** 開始が要求されたサービスの名前。

## サービス開始リジェクト・アラート

説明	リモートの Netfinity マネージャー・プログラムが、Netfinity サービス・プログラムのうちの 1 つに対する開始要求を拒否されると、Netfinity サービス・マネージャーによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	ユーザー ID ' %P1' (アドレス ' %P2: ネットワーク ' %P3) による ' %P4 サービスの開始要求が拒否されました。
アラート・タイプ	安全保護警告
重大度	5
アプリケーション ID	SvcMgr
アプリケーション・アラート・タイプ	0901

注: このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。

- %P1** サービス開始を要求したユーザー ID。
- %P2** サービス開始を要求したシステムのネットワーク・アドレス。
- %P3** サービス開始を要求したシステムのネットワーク・タイプ。
- %P4** 開始が要求されたサービスの名前。

## システム・モニター

システム・モニターによって生成されるアラートは、次のとおりです。

### しきい値上限エラー・アラート

説明	監視対象のシステム構成要素の値が、指定された時間よりも長い間エラー上限値を上回ると、システム・モニター・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	エラー・アラート <b>%P1</b> : モニター ' <b>%P2</b> ' が <b>%P3</b> 以上になっています ( <b>%P4</b> の間)。
アラート・タイプ	エラー
重大度	x
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	0000

注:

- このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。
  - %P1** しきい値の名前。
  - %P2** モニターの名前。
  - %P3** しきい値。
  - %P4** しきい値を超えていた期間。
- 重大度値 **x** を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 3 です。



## しきい値上限警告アラート

説明	監視対象のシステム構成要素の値が、指定された時間よりも長い間警告上限値を上回ると、システム・モニター・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	警告アラート %P1: モニター ' %P2' が %P3 以上になっています ( %P4 の間)。
アラート・タイプ	警告
重大度	x
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	0000

### 注:

- このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。
  - %P1** しきい値の名前。
  - %P2** モニターの名前。
  - %P3** しきい値。
  - %P4** しきい値を超えていた期間。
- 重大度値 **x** を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 4 です。

## しきい値下限警告アラート

説明	監視対象のシステム構成要素の値が、指定された時間よりも長い間、警告下限値を下回っていると、システム・モニター・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	警告アラート <b>%P1</b> : モニター ' <b>%P2</b> ' が <b>%P3</b> 以下になっています ( <b>%P4</b> の間)。
アラート・タイプ	警告
重大度	x
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	0000

### 注:

- このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。
  - %P1** しきい値の名前。
  - %P2** モニターの名前。
  - %P3** しきい値。
  - %P4** しきい値を超えていた期間。
- 重大度値 **x** を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 4 です。

## しきい値下限エラー・アラート

説明	監視対象のシステム構成要素の値が、指定された時間よりも長い間エラー下限値を下回っていると、システム・モニター・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	エラー・アラート %P1: モニター ' %P2' が %P3 以上になっています ( %P4 の間)。
アラート・タイプ	エラー
重大度	x
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	0000

### 注:

- このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。
  - %P1** しきい値の名前。
  - %P2** モニターの名前。
  - %P3** しきい値。
  - %P4** しきい値を超えていた期間。
- 重大度値 **x** を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 2 です。

## しきい値の標準への復帰アラート

説明	監視対象のシステム構成要素の値が、しきい値を超えていた状態から、“正常な”状態または範囲に戻ったとき、システム・モニター・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	情報アラート %P1: モニター ' %P2 は通常へ戻りました。
アラート・タイプ	エラー
重大度	x
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	10

### 注:

- このアラートは、次のマクロ・パラメーター文字列が使えます。
  - %P1** しきい値の名前。
  - %P2** モニターの名前。
- 重大度値 **x** を設定できます。このアラートのデフォルト重大度値は 6 です。

## 物理 RAID ドライブ・オンライン・アラート

説明	物理 RAID ドライブの状態がオンラインに変更されると、システム・モニター・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	'RAID デバイス・オンライン': 属性 '物理ディスク x状況' ('y') は、'オンライン' に設定されています。
アラート・タイプ	通知
重大度	3
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	130

### 注:

1. アラート・テキストの中の x は物理ドライブの位置 (物理ベイ番号)、y は状態の変更を報告する RAID サブシステムの名前を示します。
2. このアラートは、537ページの付録E、『サポートされる RAID アダプター』にリストされている RAID アダプターを備えたシステムだけで生成されます。

## 物理 RAID ドライブ・スタンバイ・アラート

説明	物理 RAID ドライブの状態がスタンバイに変更されると、システム・モニター・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	'RAID デバイス・スタンバイ': 属性 '物理ディスク x 状況' ( y の) は、'スタンバイ' に設定されています。
アラート・タイプ	通知
重大度	2
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	130

### 注:

1. アラート・テキストの中の x は物理ドライブの位置 (物理ベイ番号)、y は状態の変更を報告する RAID サブシステムの名前を示します。
2. このアラートは、537ページの付録E、『サポートされる RAID アダプター』にリストされている RAID アダプターを備えたシステムだけで生成されます。

## 物理 RAID ドライブ不良アラート

説明	物理 RAID ドライブの状態が不良に変更されると、システム・モニター・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	'RAID デバイス不良': 属性 '物理ディスク x 状況' ( y の) は、'不良' に設定されています。
アラート・タイプ	障害
重大度	0
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	130

### 注:

1. アラート・テキストの中の x は物理ドライブの位置 (物理ベイ番号)、y は状態の変更を報告する RAID サブシステムの名前を示します。
2. このアラートは、537ページの付録E、『サポートされる RAID アダプター』にリストされている RAID アダプターを備えたシステムだけで生成されます。

## 論理 RAID デバイス・オンライン・アラート

説明	論理 RAID デバイスの状態がオンラインに変更されると、システム・モニター・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	'RAID システム・デバイス・オンライン': 属性 'システム・ドライブ x 状況' ( y の) は、'オンライン' に設定されています。
アラート・タイプ	通知
重大度	3
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	131

### 注:

1. アラート・テキストの中の x はシステム・ドライブの位置 (システム・ドライブ番号)、y は状態の変更を報告する RAID サブシステムの名前を示します。
2. このアラートは、537ページの付録E、『サポートされる RAID アダプター』にリストされている RAID アダプターを備えたシステムだけで生成されます。



## 論理 RAID デバイス・クリティカル・アラート

説明	論理 RAID デバイスの状態がクリティカルに変更されると、システム・モニター・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	'RAID システム・ドライブ・クリティカル': 属性 'システム・ドライブ x 状況' ( y の) は、'クリティカル' に設定されています。
アラート・タイプ	警告
重大度	2
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	131

### 注:

1. アラート・テキストの中の x はシステム・ドライブの位置 (システム・ドライブ番号)、y は状態の変更を報告する RAID サブシステムの名前を示します。
2. このアラートは、537ページの付録E、『サポートされる RAID アダプター』にリストされている RAID アダプターを備えたシステムだけで生成されます。

## 論理 RAID デバイス・オフライン・アラート

説明	論理 RAID デバイスの状態がオフラインに変更されると、システム・モニター・サービスによってアラートが生成されます。
アラート・テキスト	'RAID システム・ドライブ・オフライン': 属性 'システム・ドライブ x 状況' ( y の) は、'オフライン' に設定されています。
アラート・タイプ	障害
重大度	0
アプリケーション ID	MonitorB
アプリケーション・アラート・タイプ	131

### 注:

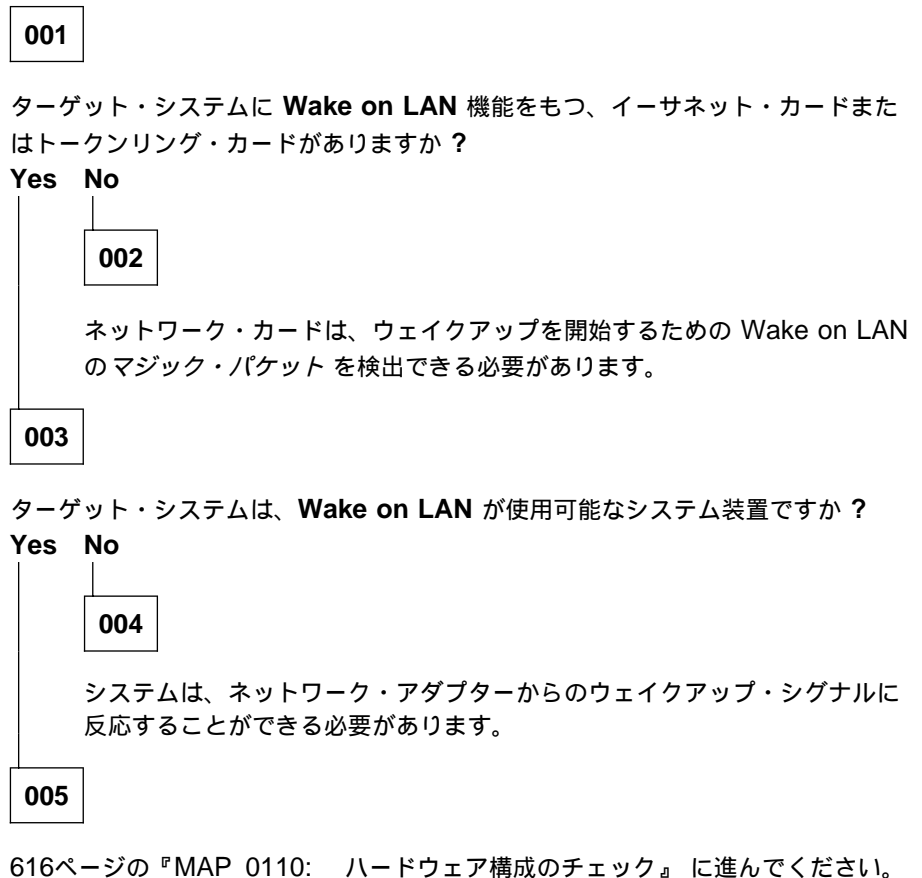
1. アラート・テキストの中の x はシステム・ドライブの位置 (システム・ドライブ番号)、y は状態の変更を報告する RAIDサブシステムの名前を示します。
2. このアラートは、537ページの付録E、『サポートされる RAID アダプター』にリストされている RAID アダプターを備えたシステムだけで生成されます。

## 付録K. Wake-On-LAN システムのトラブルシューティング

---

次のフローチャートは、Netfinity の Wake on LAN 機能を Netfinity システムと共に使用した場合に発生する可能性のある問題に対する、原因および解決策を判別することができるように作られています。

### MAP 0100: システム・ハードウェアのチェック



## MAP 0110: ハードウェア構成のチェック

001

ターゲット・システムは、**Wake on LAN** が可能なように構成されていますか？

- SurePath セットアップで、「**Advanced Power Management/Automatic Power On/LAN Wake Up**」が使用可能になっているかどうかを確認します。

Yes No

002

ウェイクアップ機能は、システムのセットアップ・プログラムを使用して使用可能にする必要があります。

003

617ページの『MAP 0120: システム・ソフトウェアのチェック』に進んでください。

---

## MAP 0120: システム・ソフトウェアのチェック

001

**Netfinity** バージョン **3.05** またはそれ以上がリモート・システムにインストールされていますか？

Yes No

002

旧バージョンの **Netfinity** は、Wake on LAN を認識しないため、この機能がシステムでサポートされていることを **Netfinity** マネージャーに通知しません。

003

**WAKONLAN.DLL** はリモート・システムに正しくインストールされていますか？

Yes No

004

この DLL は、このフィーチャーが使用可能かどうかを **Netfinity** に伝えます (注 1 (624ページ) を参照)。

005

リモート・システムで **OS/2** が実行されている場合は、**PNPDRV.SYS** デバイス・ドライバがインストールされていますか？

– リモート・システムの **CONFIG.SYS** を確認してください。

Yes No

006

**WAKONLAN.DLL** には、このデバイス・ドライバが必要です (注 1 (624ページ) を参照)。

007

**Netfinity** バージョン **3.06** またはそれ以上が管理者システム (ウェイクアップ・マジック・パケットの送信を試みるシステム) にインストールされていますか？

Yes No

008

旧バージョンの **Netfinity** は、「マジック・パケット」を送信できません。

009

リモート・システムは、自分自身のメディア・アクセス制御 (**MAC**) アドレスを決定することができますか？

次の条件のどれかが成り立つ場合に、「**Yes**」と教えてください。

- a) **IPX** を使用してリモート・システムを管理しようとしていて、**Netfinity** の **IPX** プロトコルのデバイス・ドライバがリモート・システムで使用可能になっている。
- b) **Netbios** を使用してリモート・システムを管理しようとしていて、**Netfinity** の **NETBIOS** プロトコルのデバイス・ドライバがリモート・システムで使用可能になっている。
- c) **TCP/IP** を使用してリモート・システムを管理しようとしていて、**Netfinity** の **TCP/IP** プロトコルのデバイス・ドライバがリモート・システムで使用可能で、**Netfinity** バージョン **3.06** またはそれ以上がリモート・システムで実行され、**Netfinity** の **IPX** プロトコルまたは **NETBIOS** プロトコルのどれかのデバイス・ドライバがリモート・システムで使用可能になっている。
- d) **TCP/IP** を利用して、リモート・システムを管理しようとしていて、**Netfinity** の **TCP/IP** プロトコルのデバイス・ドライバがリモート・システムで使用可能で、**OS/2** がリモート・システムで実行され、**Netfinity** バージョン **5.0** またはそれ以上がリモート・システムで実行している。
- e) **TCP/IP** を使用してリモート・システムを管理しようとしていて、**Netfinity** の **TCP/IP** プロトコルのデバイス・ドライバがリモート・システムで使用可能で、**Windows NT** がリモート・システムで実行され、**Netfinity** バージョン **5.0** またはそれ以上がリモート・システムで実行されている。

Yes No

010

TCP/IP プロトコルは、Netfinity がネットワーク・アダプターの MAC アドレス (ウェイクアップ・マジック・パケットを送信するために知る必要があります) を決定できるようなアプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) を提供していません。Netfinity バージョン 3.06 以上では、IPX または NETBIOS のデバイス・ドライバーのどちらかが使用可能な場合、TCP/IP デバイス・ドライバーは、IPX または NETBIOS からこの情報を取得することができます。

011

管理者システムは、ウェイクアップ “マジック・パケット” を生成することができますか？

次の条件のどれかが成り立つ場合に、「Yes」と答えてください。

- 管理者システムで **Netfinity** バージョン **3.06** またはそれ以上を使用していて、**IPX** プロトコルのデバイス・ドライバーが使用可能になっている。
- 管理者システムは、**Netfinity** バージョン **4.0** またはそれ以上を使用していて、**TCP/IP** プロトコルのデバイス・ドライバーが使用可能になっている。

Yes No

012

NETBIOS のブロードキャストは、IPX や IP のブロードキャストと同じような意味では、真のブロードキャストとは言えません。NETBIOS の API は、Wake on LAN が必要とするタイプのブロードキャストを送信する方法を提供していません。Netfinity は、IPX または IP が管理者のシステムで使用可能な場合は、それを使用してウェイクアップ・パケットを NETBIOS システムに送信します。

013

(ステップ013に続く)

**013 (続き)**

必要に応じて、ウェイクアップ・マジック・パケット内で、**MAC** アドレスのトークンリング形式がターゲット・システムに送信されていますか？

次の条件のどれかが成り立つ場合に、「**Yes**」と教えてください。

- ターゲット・システムは、**Wake on LAN** アダプターのトークンリング版 (イーサネットではなく) を使用している。
- ターゲット・システムでは、**Windows 3.1** または **Windows 95** は実行されていない。
- 管理者システムは、**Netfinity** バージョン **4.0** またはそれ以上を使用している。

**Yes No**

**014**

16 ビットの Windows では、NETBIOS は、カードをウェイクアップするのに必要な組み込みの MAC アドレスではなく、トークンリング形式を報告することがあります。Netfinity バージョン 4.0 以上では、報告された MAC アドレスおよび報告されたアドレスのトークンリング形式の両方を使用して、ウェイクアップ・マジック・パケットを送信します。

**015**

ターゲット・システムで **Windows 95** が実行されている場合、**Windows 95** の構成内の **MAC** アドレスがカードの実際のアドレスと一致していますか？

これをチェックするには、次のようにします。

- **a)** マウス・ボタン **2** を使用して、「ネットワーク コンピューター」をクリックする。
- **b)** 「プロパティ」を選択する。
- **c)** ウェイクアップ機能をもつネットワーク・カードを見つけて、選択する。
- **d)** 「プロパティ」を選択する。
- **e)** 「詳細設定」を選択する。
- **f)** ネットワーク・アドレスの値を確認して、訂正する。この値は、カードに付属する **LANAID** 構成ユーティリティが報告する値と一致する必要があります。

**Yes No**



016

Netfinity に対して報告される MAC アドレスは、「ネットワーク コンピューター」に表示されるアドレスです。アドレスがネットワーク・カードに組み込まれた実際のアドレスと一致しない場合は、「マジック・パケット」が送信されても、カードはそれに応答しません。

017

622ページの『MAP 0130: ネットワーク・セットアップのチェック』に進んでください。

---

## MAP 0130: ネットワーク・セットアップのチェック

001

ローカル管理アドレス (LAA) は、ターゲット・システムで使用されていますか？

Yes No

002

管理者のシステムから送信された IP または IPX のブロードキャスト・フレームは、ネットワークを経由して、ターゲット・システムのあるネットワークの一部に到達できますか？

Yes No

003

ネットワーク内の装置 (たとえば、ハブ、ブリッジ、またはルーター) には、選択したプロトコルだけを渡したり、ブロードキャストを妨害するように構成できるものもあります。

004

623ページの『MAP 0140: その他の可能性のある理由』に進んでください。

---

005

LAA を使用すると、Netfinity がネットワーク・アダプターの本当の MAC アドレスを決定する妨げとなります (注 3 (625ページ) を参照)。

---

## MAP 0140: その他の可能性のある理由

001

存在チェック・インターバル (デフォルト値は **10** 分、変更可能) を **1** 回待つか、検索の結果システムがグループに追加された後で、そのシステム上で存在チェックを実行しましたか (注 **2** (**625**ページ) を参照)?

Yes No

002

Netfinity マネージャーは、最初の検索中は、システムのウェイクアップ・サポート機能について学習しません。この機能は、その後の存在チェック中にだけ検出されます。

- Netfinity リモート・システム・マネージャーを使用して、該当するグループで、ターゲット・システムのアイコンを探します。システムが 2 つ以上のネットワーク・プロトコルを通してアクセス可能な場合は、ターゲット・システムに対して複数のアイコンが表示されることがあります。
- IPX または NETBIOS のネットワークを通してターゲット・システムを表すアイコンを探します。「グループ」ウィンドウの「表示」プルダウン・メニューで「詳細表示」を選択して、(マウス・ボタン 2 を使用してターゲット・システムのアイコンまたは名前をクリックして) システムのコンテキスト・メニューをオープンします。このメニューには、「ウェイクアップ」オプションが表示されます。このオプションは、システムが現在オンラインの場合はグレーで選択不可能になり、システムがオフラインの場合は選択可能になります。
- ターゲット・システムが Netfinity バージョン 3.06 またはそれ以上を実行していて、TCP/IP および IPX プロトコル (または、TCP/IP および NETBIOS) の両方をサポートしている場合は、TCP/IP ネットワーク経由のターゲット・システムを表すアイコンについても、ポップアップ・メニューに「ウェイクアップ」オプションが表示されます。

003

624ページの『その他の起こりうる問題』を参照してください。

## その他の起こりうる問題

「ウェイクアップ」機能が依然としてメニューに表示されないか、または作動しない場合は、直前のセクションで出された質問に対する答えを注意深く検討してから、ハードウェアまたはインストールの問題を疑ってください。ネットワーク・アダプターが、システム・ボードにケーブルで正しく接続されている必要があります。

**重要:** 古いシステムでは、ネットワーク・カードとシステム・ボードの間の 2 心ケーブルが逆になっているという問題があるものもありました。このケーブルが逆になっている場合は、メイン電源ボタンではシステムの電源のオン / オフを正しく切り替えることができません。ケーブルを逆にする必要のある場合は、ケーブルを逆にする前に、必ずコンセントから電源プラグを抜いてください。というのは、システムの電源がオフになっているように見えたとしても、このようなシステムの電源は、内部的に一部がオンのままになっているからです。

注:

1. WAKONLAN.DLL は、ターゲット・システムのネットワーク・カードにウェイクアップされる機能があるかどうかを判別するために Netfinity によって使用されます。WAKONLAN.DLL がない場合 (または DLL の現在のバージョンが、使用しているネットワーク・カードをサポートしない場合) は、次の環境変数を使用して、DLL が返す結果を上書きすることができます。

```
SET NFWAKEONLAN=ON
```

または

```
SET NFWAKEONLAN=YES
```

これらの変数によって、WAKONLAN.DLL にかかわらず、Netfinity はこの機能が使用可能であるかのように作動します。同様に、

```
SET NFWAKEONLAN=OFF
```

または

```
SET NFWAKEONLAN=NO
```

は、この機能を使用不可にします。環境変数を使用する場合、WAKONLAN.DLL および PNPDRV.SYS はターゲット・システムでは必要ありません。

環境変数の後に、スペースや余分な文字がないか確認します。SET NFWAKEONLAN 行に余分な文字があると、リモート・システム・マネージャーはこの機能を認識できません。この環境変数を設定する方法は、オペレーティング・システムによって異なります。

- この環境変数を、OS/2 システムまたは Windows 95 システムに設定するには、この変数を CONFIG.SYS ファイルに追加し、システムを再始動します。
  - NT システムの場合は、次のようにします。
    - a. Windows NT の「コントロール パネル」をオープンし、「システム」をダブルクリックします。
    - b. 「環境」タブをクリックします。
    - c. 「システム環境変数」フィールドの任意の場所をクリックします。
    - d. 「変数」フィールドに次を入力します。  
NFWAKEONLAN
    - e. 「値」フィールドに値（「はい」、「オン」、「いいえ」、または「オフ」）を入力します。
    - f. 「設定」を選択します。
    - g. 「適用」を選択します。
    - h. 「了解」を選択します。
    - i. Netfintiy サポート・プログラムを遮断し、再始動します。
2. 存在チェックの間のデフォルトのインターバルは、10 分です。この値を確認または変更するには、マウス・ボタン 2 を使用してシステム・アイコンをクリックし、メニューから「システム通知」を選択します。存在チェックを手動で開始するには、同じメニューから「存在検査」を選択します。
  3. Netfinity マネージャー または Netfinity サービス (Windows NT 版) バージョン 5.0 またはそれ以上では、ローカル管理アドレスが使用されているかどうかにかかわらず、MAC アドレスを正しく報告することができます。
  4. Windows NT を使用しているシステムで環境変数を設定する場合は、環境変数は「ユーザー環境変数」ではなく、「システム環境変数」で設定する必要があります。環境変数を「システム環境変数」で構成した場合のみ、環境変数は Netfinity に対して有効になります。



本書において、日本では発表されていない IBM 製品 (機械およびプログラム)、プログラミングまたはサービスについて言及または説明する場合があります。しかし、このことは、弊社がこのような IBM 製品、プログラミングまたはサービスを、日本で発表する意図があることを必ずしも示すものではありません。本書で、IBM ライセンス・プログラムまたは他の IBM 製品に言及している部分があっても、このことは当該プログラムまたは製品のみが使用可能であることを意味するものではありません。これらのプログラムまたは製品に代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない機能的に同等な他社のプログラム、製品またはサービスを使用することができます。ただし、IBM によって明示的に指定されたものを除き、これらのプログラムまたは製品に関連する稼働の評価および検証はお客様の責任で行っていただきます。

IBM および他社は、本書で説明する主題に関する特許権 (特許出願を含む)、商標権、または著作権を所有している場合があります。本書は、これらの特許権、商標権、および著作権について、本書で明示されている場合を除き、実施権、使用権等を許諾することを意味するものではありません。実施権、使用権等の許諾については、下記の宛先に、書面にてご照会ください。

〒106-0032  
東京都港区六本木 3 丁目 2-31  
AP事業所  
IBM World Trade Asia Corporation  
Intellectual Property Law & Licensing

## 商標

本書において使用されている次の用語 (アスタリスク (\*) で示されます) は、米国 IBM Corporation の商標です。

Alert on LAN	DB2
FFST	First Failure Support Technology
IBM	Micro Channel
MVS	Netfinity
NetView	OS/2
Predictive Failure Analysis	Presentation マネージャー
PS/2	SurePath
SystemView	Wake on LAN

本書において使用されている次の用語は、他社の商標です。

3Com	3Com Corporation
cc:Mail	cc:Mail, Inc. division of Lotus Development Corporation
EtherLink/MC	3Com Corporation
DMI	Desktop Management Task Force
IPX	Novell, Incorporated
Lotus Notes	Lotus Development Corporation
Netscape	Netscape Communications Corporation
NetWare	Novell, Incorporated
Novell	Novell, Incorporated
SMC	Standard Microsystems Corporation
Sportster	U. S. Robotics Corporation
U. S. Robotics	U. S. Robotics Corporation

Microsoft、Windows、および Windows NT は、Microsoft Corporation の登録商標です。

LANDesk および Pentium は、Intel Corporation の登録商標です。

Java およびすべての Java を基本とする商標とロゴは、米国およびその他の国における Sun Microsystems, Inc. の商標または登録商標です。



Tivoli、TME および TME10 は、Tivoli Systems の商標です。

他社名、製品名、およびサービス名は、他社の商標またはサービス・マークです。

本製品の一部として、Corel clipart が含まれています。

本ソフトウェア製品の一部は、Independent JPEG Group の成果に基づいています。



日本語、英字、数字、特殊文字の順に配列されています。なお、濁音と半濁音は清音と同等に扱われていません。

## 〔ア行〕

- アクセス、制限 283
- 値、アラート・タイプ 18
- アプリケーション・キーワード 390
- アラート条件 40, 51
- アラート情報 17
- アラート送信元 ID 18
- アラート・アクション 25
- アラート・タイプ値 18
- アラート・プロファイル
  - アクションへの割り当て 48
  - アラート条件の設定 40
  - 削除 44
  - 作成 40
  - 説明 38
  - 編集 44
- アラート・ログ
  - アラート情報 17
  - アラートの印刷 23
  - アラートの削除 23
  - アラートのファイル 23
  - アラート・ログの表示 20
  - 最新表示 24
- イベント・スケジューラー
  - イベントの削除 168
  - イベントの作成 134
  - イベントの表示 169
  - イベントの編集 170
- イベント・スケジューラー (続き)
  - キャパシティー管理タスク 166
  - 区画からのファイルのコピー 154
  - 区画ファイルの削除 150
  - コマンドライン・インターフェース・タスク 165
  - サービス構成タスク 164
  - サービス構成の更新 164, 166
  - 最新表示 172
  - システム区画アクセス・タスク 149, 150, 151, 153, 154
  - システム区画のバックアップ 150
  - システム区画の復元 151
  - システム区画へのファイルのコピー 153
  - システム情報ツール・タスク 144, 145, 146
  - システムのウェイクアップ 163
  - システムの始動 163
  - システムの始動 / 遮断タスク 163
  - システムの遮断 163
  - システム・モニター・タスク 161
  - システム・モニター・データのエキスポート 161
  - 出力の印刷 145
  - 説明 131
  - ソフトウェア・インベントリ・タスク 155
  - データベースへの「システム・プロファイル」データの送信 147
  - データベースへの出力の送信 146
  - ファイル転送タスク 140
  - リモート・セッション・タスク 142
  - 履歴ファイルの作成 144
  - ログの表示 172

イベント・スケジューラー (続き)  
  Netfinity CLI タスク 165  
  Wake-on-LAN システムのウェイクアップ 163  
エクスポート、データの 402  
エラー条件 264  
オープン、システムの 259

## 〔カ行〕

カスタマイズしたインストール 555  
画面ショット 279  
管理情報ベース (MIB) 28  
キーワードの割り当て 267  
基本プログラムをリモートから始動させる 548  
行の削除 577  
クラスター・グループ  
  作成 242  
クラスター・グループの作成 242  
クリーンアップ援助 183  
クリティカル・ファイル・モニター  
  システム・ファイルの監視 114  
  説明 113  
  存在しないファイルに対する監視 117  
  他のファイルの監視 116  
  ファイル作成の監視 117  
  NetWare のシステム・ファイル 115  
  OS/2 のシステム・ファイル 114  
  Windows のシステム・ファイル 114  
  Windows NT のシステム・ファイル 115  
  Windows 95 のシステム・ファイル 114  
グループ検索フィルター 248  
検索処理  
  グループ検索フィルターの使用 248  
  使用 266  
  説明 266  
  動的アドレス・オプション 246

検索処理 (続き)  
  複数システムの追加 244  
  リモート TCP/IP サブネットでシステムを検索する 245  
  例 269  
  DHCP 246  
  SNA による 245  
コマンドライン操作 543  
  ECCMEM.EXE 547  
  GENALERT.EXE 543  
  SINFG30.EXE 546  
  STOPBASE.EXE 548  
  STRTBASE.EXE 548

## 〔サ行〕

サービス構成マネージャー  
  説明 309  
  SCF ファイルの削除 314  
  SCF ファイルの作成 311  
  SCF ファイルの編集 313  
サービスの基本プログラムをリモートから停止させる 548  
サービスの結合名 551  
サービスの除去 555  
再始動、システムの 259  
削除、システムの 259  
作成、システム・グループの 237  
作成、ラック・グループの 239  
サンプル、照会の 578  
辞書ファイル 367  
  新規の作成 368  
  製品定義の削除 370  
  製品定義の追加 371  
  製品定義の編集 381  
  説明 367

辞書ファイル ( 続き )

ファイル・リスト製品定義 372

編集 369

ロード 367

SYSLEVEL 製品定義 377

システム管理

「アラートを使用可能にする」グループ 337

「イベント・ログ」ウィンドウ 342

「稼動パラメーター」ウィンドウ 344

「構成情報」ウィンドウ 319

「構成の設定」ウィンドウ 320

「システム管理プロセス・クロック」グループ  
324

「システム識別」グループ 321

「システム電源制御」ウィンドウ 346

説明 315

「ダイヤルイン設定」グループ 322

電源オフ遅延 328

「モデム設定」ウィンドウ 329

リモート POST 348

「リモート・アラート設定」ウィンドウ 334

ローダー・タイムアウト 326

O/S タイムアウト 327

POST タイムアウト 325

システム区画 429

システム検索条件

説明 268

選択 238

例 269

システム再始動 259

システム診断マネージャー

結果の表示 398

サポートされるシステム 395

使用 395

診断の実行 396

「セッションの選択」ウィンドウ 398

システム診断マネージャー ( 続き )

説明 393

表示されているデータの最新表示 397

システム通知 261

システムのウェイクアップ 265

システムの遮断 265

システムのパワーダウン 265

システム・グループ、ラック・グループ、およびクラ  
スター・グループ

アイコン表示 254

エラー条件 264

キーワードおよびシステム名の設定 263

グループの表示設定 253

個々のシステムの追加 243

再始動、システムの 259

削除、システムの 259

作成 237

システム通知 261

システムのウェイクアップ 265

システムのオープン 259

システムの遮断 265

システムのパワーダウン 265

システムの表示 253

システムの編集 259

システムへのログイン 260

詳細表示 255

説明 235

存在検査 260

表示の設定 253

複数システムの追加 244, 248

編成 266

ユーザー ID とパスワードの設定 263

リモート TCP/IP サブネットでシステムを検索す  
る 245

NFREBOOT.BAT 259

NFREBOOT.CMD 259

- システム・グループ、ラック・グループ、およびクラ  
スター・グループ (続き)
- NFREBOOT.NCF 259
- 事前障害分析
  - アダプター情報 201
  - アラートの生成 205
  - オブジェクトの説明 200
  - オプション 203, 205
  - サイズ情報 202
  - 「事前障害分析」ウィンドウ 200
  - 状況 204
  - 説明 199
  - ドライブ情報 201, 204
  - ドライブの PFA オプション 203
  - ドライブ・サイズ 202
  - 物理ドライブ情報 201
  - プロダクト ID 204
  - プロダクト・リビジョン 204
  - ベンダー ID 204
  - メッセージのシミュレート 205
  - リセット 205
  - 論理ドライブ情報 202
  - PUN および LUN 201
- 指定変更、発信ユーザー ID とパスワードの 260
- 自動インストール 553
- 自動的に定義されるキーワード 250
- 修正 129
- 重大度、説明 18
- 照会情報および例 578
- 初期設定ストリングのガイドライン 306
- シリアル管理 301, 302, 305
- シリアル接続制御
  - 初期設定ストリングのガイドライン 306
  - シリアル持続接続制御項目の作成 303
  - 説明 297
  - モデムの構成 298
- シリアル接続制御 (続き)
  - リモート・アクセスの 302, 305
  - リモート・アクセスを使用可能にする 301
  - リモート・システムへのアクセス 302, 305
- シングル・ビット・エラー 129
- 制限、リモート・アクセスの 283
- 生成、アラートの 543
- 製品定義 371
  - 追加 371
  - ファイル・リスト定義 372
  - 編集 381
  - SYSLEVEL 定義 377
- 設定、キーワードおよびシステム名の 263
- 設定、ユーザー ID とパスワードの 263
- ソフトウェア・インベントリー
  - アプリケーション・キーワード、使い方 390
  - 検索の実行 381
  - 辞書ファイル、新規の 368
  - 辞書ファイル、説明 367
  - 辞書ファイル、編集 369
  - 辞書ファイル、ロード 367
  - 製品タイプによる検索 384
  - 製品定義、削除 370
  - 製品定義の追加 371
  - 製品定義の編集 381
  - 説明 365
  - 全辞書の検索 382
  - 選択された製品の検索 383
  - ソフトウェア辞書のインポート 388
  - 突合せ属性 367
  - データのエクスポート 385
  - データベース・テーブル 576
  - ドライブによる検索 382
  - ファイルへの報告書の印刷 385
  - ファイル・リスト製品定義 372
  - プリンターで報告書を印刷 385

ソフトウェア・インベントリー ( 続き )  
報告書の生成 385  
NetView DM インベントリー 387  
SYSLEVEL 製品定義 377  
存在検査 260  
存在検査インターバル 262

## 〔 夕行 〕

他のプラットフォームとの統合 517  
LANDesk との 523  
SMS との 517  
着信ユーザー ID とパスワード  
削除 286  
設定 284  
パブリック・アクセスの制限 283  
< デフォルト > 設定 286  
< パブリック > 設定 282  
着信ユーザー ID とパスワードの設定 284  
データ圧縮を使用不可にする 187  
データ処理 408  
データベース機能 402  
データベース構成テーブル  
行の削除 577  
システム情報ツール・テーブル 559  
システム・プロファイル・テーブル 570  
システム・モニター・テーブル 575  
照会情報 578  
照会の例 578  
ソフトウェア・インベントリー・テーブル 576  
ALERT\_LOG テーブル 577  
BASE テーブル 559  
DASD\_ADAPTER テーブル 568  
DASD\_DEVICE テーブル 569  
DISKETTE テーブル 560  
DISPLAY テーブル 561

データベース構成テーブル ( 続き )  
EXPANSION\_SLOT テーブル 561  
FIXED\_DISK テーブル 562  
KEYBOARD テーブル 564  
LOGICAL\_DRIVE テーブル 563  
MEMORY テーブル 567  
MODEL テーブル 565  
MONITOR\_STATE テーブル 575  
MONITOR\_VALUE テーブル 575  
MOUSE テーブル 565  
Netfinity アラート・テーブル 577  
PRINTER テーブル 566  
PROCESSOR テーブル 566  
SOFTWARE\_INVENTORY テーブル 576  
SYSLEVEL テーブル 567  
SYSTEM\_CONTACTS テーブル 573  
SYSTEM\_LOCATION テーブル 572  
SYSTEM\_MISC テーブル 574  
SYSTEM\_PROFILE テーブル 570  
SYSTEM\_USER テーブル 571  
定義済みアラート・プロファイル 45  
ディレクトリーまたはファイルのリモート・システム  
からの送信 178  
デスクトップ・マネージメント・インターフェース  
(DMI) 120  
電源オン・エラー検出  
アラート 193  
インストール要件 529  
エラーで GUI を開始 193  
「オプション」プルダウン・メニュー 193  
区画アクセス・メッセージの記録 193  
区画アクセス・メッセージの無視 193  
項目の消去 192  
項目のソート 195  
サポートされるネットワーク・アダプター 532  
システム要件 529

電源オン・エラー検出 ( 続き )

終了 192

生成、アラートの 193

「ソート」プルダウン・メニュー 195

「電源オン・エラー検出」ウィンドウ 190

「電源オン・エラー検出エントリーの内容」ウィンドウ 196

ドライバーのアンインストール 531

ドライバーのインストール 529, 530

「ファイル」プルダウン・メニュー 192

「フィルター」プルダウン・メニュー 194

報告書の印刷 192

LAN 接続システムで使用可能にする 529

動的アドレス・オプション 246

## 〔八行〕

パス名の限界、DOS における 140, 174

パスワード 283, 286

発信ユーザー ID とパスワード

削除 289

設定 287

説明 286

編集 289

プロセスの停止 211

プロセス・アラート 212

プロセス・マネージャー

コマンドの実行 210

説明 207

プロセス情報 208

プロセスの停止 211

プロセス・アラート 212

プロセス・アラートの削除 215

プロセス・アラートの追加 213

プロセス・アラートの編集 215

ペーজァーのダイヤルアウト 30

編集、システムの 259

## 〔マ行〕

マスク不能割り込み 129

マネージャー (Web 用)

アラート・マネージャー 497

安全保護マネージャー 506

イベント・スケジューラー 500

インターフェース 496

クリティカル・ファイル・モニター 499

システム情報ツール 509

システム・プロファイル 511

システム・モニター 510

事前障害分析 503

使用 492

シリアル接続制御 507

スクリーン・ビュー 506

制限 492

説明 491

ソフトウェア・インベントリー 508

電源オン・エラー検出 502

ファイル転送 501

プロセス・マネージャー 503

保護機能のある接続 492

保護機能のない接続 492

要件 492

リモート・システム・マネージャー 505

リモート・セッション 504

利用不能のサービス 496

ログイン 494

ECC メモリー・セットアップ 500

RAID マネージャー 504



モデムの構成 298

## 〔ラ行〕

ラック・グループ

作成 239

リモート TCP/IP サブネットでシステムを検索する  
245

リモート専用サービス 173, 229

リモートのディレクトリーまたはファイルの削除  
179

リモート・システムからのディレクトリーまたはファ  
イルの受信 177

リモート・システムへのアクセス 257

リモート・ワークステーション制御

アクティブ・セッション 277

キーストロークの組み合わせ 278

キーストロークを渡す 278

セッション 277

説明 275

中断セッション 277

モニター・セッション 277

履歴ファイル 401

ローカルのディレクトリーまたはファイルの削除  
179

ローカル・ディレクトリーとリモート・ディレクトリ  
ーの同期 180

ログイン、システムへの 260

## A

Alert on LAN 構成

説明 57

## C

CID インストール

コマンド・ライン・パラメーター 554

## D

DHCP 246

DMI 120

定義 120

動作 120

DMI ブラウザー

エラーの通知 128

エラー・ログ、表示 128

グループ情報の表示 127

構成要素情報の表示 127

属性情報の表示 127

属性情報の変更 128

問題の通知 128

DMI の定義 120

DMI の動作 120

DMI ブラウザーの使用 125

## E

ECCMEM.EXE

パラメーター 547

## F

FFST からのアラートの受信 55

## G

GENALERT.EXE

コマンドライン形式 543

説明 543

パラメーター 543

GENALERT アラートの、ホスト・システムへの  
転送 545

## I

INSTALL.INI

編集 555

INSTALL.INI の編集 555

## M

MIB2.TBL 28

## N

Netfinity システム、管理

アラート・マネージャー、機能の相違 513

Netfinity の始動 1

NETFIN.MIB 28

NFREBOOT.BAT 259

NFREBOOT.CMD 259

NFREBOOT.NCF 259

NMVT.INI 545

## O

OS/2 システムでの Netfinity 始動の遅延 11

## R

RAID アラート 539

RAID マネージャー

アダプター構成のバックアップ 228

アダプター固有の情報 226

一般アダプター情報 225

ウィンドウのオプション 219

仮想ドライブ情報 227

仮想ドライブの管理 228

筐体情報 224

説明 217

装置管理 227

RAID マネージャー (続き)

表示スケールの変更 219

物理装置情報 225

RAID 情報の表示 224

## S

SIKEYWD.INI 406

SINFG30.EXE

パラメーター 546

STOPBASE.EXE 548

STRTBASE.EXE 548

## T

TCPADDR.DSC 245

## U

Update Connector マネージャー

インターフェースの説明 443

クライアント表示 446

グループの機能 453

グループの作成 454

グループの除去 458

グループの編集 456

更新機能 465

更新の検索 466

更新の除去 469

更新の適用 467

更新表示 448

更新プールの作成 471

更新プールの除去 475

更新プールの編集 473

サーバー管理 481

システム機能 460

システムの除去 463

## Update Connector マネージャー ( 続き )

システムの追加 461

状況表示 450

スケジュール・タスクの作成 477

説明 441

付きのリモート・システム・マネージャーの使用  
483

要件 442

## W

### Web マネージャーの構成

アクセスの制限 487

説明 485

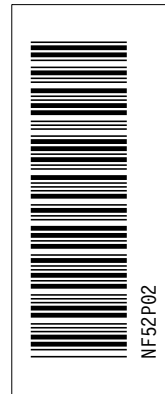
ポート番号の指定 486

Web 用の使用可能化と使用不可 486

# IBM

部品番号: NF52P02

Printed in Japan



日本アイ・ビー・エム株式会社  
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12



SC88-6555-00

**Grid Definitions**

<u>id</u>	<u>File</u>	<u>Page</u>	<u>References</u>
DRTYPE	D3VF1SET	i	

**Figures**

<u>id</u>	<u>File</u>	<u>Page</u>	<u>References</u>
A03	D3VF1GOM	1	1
A01	D3VF1GOM	2	2
A15	D3VF1CH4	14	3
LOGVIEW	D3VF1CH4	21	4
APROF1	D3VF1CH4	39	5 20
APROF2	D3VF1CH4	40	6 38
APROF3	D3VF1CH4	48	7 40, 44
APROF4	D3VF1CH4	49	8 48, 51
AOL1	D3VF1AOL	57	9 48
CAPM1	D3VF1CMG	61	10 61
CAPM2	D3VF1CMG	62	11 62
CAPM3	D3VF1CMG	63	12 63, 63, 167
CAPM4	D3VF1CMG	64	13
CAPM5	D3VF1CMG	65	14 65
CAPM6	D3VF1CMG	66	15
CLUS1	D3VF1CAV	69	16 71
CLUS2	D3VF1CAV	84	17 84

CLUS3	D3VF1CAV	85	18	
				85
CLUS4	D3VF1CAV	87	19	
				87
CLUS5	D3VF1CAV	88	20	
				88, 91
CLUS6	D3VF1CAV	89	21	
				88
CLUS7	D3VF1CAV	91	22	
CLUS7A	D3VF1CAV	92	23	
				92, 96
CLUS8	D3VF1CAV	93	24	
				93
CLUS9	D3VF1CAV	96	25	
CLUS10	D3VF1CAV	98	26	
				98
CLUS11	D3VF1CAV	101	27	
				101
CLUS12	D3VF1CAV	108	28	
				108, 109
CLUS13	D3VF1CAV	110	29	
				110
CLUS14	D3VF1CAV	111	30	
				111, 112
C20	D3VF1C18	113	31	
				116
C21	D3VF1C18	116	32	
				116
C10	D3VF1C19	126	33	
A19	D3VF1CH5	129	34	
SC1	D3VF1CH6	132	35	
SC2	D3VF1CH6	134	36	
				134
SC4	D3VF1CH6	136	37	
				136, 171
SC5	D3VF1CH6	138	38	
				138
SC9	D3VF1CH6	140	39	

SC10	D3VF1CH6	142	40	
SC11	D3VF1CH6	143	41	
SC12	D3VF1CH6	146	42	146
SC13	D3VF1CH6	147	43	147
SCDB	D3VF1CH6	148	44	
SC15	D3VF1CH6	149	45	
SC21	D3VF1CH6	155	46	
CAPM3A	D3VF1CH6	167	47	166
CAPM4A	D3VF1CH6	168	48	
SC6	D3VF1CH6	169	49	169
SC7	D3VF1CH6	170	50	170
SC8	D3VF1CH6	172	51	
FTRAN1	D3VF1NFT	175	52	175
FTRAN2	D3VF1NFT	181	53	181
FTRAN4	D3VF1NFT	183	54	
FTRAN3	D3VF1NFT	185	55	183, 184
EEK1	D3VF1CH8	190	56	190
EEK2	D3VF1CH8	196	57	196
EEK3	D3VF1CH8	197	58	197
PFA1	D3VF1CH9	200	59	
PFA2	D3VF1CH9	203	60	202
PM1	D3VF1C23	207	61	208
PM2	D3VF1C23	213	62	
RAID1	D3VF1C20			

		218	63	
RAID2	D3VF1C20			
		220	64	
				220
RAID3	D3VF1C20			
		221	65	
				221
RAID4	D3VF1C20			
		223	66	
				223
A27	D3VF1C10			
		229	67	
A04	D3VF1C11			
		236	68	
A05	D3VF1C11			
		237	69	
DISFIL1	D3VF1C11			
		248	70	
				248
GRPI	D3VF1C11			
		254	71	
				254
GRPD	D3VF1C11			
		256	72	
A08	D3VF1C11			
		261	73	
A09	D3VF1C11			
		269	74	
A10	D3VF1C11			
		270	75	
A11	D3VF1C11			
		271	76	
A12	D3VF1C11			
		273	77	
RWC1	D3VF1RCT			
		276	78	
A26	D3VF1C12			
		279	79	
A13	D3VF1C13			
		284	80	
SEC2	D3VF1C13			
		287	81	
				287
SEC3	D3VF1C13			
		287	82	
				287
C13	D3VF1C21			
		298	83	
				305
C03	D3VF1C21			
		299	84	
				298
CNF1	D3VF1SCM			
		310	85	
				309
CNF2	D3VF1SCM			
		311	86	
				311
CNF3	D3VF1SCM			
		313	87	



				313
SPROC1	D3VF1CAT			
		316	88	
SPROC9	D3VF1CAT			
		319	89	
				319
SPROC2	D3VF1CAT			
		321	90	
				320
SPROC5	D3VF1CAT			
		329	91	
SPROC4	D3VF1CAT			
		334	92	
				333, 334
SPROC7	D3VF1CAT			
		342	93	
				342
SPROC3	D3VF1CAT			
		345	94	
				344
SPROC6	D3VF1CAT			
		346	95	
SPROC8	D3VF1CAT			
		348	96	
D01	D3VF1C22			
		366	97	
D02	D3VF1C22			
		369	98	
				369
D03	D3VF1C22			
		371	99	
				371
D04	D3VF1C22			
		372	100	
				372
D05	D3VF1C22			
		376	101	
				375
D06	D3VF1C22			
		377	102	
				377
D07	D3VF1C22			
		383	103	
				383
D08	D3VF1C22			
		384	104	
DIAG1	D3VF1SDM			
		394	105	
DIAG2	D3VF1SDM			
		396	106	
				396
DIAG3	D3VF1SDM			
		398	107	
				398
A18	D3VF1C14			
		400	108	
201A	D3VF1C14			
		402	109	
SYSI1	D3VF1C14			
		404	110	

			404
DBEXP	D3VF1C14	405	111
A22	D3VF1C15	408	112
SMON2	D3VF1C15	409	113
SMON3	D3VF1C15	410	114
SMON4	D3VF1C15	417	115
SMON5	D3VF1C15	421	116
A25	D3VF1C16	430	117
SYSP1	D3VF1C17	437	118
UCM1	D3VF1UCM	441	119
			446
UCM16	D3VF1UCM	448	120
UCM17	D3VF1UCM	450	121
UCM2	D3VF1UCM	454	122
UCM3	D3VF1UCM	456	123
UCM4	D3VF1UCM	458	124
UCM5	D3VF1UCM	461	125
UCM6	D3VF1UCM	463	126
UCM7	D3VF1UCM	467	127
UCM8	D3VF1UCM	469	128
UCM9	D3VF1UCM	471	129
UCM10	D3VF1UCM	473	130
UCM11	D3VF1UCM	475	131
UCM12	D3VF1UCM	478	132
UCM13	D3VF1UCM	479	133
UCM14	D3VF1UCM	481	134
WEBCON1	D3VF1WC1	485	135
WEBCON2	D3VF1WC1	488	136
			488
WEB1	D3VF1WEB	494	137
			494
WEB2	D3VF1WEB	497	138

			497
WEB3	D3VF1WEB	499	139
WEB6	D3VF1WEB	500	140
			500
WEB7	D3VF1WEB	501	141
WEB8	D3VF1WEB	502	142
WEB10	D3VF1WEB	503	143
WEB13	D3VF1WEB	505	144
WEB15	D3VF1WEB	506	145
WEB16	D3VF1WEB	507	146
WEB17	D3VF1WEB	508	147
WEB18	D3VF1WEB	509	148
WEB19	D3VF1WEB	510	149
WEB21	D3VF1WEB	511	150
A17	D3VF1ALT	514	151

Headings
----------

<u>id</u>	<u>File</u>	<u>Page</u>	<u>References</u>
AMANG	D3VF1CH4	13	第2章, アラート・マネージャー 193, 518
ALTINF	D3VF1CH4	17	アラート・ログ 262, 262
SEVER	D3VF1CH4	18	重大度 261
LOGVIEW	D3VF1CH4	20	アラート・ログの表示 15, 38
ACTDESC	D3VF1CH4	25	Netfinity アラート・アクション 15, 20, 24
APROF	D3VF1CH4	38	アラート・プロファイル 15, 15, 24
NEWPROF	D3VF1CH4	40	アラート・プロファイルの新規作成 38, 47
EDPROF	D3VF1CH4	44	アラート・プロファイルの編集 38, 47

DLPROF	D3VF1CH4	44	アラート・プロファイルの削除 38
PROFDSC	D3VF1CH4	45	定義済みアラート・プロファイル 38
PROFBND	D3VF1CH4	48	アクションへのプロファイルの割り当て 16, 24, 41
BINDALT	D3VF1CH4	51	個々のアラートへのアクションの割り当て 24
ALTBIND	D3VF1CH4	55	下位レベル Netfinity システムのリモート管理
CAPMN	D3VF1CMG	61	第4章, キャパシティー管理
CLUST	D3VF1CAV	77	クラスター管理 71
MGRP	D3VF1CAV	78	グループの移動 86
MRES	D3VF1CAV	78	リソースの移動 90
CPROP	D3VF1CAV	79	クラスター要素プロパティーの変更 83, 86, 90, 90
CDISC	D3VF1CAV	91	クラスターのディスカバリー 71, 74, 76, 77, 97, 97, 98
CSCHD	D3VF1CAV	93	スケジューラー 75
CALRT	D3VF1CAV	95	アラート・サービス 75, 76, 92, 92
CEVNT	D3VF1CAV	102	使用可能なクラスター・イベント 98
CALTA	D3VF1CAV	104	使用可能なクラスター・アラート・アクション 99
CWIZ	D3VF1CAV	107	クラスター・エキスパート・ウィザード 75, 75, 85
CFMOTH	D3VF1C18	116	別のファイルの監視 114
CFMCR	D3VF1C18	117	ファイル作成の監視 117
DMIBR	D3VF1C19	119	第7章, DMI ブラウザー
DMICA	D3VF1C19	128	属性情報の変更 122
SCHFT	D3VF1CH6	140	「ファイル転送」タスク固有ウィンドウ 137

SCHRS	D3VF1CH6	142	「リモート・セッション」タスク固有ウィンドウ 137
SCHIN	D3VF1CH6	143	「システム情報ツール」タスク固有ウィンドウ 137
SCHSP	D3VF1CH6	149	「システム区画アクセス」タスク固有ウィンドウ 137
SCHSW	D3VF1CH6	155	「ソフトウェア・インベントリ」タスク固有ウィンドウ 137
SCHSM	D3VF1CH6	161	「モニター・データベースへのモニターのエクスポート」タスク固有ウィンドウ 137
SCHSUSD	D3VF1CH6	163	「システムの始動 / 遮断」タスク固有ウィンドウ 137
SCHSCNF	D3VF1CH6	164	「サービス構成」タスク固有ウィンドウ 137
SCHCLI	D3VF1CH6	165	「コマンドライン・インターフェース」タスク固有ウィンドウ 138
CMTASK	D3VF1CH6	166	「キャパシティー管理」タスク固有ウィンドウ 67, 138
FTRAN	D3VF1NFT	173	第10章, ファイル転送
RECDF	D3VF1NFT	177	リモート・システムからのディレクトリーまたはファイルの受信 173
SENDF	D3VF1NFT	178	リモート・システムへのディレクトリーまたはファイルの送信 173
DELDF	D3VF1NFT	179	ローカルのディレクトリーまたはファイルの削除 173
DERDF	D3VF1NFT	179	リモートのディレクトリーまたはファイルの削除 173
SYNC	D3VF1NFT	180	ローカル・ディレクトリーとリモート・ディレクトリーの同期 173
CLNUP	D3VF1NFT	183	クリーンアップ援助 173
EDPRF	D3VF1NFT	184	クリーンアップ援助プロファイル
CLNTMP	D3VF1NFT	186	クリーンアップ援助プロファイルのテンプレート 184
DISCOM	D3VF1NFT	187	データ圧縮を使用不可にする 173
EEK1	D3VF1CH8	189	第11章, 電源オン・エラー検出
EEKF	D3VF1CH8	192	「ファイル」プルダウン・メニューの選択項目 191

EEKO	D3VF1CH8	193	「オプション」プルダウン・メニューの選択項目 190, 191
EEKFI	D3VF1CH8	194	「フィルター」プルダウン・メニューの選択項目 191
EEKS	D3VF1CH8	195	「ソート」プルダウン・メニューの選択項目 191
POEDC	D3VF1CH8	196	「電源オン・エラー検出項目の内容」ウィンドウ 191
PFOPT	D3VF1CH9	203	「ドライブの PFA オプション」ウィンドウ 588, 588
RSNET	D3VF1C10	231	NetWare システムでのリモート・セッション 229
RSM1	D3VF1C11	233	第16章, リモート・システム・マネージャー 3, 190
RACK	D3VF1C11	239	ラック・グループの作成 234
CLUSTR	D3VF1C11	242	クラスター・グループの作成 234
INDSYS	D3VF1C11	243	システム・グループまたはラック・グループへの個々のシステムの追加 238
MLTSYS	D3VF1C11	244	検索処理による複数システムの追加 238
DHCP	D3VF1C11	246	動的アドレス・オプション
DISFIL	D3VF1C11	248	グループ検索フィルターの使用
PREKEY	D3VF1C11	250	自動的に定義されるキーワード 233
GVS	D3VF1C11	253	グループの表示設定 243, 244
ICON	D3VF1C11	254	アイコン表示 253
DETAIL	D3VF1C11	255	詳細表示 25, 253
ESYS	D3VF1C11	259	システムの編集 25
SYSRE	D3VF1C11	259	システム再始動
PRCHK	D3VF1C11	260	存在検査 255
LINSEV	D3VF1C11	261	システム通知 255

ERRCON	D3VF1C11	264	エラー条件 14, 14, 35, 36, 264, 264
SWAKEY	D3VF1C11	265	システムのウェイクアップ
SSHUT	D3VF1C11	265	システムの遮断
SPOWD	D3VF1C11	265	システムのパワーダウン
UDISC	D3VF1C11	266	検索処理の使用 233, 237, 239, 242, 244, 366
DCF	D3VF1RCT	275	第17章, リモート・ワークステーション制御
SECDES	D3VF1C13	281	第19章, 安全保護マネージャー 257, 260, 263
SETIN	D3VF1C13	283	着信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定 282, 301, 494
OUTSEC	D3VF1C13	286	発信ユーザー ID とパスワードの組み合わせの設定 263
SECALT	D3VF1C13	290	安全保護アクセス・アラート 282, 284
SERCNT	D3VF1C21	297	第20章, シリアル接続制御 36, 318
SERCON	D3VF1C21	298	モデムの構成
SERACC	D3VF1C21	301	リモート・アクセスの使用可能化
MDGUID	D3VF1C21	306	初期設定ストリングのガイドライン 299, 299
SVCCNF	D3VF1SCM	309	第21章, サービス構成マネージャー 136
CNFNEW	D3VF1SCM	311	サービス構成ファイルの作成 309
CNFED	D3VF1SCM	313	サービス構成ファイルの編集 310, 312
CNFDEL	D3VF1SCM	314	サービス構成ファイルの削除 310
SPCONF	D3VF1CAT	319	構成情報 316
SPCON	D3VF1CAT	320	構成の設定 316, 329, 355, 357, 359, 361
SPDOUT	D3VF1CAT	329	モデム設定 320, 323, 354
SPMCNF	D3VF1CAT	333	初期化文字列に関する指針 330

SPDIAL	D3VF1CAT	334	リモート・アラート設定 316, 325, 326, 327, 328
DEVNT	D3VF1CAT	337	「アラートを使用可能にする」グループ 336, 337
SPLOG	D3VF1CAT	342	イベント・ログ 317
SPOP	D3VF1CAT	344	稼働パラメーター 317
SPSYS	D3VF1CAT	346	システム電源制御 317
SPRPST	D3VF1CAT	348	リモート POST コンソール 317
UPBIOS	D3VF1CAT	350	システム管理サブシステムのマイクロコードの更新 317
SUPPSYS	D3VF1CAT	351	サポートされるサーバー
SUPPADV	D3VF1CAT	351	サポートされる拡張機能 325, 326, 338, 338, 339, 340, 340, 345, 349
SPPOW	D3VF1CAT	357	「システム電源」メニューの選択項目 356, 362
SPBOOT	D3VF1CAT	359	「ブート」メニューの選択項目 356, 362
SPPOST	D3VF1CAT	361	POST の管理とアクセスのためのリモート・ビデオ・モニターの使用 356
DICED	D3VF1C22	369	辞書ファイルの編集 389
ADDPD	D3VF1C22	371	製品定義の追加 370
REQFIL	D3VF1C22	372	ファイル・リスト製品定義 371, 381
SYSLVL	D3VF1C22	377	SYSLEVEL ファイル製品定義 371, 381
EDITPD	D3VF1C22	381	製品定義の編集 370
SDRV	D3VF1C22	382	ドライブによる検索
PTS	D3VF1C22	384	製品タイプによる検索 373, 378
GENRP	D3VF1C22	385	報告書の生成とデータのエキスポート 382, 382, 383, 384
NVDMEX	D3VF1C22	387	NetView 配布管理機能インベントリーの更新



			374, 374, 379, 379
APPKEY	D3VF1C22	390	アプリケーション・キーワードの使用 252, 374, 379
RDIAG	D3VF1SDM	396	診断の実行 395
REFDI	D3VF1SDM	397	表示データの最新表示 395
PREVD	D3VF1SDM	398	以前収集された結果の表示 395
SYSDB	D3VF1C14	402	データベース機能 401
VISMON	D3VF1C15	409	「システム・モニター・サービス」ウィンドウ 414, 415
MONTHR	D3VF1C15	417	しきい値の設定 413, 416
MONSET	D3VF1C15	421	モニターの設定 413, 416
MONTY	D3VF1C15	422	モニター表示の変更 413
LGRPH	D3VF1C15	423	折れ線グラフの設定値の構成 422
RTSET	D3VF1C15	424	リアルタイム設定の構成
FONTSET	D3VF1C15	424	フォント設定の構成
ATTRIB	D3VF1C15	425	属性モニター 199, 417
DELFIL	D3VF1C16	434	ファイルの削除 433
UCMGR	D3VF1UCM	441	第29章, Update Connector マネージャー
UCMCV	D3VF1UCM	446	Update Connector マネージャー・クライアント表示 444
UCMUV	D3VF1UCM	448	Update Connector マネージャー更新表示 445
UCMSV	D3VF1UCM	450	「Update Connector マネージャー状況表示」 445
UCMSC	D3VF1UCM	477	スケジュール・タスクの作成 466, 468, 470
UCMRM	D3VF1UCM	483	Update Connector マネージャー付きのリモート・システム・マネージャーの 使用 453, 460
WEBCNF	D3VF1WC1		

		485	第30章, Web マネージャーの構成 492, 493
WEB	D3VF1WEB	491	第31章, Netfinity マネージャー (Web 用) 485
WEBDIF	D3VF1WEB	496	Netfinity サービスの Web インターフェース 495
NFAMGR	D3VF1ALT	513	付録A, 下位レベル Netfinity システムのアラート・マネージャー 15, 16, 55
SHRAPP	D3VF1APA	529	付録C, 電源オン・エラー検出を使用可能にする方法 189
TRSUP	D3VF1APA	532	サポートされるネットワーク・アダプター 529
PFADRV	D3VF1APB	535	付録D, サポートされる PFA ハード・ディスク
RAIDAD	D3VF1APB	537	付録E, サポートされる RAID アダプター 218, 609, 610, 611, 612, 613, 614
RAIDAL	D3VF1APC	539	付録F, RAID アラート 417, 425
APPC	D3VF1APD	545	NMVT.INIファイルへの GENALERT のアラートの記述の追加 36, 543
SYSCOM	D3VF1APD	546	システム情報ツールのコマンドライン操作 401
NODE	D3VF1APD	551	サービスの結合名 549, 550
DBTAB	D3VF1APF	559	付録I, Netfinityリレーショナル・データベース・テーブル 1, 399, 405
NFALT	D3VF1APH	587	付録J, Netfinity アラート 26, 27
TWOL	D3VF1WOL	615	付録K, Wake-On-LAN システムのトラブルシューティング 163, 250, 258, 265
HDW	D3VF1WOL	615	MAP 0100: システム・ハードウェアのチェック
HDWC	D3VF1WOL	616	MAP 0110: ハードウェア構成のチェック 615
SFTW	D3VF1WOL	617	MAP 0120: システム・ソフトウェアのチェック 616
NTWS	D3VF1WOL	622	MAP 0130: ネットワーク・セットアップのチェック 621
OTHER	D3VF1WOL	623	MAP 0140: その他の可能性のある理由 622
HWPROB	D3VF1WOL	624	その他の起こりうる問題 623

NOTICES	D3VF1APG	627	付録L, 特記事項 ii
---------	----------	-----	-----------------

<b>Index Entries</b>
----------------------

<u>id</u>	<u>File</u>	<u>Page</u>	<u>References</u>
LOG	D3VF1CH4	17	(1) アラート・ログ 17, 20, 23, 23, 23, 24
ALPROF	D3VF1CH4	38	(1) アラート・プロファイル 38, 40, 40, 44, 44, 48
AOL	D3VF1AOL	57	(1) Alert on LAN 構成 57
CRITFM	D3VF1C18	113	(1) クリティカル・ファイル・モニター 113, 114, 114, 114, 114, 115, 115, 116, 117, 117
DMIBSV	D3VF1C19	119	(1) DMI ブラウザー 120, 120, 125, 127, 127, 127, 128, 128, 128, 128
DMI	D3VF1C19	120	(1) DMI 120, 120
SCHD	D3VF1CH6	131	(1) イベント・スケジューラー 131, 134, 140, 142, 144, 144, 145, 145, 146, 146, 147, 149, 150, 150, 150, 150, 151, 151, 153, 153, 154, 154, 155, 161, 161, 163, 163, 163, 163, 163, 164, 164, 165, 165, 166, 166, 168, 169, 170, 172, 172, 172
EEKIDX	D3VF1CH8	189	(1) 電源オン・エラー検出 190, 192, 192, 192, 192, 193, 193, 193, 193, 193, 193, 194, 195, 195, 196, 529, 529, 529, 529, 530, 531, 532
PFAS	D3VF1CH9	199	(1) 事前障害分析 199, 200, 200, 201, 201, 201, 201, 202, 202, 202, 203, 203, 204, 204, 204, 204, 204, 205, 205, 205, 205
PROCMGR	D3VF1C23	207	(1) プロセス・マネージャー 207, 208, 210, 211, 212, 213, 213, 215, 215, 215, 215
RDMGR	D3VF1C20	217	(1) RAID マネージャー 217, 219, 219, 224, 224, 225, 225, 226, 227, 227, 228, 228
SYSGRP	D3VF1C11	235	(1) システム・グループ、ラック・グループ、およびクラスター・グループ 235, 237, 243, 244, 245, 248, 253, 253, 253, 254, 255, 259, 259, 259, 259, 259, 259, 259, 260, 260, 261, 263, 263, 264, 265, 265, 265, 266
DISCON	D3VF1C11	238	(1) システム検索条件 238, 268, 269
RACKG	D3VF1C11	239	(1) ラック・グループ 239

CLUSG	D3VF1C11	242	(1) クラスタ・グループ 242
DISC	D3VF1C11	244	(1) 検索処理 244, 245, 245, 246, 246, 248, 266, 266, 269
DCAFI	D3VF1RCT	275	(1) リモート・ワークステーション制御 275, 277, 277, 277, 277, 278, 278
INCOME	D3VF1C13	281	(1) 着信ユーザー ID とパスワード 282, 283, 284, 286, 286
OUTGO	D3VF1C13	286	(1) 発信ユーザー ID とパスワード 286, 287, 289, 289
NFSER	D3VF1C21	297	(1) シリアル接続制御 297, 298, 301, 302, 302, 303, 305, 305, 306
SVCC	D3VF1SCM	309	(1) サービス構成マネージャー 309, 311, 313, 314
SPROC	D3VF1CAT	315	(1) システム管理 315, 319, 320, 321, 322, 324, 325, 326, 327, 328, 329, 334, 337, 342, 344, 346, 348
SINV	D3VF1C22	365	(1) ソフトウェア・インベントリー 367, 367, 367, 368, 369, 370, 371, 372, 377, 381, 381, 382, 382, 383, 384, 385, 385, 385, 385, 387, 388, 390, 576
DICTFIL	D3VF1C22	367	(1) 辞書ファイル 367, 367, 368, 369, 370, 371, 372, 377, 381
PRODD	D3VF1C22	371	(1) 製品定義 371, 372, 377, 381
SYSDIAG	D3VF1SDM	393	(1) システム診断マネージャー 393, 395, 395, 396, 397, 398, 398
UCM	D3VF1UCM	441	(1) Update Connector マネージャー 441, 442, 443, 446, 448, 450, 453, 454, 456, 458, 460, 461, 463, 465, 466, 467, 469, 471, 473, 475, 477, 481, 483
WEBMGR	D3VF1WC1	485	(1) Web マネージャーの構成 485, 486, 486, 487
NFWEB	D3VF1WEB	491	(1) マネージャー (Web 用) 491, 492, 492, 492, 492, 492, 494, 496, 496, 497, 499, 500, 500, 501, 502, 503, 503, 504, 504, 505, 506, 506, 507, 508, 509, 510, 511
NETFAM	D3VF1ALT	513	(1) Netfinity システム、管理 513
INTGR	D3VF1API	517	(1) 他のプラットフォームとの統合 517, 523
CLO	D3VF1APD	543	(1) コマンドライン操作 543, 546, 547, 548, 548
GENALRT	D3VF1APD		

		543	(1) GENALERT.EXE 543, 543, 543, 545
SYINFO	D3VF1APD	546	(1) SINFG30.EXE 546
ECCEXE	D3VF1APD	547	(1) ECCMEM.EXE 547
CIDINST	D3VF1APE	553	(1) CID インストール 554
INSTINI	D3VF1APE	555	(1) INSTALL.INI 555
DB2TAB	D3VF1APF	559	(1) データベース構成テーブル 559, 559, 560, 561, 561, 562, 563, 564, 565, 565, 566, 566, 567, 567, 568, 569, 570, 570, 571, 572, 573, 574, 575, 575, 575, 576, 576, 577, 577, 577, 578, 578

<b>List Items</b>
-------------------

<u>id</u>	<u>File</u>	<u>Page</u>	<u>References</u>
CMSYS	D3VF1CMG	64	4 63
TASK	D3VF1CH6	134	3 137
CMSYSA	D3VF1CH6	168	3 166
WAKE1	D3VF1WOL	624	1 617, 617
WAKE2	D3VF1WOL	625	2 623
WAKE3	D3VF1WOL	625	3 622

<b>Revisions</b>
------------------

<u>id</u>	<u>File</u>	<u>Page</u>	<u>References</u>
NF20	?	?	?
			i, i, i, i, 1, 2, 130, 172, 197, 205, 235, 235, 243, 243, 244, 244, 257, 258, 258, 263, 263, 266, 266, 282, 284, 284, 286, 289, 399, 399, 399, 400, 401, 405, 406, 423, 429, 429, 436, 439, 527, 532, 533, 535, 537, 542
NF41	?	?	?
			i, i, 131, 131, 132, 132, 135, 136, 137, 138, 161, 165
NF50	?	?	?
			i, i, xxv, xxv, 1, 2, 7, 7, 8, 8, 13, 13, 14, 14, 28, 29, 36, 37, 45, 45, 47, 47, 119, 119, 122, 123, 124, 124, 162, 162, 172, 187, 233, 234, 235, 235, 238, 238, 239, 241, 245, 247, 250, 253, 265, 265, 274, 278, 307, 314, 365, 366, 374, 374, 379, 379, 382, 382, 388, 391, 399, 399, 399, 399, 400, 400, 405, 405, 487, 487, 545, 545
SV40	?	?	?
			1, 11, 11, 55, 189, 195, 199, 199, 202, 202, 254, 254, 255, 255, 256, 256, 280, 295, 425, 425, 428, 431, 432, 432, 433, 433, 433, 433, 434, 434, 483, 489, 489, 511, 513, 516, 548, 548, 551, 552, 553, 553
NF30	?	?	?
			2, 11, 112, 117, 117, 128, 131, 131, 134, 134, 135, 135, 137, 137, 154, 160, 173, 199, 199, 205, 215, 215, 228, 245, 249, 258, 258, 258, 258, 263, 264, 281, 281, 282, 295, 307, 363, 387, 399, 399, 399, 399, 407, 407, 411, 412, 415, 415, 417, 417, 423, 428, 537, 542, 552, 553, 553, 574, 577, 578, 578, 584, 585, 585, 614
NF51	?	?	?
			4, 4, 8, 8, 9, 9, 10, 11, 17, 17, 19, 19, 131, 132, 166, 168, 173, 173, 196, 197, 218, 218, 234, 236, 242, 242, 259, 259, 275, 275, 314, 363, 376, 376, 391, 398, 406, 406, 492, 494, 496, 496, 498, 522, 535, 535, 537, 537, 547, 547, 551, 552, 553, 553, 554, 554
NF201	?	?	?
			28, 140, 140, 140, 141, 147, 147, 148, 148, 228, 231, 244, 244, 254, 254, 255, 255, 256, 256, 257, 257, 258, 258, 262, 262, 402, 402, 403, 403, 405, 405, 431, 431, 431, 431, 432, 432, 432, 432, 433, 433, 433, 433, 434, 434, 434, 434, 435, 435, 543, 543, 543, 543, 546, 546, 546, 546, 554, 554, 555, 560, 560, 570, 570, 570, 570, 571, 571, 578
NF52	?	?	?
			55, 156, 157, 315, 315, 318, 318

<b>Processing Options</b>
---------------------------

Runtime values:

Document fileid .....	D3VF1UBS SCRIPT
Document type .....	USERDOC
Document style .....	SERVER
Profile .....	EDFPRF40
Service Level .....	0028
SCRIPT/VS Release .....	4.0.0
Date .....	98.08.25
Time .....	09:42:01
Device .....	PSA
Number of Passes .....	2
Index .....	YES
SYSVAR G .....	INLINE
SYSVAR R .....	ETSU
SYSVAR W .....	ETSU
SYSVAR X .....	YES

Formatting values used:

Annotation .....	NO
Cross reference listing .....	YES
Cross reference head prefix only .....	NO
Dialog .....	LABEL
Duplex .....	YES
DVCF conditions file .....	(none)
DVCF value 1 .....	(none)
DVCF value 2 .....	(none)
DVCF value 3 .....	(none)
DVCF value 4 .....	(none)
DVCF value 5 .....	(none)
DVCF value 6 .....	(none)
DVCF value 7 .....	(none)
DVCF value 8 .....	(none)
DVCF value 9 .....	(none)
Explode .....	NO
Figure list on new page .....	YES
Figure/table number separation .....	YES
Folio-by-chapter .....	NO
Head 0 body text .....	(none)
Head 1 body text .....	第
Head 1 appendix text .....	付録
Hyphenation .....	NO
Justification .....	NO
Language .....	JAPA
Keyboard .....	395
Layout .....	OFF
Leader dots .....	YES
Master index .....	(none)
Partial TOC (maximum level) .....	4
Partial TOC (new page after) .....	INLINE
Print example id's .....	NO
Print cross reference page numbers .....	YES
Process value .....	(none)
Punctuation move characters .....	(none)
Read cross-reference file .....	ETSU
Running heading/footering rule .....	NONE

Show index entries ..... NO  
Table of Contents (maximum level) ..... (none)  
Table list on new page ..... YES  
Title page (draft) alignment ..... RIGHT  
Write cross-reference file ..... ETSU

**Imbed Trace**

Page 0	D3VF1SET
Page xxvi	D3VF1GOM
Page 11	D3VF1CH4
Page 55	D3VF1AOL
Page 59	D3VF1CMG
Page 67	D3VF1CAV
Page 112	D3VF1C18
Page 117	D3VF1C19
Page 128	D3VF1CH5
Page 130	D3VF1CH6
Page 172	D3VF1NFT
Page 187	D3VF1CH8
Page 197	D3VF1CH9
Page 205	D3VF1C23
Page 215	D3VF1C20
Page 228	D3VF1C10
Page 231	D3VF1C11
Page 274	D3VF1RCT
Page 278	D3VF1C12
Page 280	D3VF1C13
Page 295	D3VF1C21
Page 307	D3VF1SCM
Page 314	D3VF1CAT
Page 363	D3VF1C22
Page 391	D3VF1SDM
Page 398	D3VF1C14
Page 406	D3VF1C15
Page 428	D3VF1C16
Page 436	D3VF1C17
Page 439	D3VF1UCM
Page 483	D3VF1WC1
Page 489	D3VF1WEB
Page 512	D3VF1ALT
Page 516	D3VF1API
Page 527	D3VF1APA
Page 533	D3VF1APB
Page 537	D3VF1APC
Page 542	D3VF1APD
Page 552	D3VF1APE
Page 557	D3VF1APF
Page 585	D3VF1APH
Page 614	D3VF1WOL
Page 625	D3VF1APG
Page 628	E1D9IBMT
Page 628	E1D9NONT
Page 628	E1D9GENT
Page 631	DBCS DSMDBIX